

日本IT書紀

04 含牙篇

卷之七 乾坤

卷之八 重濁

卷之九 修羅

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

04 含牙篇

卷之七 乾坤

052 今カラデモ遅クハナイ

053 大陸

054 軍需動員

055 敵産なれど

056 東亜新秩序

057 駆け引き

058 誤認

059 新兵器

052 今カラデモ遅クハナイ

第五十二

今カラデモ遅クハナイ

一

——生命線・満蒙。

この言葉が政治的・経済的スローガンとして使われるようになるのは一九三〇年代に入ってからである。民衆は訳も知らないまま何とはなく、そこに込められた非常な、ないし悲壮な決意を感じ取った。

それはある種の雰囲気というものであって、財閥が權益の維持・拡大に軍事力を利用しようとし、その軍部が右翼国粹主義と結びついた結果であるという歴史的プロセスに気がついた人は多くなかった。

昭和の大恐慌、金解禁、モラトリアムといった経済界の激変を経て、日本企業が満州に投下した資本総額は対外投資の五八%を占めていた。満州は鉄鉱石や石炭など重工業資源の輸入元であったし、かつ国内産業にとって重要な輸出先でもあった。

同時に米欧列強諸国も中国大陸と満州に重大な関心を抱

いていた。特にアメリカ合衆国は張学良を通じて新たな鉄道や港湾の建設に資金を援助するなど、対日経済対抗策を強化しつつあった。逼迫する経済と農村の疲弊に日本の軍部は危機感を持ったといっている。

樺太や満州への開拓移民奨励もまた、不況と農村の疲弊を解決する策として採用されていた。つまり、国内に充満する大量の失業者を軍事力と殖民力に転用し、軍事力をもつて中国・満州など近隣を植民地化する。

そのことで国内の負荷を軽減し、併せて生産量と消費を増やそうというのである。朝鮮、台湾、満州さらに中華民国・山東半島の租借地まで包含したブロック経済圏こそ、大日本帝国の姿だった。

明治維新からこのかた、挙国一致で殖産興業に邁進してきた「列強入り」の無理が、五十年を経て一気に噴出したわけだった。政府・産業界は「殖産興業」「富国強兵」という明治以来の産業振興策が老朽化したことに薄々は気がついていた。にもかかわらず、資本の再整備による国力の充実こそ必要なことに目を背け、軍事力をバックボーンとする侵略主義に傾いた。

三十一年四月十三日に総辞職した浜口雄幸のあと、第二次若槻礼次郎内閣、犬養毅内閣と短命政権が続き、政党政治は終焉を迎える。「愛国」の名のもとに中学校で柔剣道が

必修科目となり、田河水泡えがくところの「のらくろ」が人気を集めた。自由主義的活動に圧力がかけられ、思想調査が公然と行われるようになっていく。

評論家・大宅壮一は『一九三一—一九四五年の日本』（一九六八、世界文化社）の中で

日清・日露・第一次大戦と三回戦を勝ちぬいた日本は、いよいよ準決勝へ出場するわけだが、これは田舎の弱小チームがだんだん強くなって甲子園で優勝をねらうようなものである。その冬季合宿練習ともいうべきものが、この満州事変である。

と評している。

「満州事変」と呼ばれる事件は、一九三二年（昭和六）九月十八日の午後十時過ぎに起こった。日本史で「柳条湖事件」とも表記されるのは、多分に「満州」という言葉を忌避したい気持ちがあるからかもしれない。

満州・奉天の北方七・五キロ郊外に「柳条湖」という湖がある。

筆者は高校日本史の教科書で「柳条溝」と学習した。どちらも「シ」が付く漢字だし、音も「コ」と「コウ」の違いなので、最初、ひよっとすると「湖」は「溝」の誤植で

はないかと疑った。

人というのは最初に覚えたことがらに固執する。

ところが「溝」が間違っている——というより、柳条湖と柳条溝はそれぞれに存在する全く別の地——であることが分かった。向こう岸が見えない黄河や長江を知っている中国の人は、帯状の小さな湖に「溝」という文字を当てた。このため「柳条溝」と表記する地名もあるということだ。その柳条湖の近くを南満州鉄道（満鉄）が走っていた。それが爆破された。

満鉄は日露戦争の戦果として、日本が租借権と経営権を握った。ポーツマスで結ばれた講和条約のあと、アメリカの鉄道王ハリマンがときの首相・桂太郎に資本参加を申し入れ、

——アメリカの鉄道を満鉄と結び、シベリア鉄道を経てオリエント急行に乗り入れれば、世界一周鉄道が実現すると打ち上げたことはすでに書いた。

この時代、鉄道は旅客のためにあったのではなく、第一に物資と軍兵を運ぶためにあった。工業の原材料を運び製品を運び、危急が生じれば万の軍兵を運ぶことができる。中国東北地域における日本の最大の資産であるとともに、最大の軍事施設であったといっている。同時にそれはアメリカ、イギリスにとつての垂涎の好餌でもあった。

それが何者かによつて爆破された。

二

——答は中国にある。

関東軍は電光石火の行動を起こし、東京で緊急閣議が開かれていた間に長春、奉天など満州の要地を占領してしまつた。鉄道の爆破から軍隊の出動・占領まで、あまりに手際がよかつた。

これがために外相・幣原喜重郎は関東軍の謀略であろうと推測し、国際世論をもつて事態の解決を図ろうとした。すなわち閣議決定で「不拡大声明」を発表するとともに、国際連盟による調査団を受け入れた。

国際連盟はイギリスのリットン卿を团长とする調査団を派遣したが、その調査は容易に進まなかつた。報告書をまとめるには一年を要した。この間、関東軍は張学良が本営を移した錦州を空爆するなど、既成事実を積み上げることができた。

リットン調査団——正式には「国際連盟日華紛争調査委員会」——はリットン卿、フランス、アメリカ、イタリア、ドイツの五か国の委員で構成し、日本と中国から一人ずつ陪席者が加えられた。

米欧列強がアジアの紛争を調停するのは国際連盟の成立過程からいつて当然のように見えるが、日本を含む六か国が侵略する側、中国のみが侵略される側だったことを考えると、いまひとつ釈然としないものがある。

翌三三年十月二日に公表された調査団の報告書は

- ① 中国とその東北部および日本との関係。
- ② 日本と中国との紛争解決に関する結論。
- ③ 国際連盟理事会の提案。

——の三部で構成されていた。

第一部では満州が中国の構成部分であることを認め、満州事変から満州国独立にいたる経過を「日本の侵略の結果である」と断じた。

事件の首謀者は関東軍高級参謀の板垣征四郎（大佐）と石原莞爾（中佐）、鉄道を爆破したのは分遣隊隊長の河本末守（中尉）だった。だが調査団は犯行者を特定せず、曖昧に済ませていた。

だけでなく提案と結論では日本の満州における権益を認めたとうえで、「事変前への現状復帰は紛争をいつそうひどくする可能性がある」とし、日本と中国間に満州に関する新たな協定を勧告するなど妥協的な内容だった。

この事件は張作霖事件の延長線上にあった。

三年前、北京からの帰途にあった張作霖を同じ手口で爆殺したとき、首謀者・河本大作（当時大佐）を「停職」という処分にとどめたため、ときの首相・田中義一は天皇から厳しく叱責され辞職を余儀なくされている。

これに対して柳条湖事件の板垣と石原は何の咎めも受けて、反対に陸軍にあつて出世までした。一九二八年と一九三一年では陸軍内部の構造と意識にずいぶん違いがあつた。

陸軍ばかりではなかった。

産業界の意を受け、あるいは財界に迎合した新聞が

——生命線・満蒙。

を煽り立てた。

一九三三年の二月二十四日、国際連盟総会はリットン調査団の報告書に基づき、日本帝国に対して満州から軍隊を撤回し満州の占領を中止するよう勧告する決議を可決した。それに異議を唱え、日本全権代表・松岡洋右が決然と退場したとき新聞各社は次のように報じた。

松岡の姿は、凱旋將軍のようだった。わが国は始めて、
「我は我なり」という独自の外交を打ち立てるにいたつたのだ。

そればかりか、全国百三十二社が作成した共同声明を、そろって一面に掲載した。その声明文には日本電報通信社、報知新聞社、東京日日新聞社、東京朝日新聞社、中外商業新聞社、大阪毎日新聞社、大阪朝日新聞社、読売新聞社、国民新聞社、都新聞社、時事新報社、新聞連合社などが名を連ねていた。

満州の政治的安定は、極東の平和を維持する絶対の条件である。しかして満州国の独立とその健全なる発達とは、同地域を安定せしむる唯一最善の途である。東洋平和の保全を自己の崇高なる使命と信じ、かつそこに最大の利害を有する日本が、国民を挙げて満州国を支援するの決意をなしたことは、まことに理の当然といわねばならない。いな、ひとり日本のみならず、真に世界の平和を希求する文明諸国は、ひとしく満州国を承認し、かつその成長に協力するの義務ありというも過言ではないのである。

然るに国際連盟の諸国中には、今なお満州の現実に関する研究を欠き、従つて東洋平和の随一の方途を認識しないものがある。われ等は、かかる国々の理解を全からしめんことを、わが当局者に要望すると共に、いやしくも満州国の厳然たる存立を危うするがごとき解決案は、たといいか

なる事情、いかなる背景において提起されるを問わず、断じて受諾すべきものにあらざることを、日本言論機関の名においてここに明確に声明するものである。

新聞が変節したのである。

三

橋本欣五郎という陸軍大佐がいた。

一八九〇年（明治二十三）福岡県に生まれ岡山で少年時代を過ごした。陸軍士官学校二十三期卒、一九二〇年陸軍大学校を出て満州里特務機関長を務めた。二七年から三年間、トルコ公使館付武官として勤務し、三〇年参謀本部ロシア班長となった。

このとき彼は、陸軍省の佐官級若手士官を集め、「桜会」を結成した。北一輝や大川周明らと交流し、政府の転覆を計画した。大川を通じて陸軍大臣・宇垣一成、軍務局長・小磯国昭、軍務課長・永田鉄山などを説かしめ、クーデター後、軍部独裁政権の首班となる内諾を得た。

しかし橋本の計画は、途中で宇垣が及び腰になったために頓挫し、陸軍省は首謀者を左遷もしくは予備役に編入してウヤムヤにした。

いわゆる「三月事件」である。

これを機に橋本はいったん退役したが、のち応召し野戦重砲第十三連隊長、一九四二年衆議院議員に当選して終戦となった。A級戦犯として終身刑の判決を受けたが五五年に出獄した。五七年没。享年六十七。

このとき内閣および陸軍省が毅然たる態度で首謀者たちを処罰していれば、あるいは関東軍の暴走を阻止できたかもしれないなかった。また「柳条湖事件」の首謀者を野放しにしていなければ、十月事件——荒木貞夫中将を擁立した大川周明らによるクーデター未遂計画——も起こらなかったといわれている。

一九三二年二月、井上準之助が暗殺された。享年六十三。同年三月、三井合名会社理事長の団琢磨が射殺された。

享年七十四。

この二つの暗殺事件は、史上、「血盟団事件」と称される。

五・一五事件はこの二か月後に起こった。

首相犬養毅、射殺。

「話せば分かる」

銃口を向けた将校に語りかけたこの言葉が最後になった。

「問答無用」

銃口を向けた青年将校の言葉が聞こえたかどうか。享年

七十七。

代わって内閣首班に指名されたのは海軍大将で朝鮮総督の斎藤実だった。斎藤は政党、軍部、官僚の「三者一体」「挙国一致」内閣を標榜したが、結局は三者の勢力バランスを保つのが精一杯だった。

一九三五年八月、陸軍省内で軍務局長永田鉄山が斬殺されるという事件が突発した。下手人は相沢三郎という陸軍中佐だった。

斬殺された永田は「統制派」と称された陸軍省エリートで組織する「桜会」の代表格、相沢が属したのは現場諸部隊を指揮する青年将校が中心の「皇道派」だった。皇道派は思想的には観念的天皇中心主義、天皇親政を理想とする主張だった。つまりこの事件は、統制派と皇道派の対立が背景にあった。

統制派は三月事件の頓挫を経て、合法的手段による軍事政権の樹立を目指していた。これに対して皇道派青年将校たちは、統制派がいうところの「合法的手段」が政治権力を欲するだけの欺瞞に見えた。

その欺瞞のために摩擦が激しさを増している満州、中国に駆り出されるのは自分たちであることに、彼らは焦燥感を募らせた。ことに皇道派が危機感を強くしたのは、彼らが率いる兵卒の出身母体である農村の疲弊だった。

四

紡績業の不況で生糸の原料である繭の価格が下がっていた。加えて一九三一年に東北と北海道が冷害のために凶作となり、農民はワラビやトチ、ドングリなどで飢えをしのがなければならなかった。

三三年は豊作だったが、陸軍省が中国大陸に送り込んだ陸軍十二個師団七十万分人の食糧として大量の米を買い付けた結果、農漁村に十分な量の米が行き渡らなかった。翌三四年の秋はひどい凶作が全国を襲った。

このため、満足に食事ができない欠食児童が全国に二十万人も出た。農家が抱える負債総額は、一九三〇年に四十億円を超えていたといわれている。農村では自殺や娘の身売りが日常化していた。これに対して都市部では「東京音頭」が流行し、宝塚少女歌劇団がもてはやされ、軽演劇場「ムーランルージュ」が盛況となっていた。

凶作に飢える農村、軍需景気に沸く都市。

——都市の繁栄は、農村からの搾取で成り立っている。と、皇道派青年将校たちは考えた。

部下の兵卒たちががけなしの給与から故郷に仕送りする姿を見て憤った青年将校は一人や二人ではなかった。農村

が疲弊すれば、わが帝国軍は弱兵の集まりになってしまう。軍需景気の恩恵を受ける財閥を政府が擁護し、だけでなく癒着しているのであれば、農村は救われないではないか。

一九三六年二月二十六日早朝、東京は前夜来の粉雪に覆われていた。

筆者は大学受験のおり、語呂合わせで「ヒドクサムイヒ」とその年を覚えた。

粉雪を蹴って、皇道派の青年将校が決起した。動いたのは第一師団と近衛連隊など千四百人の兵卒である。この中に落語家「柳家小さん」として知られる小林盛夫が、二等兵として混じっていた。

——命令で皇居の御門の前を機関銃で護っていた。何でも反乱軍が天皇さまを誘拐にくるつてんで、そりゃおっかなかったよ。そしたらさ、おいらたちが反乱軍だっていうじゃない。何がなんだか分からなくなったよね。

弟子の「さん治」（のち真打に昇進して「小三治」という人が筆者の高校の先輩で、文化祭で一席打ったとき、そのような話をしていたことを覚えている。

事件の直接の引き金となったのは、皇道派青年将校に近い心情を抱いていた中佐相沢三郎が統制派の陸軍軍務局長（少将）永田鉄山を陸軍省内で斬殺したことにあった。そ

の軍法会議に弁護人として立った皇道派青年将校たちは、裁判を通じて意思を統一し結束を固めていった。

陸軍の主導権を握っていた統制派は、彼ら「皇道派」を国内に置いておくのは危険と見た。皇道派の中心的人物たちが所属する第一師団を満州に派遣することを決めたのが、決起を早めた原因だった。

・斎藤実（内大臣）、斬殺。享年七十八。

・高橋是清（大蔵大臣）、射殺。享年八十一。

・渡辺錠太郎（陸軍教育總監）、射殺。享年六十二。

・鈴木貫太郎（侍従長）、重傷。

死亡が伝えられた岡田啓介首相は、官邸の一室に潜んでいて無事だった。

別荘に滞在中だった牧野伸顕（前内大臣）、西園寺公望（元老）は避難して事なきを得た。

皇道派の青年将校たちは溜池の山王ホテル、料亭「幸楽」および首相官邸を占拠し、大将・真崎甚三郎を首班とする国家改革内閣を樹立することを訴えた。霞ヶ関、永田町、溜池の一带に非常線を張り、全国の同志の決起を促したが、その結果は無残な失敗に終わった。

クーデターの首謀者である野中四郎（大尉）は短銃で自

決、安藤輝三（大尉）、栗原安秀（中尉）、坂井直（中尉）など十七人が「逆賊」の名のもとに、上告なし、弁護士なし、非公開という軍事法廷で刑を宣告され、時をおかず死刑に処せられた。

統制派は皇道派を強引に封じ込めたが、それがやがて二・二六事件の青年将校たちを「憂国の士」として礼賛する風潮を生み出した。

この年の一月、日本はロンドン軍縮会議からの離脱を表明し、一方で労働運動や自由主義・共産主義への思想弾圧を強めていた。中国の山東半島と満州に、日本の産業界は莫大な投資を行い、何百万人もの開拓民を送り込んでいた。軍事力を背景にした帝国主義の矛盾が露呈し、これが政策の硬直化を生み、大日本帝国は二進も三進も行かない自縄自縛の閉塞感に陥っていく。以後、日本は軍国主義の道をまっしぐらに進むことになるのだが、二・二六事件に際して戒厳令司令部が発した「今カラデモ遅クハナイ」は、日本の針路を意味していた。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

満州 Mǎnzhou: 現在は中華人民共和國東北地区から内モンゴル自治区北東部の総称で、語源はかつてここに仏教国「金」という国家を建てたツングース系の女真族が自らを「文殊菩薩の子孫」の意味で「マンチュウ」と称したことに発する。

張學良 ちょう・がくりよう／1898～2001。日本軍によって爆殺された満州軍閥首領・張作霖の息子で、中国国民政府の陸海空軍副司令だったが、満州事変により満州を追われた。一九三六年十二月、蒋介石を西安に監禁して抗日民族統一戦線を実現して日中戦争を中国軍有利に導いた。のち蒋介石軍に捕われ第二次大戦後も台湾に軟禁された。九三年軟禁を解かれ移住先のハワイの病院で死去した。中華人民共和国では「千古の功臣」「民族の英雄」という高い評価が定着している。

田河水泡 たがわ・すいほう／1899～1989。本名は高見沢伸太郎。東京に生まれ日本美術学校を出た。画家を目指したが生活のために新作落語の台本を書くなどしているうち一九三一年「少年倶楽部」(講談社)に漫画「のらくろ」を発表し人気を得た。「サザエさん」の長谷川町子は弟子。

のらくろ 田河水泡が一九三一年から雑誌「少年倶楽部」に連載した漫画で、陸軍を舞台に黒い野良犬の「のらくろ」がブル連隊長のもとで出世していく過程を描いた。太平洋戦争で軍を揶揄するものとして執筆禁止処分となった。終戦後、軍国主義色を払拭し復活した。

リットン卿 Victor Alexander Lytton／1876～1947。小

説『ボンペイ最後の日』、名句「ペンは剣よりも強し」で知られる作家エドワード・ジョージ・ブルワーズ・リットンの孫。国際連盟イギリス代表を務めた。

調査団の陪席者 日本からは外交官の吉田伊三郎、中国は外交官の顧維鈞が参加した。顧維鈞については第四十八補注。

板垣征四郎 いたがき・せいしろう／1885～1948。一九三三年、関東軍司令部付となつて表立った活動を控えたが、三七年には第五師団長として復活し、三八年には第一次近衛内閣で陸相に抜擢された。三九年支那派遣軍総参謀長、四一年に陸軍大將に上り朝鮮軍司令官、四五年に第十七方面軍司令官、第七方面軍司令官で終戦を迎え、A級戦犯として四八年絞首刑に処せられた。

石原莞爾 いしはら・かんじ／1886～1949。一九三二年にジュネーブ軍縮会議の随員となり、三五年に陸軍参謀本部作戦課長を務めた。のち東条英機と意見が合わず、四一年に予備役に編入された。翌年、立命館大学教授となり四九年に没した。

張作霖 第四十八補注参照

河本大作 第四十八補注参照

松岡洋右 まつおか・ようすけ／1880～1946。国際連盟日本全権として同連盟からの日本脱退を宣言したのち、一九四〇年発足の第二次近衛内閣で外相を務めた。「大東亜共栄圏」構想を打ち出してイタリア、ナチス・ドイツと同盟を結んだ。第二次大戦後、A級戦犯として逮捕されたが東京裁判の最中に病状が悪化し東大病院で死亡した。死去の直前、「日独伊三国同盟は一生の不覚だった」と漏らした。

北一輝 きた・いっき／1883～1937。本名は「北輝次郎」といった。新潟県の佐渡に生まれ、一九〇五年に上京して幸

徳秋水、堺利彦などと交流した。農村の疲弊と都市の繁栄を社会主義的手法で改革しつつ天皇制を軸とする国家体制を志向し、陸軍青年将校の精神的な支えとなった。二・二六事件で反乱将校に助言と教唆を与えた罪で軍法会議にかけられ刑死した。

大川周明 おおかわ・しゅうめい／1886～1957。山形県に生まれ東京帝国大学を出て陸軍参謀本部の依頼で翻訳の仕事をした。一九一八年満州鉄道に入り北一輝、満川亀太郎などと交流した。三二年五・一五事件に関与したとして禁固九年の判決を受けたが三九年東亜経済調査局最高顧問。第二次大戦後、A級戦犯として逮捕されたが精神障害を起こし免訴となった。

宇垣一成 うがき・かずしげ／1868～1957。岡山県に生まれ陸軍士官学校第一期、陸軍大学校卒。一九二四年清浦圭吾内閣、加藤高明内閣、若槻礼次郎内閣で陸相を務めた。師団縮小と兵制近代化に努める一方、浜口雄幸内閣のとき陸軍内の「宇垣閥」の領袖として財界から首相に推された。第二次大戦後、五三年参院議員となった。

小磯国昭 こいそ・くにあき／1880～1950。栃木県に生まれ陸軍士官学校十二期卒。一九一六年満州独立を画策し三二年陸軍省次官を経て関東軍参謀長、第五師団長、朝鮮軍司令官などを歴任した。三九年平沼騏一郎内閣で開拓相として南方進出を推進し四二年朝鮮総督となった。東条英機内閣のあと首相に任じられ対中国和平工作に失敗した。ポツダム宣言無条件受諾後、A級戦犯として逮捕され終身刑となった。

永田鉄山 ながた・てつざん／1884～1935。長野県に生まれ一九一三年ドイツで軍事を学んだ。二八年第三連隊長、三〇年陸軍省軍務局軍事課長、三二年少将に進み参謀本部第二部長、

歩兵第一師団長を経て三四年軍務局長。統制派の中心人物と目され皇道派の教育総監真崎甚三郎を罷免したため三五年陸軍省内で相沢三郎中佐に斬殺された。

荒木貞夫 あらき・さだお／1877～1966。東京に生まれ陸軍士官学校九期、陸軍大学校卒。一九一八年シベリア出兵で特務機関長、憲兵司令官、陸軍大学校長、第六師団長、三一年犬養毅内閣で陸相。皇道派青年将校に担がれ二・二六事件では反乱将校たちに同情的な姿勢を見せたが、軍法会議の査問で翻意した。三八年第一次近衛文麿内閣で文相となり軍国主義的教育を推進した。

団 琢磨 だん・たくま／1858～1932。福岡藩(福岡県)藩士の神屋家に生まれ団家の養嗣子となった。一八七一年(明治四)岩倉使節団に同行してアメリカ合衆国に渡り、マサチューセッツ工科大学で鉱山学を学んだ。帰国後、大阪専門学校教授、東京帝国大学助教などを経て工部省工部鉱山寮に技師として入り、三池炭坑が三井鉱山に払い下げられたのに伴い三池炭坑事務長となった。九四年三井鉱山合名会社専務理事、一九一一年三井鉱山会長、一四年三井合名会社理事長として政財界に力を振るった。

犬養 毅 いぬかい・つよし／1855～1932。岡山県に生まれ慶応義塾に在学中、報知新聞記者として西南戦争に従軍した。八一年統計院権少書記官、八二年立憲改進黨に参加し自由民権運動を推進し九〇年第一回総選挙で衆院議員となった。九六年進歩党を結党、九八年自由党と合併して憲政党党首となり第一次大隈重信内閣で文相、一九一〇年又新会と合同して立憲国民党を組織した。孫文の辛亥革命を支援し、一七国民党総裁、二〇年ごろ

から普通選挙運動の表に立ち二四年第一次加藤高明内閣で通信相、二九年に引退を表明したが三二年難局を乗り切るため推されて首相となった。戦後の吉田茂内閣法相の犬養健(1896-1960)は息子、評論家の犬養道子(1921-2017)は孫。

斎藤 実 さいとう・まこと/1858-1936。陸前藩(岩手県)に生まれ、一八七九年海軍兵学校を出てアメリカ合衆国に留学した。八八年海軍参謀本部、海軍大臣官房人事課長などを経て日清戦争以後しばらく戦艦の艦長を務めた。九八年山本権兵衛海相のとき海軍省次官、一九〇六年西園寺公望内閣で海相となった。日露戦争では海軍拡張計画を推進し一九二二年大將に進んだ。シーメンス事件で海相を辞任し、一九年朝鮮総督、二七年ジュネーブ軍縮会議で日本全権、三二年五月の五・一五事件で犬養内閣が倒れた後組閣し三四年の帝人事件で引責辞任。のち内大臣に就任し、二・二六事件で殺害された。

相沢 三郎 あいざわ・さぶろう/1889-1936。宮城県に生まれ陸軍士官学校二期卒。青森の歩兵第五連隊大隊長のと き皇道派に加わり、三五年皇道派の教育總監真崎甚三郎が罷免されたことを怒って統制派の永田鉄山を斬殺した。軍法会議を経て三六年七月死刑となった。

宝塚少女歌劇団 一九一三年に箕面有馬電気軌道(現阪急電鉄)が開通したとき、乗客を増やすために保養施設・遊園地「宝塚新温泉」をオープンした。その呼びびものとして少女のみによる「宝塚唱歌隊」を編成したのが始まりとなった。歌唱だけでなく演劇を加え一四年四月に初めて公演を行った。一九年に宝塚音楽歌劇学校を設立し、それを母体とした「宝塚少女歌劇団」を発足させた。「レビュー」を取り入れ二七年に上演された「モン・パリ」で

唄われた「うるわしの思い出モン・パリ」が流行歌となった。

ムーランルージュ 一九三一年東京・新宿に開業した劇場で独自の劇団と脚本製作部門を持っていた。上演された喜劇はおおいに繁盛しこれを模倣した大阪吉本興業、浅草花月劇場、古川ロッパ一座、エノケン劇場、シミキン一座、水の江滝子一座などを生むきっかけとなった。当時、新宿は映画館、寄席などが数多くあって、芸能や文学に憧れる青年が集まっていた。太平洋戦争の戦災で焼失し四七年に再建され、ここから森繁久彌、由利徹、三崎千恵子、望月優子などが出た。

二・二六事件の兵士たち その中に、やがて日本ワットソン統計会計機械の社員として活躍する島村浩もいた。彼は千葉県習志野にあった戦車部隊に所属し、皇居二重橋の前で機関銃を構えていたが、小さんと同じように、「自分たちが反乱軍とされていることに驚いた」と後日語っている。

柳家小さん 江戸中期から続く落語会の名跡で、最も著名なのは三代目(本名豊島銀之助、1857-1930)である。ここでいう小さんは五代目で、本名は「小林盛夫(1915-2002)」といった。一九三三年「柳家栗之助」の名で初高座を踏んだ。七二年日本落語協会会長。三代目小さんの芸風を受け継ぎ戦後の落語界にあつて桂文楽、三遊亭圓生、古今亭志ん生の三人に次ぐ「最後の名人」とされる。

柳家小三治 やなぎや・こさんじ。本稿に登場する小三治は十代目。本名は郡山剛藏(1939-2021)といった。二〇一〇年日本落語協会会長となった。

高橋是清 たかはし・これきよ/1854-1936。幕府御用絵師の家に生まれ仙台藩足輕高橋家の養子となった。一八六五年

江戸に出て英語を学び六七年渡米。六八年帰国し通訳・翻訳業を営んだのち農商務省に入った。八九年初代特許局長、九二年日本銀行に入り九五年横浜正金銀行に移って副総裁、一九一一年日銀総裁。一三年山本権兵衛内閣、一八年原敬内閣で蔵相、二二年首相。一度は政界を引退したが二七年の金融恐慌に際して再び蔵相に就任し経済の混乱終息に見通しがついたとして四十二日で辞任した。政府の財政難を日銀発行の公債で賄う新手法で乗り切り軍事費の圧縮に努めた。二・二六事件で殺害された主因はここにあった。

渡辺錠太郎 わたなべ・じょうたろう／1874～1936。愛知県に生まれ一九〇三年陸軍大学校を出て二〇年歩兵第二旅団長、二五年陸軍大学校校長、二六年第七師団長、二九年航空本部長、三〇年台湾軍司令官などを歴任し大将。三五年名古屋市の演説会で軍の中立性を訴え、国体明徴論や天皇機関説排撃論を批判した。これが皇道派青年将校の反発を買ひ、二・二六事件で殺害対象者リストに挙げられた。

鈴木貞太郎 すずき・かんたろう／1867～1948。大阪に大阪に生まれ一八八七年海軍兵学校卒、一九〇一年ドイツ駐在武官などを経て一四年海軍省次官、一八年海軍兵学校校長、第二・第三艦隊司令官のち大將に昇進し二四年連合艦隊長官となった。二九年に退役して侍従長兼枢密院顧問、二・二六事件で重傷を負ったが四〇年枢密院副議長、四四年同院議長から四五年四月首相。ポツダム宣言無条件受諾の道を開いた点で評価される一方、四五年六月に天皇から早期終戦の指示を受けていながら実行しなかったことが批判されている。

岡田啓介 おかだ・けいすけ／1868～1952。福井県に生

まれ一八八九年海軍兵学校を出て日清戦争時少尉、日露戦争では戦艦「春日」艦長を務めた。日本海軍に水雷術を導入した。一九一三年海軍省に戻り人事局長、海軍艦政本部長、次官を経て二四年大將、同年連合艦隊司令長官に就任し二七年田中義一内閣、三二年斎藤実内閣で海相。三四年首相となり二・二六事件では死亡と報道されたこともあった。太平洋戦争開戦を阻止できず、四三年から東条内閣の打倒と和平工作を指導した。終戦時内閣書記官の迫水久常は娘婿である。

牧野伸顯 まきの・のぶあき／1861～1949。薩摩藩(鹿児島県)に生まれ一八七一年大久保利通の遣米使節団に同行してアメリカに留学した。七九年外務省に入り憲法制度調査に参加したことから伊藤博文の知遇を得た。第一次西園寺内閣で農商務相、第一次山本内閣で外相。シベリア出兵に反対の立場を取り、一九一九年パリ講和会議で日本全権、二一年宮内相、二五年内大臣。軍部の台頭に対抗して重臣会議のウエイトを高めることに尽力した。その娘婿が吉田茂である。

西園寺公望 さいおんじ・きんもち／1849～1940。京都の公卿・徳大寺家に生まれ西園寺家の養子となった。戊辰戦争では山陰道鎮撫総督、会津討伐越後口大参謀を務めた。のち、七一年パリに留学した。八〇年帰国しパリで知己となった中江兆民と「東洋自由新聞」を創刊、八五年から九一年にかけてヨーロッパ列国公使を務めた。第二次伊藤博文内閣で外相、第三次伊藤内閣で文相、第四次伊藤内閣で首相臨時代理となり、一九一九年元勳。昭和初期の内閣首班を指名したが、二・二六事件で限界を感じ、内大臣と協議のうえ首班指名を行うようになった。日独伊三国同盟に反対したが四〇年静岡県興津の別邸で病死した。

山王ホテル 一九三二年、東京・赤坂の日枝神社下に開業した。地下一階にアイスリンクを備えていた。一九四五年八月、ポツダム宣言無条件受諾後、連合国軍総司令部に接収された。その跡地は「山王パークタワー」となっている。

料亭「幸楽」 山王ホテルの隣にあった高級料亭で、政財界の会合の場として使われた。のちにその跡地がホテルニュージャパンとなり、現在は「プリデンシャルビル」となっている。

真崎甚三郎 まさき・じんざぶろう／1876～1956。佐賀県に生まれ一九〇七年陸軍大学校を出た。一四年歩兵第四十二連隊大隊長、一五年久留米捕虜収容所所長、二〇年陸軍省軍事課長、陸軍士官学校校長、二七年第八師団長、二九年第一師団長、三一年台湾軍司令官、三三年参謀次官、三三年大将。荒木貞夫とともに皇道派の中心にあつて、二・二六事件のとき密かに組閣の準備を進めたが、クーデター失敗で軍法会議にかけられた。反乱幫助罪の適用は免れたが以後退役し、日中戦争、第二次大戦を通じて沈黙を貫いた。

決起部隊の終焉 二・二六事件勃発の報せを聞いた昭和天皇は「朕自ら近衛師団を率ゐこれが鎮定に当たらん」と述べ、可及的速やかな鎮圧の意向を示したという。二十八日午前五時過ぎ「戒厳司令官ハ三宅坂付近ヲ占拠シアル将校以下ヲ以テ速ヤカニ現姿勢ヲ撤シ各所属部隊ノ隷下ニ復帰セシムヘシ」の奉勅命令が出た。

二十九日、部隊上空を飛ぶ飛行機から「下士官兵ニ告グ、今カラデモ遅クハナイカラ原隊ヘ帰レ。抵抗スル者ハ全部逆賊デアルカラ射殺スル。オ前達ノ父母兄弟ハ国賊トナルノデ皆泣イテオルゾ」という文面のチラシが撒かれた。また九段下の軍人会館の戒厳司令部からも同様の放送が流れ反乱は一気に終息していった。

053 大陸

第五十三

大陸

一

日本ワットソン統計会計機械株式会社が活動を開始したのは二・二六事件の翌年、一九三七年だった。この国が軍国主義に大きく転換したときに、自由・平等を標榜する国の最新機械装置メーカーが始めたのは皮肉な回り合せだった。

軍国主義が顕在化した事象の第一歩は、この年の一月、廣田弘毅内閣が瓦解したことだった。引き金となったのは陸軍大臣・寺内寿一のゴリ押しである。

第七十回帝国議会で立憲政友会の衆議院議員（前議衆院議長）浜田国松が二・二六事件以降の軍部の政治干渉を批判する演説を行った。

これに対して寺内が
——軍人を侮辱している。

と反駁した。

浜田が

——速記録を調べて私が軍を侮辱する言葉があるなら割腹して君に謝罪する。なかったら君が割腹せよ。

と激しく寺内に詰め寄り、寺内が壇上から浜田を睨みつける事態となった。憲政史上に残る「腹切り問答」である。

このあと寺内は廣田首相に

——政党は時局の認識が甘い。

と議会の解散を要求した

議會を解散する・しないは首相（閣議）の専権事項という昨今の常識に従えば、廣田は寺内を罷免すればよかったところが大日本帝国憲法に

「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」

とあって、首相といえども陸海軍の人事に口を挟むことができなかった。

しかし議會を解散する大義がない。となると寺内は従わない。つまり廣田の選択肢は内閣総辞職しかなかった。

後任に指名されたのは宇垣一成だった。寺内の九歳年長で、長州閥の流れを組む宇垣派の頭目である。かつ、予備役編入を忌避する寺内の希望を叶えたことがあった。元老・西園寺公望は寺内以下の陸軍主戦派を抑えることができると考えた。

ところが陸軍大臣が決まらなかった。というのは、陸軍大臣については三長官合意を必要とする慣例があった。だ

けでなく、宇垣の打診に小磯国昭（当時陸軍中將・朝鮮軍司令官、のち首相）が答えたように、

——東京に向かう途中で『予備役編入』の通知を受け取って無駄骨になる。

という奥の手があった。

宇垣は自分が陸相を兼任することも考えたが、前年五月に復活した

——軍部大臣は現役武官に限る。

とする制度が壁になった。軍部主導の政治を目指す参謀本部の石原莞爾（大佐）らが、前陸相の寺内寿一（大將）、教育総監の杉山元（大將）や憲兵司令官の中島今朝吾（中将）を巧みに操縦した。

それを受けて誕生した林銑十郎内閣は、外務・文部の二大臣を林が兼任するにわか仕立てだったし、組閣後百二十三日で総辞職に追い込まれた。結果として近衛文麿に落ち着いたのは、近衛が平民出身の政党内でも軍人でもなく、後陽成天皇十二世の孫、藤原摂関家という血脈にあるからだだった。

政治的なにらみ合いで二進も三進も行かなくなったとき、この国は体温を持つ人ではなく、人のかたちをした形代（かたしろ）を推戴することが少なくなる。

人形（ひとがた）で「とりあえず休戦」するのだが、秀

吉が三法師を担いだのと同じように、近衛内閣は陸軍の傀儡になってしまった。これを機に、日本は戦争に突入していく。

その直後、七月七日到北京郊外約十キロの盧溝橋というところで、日中両軍が武力衝突する事件が勃発した。「盧溝橋事件」である。

次いで八月十三日、今度は上海で日中両軍が交戦状態に入った。近衛内閣が「中華民国政府断固膺懲」の声明を出して中国との全面戦争に突入したのは十五日である。

十一月に入ってドイツが日中和平工作に乗り出したが、交渉が始まった十二月、南京攻撃に当たっていた日本軍が長江河畔に停泊していた軍艦「バネー」号、「レディバード」号を砲撃する事件が発生した。日本の軍事行動は国際連盟でも批難決議の対象となっていたから、この一件で第三国を仲介役とする和平交渉は頓挫せざるを得なくなった。

日本軍は十二月十三日、当時の中国の首都である南京を占拠して当初の目的を達成した。しかし中国国民政府は首都を武漢に移して対日徹底抗戦の姿勢を崩さなかった。このとき日本政府が矛を収めていれば、後々の大きな不幸は避けることができたかもしれない。

だが南京占領軍が多数の中国人軍民や婦女子を暴行虐殺するという「南京事件」が発覚した。だけでなく、近衛内

閣は翌三八年一月十六日、

—— 国民政府を相手にせず。

として和平交渉を打ち切った。これによって事態は決定的になってしまふ。

「自由」と「民主」を標榜するアメリカ (A = America) を軸に、イギリス (B = Britain)、中国 (C = China)、オランダ (D = Dutch) の四カ国は結束を強め、対日共同戦線、いわゆる「A B C D 包囲網」を形成していく。それは、九九%以上を海外に依存していた石油が入らなくなることの意味していた。

一九三八年四月一日、近衛内閣は「国家総動員法」を公布し、五日には「電力管理法」を制定して電力の国家管理を実現した。日本軍は二十四個師団を投入して総攻撃を続け、五月に徐州、十月に武漢と中国各地を占領していった。だが国民政府は首都を重慶に移してなおも徹底抗戦を継続した。

二

一九三八年、欧州ではアドルフ・ヒトラー率いるナチス・ドイツ軍が三月にオーストリアを併合、十月にチェコのスデーデン地方に進攻して、英仏との緊張感を高めてい

た。ヒトラーは強力な統率力のもとに軍隊を機械化し、文字通り「疾風怒濤」(Sturm und Drang) の勢いでなだれ込んだ。

ドイツでは「クリスタルナハト」と呼ばれるユダヤ人迫害が激化しており、ドイツと国境を接するオランダやフランス、スイスなどにはユダヤ人難民が大量に逃げ込んでいた。

六月には中国共産党の毛沢東が「持久戦論」を発表して対日抗戦の継続を訴え、七月にはアメリカが「同義的対日禁輸」を決定した。アメリカはこのころから、大洋をはさんだ東西二つの大陸の動き——ナチス・ドイツと大日本帝国の軍事的膨張——にどう対応すべきか、シミュレーションをスタートさせていた。

アメリカが取り組んでいたのは兵器の開発ばかりでなかった。

そう書くと、本稿の本旨から、

—— はは、ん、さては計算機だな。

と推測する向きがあるかもしれないが実はそうではない。

I B M 社が陸軍に計算機の活用を提案するのは一九四〇年の七月だし、陸軍がペンシルベニア大学のムーア・スクールと砲弾弾道計算用の計算機開発にかかる契約を結ぶのは一九四三年六月である。

連邦政府も軍も、一九三七年・三八年の時点では計算機に思いが至っていなかった。彼らが着目したのは計数的経営手法、つまりランチェスターの法則だった。その背景には、いずれ勃発するかもしれない世界規模の戦争では（かわらざるを得なくなるとして、だが）、大規模なプロジェクトを運営する手法を採用すべきだ、という考えがあった。戦争を数値化しようというのである。

この話を聞いたら、当時のナチス・ドイツ関係者は

——数式で戦争ができるか。

と鼻で笑ったに違いない。

まして大日本帝国の軍関係者は

——精神がなつとらん。

と怒鳴ったかもしれない。

実際、翌三九年の二月、平沼騏一郎内閣は「国民精神総動員強化方策」を決定した。国民を総動員して対英米戦争に当たる準備を進める、というわけだった。

二月には早速、「鉄製不急品」の回収を開始した。寺院の鐘や台所の鍋釜が消えていった。これをきっかけに、巷間では「大東亜共栄圏」の言葉が頻繁に使われるようになっていく。

五月十一日、ノモンハンで勃発した日ソ軍の衝突で、日本帝国陸軍第二十三師団の東支隊が壊滅した。のちにいう

「第一次ノモンハン事件」である。

戦いは日本軍にとって初めて戦車対戦車の草原戦となったが、精銳を誇った関東軍の安岡戦車支隊はあっけなく壊滅し、歩兵部隊もソ連機甲師団の前に太刀打ちできないことが判明した。特に戦車は優劣の差が極端だった。

ただ一つ、優位であることが確認できたのは航空機だった。

同年五月二十日から月末までの戦いで、日本の航空機は攻撃してきたソ連軍機のうち五十九機を撃墜して損失ゼロ、六月二十二日にはソ連軍の百五十機との空中戦で四機を失ったものの撃墜五十六、さらに二十六日までに撃墜八十八を記録している。

このときソ連極東軍が保有していた航空機は約二千機、対して日本は三百四十機だった。質が数を制した。

優秀な航空戦力は、飛行兵の錬度と航空機そのものの性能によっていた。

満州で活躍したのは中島飛行機の「九七式戦機」（中島キ-27）である。また、三菱重工業の名古屋航空機製作所（名航）では、海軍から発注された次期主力戦闘機が完成しつつあった。

その年の七月、名航の堀越二郎が九二年の年月を費やし

て設計した海軍零式艦上戦闘機（零戦）の試験飛行が行われ、最高速度五百キロ／時という当時の戦闘用航空機としては最高記録を樹立していた。ちなみに「零式」は、海軍に制式採用された一九四〇年が皇紀二千六百年に当たっていたため、末尾の「〇」を取って名付けられた。

同じ月に日米通商航海条約の破棄が決まった。九月にはドイツがポーランドに侵攻して第二次世界大戦の欧州戦線が火蓋を切り、日本では「贅沢品は敵だ！」の合言葉のもとで、米、砂糖、マツチ、ガソリンなどの販売・使用が規制されていた。

戦時体制の強化を受けて、民間では輸入品の排斥が激化した。丸善や黒澤商店、関東大震災のあと黒澤商店からのれん分けで独立した日本事務器商会（のち日本事務器）といった輸入事務機器の販売会社は、国産化に移行せざるを得なかった。

日本事務器商会は内紛もあって一九三二年に分裂し、創業者の田中啓次郎は代表者の座を降りていた。田中はこのために東京・荻窪の私邸を抵当に入れて資金を工面したが、それでもなお五万円の借金が残っていた。

田中は日本事務器商会から離れ、くろがね工作所（大阪市西区）社長の三村小太郎の支援を受けながら、帳簿型ビジュアルレコーダー（カード式情報記録装置）「バイコ」の

開発に成功した。事務機器の輸入が激減したことが幸いして、「バイコ」は増産に次ぐ増産となった。当初の販売目標は月間三百台だったが、一九四一年には年五万台を販売したという。陸海軍の工廠が大口取引先だった。

三

排斥されたのは製品だけではなかった。

外来語、特に英語が目撃の敵になった。

明治期に欧米から輸入された文化は、例えば正岡子規がベースボールを「野球」と翻訳するなど「日本化」されていた。ちなみに現在、われわれが何気なく使っている文章の作法は、この人が生み出した。

維新以後も日本語の文章表現は旧態依然たる擬古文ないし漢文読下し的な表現で行われていた。すなわちそれは旧体制の「家」を機軸とする思想の名残であって、日常に交わされる会話と大きく乖離していた。彼はそれを「日記」というかたちで打ち破った。誰もが自分の言葉で自分を表現する手法が提示され、庶民が

——私は……。

で語り始めた。それが「自我」というものを育んだ。夏目漱石『坊ちゃん』『我輩は猫である』、伊藤左千夫『野菊

の墓』、長塚節『土』等々は、すべてこの人から出た。

その子規は東京帝大時代、神田錦町の旧開成所跡にあったグラウンドで野球を楽しんだ。その際に編み出した用語が現在も使われている。ベースⅡ「塁」、フライⅡ「飛球」、キャッチャーⅡ「捕手」、ファールⅡ「邪飛」、デッドボールⅡ「死球」、ホームランⅡ「本塁打」、ヒットⅡ「安打」、バッターⅡ「打者」、ライトⅡ「右翼手」、センタースⅡ「中堅手」、レフトⅡ「左翼手」、ショートⅡ「遊撃手」……。

そこには知恵とセンスがあった。

ところが戦時体制下で起こった英語の排斥は、「アウト」を「ダメ」、「セーフ」を「ヨシ」と言い換える類で、知的センスがまったくなかった。暴力をもつて文化を排斥するに等しかった。英語を使ったり、欧米の事情に詳しいというだけで、白眼視する風潮が蔓延し始めた。

アメリカを敵視する風潮は産業界でも同様だった。

軍需動員に伴って、資本の鎖国が始まった。国内電子機器メーカーで唯一の日米合弁会社であった日本電気は、一九三七年十二月に資本金を一千二百五十万円から三千万円に増資して、米インターナショナル・スタンダード・エレクトロニクス（I S E）社の保有株式比率を三六・九%に下げた。さらに四一年八月に再度、資本金を五千万円に増資して、I S E社の出資比率を一九・七%に下げるとともに、

住友グループが四六・一%を占めるようになった。

四一年十二月八日のインドシナ攻撃と真珠湾攻撃で、ついに米英蘭三国との戦争に突入すると、日本政府は同月二十三日、「敵産管理法」を公布・施行した。これによってI S E社の保有する日本電気株は凍結され、日本電気は完全に住友本社 of 統括下におかれることになった。

翌四二年二月、社名を「住友通信工業」に改め、全工場が軍需工場に指定された。同社は政府から電探（レーダー）の研究開発を指令されていたが、四一年六月に川崎市生田に研究所生田分室を開設している。同分室の跡地は、のちに専修大学生田キャンパスとなった。

また工場では無線通信機、電波探知機、高射砲用標定機、方向探知機、水中探音機など無線関連装置を生産した。一九四〇年度の生産高四千五百三十九万円のうち、軍需の比率は四三%だった。

これが四一年度になると五千四百八十七万円のうち六四%に跳ね上がり、四二年度は七千四百七十三万円のうち八〇%、四三年度は一億七千二百四十六万円のうち九四%、四四年度は三億二千四百六十八万円のうち九六%となっている（終戦直後、住友通信工業が連合国軍総司令部の経済科学局に提出した記録による）。

また、日本軍の展開に伴って、三七年十二月に「満州通

信機器株式会社」を設立したほか、四一年十二月に接收した「中国電気公司」の経営委託を受け、さらに四三年五月にはジャワ島バンドンにあったオランダ領インドネシア政府保有の無線研究所と付属工場の経営を委任され、これを「ジャワ無線機器製作所」と改称した。

ジャワ無線機器製作所は当初、現地日本軍の無線局や送信所の機械設備を修理・補給するだけだったが、やがて真空管や無線装置などを現地で生産するようになった。従業員は日本軍に降伏したオランダ人や現地人など一千三百五人、うち日本人は二十一人だった。

補 注

廣田弘毅 ひろた・こうき／1878～1948。福岡市出身の外交官で、一九二六年オランダ公使、三〇年駐ソビエト連邦特命全權大使、三三年斎藤実内閣、三四年岡田啓介内閣で外務大臣を経て三六年三月内閣総理大臣となった。

寺内寿一 てらうち・ひさいち／1879～1946。東京府生まれ、東京府育ちだが山口県出身となっている。第十八代内閣総理大臣などを歴任した元帥陸軍大將寺内正毅の長男で、皇族以外では陸海軍を通して親子二代で元帥府に列せられた唯一の人物である。陸軍大臣在任時は、衛生省（厚生省、現・厚生労働省）の設立を提唱。太平洋戦争期には、編成時から一貫して南方戦線の陸軍部隊を統括する南方軍総司令官を務めた。

浜田国松 はまだ・くにまつ／1868～1939。一九〇四年（明治三十七）三重県郡部から衆議院議員となり以後十二回連続で当選した。甲辰俱樂部、政友俱樂部、猶興会、又新会を経て、一九一〇年（明治四十三）立憲国民党の結成に参加した。一九一七～一九二〇年衆議院副議長、一九三四～一九三六年衆議院議長を務めた。最後まで自由主義・反ファッショの姿勢を貫いた。

林銑十郎 はやし・せんじゅうろう／1876～1943。金沢市に生まれ一八九六年陸軍士官学校卒、一九〇三年陸軍大学校を出て日露戦争後、連隊長、旅团长、陸軍大学校長、教育總監部本部長、近衛師团长、三〇年朝鮮総督。三二年大將に進み、三四年岡田啓介内閣で陸相。このとき真崎甚三郎を陸軍教育總監から罷免し二・二六事件の遠因を作った。三七年首相となったが四か月

で辞任し 四二年大日本興亜同盟総裁。満州事変のとき一存で朝鮮軍を満州に越境させるなど何かと問題の多い軍人だった。

盧溝橋事件 一九三七年七月七日夜、北平（北京）郊外の豊台に駐屯していた支那駐屯歩兵第一聯隊第三大隊第八中隊の将兵が盧溝橋付近の河原で夜間演習中、実弾を撃ち込まれ、点呼時に兵士の一人が所在不明だったため、中国側の攻撃があったと判断して起きたと言われる。比較的小規模な戦闘が繰り返された後、九日には中国側からの申し入れにより一時停戦状態となった（Wikipedia「盧溝橋事件」）。

行方不明とされた兵卒は志村菊次郎という初年二等兵だった。このとき伝令を務めていた彼は「第一小隊に戻ろうとしたが方向を失ってしまった」と後述している。のちビルマ戦線で戦死した。

日本の支那駐屯歩兵第一連隊が首謀者と目した宗哲元はこのとき北京に赴いていて事件のことを知らされ大いに慌てた。長く真犯人は不明とされてきたが、のち中国共産党が劉少奇（Liu Xiaoli／1898～1969）とその一派が行ったことを正式に認めた。

宗哲元 Song Zheyuan／そう・てつげん／1885～1940。盧溝橋事件のとき、国民政府軍第二十九軍長だった。三二年察哈爾省政府主席、三五年冀察政務委員会委員長を経て三七年に第一戦区副司令長官兼第一集團軍総司令となった。しかし病のため三八年退役し、そのまま病没した。死後「第一級上將」の位を贈られた。

パネー号 日本軍の侵攻から在中國アメリカ人を保護する目的で南京から五十キロほど離れた揚子江岸に停泊していたアメリカ砲艦で、日本軍が誤って砲撃し沈没させた。艦長はのちに太平洋艦

隊を指揮したスプルーアンスだった。

南京事件 中国では「南京大屠殺」[Nanking Atrocities]「Rape of Nanking」と呼ばれる。

一九三七年十二月十三日、中国国民政府の首都南京市を占領した日本帝国陸軍の第十軍が六週間にわたって掃討作戦を展開した。その際、多数の中国軍捕虜、敗残兵、便衣兵及び非武装市民を不法に殺害したとされる。大日本帝国陸軍は移動中に上海、蘇州、無錫、嘉興、杭州、紹興、常州などでも捕虜や市民への虐殺と略奪を続けていた。欧米ではシカゴ・デイル・ニュースやニューヨークタイムズ、中国では大公報などが現地情報として報道しており、当時から国際的な非難が集中した。

欧米報道機関が用いた写真の中には南京事件と関係のないものや実態と異なる作画的なものが混入している。しかし南京事件そのものが欧米報道機関や軍関係者および、中国共産党などによって捏造されたことにはならない。軍刀の試し斬りや婦女暴行、嗜虐的な拷問、大量殺戮などが行われたことは否定できない。

アドルフ・ヒトラー Adolf Hitler / 1889 - 1945。オーストリアのブラウナウに税関吏の子として生まれた。一九一三年オーストリア・ハンガリー帝国の兵役を逃れるためミュンヘンに移住し、第一次世界大戦にはドイツ帝国の志願兵として参加した。軍隊での階級は伍長で留まった。対ロシア戦線で使用された毒ガスによる負傷で視力は回復したものの声は元に戻らなかった。

このうち「ドイツ労働者党」に参加し独裁を認めるよう党綱領を改変し、党名を「国家社会主義ドイツ労働者党」と改めて二一年党首となった。イタリア・ファシスタ党ムッソリーニに憧れ武装蜂起を画策したが失敗、それを機に平和的政権奪取に転換し三

二年大統領選挙に出馬した。この選挙には敗れたが続く総選挙で第一党に躍進、ヒンデンブルク大統領はやむなく三三年ヒトラーを首相に任命した。

三三年三月「全権委任法」を制定、翌三四年六月軍事クーデターで政敵を一掃して独裁体制を固め三九年ポーランドに侵攻して第二次大戦の口火を切った。四〇年七月国防軍最高司令官に就任し戦争最高指導者となったがロンメルをはじめとする軍人にとっては「たかが伍長」に過ぎなかった。対ソ戦に失敗し連合国軍のノルマンディ上陸を許して以後は軍部のクーデターを恐れつつ、空想的な「革命的新兵器」に一縷の望みを託した。原子爆弾はその中の一つだった。

四四年七月クラウス・シェンク・フォン・シュタウフェンベルクによる暗殺未遂事件で数人の側近が死亡したがヒトラーは奇跡的に無傷だった。四五年三月「ドイツは世界の支配者たりえなかった。ドイツ国民は栄光に値しない以上、滅び去る他ない」と述べ、全土を焦土化する「ネロ指令」を出したが軍需相アルベルト・シュペーアによって回避された。同年四月三十日愛人エヴァ・ブラウンと結婚し、翌日、総統官邸地下壕で妻エヴァと共に自殺した。

ズデーデン チェコの北部の総称で、第二次大戦前、ここに多数のドイツ人が居住していた。ナチス・ドイツが近隣諸国に侵攻する口実として、列強によるズデーデン進出容認が利用された。

疾風怒濤 シュトルム・ウント・ドラング。ローマン主義に対してシラー（一七五九 - 一八〇五）、ゲーテ（一七四九 - 一八三三）などが提唱した民族主義的思想で、ナチス・ドイツの思想的標語となった。

平沼騏一郎 ひらぬま・きいちろう／1867～1952。岡山県に生まれ一八八八年帝國大学(のち東京帝國大学)を出て司法省に入った。一九〇七年大逆事件の捜査を指導し二二年検事総長、一四年シーメンス事件の捜査を指揮して二三年山本権兵衛内閣で法相。西園寺公望とは犬猿の仲で、何度も首相候補とされながら組閣することがなかった。西園寺の影響力が薄れた三九年首相となったが日独防共協定と矛盾する独ソ不可侵条約にあつて「複雑怪奇」の言葉を残して辞任した。ポツダム宣言受諾に最後まで反対し、戦後A級戦犯として巣鴨拘置所に拘留、四八年終身刑の判決を受けたが五二年仮出所、ややあつて病死した。

ムーア・スクール Moore School of Electrical Engineering: アルフレッド・フィトラー・ムーア (Alfred Fitter Moore) の寄付で一九二三年六月に設立され、ペンシルベニア大学から電気工学部として認定された。ここで教員を務めていたジョン・モークリー (John William Mauchly / 1907～1980) とジョン・プレスパー・エッカート (John Adam Presper Eckert Jr. / 1919～1995) がENIAC, EDVACを開発した。のちペンシルベニア大学工学部に統合された。

第一次ノモンハン事件 外モンゴル軍総司令官チヨイバルサン

元帥は三九年五月十五日ごろ、第六騎兵師団をハルハ河に進出させた。同時にソ連第五十七狙撃軍団も同地に結集し、日本帝國陸軍東支隊が撤収した後の東岸に陣地を構築した。これに対して帝國陸軍第二十三師団は歩兵第六十四連隊の山縣支隊に出勤を命令、飛行隊も増強して五月二十八日攻撃を開始した。東支隊は側面攻撃に向かったが、ソ連・モンゴル連合軍はハルハ河西岸台上から砲兵射撃で反撃した。結果として東支隊は戦車隊を伴うソ連軍歩

兵部隊に包圍され孤立し、出動兵力の半数が戦死、死傷六三%の大損害を受けた。山縣支隊は師団司令部の命令により五月三十一日に戦場を離脱し、ソ連・モンゴル軍もハルハ河西岸に後退したため、戦いは収束した。

戦車の優劣 日本陸軍は戦車を「歩兵部隊を支援する補助的兵器」と捉え小回りが利く短砲・小口径と薄い装甲で装備した。対してソ連軍はヨーロッパ大陸での機械化戦闘に備え、長砲・大口徑で厚い装甲を備えた重戦車を開発した。装甲に使った鋼鉄の製造技術も優劣がはっきりしていた。のちに満州の戦車隊整備兵だった福田定一(1923～1996、筆名:司馬遼太郎)は、「日本の戦車はヤスリでこすると削れるほど装甲が軟らかかった」と述懐している。

中島飛行機 海軍機関大尉だった中島知久平(なかじま・ちくへい/1884～1949)が一九一七年に創業した。試作機がなかなか飛ばないので「さつはだぶつくお米はあがる／何でもあがる／あがらないぞい中島飛行機」などと揶揄された。のち三井物産と提携して陸軍から飛行機的设计・製造を受注し、第二次大戦では陸軍の主力戦闘機「隼」を生み出した。現在の富士重工の前身。

九七式戦闘機 一九三五年末、日本陸軍が中国大陸での戦闘用に発注した。単座式で全幅十一・三メートル、全長七・五三メートル、総重量一七九〇キログラム、最大速度四六〇キロメートル／時、七・七ミリ機銃二基を装備し、草原や荒地での離着陸を考慮してスパッツ型固定脚を採用していた。一九四二年までに三千三百八十六機が生産された。

堀越二郎 ほりこし・じろう／1903～1982。群馬県に生

まれ東京帝国大学を出て三菱重工業名古屋航空機製作所に入った。ドイツのユンカース社に留学して航空機設計を学び、「九六式艦上戦闘機」「零式戦闘機」「雷電」「烈風」などの設計を担当した。第二次大戦後は在日アメリカ軍立川基地技術顧問を経て東京大学宇宙研究所講師、防衛大学校教授などを務めた。

零式艦上戦闘機 「零戦」「ゼロ戦」とも。制式採用された一九四〇年が皇紀（神武即位年の元年とする年紀）二千六百年に当たり、皇紀の下二桁を取るというルールから「零式」となった。九六式艦上戦闘機の後継機として投入され、日中戦争から太平洋戦争全期に量産された。一千馬力のエンジン「栄」を搭載し、二十ミリ機銃二門、無線電話・電信機を装備した。航続距離三千キロ、最高速度五百キロ／時、急降下耐久速度七百四十・八キロ／時を達成した。一九三九年四月一日陸軍各務腹飛行場（岐阜県）で初飛行してから一九四五年八月十五日まで、一万四百三十機が生産されたとされている。

田中啓次郎 たなか・けいじろう／1891～1981。新潟県に生まれ一九一六年早稲田大学を出て黒澤貞次郎商店に入った。一九二一年支配人となったが関東震災のあと独立して日本事務器商会を設立した。輸入事務機器の販売ばかりでなく独自開発の情報記録管理装置を開発した。第二次大戦後、株式会社に改組し六一年日本電気と共同で小型電子計算機の開発に着手し、のちの「オフコン」の基礎を作った。六八年勲四等瑞宝章。

054 軍需動員

第五十四

軍需動員

一

ヨーロッパでナチス・ドイツが台頭し、極東では日中戦争の泥沼化と、国境紛争をめぐるソ連との緊張が高まっていく中で、電子技術に大きな前進があった。ラジオの普及とテレビジョンの技術開発の副産物である。

それは二つあった。

一つは「Radio Detecting And Ranging」すなわちRADAR（レーダー）だった。

オートバイやトラックなどが近くを走るとき、ラジオ放送にガリガリと雑音が入った。ラジオの電波に波長の異なる電波が紛れ込み、干渉が起きる。同じように上空を航空機が通過すると、受像電波が乱れる。

その現象に、軍部が注目した。

それまでも、電波が物体にはね返ってくることは知られていた。だが、その反射電波をうまくとらえることができないでいた。

一九二五年（大正十四）、東北帝国大学の工学部長だった八木秀次が、独自の超短波送受信理論に基づく指向性アンテナを開発した。彼は翌二六年に特許を取得したのだが、この発明は日本ではまったく評価されなかった。

八木は三年後の二八年（昭和三）、今度は弟子の岡部金次郎と共同で超短波発振器「マグネトロン」を初めて実用化し、アメリカで発表して国際的に高く評価された。指向性アンテナとマグネトロンを組み合わせれば、物体にぶつかって返ってくる微細な電波を増幅することができる。

欧州で第二次世界大戦が勃発した一九三九年（昭和十四）、アメリカ合衆国はイギリスを支援する目的でレーダーの開発に本腰を入れ、ナチス・ドイツ空軍機によるロンドン爆撃対策に実用化した。ただし初期のそれは、漠然と「何かが近づいてくる」ということが分かる程度だった。

空中に浮かばせた防衛用の気球と似たり寄ったりの効果だった。もちろん何か、とはナチス・ドイツ軍機であるほかになかったのだが、迎撃のために舞い上がったイギリス軍戦闘機の性能がドイツ軍機に及ばなかった。

日本の軍部もわずかにその情報を得て、テレビジョン・システムの開発で実績があった東京芝浦電気と日本電気にレーダーの開発を指令した。日本電気は独自に製作した三極真空管を使って四〇年に試作に成功し、東京芝浦電気が

四二年に実用化第一号を開発した。

実をいうと、それより前の一九三五年（昭和十）ごろ、海軍研究所の技師がレーダーの研究開発を軍の上層部に進言したことがあった。だが、上層部は相手にしなかった。

「闇夜に提灯を点すようなものではないか」

「なにごとく機械に頼ろうとする考えがなつとらん。正確な砲撃は訓練と精神である」

と門前払いにした。

「そんなものより、もつと破壊力のある新兵器の開発と将兵の訓練が大事」

と判断したのだった。

もつと破壊力がある新兵器、とは井深大が取り組んでいた「熱光線兵器」のことである。それについては後述する。ともあれ地道な科学技術の積み重ねというものを、日本の軍部は理解していなかった。

これからやや後のこと、一九四二年一月にフィリピン、二月にシンガポールを占領した山下奉文麾下の陸軍第二十五方面軍は、イギリス軍撤退後の陣地から地上用対空電波警戒機を鹵獲した。

それには「Y A G I A R R A Y」という文字が書かれていた。直訳すると「Y A G I の配列」だが、電波を受診する棒状の反射器（リフレクタ）、輻射器（ラジエータ）、

導波器（ディレクタ）を並べる構造のことをいう。

陸軍研究所、日本電気、東芝などの技師が調査したところ、押収した文書などから八木アンテナであることが判明した。

すると今度は、

「電波探知機を開発せねばならぬ」

ということになった。

これを聞いて、八木の師である長岡半太郎は

「周章狼狽、敵に学んで八木アンテナを装備するに至つたは、笑止と言わん」と憤慨した。

二

もう一つの副産物は電子レンジである。

一九三六年に開催されたベルリン・オリンピックのとき、ナチス・ドイツは強力な電波発信装置を開発した。その装置はテレビ中継のためのものだったが、不思議なことにアンテナの周辺に大量の昆虫の死骸が落ちていた。

マイクロ波に殺虫効果があるということから、ナチス・ドイツはこれを殺菌装置に応用することを考えた。実用レベルの装置が開発されたのは一九三九年のことである。

殺菌装置と聞くといかにも平和的な利用のように思えるが、その目的はおぞましいものだった。ナチス・ドイツはこの装置を使って、アウシュビッツ収容所で殺戮したユダヤ人の遺体や、ガス室に送り込む前に奪った衣類を効率的かつ安全に消毒した。

連合国軍の爆撃によって装置の生産が遅れ、医療機関や収容所に設置されたのは四四年六月だったとされる。

一方、連合国側が考えたのは、

——昆虫を殺せるのなら、人間も殺せるはずだ。
ということだった。

マイクロ波で敵の兵士を殺傷することができれば、建物や橋などの施設、航空機や戦車などを無傷で手に入れることができる。電波兵器または熱光線兵器の開発が秘密裡に進められた。

この原理には、のちにソニーを設立した井深大も、第二次大戦前に気がついていた。彼は陸軍の命令で「熱光線兵器」の名で開発に取り組んでいた。これが現実のものとなっていたら、第二次大戦は怖ろしい——火炎放射器や原子爆弾だけで十分過ぎることだが——神をも畏れぬ悪夢の戦いになっていた。

偶然というのは、思わぬかたちで突然姿を現わす。

アメリカで軍事用レーダーの開発に当たっていた研究員

がマイクロ波を実験していたときのことだった。ある技師が、ポケットに入れていたチョコレートのまにか溶けていることに気がついた。研究中にチョコレートをほおばっていたというのが、いかにもアメリカ人らしい。

はじめは何が原因か分からなかった。

次に、やはりレーダーの実験中、ポケットに入っていたキャンデーが熱くなっていることが分かった。不思議なことに、理解できない現象にぶつかるのと、原因を解明したくなるのが研究者、技術者というものであるらしい。

ポケットに入れていたチョコレートやキャンデーは、室温や人の体温でそう簡単に溶けるものではない。何か別の原因があるはずだった。彼らはレーダーの開発をそっちのけにして、チョコレートやキャンデーの研究を始めた。他の研究室では同じ現象が起こっていないのだから、レーダーの電波に原因があるらしいことが推測された。

詳細に調べたところ、マイクロ波がチョコレートやキャンデーの分子を超高速に振動させたことが分かった。超高速で振動する分子と分子が摩擦熱を起こし、物体を加熱させたのである。熱線兵器、熱光線兵器は実現しなかったが、幸いにもそれが家庭用電子レンジに使われることになった。

こうした新しい機器や装置、ないし、まだ具体的な姿を見せていない技術というものは、当時においては第一義に

軍事用だった。とはいえ民需用に開発することが禁じられていたわけではなかった。

ところが日中戦争の本格化によって、「軍需」という言葉が誕生した。民需は後回し、というより

——ケシカラン。

ということになった。

三

満州軍閥の領袖・張作霖が奉天近郊で爆殺される一と月半ほど前、一九二八年（昭和三）の四月十七日のこと、二十二条で成る「軍需工業動員法」が成立した。その法律によれば、「軍需品」は次のようなものを指すと定義されていた。

- 一 兵器、艦艇、航空機、弾薬並軍用器具機械及物品。
- 二 軍用ニ供シ得ヘキ船舶、海陸聯絡輸送設備、鉄道軌道及其ノ附属設備其ノ他ノ輸送用物件。
- 三 軍用ニ供シ得ヘキ燃料、被服及糧秣。
- 四 軍用ニ供シ得ヘキ衛生材料及獣医材料。
- 五 軍用ニ供シ得ヘキ通信用物件。
- 六 前各号ニ掲クルモノノ生産又ハ修理ニ要スル材料、

原料、器具機械、設備及建築材料。

七 前各号ニ掲クルモノヲ除クノ外勅令ヲ以テ指定スル軍用ニ供シ得ヘキ物件。

最後の一条「勅令ヲ以テ」を適用すれば、この国土に存在するおよそすべてのもの——日本国民の生命・財産まで含んで——が軍需品になるという内容である。

そこまでの法律を備えていながら、政府は新たに「国家総動員法」を発令・公布して、強制力と統制力、つまり有無を言わせず国民のすべてを軍事体制に協力させる力を担保した。その新しい法律が及ぶ範囲は、物品や生産設備、国民の生命・財産にとどまらなかった。

——生命・財産のほかには何があるのか。

と読者は訊ねるかもしれない。

それは精神ないし「心」というものである。思想・信条、宗教、学問、創作、あるいは欲求、希望、慈悲、喜怒哀楽、こうしたもので国家に供出せよという。それこそがファシズムの目的とするところであって、そこに人道的な行動を許す余地は残されていなかった。

軍需動員が及んだのは民間企業だけではなかった。大学の研究も、軍需一色だった。

「研究所での研究テーマは軍事関連のみでした」

と、当時、東京帝国大学の航空研究所に研究員として勤務していた庄野久男は語っている。

庄野久男は一九一九年（大正八）、徳島県勝浦郡に生まれ、一九三七年（昭和十二）に東京・目黒にあつた無線電信講習所に進学した。

士官半民の運営になる専門学校で、無線通信士の養成機関だった。一級の資格を取ると商船学校卒と同格となり、外国航路の船舶に乗ることも夢ではなかった。

一九三九年に卒業すると、庄野はその優秀さが認められて東京帝国大学の航空研究所に研究要員として配属された。ところが、配属から二週間後に陸軍から召集令状が届いた。香川県善通寺に駐屯していた第四連隊の山砲隊への入隊が決まり、ここで訓練を受けた。同年十月、第四十師団に転属となり、中国に向けて坂出港から出征した。

一九四〇年六月二十一日、中国遊撃軍掃討のために歩兵四十人、砲兵十六人を率いて出動したところ、二千人ほどのゲリラ兵に三方を包囲されてしまった。このとき彼は歩兵が携帯していた無線機を使って友軍と連絡を取ろうとした。

ところが無線がまったく通じない。

——もはやこれまでか。

と覚悟を決めた。

覚悟、というのは、部隊が一丸となって敵中突破の戦端を開くということである。もちろん、全員が戦死するであろう。

——最後にもう一度だけ。

と試みた無線が、わずかに通じた。自分たちの居場所を伝えたところ、日本軍が確保している安全な道が示された。その情報をもとに、部隊は闇にまぎれて脱出することに成功した。

除隊となったのは四一年の春だった。東京に戻ると東大航空研究所は東工大、東北大、陸軍航空研究所の共同研究の場になっていた。庄野に与えられた課題は、射撃訓練用模型飛行機の無線操縦装置の開発だった。

九月に技官に昇格し、今度は電波で航空機の航空高度を計る装置の開発だった。高射砲の照準をより正確にするのがねらいだった。十二月七日に茨城県の水戸飛行学校でテストが行われた。テストでは高度五千五百メートルを実測し、試作装置の性能は「合格」だった。

テストが終わったのは八日の早朝だった。夕方に目が覚めると、玄関のガラス戸に新聞が挟み込まれていた。日本軍のハワイ奇襲成功を知らせる号外だった。

開戦後、庄野は高度計測技術を活用した電探の開発に携

わった。一七二メガヘルツ、三キロボルトの出力、一次パラボラアンテナを使用し、四二年二月六日、百三十三キロ離れた羽田上空の飛行機を捕らえることに成功した。もちろん、それまでも国産のレーダーは開発されていた。陸軍は日本電気製、海軍は東京芝浦電気製を制式採用していたが、航空研のレーダーは戦いのためではなかった。米空軍による本土爆撃に備えるためだった。

以上の話は府中アマチュア・ラジオ・クラブ（現在は府中アマチュア無線クラブ）のホームページ「J A 1 A A 庄野久男 M O プロファイル」ならびにホームページ「B E A C O N 関東のハムたち 庄野さんとその歴史」に出ている。

四

戦時体制への移行が最も大きな痛手をもたらしたのは、海外から事務機械を輸入していた黒澤商店、日本事務器商会、日本ワットソン統計会計機械などだった。彼らは一九三〇年代に起こった国産品愛用運動で最初のダメージを受けた。

ナショナル金銭登録機は、藤山愛一郎の日本金銭登録機に吸収統合され、日本事務器商会はファイリング装置の国

産化に移行せざるを得なかった。

日本ワットソンだけは、苦しいながらも事業を広げることができた。

計算機を国産化する動きは、矢頭亮一の事業がその死によって途絶え、関東大震災で川口式分類統計機の技術が失われた。わずかにヘンミ計算尺とタイガー計算器が電動による自動化を指向していたが、統計会計機械装置の国産化は一朝一夕にできるものではなかった。

軍需で保険業界や軍関連の機関、軍需産業の製造業——造船、航空機、鉄鋼、機械、化学、窯業——などから大型受注があつたし、国産化したパンチカードの継続的な需要が堅調に推移していた。

しかし一九三八年（昭和十三）七月に、日本の中国侵略に対する経済制裁の一環として、アメリカ政府が「道義的対日禁輸」を発動した。このため、日本ワットソンは、受注したIBM社の計算機を円滑に輸入できなくなっていた。当時、日本ワットソンがカスタマーに配布した但し書きがある。

納期ハ輸入許可附後六カ月、但シ輸入不許可ノ場合ハ上記御注文ハ御受致兼候

事実上の受注拒否に等しい。

並行して日本国内では、国家総動員法を境にパンチカード式統計会計機械装置の利用も軍需に傾いていく。

一九四〇年（昭和十五）に立川飛行機が「IBM405」の採用を決定した。

同社は石川島造船所から分離独立し、軍から「赤トンボ」の愛称で知られる複葉式練習機（制式名称は「海軍九三式中間練習機」）の受注を得て、三菱重工業、中島飛行機に次ぐ軍用飛行機メーカーとなっていた。

ここでは日本ワットソン統計会計機械の営業部長だった安藤馨が中心となってシステム設計を行い、資材管理、作業管理、原価計算、賃金計算といった業務を機械化した。

正規ルートでの輸入は、翌四一年の夏、名古屋の大同製銅（のち大同特殊鋼）に設置されたのが最後になった。同社も軍からの発注に大きく依存する軍需産業として、正確・迅速な原価計算や部材管理が必要とされていた。

国家総動員法が施行されてから以後は、日本ワットソンや三井物産、あるいはタイガー計算器販売や黒澤商店、日本事務器商会などは軍需産業に売り込まざるを得なかった。軍艦や戦車、大砲、銃器、軍用トラック、兵装などを生産する企業が、計数管理のニーズを強く持っていた。事実、日本ワットソンの水品浩は一九四〇年以後、航空機や製鉄、

造船といった分野の企業に営業力を集中している。

アメリカ政府は、それによって日本の軍事力が強まることを警戒した。道義的対日禁輸令で鉄、石油、精密加工機械などと並んで計算機が指定されたのは、アメリカ政府の立場からすれば当然のことだった。日本ワットソンは受注を受けても、納品期日を確約できない状態に追い込まれた。大日本帝国海軍の航空隊が真珠湾奇襲攻撃に成功した直後、一九四一年の十二月二十三日に「敵産管理法」が公布、即日実施された。これに伴って日本ワットソンの社員たちは事実上、職を失った。

退社した幹部のうち、北川宗助、島村浩、安藤馨などは、のちに神戸に本拠を置いて統計会計機械装置の国産化を目指すことになる。

それに対して水品は、日本軍がフィリピンの米軍コロヒドール要塞から接収したIBM社の計算機を補修するにとどまった。計算機をめぐる日米のねじれが、日本ワットソンの社員たちの戦後を決定していく。

補注

八木秀次 やぎ・ひでつぐ／1886～1976。大阪に生まれ一九〇九年東京帝国大学電気工学科を出て仙台高等工業教授、のち東北帝国大学工学部教授候補としてドイツに留学した。一九九年東北帝大教授、三二年大阪帝国大学の設立に参画し翌年理学院長、四二年東京工業大学学長、四四年技術院総裁。第二次大戦後、公職追放となったが五三年社会党から立候補して参院議員となり、一方では「八木アンテナ」を創業して社長。五六年文化勲章。

岡部金次郎 おかべ・きんじろう／1896～1984。

名古屋出身で東北帝国大学を卒業した。一九二八年、東北帝大助教授のとき「分割陽極マグネトロン法」を考案し、極超短波を発生することに成功した。四四年に文化勲章を受け、第二次大戦後、大阪大学教授を務めた。

マグネトロン magnetron：最初に発明したのは一九二二年、アメリカ合衆国のアルバート・ハル（Albert Wallace Hull／1880～1966）とされている。これを現在のような形に発展させたのは大阪大学教授の岡部金次郎である。

長岡半太郎 ながおか・はんたろう／1865～1950。長崎県に生まれ一八八七年帝国大学（のち東京帝国大学）物理学科を出た。九三年ドイツに留学し九六年帰国して数理物理、実験物理、地球物理などの基礎を築いた。二四年「水銀を金に変える方法を発見した」と発表したが、直後に間違いを認めた逸話もある。三七年第一回文化勲章。

庄野久男 しょうの・ひさお／1918～2018。一九三八年

アマチュア無線の免許を取得した。第二次大戦後、一九五二年にアマチュア無線が再び許可された際に、関東エリアの再開後第一号を意味する「JA1AA」のコールサインが電波監理委員会（当時）から交付された。日本アマチュア無線連盟（JARL）の副会長を二期務めた。エピソードはホームページ「JA1AA庄野久男MOプロフィール」（府中アマチュア・ラジオ・クラブ）、ホームページ「BEACON関東のハムたち・庄野久男さんとその歴史」から。

山砲 一九〇八年に制式化され、主に歩兵連隊の支援砲として運用された。分解して六頭の馬に分載または組み立てた状態で一二頭の馬で牽引し八人で操作した。太平洋戦争全期間を通じて多くの戦場で直接・間接支援砲撃に使用された。

藤山愛一郎 ふじやま・あいいちろう／1897～1985。東京都に生まれ、慶應義塾大学を出た。父・藤山雷太（1863～1938）の後を受けて大日本精糖、日東化学工業、日本製紙の社長などを務め、一九四一年に東京商工会議所会頭に就任した。第二次大戦では海軍省顧問、大政翼賛会総務を務め、四四年後半以後は戦争終結に向けた工作を図った。

第二次大戦後、公職追放となった。解除後は日本航空会長、日本テレビ取締役などに就任する一方、政治家となり、五七年発足の岸内閣で外相、自由民主党総務会長などを歴任した。彼が政治家に転身したとき「絹のハンカチを雑巾にするようなものだ」といわれた。

複葉機「赤トンボ」 複葉式で計五千五百八十九機が生産され、一九三八年から機体を赤みの帯びたオレンジ色に塗るようになった。終戦間近には特攻作戦にも加えられた。

055 敵産なれど

第五十五

敵産なれど

一

計算機の軍需利用を物語るのは、その年の春、陸軍から日本ワットソン統計会計機械に大量の発注があったことである。日本IBMの資料では「数十セット」となっているが、日本ワットソン統計会計機械に勤めていた北川宗助の証言によると

「八十セットだった」

という。当時の国内で稼動していたパンチカード式統計会計機械装置の総台数に匹敵する。

この発注は折からのアメリカ政府による輸出規制で実現しなかった。仮に実現していれば以後の戦争の展開は少し違っていたかもしれない。

陸軍が八十セットもの「IBM405」を発注したのは、山下奉文の独断だったといわれている。

彼は意外にも欧州の事情に詳しかった。

若いころ、彼は皇道派——二・二六事件を起こした青年

将校たちの一派——に属していた。そのために、軍部中枢から疎んじられた。

——そういう危険なやつを日本の国内においておくわけにはいかん。

ということ、ドイツやオーストリアなどの日本大使館に武官として派遣された。

体裁はいいが、実態は左遷である。

米英との戦争不可避の気運が高まった一九四〇年、山下は航空総監に就任し、ドイツ視察団の団長としてメッサーシュミット社を見学した。この会社は流線型の高速戦闘機「Bf109E」あるいは、世界で初めて実用レベルのジェット機「Me262」を開発したことで知られる。ここが電動パンチ装置とIBM405統計会計機械装置を活用して、航空機の生産能率を高めていた。

このころ、軍用航空機には高出力のエンジンの搭載が強く求められていた。出力が大きくなるとより多くの燃料を消費することになるのだが、短時間で高高度に上昇すれば同じ量の燃料で飛行時間もしくは航続距離を伸ばすことができる。

具体的には、高度六千メートルが一つの目安とされた。

高度が六千メートルに達すると、空気抵抗が急激に低減し、省燃料化が可能になる。また急上昇速度を上げれば敵

機より早く、より高い位置に達することができ、高出力エンジンの搭載で機体の重量が増すのだが、降下速度が速くなる。

当初は艦船の真上から真つ直ぐ爆弾を落とす作戦が想定され、「重戦闘機」という言葉が生まれた。その流れの中から、「一撃離脱」という戦法が編み出された。上段から全体を俯瞰し、狙い定めた敵機に急降下しつつ銃撃するのである。

結果として機体は総金属製となり、引込脚、開閉式キャノピーが主流になった。航空母艦に艦載するため折りたたみ翼が採用され、航続距離を伸ばすための増槽や高高度の酸素濃度に対応する酸素マスクが必要になった。設計は精緻になり、使用する部材の点数が増えた。

日本軍は部材や部品、器具などの管理を人手で行ったが、ドイツ人は合理的に考えた。

——機械的に管理すれば、流れ作業で機体を組み立てることができないか。

この新しい方式に山下は強く刺激された。

ドイツ視察を通じて山下は、

——これからの戦争は航空機の性能と数が勝敗を決める。攻撃するにも守るにも技術と生産力がある。

ということを強く認識した。

また山下はレーダーと暗号の重要性にも気がついていた。ヒトラーは極東の島からやってきた同盟国の陸軍幹部を歓迎して、

——見たいものがあつたら言ってくれ。東洋の友人にドイツは隠すようなことはしない。

と告げた。

それによつて山下は電波を使つて航空機や艦船の位置を検出する装置、複雑な暗号を生成する専用の装置を見聞し、また敵の暗号を解読する技術を提供してくれるよう依頼した。情報戦が作戦の基盤となることを、山下は理解した。

そこで山下はドイツから帰国するとすぐ、首相・東条英機に強大な兵器より技術開発と生産力の強化を申し入れた。併せて独断でワットソンの計算機を発注したわけだった。

二

一般論として、日本の海軍は開明的だったが、陸軍は保守的だった、といわれる。

海軍は兵制をイギリスに学び、欧米の日本大使館に武官を派遣していた。その関係から先進的な機器や技術に敏感だった。それに対し陸軍はプロシア式兵制で歩兵部隊による白兵戦と精神論を重視し、戦車や野戦砲など機械化戦法

を軽視していた、という。

この通説はおおよそにおいて正しいが、一部については異論がある。というのは、まず海の戦いというのは戦場を自在に選択することができ、会敵すれば一撃して退く。個々の艦船が独立した指揮命令系統を持つ組織で構成され、戦場における集散離合は各艦の指揮官によって判断が下される。

また艦船は戦場にあつては装備・搭載した武器・弾薬のほか追加補給を受けることがない。最新鋭の機器や兵器、技術に敏感にならざるを得なかった。

対して陸軍は、万を単位とする歩兵の集团的・組織的な戦闘を前提にものごとを考える。他の戦線から手薄な前線に部隊を回し、基本的には英雄的な突出を許さず敵に圧力をかけつつ長い時間をかけて陣地を確保する。それに広大な中国大陸で最も最初に航空機戦力を活用したのは陸軍ではなかったか。

——勝敗を求める遊戲に喩えれば、海軍は将棋、陸軍は囲碁というわけである。

軍の戦い方、それは戦略思想と言い換えてもいいが、その違いを理解しなければならぬ、という。それは分かるが、世界の趨勢から見れば、日本の海軍も陸軍も似たり寄ったりだった。

開明的とされる海軍は航空機を重視した。しかし超弩級戦艦「大和」「武蔵」に代表される大艦巨砲主義から脱することができなかった。かつ、戦法は日清、日露戦争の艦隊決戦を継承していた。

なるほど艦船の建造を受注した三菱造船、航空機を受注した立川飛行機などは部材管理にパンチカード式統計会計機械装置を使い、軍艦の内部では弾丸を発射する角度や初速の割り出しに電気式計算器が使われた。だが、もつと根本的な課題である物資の調達と最適配備にかかわるシステムは最後まで構築されなかった。

陸軍にいたっては、戦地で食糧を調達せよという、時代錯誤も甚だしい指令がまかり通った。食糧ばかりでなく武器、弾薬すら敵から奪って戦えというのは、チンギスハン以来の無謀な命令だった。

日本軍が計算機の重要性に気がつくのは、抜き打ち的に真珠湾を攻撃して広大な太平洋と東南アジアに兵力が拡散したときである。物資を運ぶ船舶の手配が混乱した。この戦場に何をいかほど送ればいいのか、送った物資が間違いないく現地に荷揚げされたか、誰にも分からなかった。

分厚い毛布がサイゴンの司令部に届いたり、万余の陸戦兵の手許に飛行機の部品が手渡されたりした。さらに大量の武器弾薬が港湾の倉庫に滞留した。近代戦争を仕掛けた

のに、事務処理は前近代的な仕組み——十露盤と人海戦術——で行われた。

実際、主要な物資積出港には、近隣の学校から十露盤自慢の女学生が五十人から百人の規模で集められ、毎日、パチパチと珠をはじく勤労奉仕部隊が編成されていた。

「会計機械があるではないか」

内閣の企画院は言った。

ところがどう逆立ちしても、軍や関係機関が保有している計算機は絶対数が少なかった。

大本営のうろたえぶりを見たら、山下奉文は

「だからオレは、八十台を注文したのだ」

と、ふんぞり返って自慢したであろう。

いたし方なく陸軍参謀本部は、日本生命が保有するパンチカード・システムの軍需への転用を強く要請——つまり命令——して、暗号の解読などを行った。日本生命には海軍省からも「強い要請」があつて、艦船配置計画の策定などを行っている。そうした要請は第一生命、帝国生命、安田生命、松坂屋などにも行われていた。

海軍からも強制使用の指達があり、随時仕事を持ち込まれ、海軍士官二名の厳重な監督のもと、統計課員がすべてその作業に当たらなければならなかった。

こう記すのは帝国生命である。

日本ワットソンの資産を継承した日本統計機は、軍需産業からの要請にも応じなければならなかった。しかし新規の輸入は不可能だったため、生命保険業などを中心とする「平和産業」で使用しているマシンを斡旋した。

このとき東京芝浦電気から派遣された社員の中に、稲垣早苗がいた。戦後、日本IBMの第四代社長となる人物である。

三

一九四一年十二月八日、日米開戦直後（十二月二十三日）に「敵産管理法」が公布、即日施行されると、日本ワットソン統計会計機械の全資産が凍結された。そればかりでなく、経営の実質を担っていた水品浩、安藤馨の両名がスパイ容疑で横浜警察署に逮捕・拘束されてしまった。同社の事業活動は事実上、このときに停止した。

大蔵省は翌四二年一月、拘留中の水品に

「資産の管理人は誰が適任か」

と意見を求めている。

これに対して水品は、森村商事の取締役であつて、元モ

リムラ・ブラザーズ・カンパニーでニューヨーク副支配人としてパンチカード式計算機の輸入業務にかかわった中山武夫を推した。しかし中山は高齢を理由に辞退し、後任の地主延之助が管理人に指名された。

地主は一年をかけて日本ワットソン所有の自動車や不動産などを処分したのち、一九四一年十二月末現在における貸借対照表を作成した。それによると同社の総資産は二百四十八万七千七百八十七円四十六銭となっている。

日本ワットソンを「敵性企業」として解散させたにもかかわらず、戦線が太平洋全域に拡大したことから、日本軍中枢はこれまで以上に統計会計機械装置の重要性を認識した。また既存のユーザーは、継続的な保守サービスを強く求めていた。

こうしたことから地主は渋澤敬三や大口ユーザーである第一生命などと相談し、保守サービスの専門会社を設立することで合意を見た。中心となるのは精密電気機械に通じている会社がいいということで、東京芝浦電気が選ばれた。一九四三年六月一日、「日本統計機株式会社」が発足した。

資本金は二百万円で、五五％を東京芝浦電気が出資し、同社副社長の清水与七郎が社長に就任した。このほか、西岡俊雄、矢野一郎、弘世現、渋澤智雄、森村義行が役員に

名を連ねた。矢野は第一生命、弘世は日本生命、渋沢は渋沢倉庫、森村は森村商事、つまりCTR社時代から深い因縁を持つ民間のIBMユーザーを代表した人選である。

日本ワットソン統計会計機械から日本統計機に移籍して営業部長を務めることになった矢向音久の述懐によると、発足に際して矢野一郎は、

「われわれ企業家としてはIBMの事業を残しておくことが業務と思う」と述べたという。

彼は純粹にユーザーの立場から、IBM統計会計機械装置の温存を願ったと考えていい。ただ、実質的な経営の主体となった東京芝浦電気は、新しいビジネスチャンスとしてとらえていた。

すなわちIBM社のパンチカード・システムを保守することによって、機械製造の技術を取得し、あわよくば模倣しようとしたのである。鐘淵紡績、神戸製鋼所と同様、大本営の要請があったのであろう。にしても、同社において計算機への関心は、すでに戦前に始まっていた。

日本ワットソンの社員たちはどうしたであろうか。

水品浩は日本ワットソンが「敵産管理法」で資産を凍結されると同時に、横浜の山手警察署に逮捕された。書類上

の代表取締役社長はモリス・シユバリエだったが、一九四〇年にアメリカに帰国したまま日本に戻ってこなかった。

どうやらシユバリエと水品の間で打ち合わせができていたらしく、結果として水品が実質的に経営全般を見た。治安当局（実態は特別高等警察）は以前から水品に目をつけていて、十二月八日、対米開戦と同時に逮捕・拘留に踏み切った。

営業責任者だった安藤馨も同時に逮捕された。ただし安藤は、叔父が司法大臣の岩村通世であったことから即日釈放となった。しかし水品は翌四二年三月まで拘留され、特別高等警察の厳しい取調べを受けた。

容疑はスパイ容疑だった。営業で軍関係機関に出入りしていたことが疑われたのである。

一九四二年の三月、「該当する事実なし」として水品は釈放されたが、今度は海軍の命令で三重県鳥羽にある神戸製鋼所鳥羽工場でIBM統計機の修理と部品の設計に従事させられた。

陸軍がアメリカ軍フィリピンのコレヒドール要塞から接收したIBM統計機を、再利用できるよう、水品に修理を委託したのである。船の甲板に積んで輸送された機械装置は、汐をかぶって全体が真っ赤になっていた。水品はまず「RUBY CHAR=錆、^{やぶ}落としから始め、破損した部

品を日本統計機に作らせるなどして稼動可能な状態に復したという。

北川宗助と安藤馨は、四二年三月に日本ワットソンを退職し、後輩の大倉正士を誘って神戸市の六甲山麓に「統計研究所」を設立した。神戸は北川が大阪営業所長だった時、IBM統計機を納入した神戸商業大学があつて、北川や安藤は同大学教授・平井泰太郎が創設した「経営計録講習所」の講師として招かれたのだった。

経営計録講習所は神戸商業大学が「IBM405」を導入したのち、民間企業の人材を育成すべく開設した講座と、平井研究室を兼ねた組織だった。終戦後、ここで学んだ人のなかから多くのシステム・エンジニアが出た。

——暗号解析や軍需物資の輸送に、統計会計機が必要。

と判断した政府は、神戸の「統計研究所」に統計会計機の国産化を指令した。そのために軍の予算二百円が拠出された。これを受けて鐘淵紡績は兵庫工場に精密機械工場を建設し、北川らが開発に当たった。

その北川にも、召集令状が送られてきた。会社相談すると、鐘淵実業の社長・津田信吾はただちに陸軍に連絡し、徴兵免除の措置を得ることができた。統計会計機の開発が優先されたわけだった。

鐘淵紡績で作られたパンチカード式計算機械装置の試作

機は鐘淵実業や陸軍の工廠や暗号解読部門のほか九州帝国大学などに納入された。しかし一九四五年の春、米B-29の空襲で設計図ともども完全に焼失した。

四

安藤馨の配下にいた今村榮喜は、戦時中も一貫して立川飛行機に設置された統計会計機をサポートしていた。徴兵されずに済んだのは、パンチャー、サービスエンジニアとしての仕事が「お国へのご奉仕」と理解されたためだった。終戦後、北川に誘われて連合国軍総司令部の情報処理業務に従事することになる。

島村浩は明治学院大学英文科を卒業して、日本ワットソン統計会計機械の設立と同時に入社した。ところが一九三八年に召集され、二年間の初年兵教育を受けたのち、一九四一年九月から四三年一月まで、戦車旅団の中隊長として台湾―マレー半島―シンガポールを転戦した。

関東軍に配属されていたら彼の戦後はなかったに違いない。

四三年に兵役を解かれ、向かったのは神戸だった。鐘淵紡績の兵庫工場で統計機の国産化に取り組んでいた北川宗助、安藤馨と合流し、並行して神戸商科大学で講師を務め

た。

前川良博は一九四二年に陸軍に召集され、平壤の高射砲隊に編入されたあと、釜山を経てラバウル、ブーゲンビルを転戦した。

ブーゲンビル島はガダルカナル島と並ぶ戦略の要地だったが、最後は撃ち返す砲弾もないままアメリカオーストラリア連合軍に一方的に攻めたてられ、アメーバ赤痢とマラリアに侵されながら一時は玉砕も覚悟したという。

四六年、無事帰国。

モリス・シュバリエは一九四〇年に日本を離れ、IBM社を退社してイギリスに渡り、次いでヨーロッパに渡って母国ベルギーをナチス軍から解放すべく、ベルギー自由軍に身を投じた。対ナチ・ゲリラ戦線で指導的役割を果し、戦後になって再び来日したときの肩書きは「連合国軍ベルギー代表」だった。親日家として戦後日本の復興に尽力した。

日本ワットソンでカスタマー・サービス部門を統括したチャールズ・デッカーは四一年にアメリカに戻り、アメリカ陸軍のMRU（マシ・レコード・ユニット）に配属された。パンチカード・システムの操作と保守を任され、終戦の時はフィリピンのマニラにいた。のち戦略爆撃調査団を経て日本IBM初代社長となった。

日本ワットソン統計会計機械のフィールドサービス業務を継承した稲垣早苗は、軍服に似せたカーキ色の国民服を着て、東奔西走してIBM統計会計機械装置の保守に当たっていた。

皆機械の保全には苦勞したわけです。僕らは長崎に行ったり名古屋へ行ったり、重工業めぐりをして歩いた。部品が摩滅すると、部品そのものをもって行つて、東芝の技術屋さんが似て非なるものを作つて供給してくれた。

稲垣らの奔走で戦争中も計算機はそこそこに動いていた。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

**山下奉文** やました・ともゆき／1885～1946。太平洋戦争で第二十五方面軍司令官としてマレー上陸作戦を指揮して成功させ、連合軍から「マレーの虎」の異名で畏れられた。四三年、大將に昇進し、四四年から第十四方面軍司令官としてフィリピンに駐屯した。四五年春、連合軍に投降し、翌四六年二月二十三日、「マニラ大虐殺」の罪で絞首刑に処せられた。

**メッサーシュミット社** もとはバイエルン航空機製造という小さな航空機メーカーだったが、開発・設計技師だったヴェリ・メッサーシュミットが経営権を取得し、先行するユンカース社やフォッケウルフ社などにはない軽量・全金属機体による航続性能、折りたたみ脚採用による高速飛行、大口径機銃装備による攻撃力などでナチス・ドイツ軍の主力戦闘機を受注した。世界初のジェット機を開発したことで知られる。第二次大戦後は五〇ccエンジンを搭載した三輪車やオートバイなどを生産した。

**戦闘機「Bf109」** スペイン内戦のコンドル部隊に三機が試験的に投入された。第二次世界大戦終了までドイツ空軍の主力戦闘機として三万五千機が生産された。イギリス空軍のスピットファイア（スーパーマリン社製）、ハリケーン（ホーカー・エアクラフト社製）、アメリカ空軍のF4Fワイルドキャット、F6Fヘルキャット（グラマン社製）とライバル関係にあった。

**戦闘機「Me262」** 世界初の実戦配備および実戦を行ったジェット機。戦闘機の愛称は「シユヴァルペ」（ツバメ）、戦闘爆撃機は「シユトゥルムフォーゲル」（ミズナキドリ）だった。高高度

の水平飛行で最高時速八百七十キロ、急降下速度九百五十キロの記録がある。一千四百三十機が生産された。

**暗号装置** ナチス・ドイツが開発した暗号「フィッシュ」と暗号装置「エニグマ」は連合国軍を大いに悩ませた。この暗号を解読する目的で行われた技術開発が電子計算機の基礎を作ったとされる。

**超弩級戦艦** 「弩」は石弓の意。超弩級は「特別に大きい」という意味で使われ、「ドアホ」「ド根性」など強調の接頭詞にもなっている。しかし本来は一九一六年就役のイギリス海軍の大型戦艦「ドレイトン」（二万七千五百トン、二十インチ砲十二門装備、速度毎時二十一ノット）を指す。各国が「ドレイトン号を超える大型戦艦」を目指したが日本は建造計画を修正できず「準弩級」戦艦しか建造できなかった。「ドレイトン」に「弩」の文字を当てたために本来の意味が分からなくなった。

**日本帝国海軍における計算機の利用** 戦艦「大和」「武蔵」、航空母艦「大鵬」などの設計と建造には大量の鉄鋼材が必要だった。そこで統計会計機械装置を使わざるを得なかった。また艦船の砲台にはヘンミ計算尺を改良した専用の電動計算機が常備され、航行しながら波高や風向、風速などを勘案した砲弾の打ち出し角度の計算が行われた。

**モリムラ・ブラザーズ・カンパニー** 森村豊などが設立した「日の出商会」が発展して社名を変更した。一九四一年十二月八日、日米開戦と同時にアメリカ連邦政府により資産を凍結され事実上解散した。

**西岡俊雄** にしおか・としお…東京芝浦電気の資材部長だった。矢野一郎 やの・いちろう／1899～1995。第一生命を創

業した矢野恒太（やの・つねた／1866～1951）の息子。

一九四七年第一生命社長となった。

**弘世 現** ひろせ・げん／1904～1996。実父は三井合名会社理事の成瀬隆蔵（なるせ・りゅうぞう／1856～1942）。日本生命第三代社長・弘世助太郎の娘婿となった。一九四四年、三井物産から日本生命に移って取締役、四七年専務、四八年社長となった。以後、三十五年間にわたって日本生命の社長を務めた。  
**洪澤智雄** しぶさわ・ともお／1901～1947。渋沢栄一嫡流の孫で日本ワットソン統計会計機械の取締役だった。本業は澁澤倉庫常務だった。

**森村義行** もりむら・よしゆき／1896～1970。松方正義（第六代内閣総理大臣）の十一男として生まれ、一九二一年京都帝国大学を出た。同年、森村開作（七代目市左衛門）の娘・松と結婚して森村姓となった。

**岩村通世** いわむら・みちよ／1883～1965。東京に生まれ一九一〇年東京帝国大学法学部を出て司法省に入った。三四年東京地裁検事正となり帝人事件、天皇機関説事件の捜査を指揮した。刑事局長、司法省次官、検事総長を経て四一年第三次近衛内閣、東条内閣で法相を。第二次大戦後A級戦犯、四八年釈放され日本調停協会連合会理事となった。

**津田信吾** つだ・しんご／1881～1948。愛知県に生まれ慶應義塾大学を出て鐘淵紡績に入社した。一九一〇年西大寺工場長、一六年淀川工場長を経て二九年取締役、三〇年副社長、社長。三八年鐘淵実業を興して重工業や航空機製造、機械製造など軍需産業に進出した。第二次大戦後、戦犯として拘留されたが脳溢血で倒れた。

**チャールス・デッカー** Charles M. Decker：第二次大戦前、日本ワットソン統計会計機械にエンジニアとして派遣され、サービス部門の責任者を務めた。日本人女性と結婚し日本語も達者だったが太平洋戦争とともにアメリカに帰国、のちアメリカ陸軍太平洋戦線の情報処理部門に勤務した。連合国軍総司令部（GHQ）戦略爆撃調査団の一員として東京に駐在し、五一年「日本インターナショナル・ビジネス・マシンス」設立と同時に社長となった。  
**稲垣早苗** いながき・さなえ／1910～1999。一九四三年十月、日本統計機に入社した。東京芝浦電気から移籍したとする説と、知人の紹介で日本統計機に入社したとする説がある。一九五〇年、営業活動を再開した日本IBMに入って営業課長、五六年取締役、六〇年常務、副社長を経て六二年社長となった。

## 056 東亞新秩序

第五十六

東亜新秩序

一

一九四一年の六月二十二日、ナチス・ドイツがソ連と交戦状態に入ったという報せが入った。それをきっかけに、国内では

「新体制」

「東亜新秩序」

「バスに乗り遅れるな」

という言葉が流行した。

最初にこの言葉を使ったのは、近衛文麿であつたらしい。近衛の家は、かつては摂政・関白を独占した藤原家の筆頭であり、ということは天皇に最も近い家柄であつて、父篤麿は公爵にして貴族院議長、文麿自身は学習院から一高、東京帝国大学に進み、京都帝国大学法科に転じたというから、優秀な頭脳の持ち主だった。

京都帝大時代にマルクス主義者の河上肇に従つて勉強したかと思うと、天皇を中心に陸軍の改革を訴える皇道派の

青年将校とも交流を持ったのは、公家ならではの離れ業であつたのかもしれない。政治好きという点で幕末維新の岩倉具視に似ていないでもないが、得体の知れない鴎のような思考の持ち主であつた点は岩倉をはるかに凌駕する。

政治的言動が注目を集めるようになったのは、第一次大戦の戦後処理を協議した一九一九年のパリ講和会議のときである。内務省職員として西園寺公望に随行した近衛は

「英米本位の平和主義を排す」

と題した論文を発表して耳目を集めた。

その主張は父篤麿の大アジア主義を継承しつつ、米欧列強による世界支配を拒否すべきであるとしたところに特徴があつた。

——日本は正当な生存権を行使するのである。

ここで彼が「日本は」を「アジアは」に言い換えていたら、その後に別の展開があつた。だが近衛はそれ以上でもなければそれ以下でもなかった。

柳条湖事件が起こつた一九三一年九月、近衛は

——軍部の行動は「運命の道」である。

と論じて軍部の喝采を浴びた。

そして彼は続けて、

——そのために政治家は革新を実行しなければならない。と論じたが、方向性を示すことがなかった。時の流れに



乗る標語作りはうまかったと見える。

最初に首相に就任したのは一九三七年六月、林銑十郎のあとを受けたものだった。

組閣直後に盧溝橋事件、上海事変が勃発して日中両軍が戦争状態に突入していた。その引き金は関東軍が引いたにせよ、国家総動員法、戦時統制経済への移行や大本営の設置、「中国国民政府を相手にせず」の声明を発表するなど、客観的に見れば日本を戦争の泥沼に導いたのは近衛にほかならない。

だが、当の本人はそうとは思っていなかった。

三九年一月四日に首相から枢密院議長に転じたが、天皇に直接面会できる公家最高位の立場を巧みに利用して、平沼騏一郎、阿部信行、米内光政と三代続いた短命内閣にあつて「閥白政治」を取り仕切った。

——「シュトルム・ウント・ドラング」を合言葉に、ナチス・ドイツ軍が対ソ電撃作戦に成功した

という情報を得た彼は直ちに枢密院議長を辞任し、「新体制」運動を提唱した。迅速に「新体制」に移行するために、「新しい国民組織」が必要である、と説いた。

——旧来の政党はすべて解党し、「近衛党」に結集すべきである。

これが「大政翼賛会」として実現し、すべての国民は

「隣組」に組織されていく。

近衛が唱えた「新体制」が支持を得ることができたのは、一九四〇年の世相にもよっている。

この年は皇紀二千六百年に当たっていて、東京で第十二回オリンピック大会が開かれることになっていた。しかし国際連盟から離脱して以後の日本に対する内外の批判を受けて、米内内閣は退陣の前日（七月十五日）、イタチの後つ屁のように「開催取止ヲ適當」とする閣議決定を出していた。

それに代わつて「八紘一宇」「万世一系」といった空想的精神論がしきりに吹聴されるようになった。かつ十月に実施された第五回国勢調査で総人口が初めて一億人を突破したことが発表されるなど、国威発揚論が盛り上がった。近衛に内閣首班が下命されたのは以上のような経緯によっている。

第二次大戦が終わつて戦犯指定を受ける前、彼は連合国軍の取り調べで、

——挙国一致体制を作ることによって、軍部の暴走に歯止めをかけることができると考えた。

と述べている。

しかし大政翼賛会は、実際には軍部の御用機関となり、国民同士を監視させ、国家による統制を強化することにな

った。戦争の回避には何ら役立たなかった。むしろ政財界を巻き込んで、対米英戦突入への弾み車となってしまった。

日本政府は一九四一年の四月、ソビエト連邦共和国と「日ソ中立条約」を結んだ。

にもかかわらず日本の陸軍は

①極東に動乱勃発

②極東兵力の西送

③ソ連政権の崩壊

などが起これば、ただちにソ連領内に侵攻する計画を進めていた。

――ノモンハンの恨みを晴らす。

という並々ならぬ決意があった。

首相としての近衛は、すでにして政府間の約束か、軍部の圧力かの板挟みに陥っていた。以後しばらく、彼は内外の様々な動きに「臨機応変」または「柔軟」に対応することで時を稼ぐことができた。だが翌四一年十月十五日、遂に近衛はすべてを放り出すことになる。

## 二

ソ連は陸軍参謀本部の予想に反して、対ナチス・ドイツ戦で粘り強さを示しつつあった。ノモンハンで関東軍を一

蹴したジューコフが元帥としてレニングラード防衛線を指揮していた。

本来であれば思想的に対立関係にあるはずのイギリスがソ連を支援する腹を固め、そのイギリスの要請に基づいてアメリカ合衆国がヨーロッパ戦線に参入するのは時間の問題となっていた。そうこうするうち、アメリカ、イギリス、オランダの三国は日本に対して経済的圧迫をかけていった。これに中国を加えた、いわゆる「A B C D包囲網」がそれである。

石油、ゴム、錫、銅など軍需物資を輸入する途が閉ざされつつあった。この時点で国内に備蓄されていた主な軍需物資は、重油が一月半分、航空機用揮発油が十五か月分、普通揮発油は二か月分に過ぎなかった。

企画院の総裁・鈴木貞一（国務相兼務、陸軍中将）は「現状を以て推移せんか、帝国は遠からず瘦衰起つ能わざるべし」と警告を発していた。

また、海軍は軍事物資の生産力について、次のような日米比較を密かに行っていた。

石油生産量は一対数百、製鋼生産力は一対二十、石炭産出量は一対十、電力生産量は一対六、航空機生産力は一対五、船舶保有量は一対二、工業労働者数は一対五。いずれ

をとつても敵する相手ではない。こうしたことから、陸軍参謀本部はその打開策を短期決戦に求めようとした。

折からワシントンでは、その年の四月から駐米日本大使野村吉三郎（海軍大将）、前駐独大使・来栖三郎の兩名が、アメリカ連邦政府の國務長官コーデル・ハルと外交交渉を行つていた。ただしそれは、戦争回避の道を最優先にしたものではなく、いかに日本の主張を貫くかに重点が置かれていた。戦争という手段も選択肢の一つだったという点において、通常の和平交渉ではなかった。

交渉の焦点は表向き「中国」だったが、実態は満州における利権だった。

日本の主張は「日本が中国に保有する利権と満州国の承認」だったし、アメリカの立場では「日本の日独伊三国同盟からの離脱」「日本軍の中国からの撤退」だった。

十九世紀、にわかに台頭して列強の仲間入りを果たした二つの国が、太平洋をはさんで、中国およびアジアでの利権を争ったといつていい。アメリカはハワイとフィリピンを領有していたから、太平洋を「わが庭」とする野心がなかったとはいえない。

中国・アジアに触手を伸ばそうとするアメリカに対し、日本は同じ地域に鉱業資源を求めていた。となると南太平洋に日本が統治する諸島が、潜在的な前線として浮上する

のは当然といえた。

野村―ハル会談に緊張感をもたらしたのは七月二日の御前会議で決定された「情勢の推移に伴ふ帝国国策要綱」と、同月九日に発動された関東軍特別演習である。七月二日の御前会議は前月二十五日に大本営政府連絡会議が決定した「南方施策促進に関する件」いわゆる南部仏印進駐方針を受けたもので、そこには対ソ戦を準備するとともに、

——南進のために英米戦を辞せず。

と明記されていた。

関東軍特別演習は満州に陸軍二十四個師団七十万の兵力を集めた実戦さながらの演習だったが、真のねらいは一気にソ連領に侵入し、ナチス・ドイツ軍と呼応して東西からソ連軍を圧迫することにあつた。そのねらいを察知した外相豊田貞次郎は演習中止を命ずる特使を関東軍に派遣するとともに、大本営政府連絡会議で「対ソ外交交渉要綱」を強引に決定した。

それには

——ソ連が日ソ中立条約に違反しない限り、日本がこれを侵すことはない。

という一条が盛り込まれていた。

豊田はただちにそれをソ連に通告し、このために関東軍の思惑は封じ込められた。こうして満州を戦争の引き金と

する工作は阻止されたが、大勢を変えるには至らなかった。

### 三

このとき海軍は、石油資源の確保を図るため南方への進出を強く求めていた。併せて第一次大戦で手に入れた旧ドイツ帝国領南洋諸島を足がかりに、太平洋を抑えようというのである。

実際、ヨーロッパ戦線でフランスとオランダがナチス・ドイツに占領され、両国政府はイギリスに亡命していたから、東南アジアにおける両国の植民地（フランス領インドシナ＝現ベトナム、ラオス、オランダ領インドシナ＝現インドネシア）は、空室家も同然だった。

この日本帝国海軍の思惑は、アメリカ連邦政府も察知していたが、最大の関心事はヨーロッパ戦線の成り行きであったし、政治的・軍事的目標は一貫して「打倒ナチス」に向けられていた。

ところが北アフリカでナチス・ドイツのロンメル戦車軍団がフランス軍を蹴散らし、ロンドンではドイツ空軍機の爆撃に悩まされていた。このためアメリカ合衆国の軍需工場はヨーロッパ向け援助物資の生産に追われていた。

つまりアメリカ合衆国は日本の軍事的・帝国主義的野望

——中国およびアジアを包含する「大東亜共栄圏」構想——に深くかわかりあっている余裕がなかった。そのために合衆国政府は、いずれ戦うことになるとしても、日本との武力衝突はなるべく先に延ばす作戦を立てた。

ただし日本への圧力をかけることも忘れてはいなかった。まずアメリカ合衆国政府が打った手は、七月二十五日付で在米の日本人資産を凍結したことだった。ニューヨークにあったモリムラ・ブラザーズ・カンパニーはこのときをもつて事実上、閉鎖となった。

次いで八月一日、アメリカ連邦政府は

——石油製品の対日輸出を全面的に禁止する。と決定した。

明らかに対日開戦決意の表明であるにもかかわらず、ワシントン・D・Cでは駐米日本大使・野村吉三郎と国務長官ハルとの交渉が継続され、さらに八月七日に野村大使を通じてもたらされた

——近衛首相とルーズベルト大統領の直接会談はどうか。という外相・豊田貞治郎の提案を受ける構えすら見せた。実際、東京で日本と交渉に当たっていたジョセフ・グリー駐日アメリカ大使は、本国政府に向けて次のような意見を具申ししていた。

日本とアメリカの間にまったき不毛の戦争の起こる可能性がますます高まるのを避ける為に、本官の持つあらゆる影響力を賭して、次の様に勧告する。

深い祈りを込めた考慮なしに、この日本の提案を斥けないように。

(中略)

最高の政治行動として、太平洋の平和に対する克服可能な事態の到来を避ける機会はこのように呈示されている。この機会を逃したならば、太平洋の平和の機会は明白に克服不可能なものとなる。

これに対して国務長官ハルは、のちに次のように述べている。

日本人は無警告で攻撃すると云う悪名が高い。日本に最初に撃たせると、危険もあるが、アメリカ国民の完全な支持を得る為には、確実に日本人に最初に撃たせる事が望ましい。

軍最高幹部は、米国のみならず、侵略に抵抗しつつある諸国にとって、防備を調えるために時間が必要だと強調していた。従って我々の対日交渉を開始する決定は、我々の自衛再軍備の必要に沿ったものだった。

八月九日から地中海のヤルタ島で始まった米英首脳会談で、イギリスの首相ウィンストン・チャーチルは、

——日本の南進を阻止すべく、対日政策をより強硬に行うべきだ。

と主張した。これにアメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトは、

——その問題は私にお任せ願いたい。三か月ぐらい、ベイビー・アロング<sup>①</sup>できるだろう。

と答えたとされている。

ベイビー・アロングとは、「ダダをこねる赤ん坊をあやす」という意味である。

「三か月ぐらい」という言葉が通常の四半期を意味する程度だったのか、対日開戦の準備が整うという意味だったのか、あるいはそのころまで焦らせれば日本が「最初の一発」を撃つに違いないという予測を示したのか、真意は分からない。

ヤルタ会談から一か月のち、チャーチルはイギリス議会で次のように発言した。

アメリカは自身が攻撃されなくても極東の戦争に加わり、最後の勝利が保証される、と云う可能性は、私がルーズベ

ルト大統領とこれらの問題を語り合った大西洋会談以来のものである。

この会談のあと、アメリカ海軍が行った太平洋諸島への兵力増強を見ると、ルーズベルトは十一月下旬から十二月上旬にかけてのころを「危険水域」と見ていた節がある。

八月十四日、米英の首脳は共同宣言を世界に向けて発表した。いわゆる「大西洋憲章」がそれであって、これが対日戦線における連合国軍の共通認識となり、やがては国際連合憲章のベースとなっていく。

~~~~~  
補 注
~~~~~

**阿部信行** あべ・のぶゆき／1875～1953。石川県に生まれ一八九七年陸軍士官学校卒、〇七年陸軍大学校を出てドイツ、オーストリアで過ごした。三三年大將に進み二・二六事件後予備役。三九年首相に指名されヨーロッパに起こった第二次大戦に不介入を声明したが陸軍の支持を得ることができず辞任した。四四年朝鮮総督、戦後A級戦犯にリストアップされたが被告から除外された。

**米内光政** よない・みつまさ／1880～1948。岩手県に生まれ一九〇一年海軍兵学校卒、一四年海軍大学校を出て一八年ウラジオストック派遣軍司令部付、一九年軍令部参謀、二〇年から二二年までベルリン駐在武官。帰国後、二八年第一遣外艦隊司令官、三二年第三艦隊司令長官、三六年の二・二六事件では軍艦を芝浦に回航させことあらば陸軍と戦う姿勢を示した。三六年連合艦隊司令長官、四〇年首相。陸軍が大臣を出さなかったことで瓦解したが、四四年小磯国昭に協力し海軍大臣として和平模索内閣を編成した。ポツダム宣言受諾後も戦後処理に尽力し、公職追放を免れた。

**政党の解党** 太平洋戦争開戦前の政党解党は、一九四〇年六月十一日に行われた聖戦貫徹議員連盟の勧告に基づいて行われた。七月六日社会大衆党、同十六日政友会久原派、同三十日政友会中島派、八月十五日民政党が解党を決議し、十月十三日に大政翼賛会が発足した。

**第五回国勢調査** 朝鮮、台湾、満州まで調査が及んだ。人口一億

人というのはその合計であって、第二次大戦後のそれとは意味合いが異なる。

**鈴木貞一** すずき・ていいち／1888～1986。千葉県に生まれ一九一七年陸軍大学校を出て参謀本部に所属。四〇年中将、四一年四月第二次近衛文麿内閣で国務大臣兼企画院総裁に就任した。東条英機内閣でも留任し、太平洋戦争開戦を支持した。第二次大戦後、A級戦犯として終身刑の判決を受けたが五五年釈放となった。

**野村吉三郎** のむら・きちさぶろう／1877～1964。和歌山県に生まれ一八九八年海軍兵学校卒、一九二二年軍令部次長、三二年第三艦隊司令長官に就任し爆弾テロで右眼を失明した。三七年予備役となり学習院長、第二次近衛文麿内閣で駐米大使、太平洋戦争中は枢密院顧問だった。五四年参院議員、のち日本ビクター社長も務めた。

**来栖三郎** くるす・さぶろう／1886～1954。横浜市に生まれ東京高等商業学校を出て外務省に入った。駐ベルギー大使のち駐独大使、四一年野村ハル会談を補佐するためアメリカに渡った。

**コーデル・ハル** Cordell Hull／1871～1955。弁護士、テネシー州議会議員、裁判官を経て一九〇七年に連邦下院議員に当選した。三一年に連邦上院議員に当選し、三三年からルーズベルト大統領の下で国務長官。対日交渉では「ハル・ノート」を日本政府に突き付け太平洋戦争の原因を作った。四三年に「国際連合」(The United Nations)の設立を提唱した。四五年ノーベル平和賞を受けた。

**関東軍特別演習** 「関特演」と呼ばれる参謀本部主導によるソ連

軍強襲作戦。中心的な立案者は参謀本部作戰部長の田中新一で、ナチス・ドイツ軍と呼応し陸軍三十四個師団をもつてソ連軍を東から攻撃する計画だった。陸軍省、海軍および天皇の反対にあつて「関特演」は不発に終わったが、七十万の兵士と馬匹十四万が集結し、この大兵力が東南アジアや西南太平洋諸島に転進していった。

豊田貞次郎 とよだ・ていじろう／一八八五—一九六一。一九〇五年海軍兵学校を出て一年からイギリス・オックスフォード大学に留学した。三一年海軍省軍務局長、三八八年航空本部長、四〇年海軍省次官、四一年大將に昇進し退役して第二次近衛文麿内閣で商工務大臣、のち松岡洋右外務大臣の後を受けてこれを兼務した。近衛内閣瓦解とともに民間に移り日本製鉄社長、銑鉄統制学会長、四五年四月鈴木貫太郎内閣で軍需相兼運輸通信相として入閣した。

ジョセフ・グルー Joseph Clark Grew／1880—1969。一九〇二年ハーバード大学を出てカイロ総領事館書記官、メキシコ、ロシアのアメリカ大使館に勤務、第一次大戦勃発時は駐ドイツ大使館参事官。アメリカ参戦の時はウィーン代理公使だった。対ドイツ休戦条約締交交渉を担当し、その後、デンマーク公使、スイス公使を歴任した。二四—二九年国務次官、三二年に駐日大使として赴任し、日米開戦回避に尽力した。四四年国務相極東局長、同年十二月国務次官、ボツダム宣言起草では天皇制存続を主張した。六〇年に勲一等旭日大綬章が贈られた。

大西洋憲章 全文は以下のようである。

アメリカ合衆国大統領及び連合王国における皇帝陛下の政府を代表するチャーチル総理大臣は、会合を行った後、両者が、世界

の一層よい将来に対するその希望の基礎とする各自の国の国政上のある種の共通原則を公にすることは正しいことであると認める。  
第一に、両者の国は、領土たるとその他たるとを問わず、いかなる拡大も求めない。

第二に、両者は、関係国民の自由に表明する希望と一致しない領土変更の行われることを欲しない。

第三に、両者は、すべての国民に対して、彼らがその下で生活する政体を選択する権利を尊重する。両者は、主権及び自治を強奪された者にそれらが回復されることを希望する。

第四に、両者は、その現に存する義務に対して正当な尊重を払いつつ、大国たると小国たるとを問わず、また、先勝国たると戦敗国たるとを問わず、すべての国に対して、その経済的繁栄に必要な世界の通商及び原料の均等な開放がなされるよう努力する。

第五に、両者は、改善された労働条件、経済的進歩及び社会保障をすべての者に確保するため、すべての国の間の、経済的分野における完全な協力を作り出すことを希望する。

第六に、ナチ暴政の最終的破壊の後、両者は、すべての国民に対して、各自の国境内において安全に居住することを可能とし、かつ、すべての国のすべての人類が恐怖及び欠乏から解放されて、その生命を全うすることを保証するような平和が確立されることを希望する。

第七に、このような平和は、すべての人類が妨害を受けることなく航行を可能ならしめるものでなければならぬ。

第八に、両者は、世界のすべての国民が、実際のおよび精神的のいずれの見地からみても、武力の使用の放棄に到達しなければならぬと信ずる。陸、海および空の軍備が、自国の国境外にお



ける侵略の脅威を与えまたは与えることのある国々において引続き使用される限り、いかなる将来の平和も維持され得ないのであるから、両者は、一層広範かつ恒久的な一般的安全保障制度が確立されるまでは、このような国々の武装解除は欠くことのできないものであると信ずる。両者は、また、平和を愛好する国民のため、恐るべき軍備の負担を軽減する他のすべての実行可能な措置を援助し、かつ、助長する。

フランクリン・D・ルーズベルト  
ウインストン・S・チャーチル

## 057 駆け引き

第五十七

駆け引き

一

日本では、陸軍参謀本部が早々と米英戦を決意していたのに対し、海軍は態度を決めかねていた。だからといって陸軍が開戦に積極的ないし好戦的、海軍が消極的ないし和平的であつたということには直結しない。

軍というのはそもそも戦うために存在するのであつて、平和的な軍隊というものがあつたとすれば、それは御伽噺に出てくるおもちゃの兵隊でしかあり得ない。戦意という点で一九四一年の大日本帝国陸海軍は、ともに先鋭化していたといつていい。

しからば何ゆえに陸軍が早々と対米英開戦を決意し、海軍が決断を躊躇したかという点、戦略ないし戦術の展開方法の違いであつた。陸軍が開戦と同時に連合国軍と戦闘に突入するには、数十万の兵、武器・弾薬、食糧などを周到に準備しなければならなかつた。

宣戦を布告してから輸送船を繰り出していたのでは到底

間に合わない。どこるか領海内と公海上を問わず、輸送船はたちまち魚雷の餌食になってしまう。

対して海軍は、公海上に艦隊を待機させ攻撃機の編隊を飛ばせば、宣戦布告と同時に敵基地を攻撃することができ。かつ海上で会敵し、ともに砲撃を交わすのは数時間、長くて数日に過ぎない。

海軍は開戦を躊躇したのではなかつたが、日米和平交渉の成り行きをぎりぎりまで見届ける余裕があつた。ここに陸軍との間で微妙な駆け引きが行われた。

とはいえ、目処を設定しなければならぬ。

九月六日に天皇臨席で開かれた御前会議で基本方針が決まつた。

「帝国国策遂行要領」がそれである。

一、帝国は自存自衛を全うする為対米（英蘭）戦争を辞せざる決意の下に概ね十月下旬を目途として戦争準備を完整す

二、帝国は右に並行して米、英に対し外交の手段を尽して帝国の要求貫徹に努む

三、前号外交交渉に依り十月月上旬頃に至るも尚我要求を貫徹し得る目途なき場合に於ては直ちに対米（英蘭）開戦を決意す

——戦争の準備は進めるが、外交努力を尽す。  
という。

外務省は首相近衛文麿とアメリカ大統領ルーズベルトとの直接会談を計画しており、

——その結果を見て断を下してはどうか。  
という見解を示していた。

在ニューヨークの三井物産支店の宮崎清支店長を通じて非公式秘密折衝が続けられ、在モスクワ日本大使館を通じて対英和平工作が行われていた。

アメリカ合衆国政府國務長官のコーデル・ハルは

——世界の平和のために、今こそアメリカ合衆国と大日本帝国との関係を改善しなければならない。

と繰り返して口にしていたから、外務省は

——何とか打開の道が開けるかもしれない。

と考えていた。

海軍軍令部の意見も同様だった。ただし外務省ほどには樂觀的でなかった。

——日独伊三国同盟が障害になる。

盟約を結んでいるナチス・ドイツとファシスト・イタリアがヨーロッパ、北アフリカ、バルカン半島で連合国軍と砲火を交えているのである。日本のみが英米蘭仏と世界平

和のための協調路線を保持できるなどというのは妄想に近い。

——開戦、開戦、開戦！

と連呼する陸軍に手を焼きながら、外相東郷茂徳以下の外務官僚たちは、アメリカ國務長官ハルの態度が煮えきらないことに苛立ちを感じ始めていた。

実はハルは、

——遠からず対日開戦あるべし。

の腹を決めていたが、時間かせぎのために表向きノラリクラリを続けていたに過ぎない。

そのうちに「帝国国策遂行要領」文中にある十月上旬が近づいた。

この字句が帝国国策遂行要領に盛り込まれたのには、氣象の条件が背景にあった。米英戦に踏み切った場合、日本にとってソ連が極東に配備している軍隊が後背の不安材料だった。軍事行動を起こすとすれば、シベリアが凍土に覆われ、ソ連軍の動きが封じられる冬が望ましい。

かつ、東南アジア地域での航空機による対英作戦——シンガポールからインドを旨指す作戦——を考えると偏西風が弱まる十二月より前に実施するのが理想的である。

そこで陸軍参謀本部は九月二十五日、大本営政府連絡会議で「外交交渉の期限は十月十五日」とする案を提出し、

海軍の了解を得た。国策遂行要領にも沿うもので、異論を唱えるには相当の材料がなければならない。

一九四一年十月の時点で、第二次大戦に参加した主要国首脳のうち、いちばん腹が据わっていないかったのは近衛文麿であつたかもしれない。

盧溝橋事件、上海事変、南京占領といった一連の軍事行動で中国大陸に深入りし、東亜新秩序を打ち上げ、大政翼賛会を結成し、閔白政治で共產主義や社会主義を弾圧し、軍部を増長させ、かつフランス領インドシナへの日本帝国陸軍進駐をこり押しした。

その挙句、いざ対英米開戦を迫られると腰が引けてしまったのはどういふことだろう。

——アジア世界からの英米仏蘭勢力の排除。

を訴えていた彼は、要するにアメリカやヨーロッパへの劣等感が鬱積していたに過ぎなかったのかもしれない。

陸海軍から「十月十五日」と期限を切られたとき、近衛の内に潜在していた米英への畏怖心が頭を擡げた。

それとも単純に

——戦争のボタンを押した首相として歴史に名を残したくない。

と考えたのか。

二進も三進も行かなくなった近衛は十月十五日、

支那事変の未だ解決せざる現在に於て更に前途の透視すべからざる大戦争に突入するが如きは、支那事変勃発以来重大なる責任を痛感しつつある臣文麿の到底忍び難き所なり。

という上奏文を提出して首相を辞任してしまつた。「支那事変の未だ解決せざる現在」を作つたのは、「国民政府を相手にせず」と表明した自分自身ではないか。

近衛の首相辞任で「十月十五日を以て期限とする」決議はご破算になつた。近衛は内大臣・木戸幸一に心情をこう告げた。

臣は衷情を披瀝して東条陸軍大臣を説得すべく努力したり。之に対して陸軍大臣は、時期を失せず此の際開戦すべきことを主張して已まず。懇談四度に及びたるも終に同意せしむるに至らず。

心情を吐露された木戸は、反対に近衛の無責任を諷刺とはなはだしかった。

近衛は一個人の立場ではない。一国の命運を担うべき内閣総理大臣が、国家大事の事態を眼前にして收拾の方策を

放り出してしまったのだから当然であろう。

代わって首相に任命されたのは、陸軍大将・東条英機だった。彼は首相のほかに陸軍大臣と内務大臣を兼任することになった。近衛の後任を選定するとき、

——陸軍を抑えるには陸軍で。

という内大臣・木戸幸一の意見が、東条内閣の発足に重きを占めたとされる。

## 二

一九四一年十一月五日、大本営政府連絡会議は新しい「帝国国策遂行要領」を策定した。

一、帝国は現下の危局を打開して自存自衛を完うし大東亜の新秩序を建設する為此の際対米英蘭戦争を決意し左記措置を採る。

(1) 武力発動の時機を十二月初頭と定め陸海軍は作戦準備を完整す。

(2) 対米交渉は別紙要領に依り之を行う。

(3) 独伊との提携強化を図る。

(4) 武力発動の直前秦との間に軍事的緊密関係を樹立す。

一、対米交渉が十二月一日午前零時迄に成功せば武力発動を中止す。

一方、アメリカ政府内では十月六日、陸軍長官スチムソンが「我々の地歩を確保するには、なお三か月を要する」と対日交渉の引き延ばしを要請していた。このため国務長官ハルは「昨は妥協、今日は決裂」(『機密戦争日誌』)というノラリクラリを演じ続けた。

ために、ワシントンでの外交交渉は大きな進展を見せなかった。だが、駐米大使野村はアメリカの真意を見抜いていた。彼は東条内閣で外相に起用された東郷茂徳に当てて打電した。

今日にては太平洋戦に世論の反対の少なきを見て、この方面より参戦することも十分あり得べし。

アメリカ合衆国内での世論を見るに、太平洋を挟んでの対日開戦に反対する意見が少なくなってきた。つまりアメリカ政府は、まず日本と交戦状態に入ること、日本が同盟を結んでいるナチス・ドイツに対して宣戦を布告しようと企んでいる、というのである。

野村の読みは正しかった。

十一月二十五日、大統領ルーズベルトは閣議を招集し、対日戦に踏み切る考えを示し了解を得た。

ねらいは

——ドイツ。

である。

日本との戦いは、対ナチス・ドイツ戦に参加する手段に過ぎなかった。

ただし、そのために戦いの相手として日本を選んだアメリカ政府の判断は、正しいとはいえなかった。日本は「手段」として安易に取り組めるほどヤワな相手ではなかったのだ。

二十六日、國務長官ハルは日本の駐米大使野村を國務省に招き、アメリカ合衆国としての最終提案を告知した。そこには従来から主張してきた

「日独伊三国同盟の破棄」

「日本軍の中国からの撤退」

という二項目に加え、

「満州国の解消」

が新たに盛り込まれていた。

振り出しに戻った、というところか、日本から見れば虚仮にされたのも同然だった。

——いまさら何を……。

と言ってもそれは愚痴というものだった。

いわゆる「ハル・ノート」がそれで、これによりアメリカ政府は事実上、外交交渉の打ち切りを宣言したのだった。

翌二十七日、ハルは

「私は手を洗った」

と陸海軍長官に日本との交渉を打ち切ったことを告げ、併せて海軍作戦部長スタークはハワイ駐在の太平洋艦隊司令長官キンメルとアジア艦隊司令長官ニミッツに、次のような警告の電報を発信した。

対日交渉はすでに終わった。日本側の攻撃行動は数日内に予期される。日本軍の数、装備および編成は、フィリピン、タイ、またはクラ地峡、あるいはおそらくボルネオ等に対する海陸両面の作戦を示唆している。

一方、陸軍参謀総長マーシャルは、フィリピン駐在のアメリカ極東軍司令官マッカーサー（中将）に宛てて、次のように打電した。

日本の将来の行動は予測し難いが、敵対行動はいつでも予期できる。もし、敵対行動を避けることができれば、米国は日本が最初の明白な行動に出ることを希望している。

三

日米開戦の直前、日本海軍はハワイ真珠湾に集結しているアメリカ太平洋艦隊に壊滅的打撃を与えることに全精力を集中した。このために海軍は、ユリウス・オットー・キーンというドイツ人をハワイにスパイとして潜入させて情報の収集に当たらせていた。

しかしより詳細な情報が必要と判断した軍令部は、一九四一年三月に吉川猛夫という予備役少尉を民間人「森村正」の名で外務書記生として送り込んだ。

彼は真珠湾を出入りするアメリカ太平洋艦隊の艦船の数、その編成や周期、防御体制の情報を事細かに調べ日本に送信した。

「朝晩の真珠湾を見張るためには、春潮楼に泊まるのが最も都合がよい。そこで、芸者やメイドに惚れ込んでうつつをぬかす風を装わなければならなかった」

というあたりは、忠臣蔵の大石内蔵助を思わせる。

こうして本国に送信された通信は「A電」と呼ばれ、その数は計百七十七通にのぼった。

また、陸軍参謀本部は当面の敵となる香港、マレー半島、フィリピンに展開している連合軍（アメリカ、イギリス、

オランダ、オーストラリア）の兵力を、最大で陸兵十三万人、航空機約五百機と見積もっていた。参謀本部が前年の夏ごろから、民間人を装った大尉、少佐クラスの士官を、現地に派遣して情報の収集に当たらせていたのである。それぞれの推定値は次のようだった。

香港　イギリス軍陸兵　約一万二千人

航空機　若干

マレー　オランダ軍陸兵　約六万七千人

航空機　約三百二十機

フィリピン

アメリカ軍陸兵　約四万二千人

フィリピン軍陸兵　約四万八千人

航空機　約百七十機

これに対して日本が開戦時に投入することを計画していたのは、陸兵二十万人、航空機二千四百機（陸軍七百機、海軍一千七百機）だった。近代戦争においては、一の防衛兵力に対して三倍の攻撃兵力が必要とされている。参謀本部は奇襲的攻撃と四倍の航空戦力をもって、連合軍を圧倒する考えだった。

海軍力はどうかだったか。



日本の連合艦隊は山本五十六（大将）を総司令官に、南雲忠一（中将）が率いる機動部隊、近藤信竹（同）が率いる南方部隊、井上成美（同）が率いる南洋部隊で構成されていた。

日本時間十二月六日にアリューシャン列島ヒトカツプ湾をひそかに出港した機動部隊は、八日零時を期してハワイ真珠湾を襲い、南方部隊はマレー、フィリピン方面、南洋部隊はグアム、ウェーキ方面に出撃した。

機動部隊は空母六、戦艦二、重巡洋艦二、軽巡洋艦一、駆逐艦九、潜水艦三。

南方部隊は戦艦二、重巡洋艦七、軽巡洋艦五、駆逐艦四十八、潜水艦十四。

南洋部隊は軽巡洋艦三、駆逐艦八。

さらに大型戦艦「長門」が控え、超弩級戦艦「大和」「武蔵」が完成しつつあった。

航空戦力は機動部隊が九七式艦上攻撃機百四十三、九九式艦上爆撃機百二十九、零式艦上戦闘機七十八の計三百五十機。南方部隊には陸軍六百三十九機、海軍五百六十三機。南洋部隊には五十四機が配備されていた。

対するアメリカ太平洋艦隊が保有するのは航空母艦四、戦艦五。

イギリス極東艦隊に空母はなく、戦艦一、重巡洋艦二。

これであれば、向こう一年か二年は戦えるであろう。

## ~~~~~ 補 注 ~~~~~

**軍令部** 大日本帝国海軍の作戦司令部。陸軍は参謀本部がそれに当たる。組織としては海軍大臣の所管するところだが軍令系統では連合艦隊の上位に位置し実質的に戦争遂行の中樞だった。

**木戸幸一** きど・こういち／1889～1977。木戸孝允の養子・孝正の子。東京に生まれ一九三〇年内大臣秘書官長、宮内省参事官などを経て三十七年第一次近衛文麿改造内閣で文相、平沼騏一郎内閣で内相、四〇年内大臣となり侯爵。第二次大戦後、A級戦犯として逮捕され東京裁判では東条英機を首相に推薦し、かつ軍部の暴走を助長したとして終身刑の判決を受け、五五年に出所した。戦前・中および終戦時のことを記した『木戸幸一日記』がある。

**スチムソン** Henry Simson／1867～1950。はじめ弁護士だったが連邦検事となったのをきっかけに国政に関与するようになり、文民出身のフイリピン総督に任命された。日米開戦時は陸軍省長官、のち國務長官となった。

**東郷茂徳** とうこう・しげのり／1882～1950。江戸時代に朝鮮から薩摩藩にやってきた陶工の朴家に生まれ、「朴茂徳」(バク・ムドク)として幼少期を過ごした。明治維新後に薩摩藩士東郷家の士族株を買い取り、姓を東郷に改めた。一九〇八年(明治四十一)東京帝国大学を出て外務省に入り、一九三三年欧米局長、三四年欧亜局長、三七年駐独大使、三八年駐ソ大使を経て四一年十月、東条英機内閣の外相。四二年九月に大東亜省設置をめぐって東条と対立し辞職した。第二次大戦後、A級戦犯として禁固二

十年の判決を受けたが拘禁中に死去した。

**スターク** Harold Rainsford Stark／1880～1972。アメリカ合衆国海軍の増強を図るべく空母を主体とする艦隊の整備を推進した。特に太平洋、大西洋のそれぞれに超大型空母と超弩級戦艦で構成する複数艦隊を配備して五大洋の軍事行動をカバーしようという「スターク計画」は、のちのアメリカ海軍の基本戦略となった。日米開戦時、海軍省長官。

**キンメル** Husband Edward Kimmel／1882～1968。ケンタッキー州ヘンダーソンで生まれ、太平洋戦争開戦時は太平洋艦隊司令長官兼合衆国艦隊司令長官(少将)を務めていた。真珠湾奇襲攻撃によってアメリカ太平洋艦隊が大きな被害を受けた責任を追及され、同年十二月七日司令長官を解任され、四二年三月退役した。

**ニムツ** Chester William Nimitz／1885～1966。テキサス州フレデリックスバーグで生まれ、第一次大戦のとき大西洋潜水艦隊部隊参謀長だった。四三年アジア艦隊旗艦戦艦「オーガスタ」艦長、日米開戦時は海軍大将。キンメル解任後の太平洋艦隊司令長官に就任し、四四年十二月元帥に昇進し、四五年九月二日アメリカ合衆国代表として日本の降伏文書に署名した。日本通であって、特に東郷平八郎に心酔していた。その東郷の旗艦である戦艦「三笠」の保存に私財を寄贈したことも知られる。

**マーシャル** George C. Marshall／1880～1966。一九〇一年ヴァージニア陸軍学校を卒業し第二次世界大戦中は参謀総長。四七年國務長官、五〇年国防長官。第二次大戦後のヨーロッパ復興政策「マーシャル・プラン」を立案し、この援助で西側諸国は復興の足掛かりを得た。しかしヨーロッパ諸国に流入したドルがそ

の後の経済問題として長く残り、かつ東西冷戦構造を決定的にした。五三年ノーベル平和賞を受けた。

マッカーサー Douglas MacArthur / 1880 - 1964。一九三〇年アメリカ合衆国陸軍参謀総長を最後に一度退役しフィリピン政府軍事顧問としてマニラに移住した。日米開戦の直前、現役に復帰し中将・在フィリピンアメリカ軍司令官、四四年元帥となった。連合国最高司令官として日本の占領統治を担当、のち朝鮮戦争で原爆を投下しようとしたトルーマン大統領と対立し解任された。

吉川猛夫 よしかわ・たけお / 1913 - 1993。「森村正」の偽名で在ハワイ日本領事館に赴任し、真珠湾に停泊するアメリカ海軍の艦船や湾の警備体制などを詳細に調べ上げた。日本軍の奇襲攻撃のあとアメリカ連邦捜査局 (FBI) に逮捕されアメリカ本土に収監されたが四二年日本に送還され他。軍に復帰することなく、郷里の松山市でひっそりと暮らした。

吉川の手記 「真珠湾スパイの回想」朝日パノラマ。ちなみに文中に登場する「春潮楼」は在ハワイ日本人を相手にした料亭で、のち「花の家」と改称した。

山本五十六 やまもと・いそろく / 1884 - 1943。経歴の詳細は本文。アメリカ合衆国の事情に精通していたことは事実で、米英決戦には反対だったが、「自分がやらなくても他の誰かがやる」という考えから、短期決戦・講和の道を探った。太平洋戦争の転機に撃墜・殉職したため一部で神格化された伝説が残された。

南雲忠一 なぐも・ちゅういち / 1887 - 1944。山形県に生まれ一九二〇年海軍大学校を卒業した。三二年軍令部第二課長、三九年中将、四〇年海軍大学校校長、四一年第一航空艦隊司令長

官、四四年中部太平洋方面艦隊司令長官となりサイパン島攻防戦で戦死した。

近藤信竹 こんどう・のぶたけ / 1886 - 1953。大阪に生まれ一九三五年軍令部第一部長、三八年第五艦隊司令長官、三九年軍令部次長、四二年第二艦隊司令長官として南方作戦を指揮した。終戦時は支那方面艦隊司令長官・軍事参議官だった。

井上成美 いのうえ・しげよし / 1886 - 1975。宮城県に生まれ、一九〇九年海軍兵学校卒、のち海軍大学校卒。在イタリア日本大使館武官、海軍大教官を経て三二年海軍省軍務局第一課長、三六年少将となり横須賀鎮守府参謀長。三七年軍務局長のとき日独伊三国同盟に強行に反対したが果たせず、三九年支那方面艦隊参謀長、中将・航空本部長、四一年第四艦隊司令長官となり、太平洋戦争の緒戦では Guam、ウエーキ、ラバウルと転戦、四二年海軍兵学校校長、四四年海軍省次官、四五年大将・軍事参事官。戦後は塾の教師をして世に出ることがなかった。

## 058 誤認

第五十八

誤認

一

一九四〇年から四一年秋にかけて、開戦直前の時点で連合国側が日本の軍勢力をどのように評価していたかを見てみよう。

一九四〇年にマレーに派遣されたオーストラリア第八師団の兵士たちは、次のような文書を配布されていた。

日本軍は残忍で、高度の武装と訓練を身につけている。その肉体的耐久力は偉大なほどある。敵をごまかす技術にたけ、マレーには膨大な第五列を配置し、豊富な上陸作戦の経験を持っている。日本軍は猛烈なスピードで山野を突進し、数日間は補給なしで行動できる。

密林国でこのような日本軍に対抗するには、静かな防御は不適当で、どんな場合でも、敵に遭遇したら攻撃するほかはない。したがって全将兵はまず、ジャングル戦の訓練に熱中すべきである。

ところがアメリカはそうは見えていなかった。

一九四一年九月に発行されたアメリカの航空雑誌『エビエーション』は、日本の航空機技術を次のように報道していた。

日本の軍民の操縦士は、世界一の事故率を示し、日華事変では中国の操縦士に劣り、その年次の養成数は陸海軍を合せて千人足らずである。大空軍の建設には間に合わない。航空技術は模倣一点張りで、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、ソ連に遠く及ばない。

外国の製品権を買っても、その原型の性能を出すことすらできない。アメリカの航空専門家たちは躊躇なく、日本の主要な軍用機が旧式か旧式になりつつあると断定できる。

比較の対象となったのは、アメリカ陸軍が制式採用していた戦闘機「バッファロー」だった。航続距離七百五十九マイル、最高速度二百九十五キロ／時、高度四千五百メートル、十二・七ミリ機銃×四基を装備。イギリス陸軍にも供給され、アジア地域におけるイギリス航空兵力の主力をなしていた。

「イギリス本土の防衛用としては、スピードが遅い。し

かしマレーでは十分に間に合う」

マレーのイギリス軍極東総司令官ブルック・ポーハム（中将）は、戦端が開かれる直前の一九四一年十二月三日、記者会見でこう述べて対日戦に自信を示していた。

さらにアメリカ海軍省がまとめた敵国情報には、次のようなコメントがあった。

日本の飛行機乗りはいまだかつて航空母艦の甲板から発進したこともなければ、着艦したこともない。せいぜい凡庸な飛行機乗りになかなれない彼等の気短な気質を考えると、将来彼等が母艦からの発着をうまくできるようになるかどうか、疑わしい。

この判断は全く間違っていた。

『エビエーション』誌が「旧式か旧式になりつつある」

と評価した日本の軍用機は、実際のところという当時の世界水準をはるかに凌駕していた。海軍の要請で三菱重工、名古屋航空機製作所が開発した零式艦上戦闘機（零戦）は、航統距離八百八十五マイル（一千四百キロ）、最高速度三百三十五キロ／時、高度五千四百メートル、七・七ミリ機銃×二、二十ミリ機銃×二を装備していた。

二百五十キロ爆弾を装備し、一回の飛行で片道七百キロ

を往復できるこの航空機は、そもそも広大な中国大陸の制空権を掌握することにねらいがあった。つまりその要求仕様は基本的に陸軍の要望に基づいたものであって、陸軍を支援するために海軍が設定したのである。

同時にそれは太平洋にも適用できる性能だった。島を拠点に広大な制空権の網を張ることができ、かつ航空母艦で長駆の爆撃が可能であることを意味していた。

航統距離ばかりでなく、航空機同士の戦いでは高度が重要だった。機銃から発射された弾丸は重力の法則によって落下する。つまり上から攻撃すれば弾丸は真つ直ぐ標的に向かうが、下からの攻撃は命中率が悪い。

遭遇したときいかに相手より早く有利な位置につくか——理論上の最大速度と最高高度を実戦で発揮できるか——が勝敗を分けた。零戦はほぼ理論通りだったのに比べ、バツファローは机上の数字だった。

『エビエーション』誌の評価は、重大な誤認だった。

実際、開戦の直後、フィリピンの基地が日本の航空機に爆撃されたとき、アメリカ軍は

——近くに空母群がいるに違いない。

と見て、懸命に近海を搜索した。

このときフィリピンのマニラにいたダグラス・マッカーサー（当時はアメリカ極東軍司令官、のち連合軍司令長官）

は、のちのちも

「日本軍は空母で近づき、奇襲攻撃をかけてきた」

と語っている。

だがフィリピンを襲った日本の航空機は、はるか遠方、台湾の基地から出撃したのだった。

またイギリス極東艦隊司令官トーマス・フィリップス（中将）は、

——最も近い日本軍の航空基地は四百マイルも離れている。空からの攻撃を受ける心配はない。

と考えた。

このために航空機の護衛なく出港し、ばかりでなく日本の潜水艦に追尾され、<sup>〃</sup>虎の子<sup>〃</sup>のイギリス極東艦隊をあつけなく壊滅させてしまった。

開戦に先立つ十一月、日本との戦争を覚悟したアメリカ合衆国政府が、

——最初の一発は日本に撃たせるべきである。

としたのは、日本軍の戦力をはるかに低く見た分析に基づいていた。

## 二

相手の力を過小評価したのは連合国軍だけではなかった。

日本の大本営は連合国軍の力を次のように分析した。

一、物的戦力は豊富だが、人的戦力は不十分である。とくに米国は、総力戦態勢確立にともない、その政治社会機構に多くの摩擦、紛糾を招くだろう。

二、軍備は優秀だが、進攻拠点を失ったため、その価値は大いに減殺された。

三、英国の戦争遂行能力は海上輸送力に依存している。だが、米国の海上輸送力は貧弱で、援英に徹底できない。

四、米英の遮断分離はその戦争遂行能力に絶大な影響を及ぼす。とくに、英国と自治領植民地などとの分離は、ついに英国の崩壊を招く可能性がある。

五、米英両国民は生活程度が高く、その低下は苦痛である。戦勝の希望がない戦争継続は社会不安をつくりだし、士気の低下を招く。とくに英国の敗戦が米国に及ぼす影響は極めて大きい。

六、米英ソの提携は不自然である。またルーズベルト、チャーチルの政策は、ややもすれば投機冒險に堕し、両国民は必ずしもその指導に悦服していない。

この分析が行われたのは一九四二年三月現在なので開戦

から四か月目である。この時点で日本海軍は、ハワイ真珠湾奇襲攻撃でアメリカ海軍の出鼻をくじき、マレー沖海戦でイギリス極東艦隊を壊滅させ、残余の連合国軍艦隊をスラバヤ沖海戦、バタビア沖海戦で海中に葬っていた。

また陸軍は四一年十二月二十五日に香港、四二年一月二日にマニラ、二月十日にシンガポールを落とし、オランダ領インドシナの占領も間近、フィリピン・コレヒドール要塞は日本軍の包囲で孤立無援という状況にあった。陸海軍とも、向かうところ敵なしの勢いだったといっている。

東条英機がラジオで

「連戦連勝、ご同慶の至り」

と発言したのはこのときである。

余談だが、「ご同慶の至り」はちよつとした流行語になった。何かの式典に登壇した地方名士が挨拶や祝辞に盛り込んだばかりでなく、庶民が日常の慶事に接したとき、

——それはそれは、ご同慶の至りで。

という具合だった。マッカーサーが脱出したあと、コレヒドール要塞に残された将兵が、ニヤリと笑って

——アイ・シャル・リターン。

とトイレに行く合図にしたのと同じく似ている。

穿った見方をすれば、庶民は本能的にこの戦争の空疎さを見抜いていた。

日本の分析はあまりに主観的で、希望的観測に過ぎなかった。だけでなく、自身の力を過大に評価していた。なるほど各戦線で連合国軍は後退に後退を続けていたが、日本とアメリカ合衆国では生産力に格段の差があったし、暗号の解読や統計分析の能力は天と地ほどの違いがあった。

例えば状況分析の第二項目

「軍備は優秀だが、進攻拠点を失ったため、その価値は大いに減殺された」

とあるのだが、航空機の戦いが趨勢を左右するとなれば、陸上の進攻拠点が価値を持つということを大本営は考慮しなかった。敵地を占領し領土に編入するという旧世紀の思考回路が戦略の基礎似合った。

さらにいえば、政府や軍部は自身に内在する齟齬を理解していなかった。正面の敵は東南のイギリス、オランダなのか、太平洋の向こうのアメリカ合衆国なのか、はたまた南方のオーストラリアなのか。

陸軍は

——我らが対すべきは中国、イギリス、オランダである。と考えていた。このため、

——太平洋とアメリカは海軍に任せる。

と陸軍は言った。

ところがその海軍の中には、西進してアメリカ本土を攻め



るべきとする一派と、陸軍と連携して南方を固めるべきとする一派があった。

西進派は航空戦力すなわち航空母艦重視・戦艦不要論、南進派は輸送力重視・大艦巨砲論だった。自軍の中の意志統一がないまま、東条は陸軍の力に押し切られて開戦に踏み切ったことになる。

### 三

話を日米開戦の前に戻す。

一九四一年の秋、大本営や陸軍参謀本部の内で「和平論」「持久論」が台頭した。

まず政府内に出たのは、開戦のち南方に籠城し、カンリック教界を通じてアメリカ、イギリスと和平交渉を始めようという動きだった。これは近衛文麿の知恵袋とされた産業組合中央金庫理事・井川忠雄などが中心になったとされている。

だがそれは、有利な条件で戦争を続行するための謀略に過ぎなかった。

大本営はもっと大きな誤認を犯していた。

日本帝国陸海軍の中で、戦略立案部門と最前線の間に認識の齟齬が生じていたのだ。

例えば大本営が対米英開戦を決意していたとき、外務省は民間人をも動員して平和的妥協点の模索を並行して進めていた。

しかし陸軍参謀本部は

「宣伝情報利用に限定し、之を謀略的に利用せざるを可とす」

と冷ややかに評し、さして重要視していなかった。

にもかかわらずその陸軍参謀本部の内部で「持久戦」論が持ち上がったのだから、おかしい話だった。

それというのは、

——ヨーロッパ戦線でイギリスがナチス・ドイツに降伏するのを待ち、アメリカが戦意を喪失することに期待する。

という考え方である。

しかしこの案は海軍が真つ向から拒否した。

その筆頭は連合艦隊司令長官の職にあった山本五十六である。

彼は、

——政治というものは、一度決意したらやり通さなければならぬ。

と考えていた。戦争もまた、政治であった。

一八八四年（明治十七）、新潟県長岡に生まれた山本は、やや血縁がつながる河井継之助に強く憧れた。

河井は幕末の長岡藩にあつて執政となり、万余の官軍を引き受けて奮戦して死んだ。生まれる時と場所が違つていたら、一国の宰相を務める器量であつた、とされる。

山本五十六は一九〇四年（明治三十七）、海軍兵学校を出て戦艦「日進」に乗り組み、日本海海戦に参加した。このとき事故で左手の指を失っている。のちアメリカに武官として駐在したとき、ハーバード大学に学んだ。

帰国後、空母「赤城」艦長、一九三〇年（昭和五）海軍航空本部技術部長、三四年中将に昇格し、三五年航空本部長、三六年海軍省次官という経歴を持っている。

三八年に日独伊三国同盟が政治課題となつたとき、  
——それは対米軍事同盟になる。

として強硬に反対した。武官として駐在したとき、アメリカという国の底力を知つたためだった。

四〇年、大將に昇格したが、現場の戦闘指揮官であることを理由に日米開戦論議には加わらなかつた。山本が対英米開戦反対論者であることを知つていた参謀本部が、その発言を封じたとも、あるいは山本自身が議論に参加することを忌避したともいわれている。

——戦うなら、乾坤一擲の短期決戦でなければならず、ひるんではならない。

が持論だった。

山本は海相兼軍令部総長の嶋田繁太郎に書簡を送り、

そろそろ銭勘定する経営家多き由なるも、そんな中途半端にて守勢など固まるものに無之。

少くも英米両主力艦隊を徹底的に撃滅して、太平洋、印度洋より近東經由ドイツと自由に交通し得る態勢まで、作戦は一步も弛め難しと存居候。

と、安易な和平工作論に反対した。

その一方で彼は、連合艦隊旗艦「長門」、戦艦「陸奥」、空母「蒼龍」を敵艦隊と仮定して、航空機による雷撃訓練を強化した。鹿児島湾に停泊している三艦を目標に、空母から発進した艦上攻撃機、双発陸上攻撃機、艦上爆撃機などが低空から模擬魚雷を撃ち込むというものだった。

山本はこのとき

「飛行機でハワイを叩けないものか」

と呟いたという。

翌四一年一月、連合艦隊司令長官に就任した山本は海軍大臣・及川古志郎に私信を発した。

日米戦争に於て我の第一に遂行せざるべからざる要項は、開戦劈頭敵主力艦隊を猛撃撃破して、米国海軍及米国民を

して救ふ可かざる程度に、其の士気を阻喪せしむ事是なり。此の如くにして、初めて東亜の要衝に占居して不敗の地歩を確保し、依て以て東亜共栄圏も建設維持し得べし。

談し、次のような結論を得た。  
——高度十メートル以下で魚雷を水平に投下すれば、不可能ではない。

同月下旬、連合艦隊司令部は第十一航空艦隊参謀長・大西瀧治郎（少将）に真珠湾攻撃の研究を極秘で依頼した。大西は山本と同じく航空主兵、艦隊無用論者だった。大西の指示で作戦計画を練ったのは源田實という海軍少佐である。

源田は

——これからの海の戦争は、航空母艦が中心になると考えていた。

その意味で彼は山本——大西ラインの直系にあった。

ハワイの近くで発艦した航空機によって真珠湾を叩くには二百五十キロ爆弾でなく魚雷でなければならなかった。

大日本帝国海軍が保有していた魚雷は、航空機から落とされるといったん水面下六十メートルまで沈み、起動したスクリューで指定深度を確保する。

真珠湾の水深は十二メートルだった。であればこそアメリカ太平洋艦隊は雷撃を受けることなど一切心配していなかった。常識では不可能だったからだ。

源田は第三航空艦隊参謀・淵田美津雄（当時少佐）と相

~~~~~ 補 注 ~~~~~

ブルック・ポーハム Robert Brooke-Popham / 1878~1953。名を「ポッフアム」とする表記もある。シンガポール陥落直前までイギリス極東司令部の最高司令官だった。第二次世界対戦後、イギリス空軍 (RAF) 司令官となった。最終階級は空軍大將。

トーマス・フィリップス Thomas Spencer Vaughan Phillips / 1888~1941。一九四一年十二月二日イギリス東洋艦隊司令官に就任し、その八日後の十二月十日、マレー沖海戦で沈没した乗艦プリンス・オブ・ウェールズと運命をともにした。最終階級は海軍大將。

雑誌「エビエーション」 太平洋戦争前から発行されていた航空専門の雑誌で、現在は「エビエーション&ウィーク」と誌名を変えている。

戦闘機「バッファロー」 制式採用後の名称は「プリュースター/F2Aバッファロー」。アメリカ海軍に配属された最初の単葉機で、一九三六年に策定された海軍次期艦上戦闘機の要求仕様(単葉機、折りたたみ翼、引き込み脚、密閉式コクピット)に沿ってプリュースター社、グラマン社、セバスキー社が競争試作に参加し、プリュースター社が受注に成功した。航続 距離約一千二百七十キロ、最大速度二百九十五キロ/時、十二・七ミリ機銃四基を装備し、最高高度は六千百メートルだった。しかし実際はそれよりかなり遅かったといわれる。

マッカーサーの誤解 『マッカーサー回顧録』による。ついでな

がら当時のアメリカでは、「日本人は乳幼児のころ母親の背中に背負われて育つため、多くが三半規管に異常を持ち、満足に飛行機を操縦できない」と考える人が多かった。マッカーサーもそうした俗信のとりこだった。

イギリス極東艦隊の壊滅 開戦直後、イギリス極東艦隊は旗艦「プリンス・オブ・ウェールズ」などを日本軍航空機の攻撃で失った。日本軍は艦船対航空機という新しい戦法を開きながら、自身はその対応ができず自滅していく。

イギリス極東艦隊 インドネシア・オーストラリア・インド地域を所管するABDA (American-British-Dutch-Australian) 司令部の中核部隊だった。

戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」、巡洋戦艦「レパルス」を中心とするZ部隊。ここに大型空母「インドミタブル」が配備されているはずだった。ところがインドミタブルは大西洋を横断してインド洋に向かう途中、四一年十一月三日、ジャマイカ沖で座礁し航行不能に陥っていた。インド洋に到着したのは四二年一月のことだった。

戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」 排水量三万六千七百二十トン、全長二百二十七・一メートル、全幅三十一・四メートル。キングジョージⅤ世級の二番艦として四一年三月に就役し、同年五月ナチス・ドイツ海軍の戦艦ビスマルクと大西洋で交戦した。そのとき被弾損傷したため補修を受けたのちイギリス極東軍に配備された。四連装の三十六センチ砲二基、連装一基の主砲十門を装備していた。艦名は代々の英国皇太子に由来している。

巡洋戦艦「レパルス」 レナウン級巡洋戦艦の二番艦として一九一六年に就役した。二度の兵装強化で連装三十八センチ砲三基、

三連装十センチ砲五基、魚雷発射管二基を備えていた。排水量は三万八千二百トン、全長二百四十二メートル、全幅三十一・三メートル。巡洋戦艦は巡洋艦に戦艦並みの攻撃力を備え、戦艦より高速に航行できることから、第二次大戦の主要国海軍が砲艦の主力とした。

井川忠雄 いかわ・ただお／1893～1947。島根県出身、旧制仙台一中から東京帝国大学法科大学生時学科を出て大蔵省に入った。近衛文磨を座長として一九三三年十二月末に発足した「昭和研究会」に参加し、民間交渉による日米・日英開戦回避に尽力した。

産業組合中央金庫 一九二三年、政府および産業組合（農業協同組合の前身）とその連合会の出資で設立された。のち日本農林中央金庫となった。

河井継之助 かわい・つぐのすけ／1827～1868。名の読みは「つぎのすけ」とも。諱は「秋義」。越後長岡城牧野家の藩政改革を推進した。戊辰戦争では長岡藩の「独立特行」を主張して維新政府軍と和平交渉を行ったが、決裂して戦闘となった。「北越戦争」と称される戦いに敗れ、会津に向かう途中、只見村で死去した。

及川古志郎 おいかわ・こしろう／1883～1958。岩手県に生まれ一九〇三年海軍兵学校卒、のち海軍大学校卒。二八年少将・呉鎮守府参謀長、第一航空戦隊司令官、海軍兵学校校長を経て中将、三八年第三艦隊司令官、三六年航空本部長、三八年支那方面艦隊司令官兼第三艦隊司令官、三九年大将。四〇年海相に就任し、対米英開戦について明確な考えを示すことがないまま戦争に突入した遠因を作った。四四年軍令部総長としてマリアナ

沖海戦、レイテ沖海戦を指導し大敗、終戦時は軍事参事官の職にあった。

大西瀧治郎 おおにし・たきじろう／1891～1945。兵庫県に生まれ、一九一二年海軍兵学校卒。一八年からイギリス、フランスに駐在し、帰国後は航空兵力の拡充に努めた。三九年第二連合航空隊司令官、四二年航空本部総務部長、四三年中将、四四年第一航空艦隊司令官、軍令部長として航空機による特別攻撃（特攻）を指導した。ボツダム宣言受諾をめぐる協議で徹底抗戦を主張したが容れられず自決した。

淵田美津雄 ふちだ・みつお／1902～1976。海軍兵学校五十二期。同期に源田實、高松宮宣仁王がいる。一九四一年第一航空艦隊の赤城飛行長として真珠湾攻撃の特殊訓練を指導した。真珠湾攻撃における空襲部隊の総指揮官で、全機突入せよの「ト・ト・ト」信号、奇襲成功を伝える「トラトラトラ」を発信した人物でもある。しばらく連合艦隊がハワイ沖にとどまって、真珠湾に不在だったアメリカ航空母艦を叩くべきと進言したが受け入れられなかった。第二次大戦後はキリスト教の伝道に努めた。

059 新兵器

第五十九

新兵器

一

第一次世界大戦では、潜水艦、爆撃機や戦闘機、水上機母艦、戦車、地雷、毒ガスといった「新兵器」が登場した。ここで「新兵器」とかぎカッコで括つたのは、個々に見れば、いずれも十九世紀末までに登場していたからである。

例えば潜水艦は、一六二〇年にロンドンのテムズ川で初の潜行航行に成功し、一七七六年に初めて兵器として使用されている。

また飛行機はアメリカのライト兄弟によって一九〇三年に発明され、第一次大戦で初めての空爆と空中戦が行われた。戦争が使用法を変え、使用法が変わることで新しい機能が追加された、といつていい。

一九一四年九月、第一次世界大戦で膠着状態にあった西部戦線に登場した「タンク」（戦車）と「地雷」もそうだった。

車輪が付いた戦場を駆け巡る利器という意味での「戦車」

は、紀元前のシムメル文明で発生している。中国では三国志のころ、車体の両脇に長い刃を装着して歩兵を撫で斬りにする戦車があった。自動車を分厚い鉄の板で覆い、機関砲を備え、車輪に無限軌道を装備したという点で、イギリス軍が投入した四十九台の「タンク」は画期的だった。

さらに東部戦線では毒ガスも使われている。さらに画期的だったのは、水上機母艦である。

そもそもは輸送船に過ぎなかったが、それにクレーンと格納庫を備えつけ、敵陣の近くの海面に水上艇を下ろして発進させたのである。さらにイギリスは建造中だった大型巡洋艦「フューリアス」の設計を変更して、前甲板と後甲板を改造した。ここに世界最初の航空母艦が誕生した。

フューリアスは巡洋艦として設計されたために、艦の真中に高い艦橋と煙突がそびえていた。そこでイギリスは、建造に着手したばかりの大型商船の設計を改め、艦首から艦尾までを飛行甲板にして飛行機の発着を専門とする特殊な船「アーガス」を建造した。これがのちの航空母艦の基本型となった。

ついなので航空母艦について書いておくと、当初から航空母艦として設計された最初の艦船は、日本の「鳳翔」である。この船は浅野造船所で一九二二年に竣工し、翌二三年に就役した。ところが航空機が発着するには甲板の形

状が不備であったり、海洋のうねりによって艦が安定しないなど、大きな問題が潜んでいることが判明した。

「鳳翔」が実戦に配備されたのは一九三二年のことだった。上海事変に動員され、そのとき同艦から発進した日本の戦闘機がアメリカ人パイロットの操縦する中国軍機と初の空中戦を行っている。

太平洋戦争ではミッドウエー海戦に参加したのち、広島の大津波で飛行機の発着練習用に使用された。米軍の空襲で軽微な損傷を受けたが、一九四五年八月十五日の時点で帝国海軍の空母としていまだに健在だった。

イギリスは日本の「鳳翔」から遅れること二年で「ハームズ」を竣工し、ほぼ同時に「イーグル」を完成させた。アメリカは石炭運搬船として建造中の「ジュピター」の設計を途中から航空母艦に改め、「ラングレー」の名で就役させた。

その後、イギリス海軍は「カレイジャス」「グロリアス」「アークロイヤル」「イラストリアス」「コロッサス」などを、アメリカ海軍は「レキシントン」「サラトガ」「レンジヤー」「ヨークタウン」「ワスプ」「エセックス」などを、フランス海軍は「ベアルン」を、大日本帝国海軍は「龍驤」「蒼龍」「飛龍」「翔鶴」「大鳳」「信濃」「雲龍」「千歳」「瑞鳳」などを建造している。

不思議なことにナチス・ドイツとファシスト・イタリアは空母を建造しなかった。ナチス・ドイツは代わりに潜水艦を作った。このあたり、思想の違いというほかはない。

各国が航空母艦を相次いで建造したのは、ロンドンとワシントンの二度の軍縮会議で、戦艦と巡洋艦の新規建造が規制されたためだった。航空母艦は規制の対象ではなかった。それと空からの敵地爆撃の効果が認識され始めていた。艦数だけだとイギリスが七、アメリカが七、フランスが一、日本が十と、日本が最も多い。しかしイギリスとアメリカは並行して、航空母艦に転換することを前提とした輸送船を建造していた。

潜在的な航空母艦を合わせると、第二次世界大戦の初期、イギリスは二十四隻、アメリカは四十八隻を保有していた。日本は戦ってはならなかったのだ。

二

第二次大戦で登場した「新兵器」は何であつたろう。

戦車、航空母艦、戦闘機、潜水艦などは、第一次大戦から二十五年の間に改良が重ねられ、大きな変貌を遂げていた。なるほど大戦の末期に原子爆弾が発明されたが、通常の使用に供する兵器ではない。

その意味ではおそらく、

——ローターと暗号装置である。

ということになる。

このうちローターについては、すでに書いた。

暗号装置は、コンピュータの基本原理を形成した一要素として、しばしば紹介されている。

最も有名なものは、ナチス・ドイツが使用した「エニグマ」(Enigma) である。

ドイツ語で「謎」を意味するこの装置は、一九一八年にその原理に特許が与えられ、一九二〇年代には商用機が発売されていた。タイプライターと同じキーボード（ただしドイツ語用にウムラウトのキーがあった）からアルファベットの入力すると、内部に装着されたローターでランダムに別のアルファベットに置き換えられ、最終的にはまったく意味をなさないアルファベットと記号の列に変換される。原理はこうである。

キーボードが動いて何かの文字が打たれると、電流が流れる。すると第一のローターが動いて、第二のローターに信号が送られる。

第一のローターが「A」を発信すると、第二のローターで一つあとの「B」に変換される。第一のローターの「B」が第二のローターで二つあとの「C」に置き換えられる。

すると原文「AB」は、二度の置き換えで「CD」に変換される。

もちろん、これでは単純すぎて暗号にならない。

そこで、ローターの周期を違える。

第一、第三のローターが十五回転する間に第二、第四のローターが十七回転する。初期のモデルはローター一個に二十八の電極があったから、電極の数と回転数の相乗によって理論上、三百九十九億六千八百万六千四百通りの組み合わせができる。

ドイツの陸軍が制式に採用したのは一九二八年だった。ここでエニグマは軍用に改良され、ローター一個当たりの電極が二十六個に、ローターは三個に減らされたが、反転ローターとプラグボード（統計会計機械装置の配電盤と同じ原理）が採用された。

三個のローターの回転周期を二十六、二十五、十六に高速化したので、文字を変換する理論上の組み合わせは一億八千二百七十九万四千通りだった。そこでさらにプラグボードの配線を変えることで、ほとんど無限大の組み合わせが生成されるというわけだった。

とはいえ、以上はあくまでも理論上の数字であって、実際にはいくつかのパターンが使用された。送り手が生成した暗号を受け手が解読できなければ何の役にも立たないし、

現場の部隊に数学の専門家がいるわけではなかった。このことは、装置の原理とパターンが判明すれば、傍受者が解読できることを意味していた。

ナチス・ドイツの膨張がソ連を指向していることが明らかになった一九三〇年代、自国が理不尽な戦場となることを恐れたポーランドのマリアン・レイエフスキという数学者が、初期の「エニグマ」の暗号を解読することに成功した。

彼はナチス・ドイツ軍の部隊の間で交わされる暗号文に、

——〇〇から〇〇へ。

——本日、異常なし。

といった定型的な文章が繰り返し入っているに違いないと考えた。

そこで彼は傍受した暗号を丹念に分析して、いくつかの定型文を見つけ出した。仮説と推理によつて単語が解読され、個々のアルファベットを元のアルファベットに置き換える方法が発見された。

一九三八年の十月頃、レイエフスキはポーランド軍の参謀本部第二部暗号局に属していたヘンリク・ジガルスキ、イェジ・ルジツキという二人の若い研究者をチームに加えて、符号を一致・不一致を照合して解析する仕組みを考え出した。

これが「b o m b a」（ボンバ…爆弾）という暗号解読機となった。しかしポーランドは「b o m b a」の存在をイギリスやフランス、アメリカなどにも秘匿していた。

暗号が解読されているらしいことを察知したナチス・ドイツは、ローターの数を五個に増やし、ローターの回転周期を変更した。これにより理論上の暗号生成機能が一気に一千倍に引き上げられた。ただし交信のパターンまで変わったわけではなかった。

ポーランドの学者たちはなおも解明の努力を続けたが、ナチス・ドイツ軍の侵攻によつて彼らの研究は途絶えてしまった。ただしナチスが侵攻する直前、「b o m b a」の情報はいギリスに引き渡された。

これがイギリスで改良されて「B O M B E」と名付けられ、さらに改良されて「Colossus」（コロサス）となっていく。

三

一九四〇年の二月、イギリス軍は最新の「エニグマ」のローターを手に入れることができた。大西洋上で捕獲したドイツ海軍潜水艦（Uボート）「U 33」号の乗組員が、ボケットの中のローター二個を破棄するのを忘れたためだっ

た。

そのローターはただちにケンブリッジ大学のキングスカレッジに送られて、暗号解読研究チームに渡された。

次いで同年五月、同じく大西洋上でトロール漁船を偽装していたドイツのスパイ船から、大量の通信文書が接収された。これもまたキングスカレッジに送られた。暗号文とそれを解読した文書を照合すれば、仕組みが解明できるはずである。

ここにマックス・ニューマンという数学者がいた。

彼はイギリス郵政省の研究班と共同で、暗号解読装置の開発を行っていた。その装置はナチス・ドイツ総統ヒトラーが連絡に使う専用の暗号「フィッシュ」を解読するのが目的だった。彼はフィッシュ暗号を統計的に解析する装置の開発を進めていた。

彼は、教え子で英米首脳間秘話装置の開発を担当していたアラン・チューリングを中心に、アメリカの研究者を交えたチームを作り、エニグマ暗号を解読する作業に着手した。

イギリス政府はキングスカレッジに約一千人の数学者、数学者などを集めて解読に当たったという。しかるにアラン・チューリングが初めて「エニグマ」の暗号体系を解明した。

彼が作成した「チューリング・マシン」および、一九四三年に開発した暗号解読装置「コロッサス」がヨーロッパ戦線の状況を一変させた。ナチス・ドイツ空軍機の爆撃目標が事前に把握できるようになっていく。

——イギリス政府は解読に成功したことをナチス・ドイツに知られたくなかったので、コペントリーにドイツ軍の空襲があることを承知していながら、住民に避難を勧告しなかった。

という話がある。

だが、これはどうやら後世の創作であるらしい。

当時の研究者たちは、ドイツ空軍が使用していたイギリスの都市名のコードまでは解読できなかった。エニグマ暗号を解読したとき「KORN」で示された都市を、彼らはロンドンだと考えていた。暗号とは別に符号の解読も必要だったのである。

四

ナチス・ドイツと同盟を結んでいた日本にもUボートによって「エニグマ」の技術が伝えられた。そのまま適用されなかったのは、アルファベットと日本語の違いゆえだった。

日本語にはアルファベット、数字のほかにカナがある。通信文をカタカナにして、受信側で漢字交じり文に直すにしても、文字種が倍も多い。

このため日本では独自の改良を重ね、「エニグマ」と同じ原理ながら異なる機構を採用した「紫」を外交文書や外交指令に適用した。また海軍は「九七式欧文印字装置」を開発し、陸軍は「三式換字機」を作った。

このうち「紫」は日米交渉中にあらかたが解読され、海軍の「九七式」は太平洋戦争が始まった半年後から一年後の間にほとんど役に立たなくなった。アメリカの政府や軍にとつての重要度の順と考えればいい。

エニグマを真似たとはいえ、「紫」は日本語を暗号化する独自のコード体系を持っていた。そこでアメリカ連邦政府は専用の解読装置を開発することにした。

初期の解読は人手によって行われ、次いで「エニグマ」用に開発された「BOMBE」という装置が適用された。

この装置の開発にはイギリスのチューリングもかわった。一九四一年に入つて、ウィリアム・フリードマンが「紫」の解読に成功した。彼は「紫」のコードを解明したばかりでなく、海軍の「九七式欧文印字装置」の模造機を作つてもいる。

フリードマンが作製した「紫」解読装置は「パープルマ

シン」と名付けられ、日米開戦までに八台が作られた。そのうちの二台がイギリスに手渡され、ロンドンの北方七十キロのブレッチリーという町にあった「政府通信本部」(ブレッチリー・パーク)に設置された。

ブレッチリー・パークのスタート時は二百人程度だったが、第二次大戦末期には補助要員も含めると二万人にのぼる人々が働いていた。そこでベルリンの駐独日本大使館が発信する暗号文を傍受して解読した。

首相チャーチルが側近に「ブレッチリーは私のウルトラシークレットだ」と語つたことから、同本部で解読されたナチス・ドイツや日本の暗号通信文は「ウルトラ」と総称された。ドイツで開発された暗号技術が日本を経由してアメリカからイギリスに渡り、太平洋戦争の戦況を左右したことになる。

ワシントンの駐米日本大使館は、「九七式欧文印刷装置」と「紫」で本国と電信文をやり取りしていた。「海軍甲」と称された方式である。

少なくとも一九四一年十月以後、アメリカ連邦政府の日交渉グループは日本政府の対米英開戦決意や「帝国国策遂行要領」を周知していたわけだった。ドイツ・ベルリンにある日本大使館から発信される情報と照らし合わせていたアメリカ連邦政府は、日米交渉の主導権を完全に握つて

いた。

しかし、だからといってアメリカ連邦政府は、日本がいつ宣戦を布告してくるかまで承知していたわけではなかった。というのは、日本帝国陸軍は「三式換字機」という別の暗号装置を使っていたし、海軍は外務省とは異なるコード体系を持っていた。

海軍には「甲」「乙」「丙」「丁」「戊」「辛」「巳」のほか、「D」「F」「G」「H」「J」「S」「W」の計十四種があり、かつ独特の略語、符号などがあつた。

こうした体系を整えたのは、中央大学法学部を出た藤崎栄である。藤崎ははじめ警察官となつたが、独力で暗号を研究して外務省の入省試験を受けた。一次試験は首位で合格したが、従兄弟が思想問題で憲兵に連行されていたために最終選考で不合格となつた。

ところが彼の論文が中野高等無線学校の創立者である高本章（第二次大戦後、衆議院議員）の目にとまつた。高木は藤崎を中野高等無線学校の教師として招き、ややあつて、海軍航空本部技術部長（少将）だった山本五十六に校長となつてもらえるよう請願した。

藤崎が交渉の窓口となつた。

高木の請願は実現しなかったが、後日、山本から藤崎に——海軍の仕事をしろ。

という指示がきた。

これ以後、藤崎は海軍の暗号に関わるようになる。

日米開戦の前夜、日本の外務省はワシントンの駐米日本大使館に長大な通信文を送信した。対米交渉の打ち切りを告げる「対米覚書」すなわち最後通告である。

全部で十四部から成る長文であつたため、外務省は細かく区切つて送信した。最初のパイロット・メッセージ「九〇一号電」の送信が開始されたのは、一九四一年十二月六日午前六時三十分だった。

それは外相・東郷茂徳の名で、

「十一月二十六日決定の「対米覚書」（英文）を送る」

「長文なので分割して順次送る」

「極秘扱いである」

「手交時刻はのちに指定する」

「いつでも手交できるよう文書作成に万端の手配をせよ」
などが指示されていた。

日米覚書の最後となる第十四部が送信されたのは十二月七日午前二時、エンディング・メッセージ「九〇七号電」は同日午前三時三十分である。

その九〇七号電には

本件は七日午後一時を期し米側に（なるべく國務長官に）

貴大使より直接手交ありたし

となっていた。「七日午後一時」とは、もちろんワシントン現地時間である。

ところが日本大使館の上層部には危機感が薄かった。その結果、駐米日本大使・野村吉三郎がアメリカ国務長官コーデル・ハルに文書を手交したのは、日本軍の航空機がハワイ真珠湾を攻撃したあとだった。このため日本は騙し討ちをしたことになった。

一九四一年十二月八日にかかわるもう一つの暗号がある。連合艦隊司令長官・山本五十六が戦闘開始を命令した「ニイタカヤマノボレ二二〇八」でも、南方軍が上陸に成功したことを知らせる「ハナサクハナサク」でも、機動部隊長官・南雲忠一が発した真珠湾攻撃に成功したことを知らせる「トラトラトラ」でもない。

それは日本の大本営（陸軍参謀本部と海軍作戦本部で組織）が開戦の最終決定を関係機関や諸部隊に通知する暗号であって、のちに「風暗語」と呼ばれている。

日本政府が陸海軍と協議して一九四一年十一月十九日に取り決めた符号で、海外向けラジオ短波放送で発せられる天気予報である。

——アメリカとの開戦を決定した場合は「東の風、雨」

を挿入する。

というものだった。

また英蘭仏と戦争を開始する場合には「西の風、晴」、ソビエトを攻撃する場合は「北の風、曇」と合図されることになっていた。

十二月五日、

「東の風、雨」

「西の風、晴」

のメッセージが、外地の諸部隊に向けて発せられた。

~~~~~  
補 注  
~~~~~

潜水艦 これに類する乗り物の記録は古代にもある。しかし近代的な意味での潜水艦の元祖は、ロンドンに住んでいたオランダ人の船大工であるコーネリウス・ドレベルが考案した。グリースを塗った皮で木造船を包み、十二人の乗員が船体から突き出したオールを漕いでテムズ川を潜水したまま数 マイルさかのぼることができた。二〇〇三年に民間団体が復元しその事実を確認した。

潜水艦が戦闘に使用された最初はアメリカ南北戦争で、一七七六年南軍のデービッド・ブッシュネルが作った「タートル号」がニューヨーク沖に停泊していたイギリス戦艦「イーグル号」に機雷を仕掛けようとして失敗した。タートル号は手動のスクリュ二基で航行し、のちの潜水艦と同様、船体に装備したタンクに水を出し入れする機構を備えていた。

飛行機による世界最初の爆撃 一九一四年八月、ドイツ帝国陸軍の複葉飛行機がフランスのリュネビ上空に飛来し、操縦士が爆弾を手でつかんで二発の爆弾を投下した。日本帝国軍における空爆は同年八月、陸軍所属の五機および、海軍所属の飛行艇六機がドイツ帝国租借地だった中国山東省の青島に爆弾を投下したのが最初とされる。海軍は横須賀の海軍工廠で「若宮丸」という運送船を改造して水上機搭載設備を備え、青島近海から飛行機を発進させた。

タンク (戦車) と地雷 第一次大戦の西部戦線でドイツと英仏連合軍は長大な塹壕を築いて膠着状態に陥っていた。ここに「スベイン風邪」と呼ばれた悪性のインフルエンザが発生した。長期戦

による倦怠感と病人の続出で士気が低下した。これを打破するためにイギリスが投入したのが「タンク」だった。ドイツ帝国もすぐに採用した。タンクから陣地を守るために開発されたのが地雷である。

ドイツ帝国は対ロシアの東部戦線も展開していたため経済的に二面作戦を維持することが困難になった。そこで投入したのがマスタードガスだった。これにより近代戦争は、機械化による大量破壊、大量殺戮に変質していった。

水上機母艦 最初に実戦に使用したのはイギリスだった。ドイツ帝国軍の潜水艦が無差別攻撃を行ったことへの報復として、イギリスはドイツ空襲を思いつき、二千トンから一万トンの商船を改造して水上艇をドイツ近海に運び、数機編成で空爆した。

フューリアス 一九一六年八月進水、一七年六月に巡洋戦艦として就役した。全長二百四十メートル／最大排水量二万八千五百トン。その後、主砲を撤去して全通式発艦甲板を備えた航空母艦となった。最大四十機を搭載することができた。

アーガス イタリアのトリノに本社を置く旅客サービス会社ロイド・サバイド社が発注した貨客船をイギリス海軍が買い取って航空母艦に仕立てた。就役は一九一八年九月だった。全長百七十二メートル、最大幅二十・七メートル、最大排水量一万五千七百七十五トンだった。最大二十期を搭載することができた。

空母「鳳翔」 ほうしょう。九千四百九十四トン。第二次大戦後、復員船として一九四六年八月まで就航し、一九四七年五月に日立造船で解体された。

エニグマ グリシア語で「謎」の意味。特許を出願し認められたのはアルトゥール・シエルビウス (Arthur Scherbius / 1878

（1929）というドイツの数学者だった。彼の特許を用いてシフレン・マシーネン社が一九二三年に製品化し発売した。当初は秘匿情報を知られたくない証券取引きや軍事用の通信などに利用された。

マリアン・レイエフスキ Marian Adam Rejewski / 1905～1980。プロイセン王国ポズナン州（一七九三～一九一八年までドイツ領だった）で生まれたことからドイツ語を自在に操ることができた。一九二九年ポーランド軍参謀本部の暗号局でドイツ海軍の暗号研究に従事し、三二年ごろからエニグマの解読に取り組んだ。

ヘンリク・ジガルスキ Henryk Zygałski / 1908～1978。ポーランドのボズナン大学の同窓生であるマリアン・レイエフスキ、イェジ・ルジツキと共同でエニグマの解読方法と解読装置の開発に取り組んだ。のちイギリスに亡命して大学で教鞭を取った。イェジ・ルジツキ Jerzy Witold Różycki / 1909～1942。ポーランドがナチス・ドイツとソ連に分割され事実上消滅したあとフランスに亡命してエニグマの解読に取り組んだ。

マックス・ニューマン Maxwell Herman Alexander Newman / 1897～1984。父親がユダヤ人だったためナチス・ドイツとの戦いに参加する意味から、四十五歳のとき（一九四二年）イギリス政府通信部でドイツのテレタイプ端末用暗号「Tunny」を研究した。ここで「ヒース・ロビンソン」と名付けた暗号解読装置を開発した。

トニー・フラワーズ Thomas Harold Flowers / 1905～1998。「ヒース・ロビンソン」に真空管を適用して信頼性を高めたのが世界初のデジタル計算機「Colossus」となった。

Colossus コロッサス：「ロードス島の巨像」(Colossus of Rhodes)のこと。台座を含めると高さ約五十メートルの太陽神ヘリオンの像だったという。紀元前二二六年の地震で倒壊したが、その残骸は六五四年にイスラム教徒が持ち去るまで見物客を集めていた。

計算機「Colossus」 第二次大戦中に「Mark I」「Mark II」の二機種計十台が製造された。Mark IIが解析したナチス・ドイツの情報に基づいてノルマンディ上陸作戦が策定されたといわれる。

Uボート Unterseeboot:ドイツ海軍の保有する潜水艦の総称で、第一次世界大戦のとき三百隻が建造され商船五千三百隻、戦艦十隻を撃沈させた。第二次世界対戦では千三百三十一隻が建造され、商船三千隻、戦艦二隻、空母二隻を沈めた。ヨーロッパ戦線だけでなく、インド洋でイギリス連邦の商船を攻撃している。また日本にも模造艦建造のために一隻が贈呈された。ちなみに「U33」はドイツ海軍第二潜水隊群所属の潜水艦だった。

アラン・チューリング Alan Mathison Turing / 1912～1954。ロンドンで生まれ、一九三一年ケンブリッジ大学のキングス・カレッジに入学し、数学を専攻した。一九三六年から三八年まで米国プリンストン大学に留学、ここで教授をしていたフォン・ノイマンから助手として誘われたが、それを断ってケンブリッジ大学に戻った。三八年、ナチス・ドイツの暗号「フィッシュ」「エニグマ」の解析に当たり、独自の解読装置を作ることになった。四二年、暗号解読技術の交流のためアメリカに派遣され、帰国後、真空管を使った新たな暗号解析機「コロッサス」の開発に従事した。戦争が終わった一九四五年、イギリス国立物理学研

究所に入り、ここでイギリスの国産コンピューター開発プロジェクト「ACE」に参加、四八年にアメリカに移ってマンチェスター大学の計算機担当になった。論文「計算機構と知能」(一九五〇)は人工知能の先駆けとなった。五四年、青酸カリで自殺した。

コベントリー Coventry : ロンドン北西約百キロにある中規模都市。第二次大戦では、聖ミッシェル教会がドイツ軍空爆の目標とされ、現在も廃墟が残されている。この町の伝説にいわく——。中世の領主リオフリクの夫人ゴダイヴァは、重税に苦しむ住民の税を軽くするよう王に願ひ出た。すると王は「白馬に乗り裸で町を歩いたら願ひをかなえよう」といった。彼女は裸で馬に乗り町に出たが、住民は戸を下ろして見ようとしなかった。ところが一人だけこっそりとのぞき見た男がいた——それが「ピーピング・トム (のぞき見男)」の由来になったという。

映画『エニグマ』 ダグレイ・スコット主演、マイケル・アプテッド監督、二〇〇一、イギリス。

紫(パープル) ワシントンで野村—ハル会談が続けられていた一九四一年の早い時期にアメリカ情報部に知られ、「パープル」と名付けられた。このほかに九一式欧文印字機は「レッド」、三式換字機は「グリーン」などと呼ばれた。

ウィリアム・フリードマン William Frederick Friedman / 1891~1969。米陸軍シグナル・インテリジェンス・サービス(SIS)に属して暗号の解読に当たった。一般的に暗号を解読するには、多くの暗号文の中から多用される反復文を探し出し、これから暗号を解く鍵を見つけていく。しかしフリードマンはいきなり模造機を作った。このため多くの専門家は、アメリカ連邦政府は何らかの工作で日本から暗号機的设计図ないし機構に関する

情報を入手したのではないかと疑っている。そのことについて連邦政府は「国家機密」として明らかにしていない。

妻のエリザベス (Elizabeth Smith Friedman / 1826~1980) も暗号解読の研究者で、彼女は中南米に潜むドイツ系反米勢力の攻撃を警戒する任に当たっていた。

二台のパーブルマシン 一台は、本来はハワイのアメリカ軍基地に設置される予定だった。日米開戦直後にキンメル中将は罷免されたが、「ワシントンが十分な情報を提供していなかった」とする名誉回復の裁判で「パーブルマシン」の配備が焦点となり、キンメルの主張が認められている。

フリードマンが作った「パーブルマシン」は、ロンドンの北方七十キロのブレッチリーという町にあった「政府通信本部」(ブレッチリー・パーク)に設置された。スタート時は二百人程度のスタッフだったが、第二次大戦末期には補助要員も含めると一万人にのぼる人々が働いていたという。

その所在は枢軸国側には全く知られなかった。首相チャーチルが側近に「ブレッチリーは私のウルトラシークレットだ」と語ったことから、同本部で解読されたナチス・ドイツや日本の暗号通信文は「ウルトラ」と総称された。

海軍甲 カタカナ四文字のコードブックに基づき、カナ乱字で暗号化していた。まず通信文の語句をコードブックでカタカナ四文字に置き換える。その符号の下にカナ乱字を記入する。こうして生成された「符号+乱字」の縦列二字を九七式和文印字機で叩くと秘匿用算用数字がタイプされる。海軍甲暗号は通信量が大きくなるため、帝国海軍では大本営海軍部発の作戦命令などに限定して使用した。

対米覚書 当初、最後通告の発信開始時刻は「六日午前二時」となっていた。それが四時間半も遅れたのは、通信文を暗号化するのに手間取ったためだった。

04 含牙篇

卷之八 重濁

060 機密戦争日誌

061 鹵獲品

062 その名はジーク

063 戦場の計算機

064 真珠湾の次

065 空母対空母

060 機密戦争日誌

第六十

機密戦争日誌

一

本書は「戦記もの」ではないので、第二次大戦、ことに太平洋戦争について、その経過を詳細に語る紙幅を持たない。ただ、次の観点から、太平洋戦争のポイントとなった事実を積み重ねようと考えている。

その観点とは、

- ① ようやく国内で普及段階にあった計算機の利用を中断した重大な事件であったこと。
- ② きわめて計数的な手法で運営されたこと。
- ③ その運営に当たっては長期にわたる多くの可変数の組み合わせを必要としたこと。
- ④ 意思決定において情報の収集と分析が重きをなしたこと。
- ⑤ 計算機ばかりでなく、様々な電子機器が彼我の優劣と勝敗の決定に関与したこと。

- ⑥ 極限の競争状況の中で新しい技術が開発されたこと。
- ⑦ ときに個人の能力が思いもせず発揮され、戦局を左右したこと。

——などである。

そこで戦争の経過を語りつつ「情報」（計算機で処理されたデータの意味に限定しない）というものを概観していきたい。主に使用した文献資料は、世界文化社『日本歴史シリーズ・太平洋戦争』、岩波新書『太平洋戦争』、柳田邦夫『零式戦闘機』『零戦燃ゆ』、秦郁彦『戦後史の謎を追う』などである。

教科書日本史などでは、一九四一年（昭和十六）十二月八日から四五年（昭和二十）八月十五日までの戦争は「第二次大戦」の呼称で一括りにされる。ただ、この戦争は大きく二つの局面、すなわち太平洋戦争と大東亜戦争で成り立っている。

ざっくりいえば、太平洋戦争は海軍の、大東亜戦争は陸軍の戦いだった。海軍と陸軍は戦争の思想が異なっていたから、経緯にも自ずから質的な相違がある。そのことは追々明らかになる。

表題の『機密戦争日誌』は、終戦直後、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の度重なる調査にもかかわらず発

見されなかった。ポツダム宣言無条件受諾の報が伝わると、戦争犯罪の証拠となりそうな大量の書類が焼却された。

『機密戦争日誌』も煙になって消滅したと考えられていたが、紆余曲折を経て門外不出の機密文書として防衛庁図書館に秘蔵されることとなった。

一九九八年十月、錦正社が刊行した際に付された序文には次のようにある。

今回防衛庁防衛研究所所蔵の大本営陸軍部第二十班（戦争指導班）の昭和十五年六月一日から二十年八月一日に至る業務日誌「機密戦争日誌」を刊行することが出来たことは、本会にとっても多くの研究者にとっても大きな慶びとする所である。元来大本営内の各部課でも業務日誌を作成していたと思われるが、現存するものはこの第二十班（戦争指導班）のもののみである。敗戦にあたり、書類焼却指令が出されていた中で、これが残存したのは一人の庶務将校が焼却に忍びなく、これを含む一連の文書を密かに隠匿したことによるのであって、今日となって我々はその恩恵に預かることが出来るのである。

極東裁判が終結し、サンフランシスコ講和条約が発効して以後、初めて一部関係者にその実在が知らされた。太平

洋戦争に関する日本側の第一級資料とされている。

その日誌には一九四一年八月二十二日のこととして、

陸軍省案を加味したるものにて部長会議開催。前後四時間により審議し、対米英戦決意を決定す。次長、対米英戦決意の意見牢固たるものあり。約一ヶ月にわたり、苦悩に苦悩を重ねたる結果、戦争決意に到達したものの如く、次長の意見は極めて強固なり。右案果たして海軍または政府と意見一致するや否やに関し、総長以下大なる疑問を持ちあり。一致三分不一致七分と考えるあるが如く、内閣瓦解は必至なるべし。

と記している。

文中の「次長」は塚田攻（中将）、「総長」は杉山元（大将）を指している。攻は「おさむ」、元は「げん」と読む。

塚田は一八八六年（明治十九）茨城県に生まれ、一九一四年（大正三）陸軍大学を卒業した。関東軍参謀、中支那方面軍参謀長、陸軍大学校長などを経て四〇年に参謀本部次長に就任していた。

翌四一年十一月、南方軍参謀長となり、四二年十二月、第十一軍司令官のとき、中国・南京から帰国の途中で搭乗していた飛行機が墜落して死亡した。死後、大将に昇進し

ている。

杉山は一八八〇年（明治十三）生まれ、福岡県出身。一九〇〇年（明治三十三年）陸軍士官学校を卒業し、日露戦争に従軍した。一九一〇年（明治四十三年）に陸軍大学校を卒業、一九一五年（大正四）駐インド大使館付武官。

二八年（昭和三年）陸軍軍務局長に進み、第十二師団長、航空本部長を経て三六年（昭和十一年）教育總監・大将に昇進した。林銑十郎内閣、第一次近衛内閣で陸相、一九四〇年に参謀総長に就任した。四三年元帥となり、四五年九月十二日、拳銃で自決した。

先回りだが、杉山の自決について話しておく、巷間に流布しているのは、

——戦犯として逮捕されるのを忌避した。

という説である。

おそらくこの説は正しいのだが、杉山が自決した理由は逮捕と裁判への恐れではなかった。陸軍大臣、参謀総長、元帥という経歴からいって、死刑が無期懲役は回避できない。

実をいうと、その前日、杉山は新しい憲法の草案を目にしていた。天皇制が護持できること、民主国家への転換が図られること、戦争の放棄が明文化されていることを確認したうえで覚悟だった。心情的にいえば潔いサムライ的

な、客観的にいえば身勝手な完結であったといつて差し支えない。

二

八月二十二日付の『機密戦争日誌』は、「対米英戦決意」の文字が現れる最初とされている。さらに近衛内閣が崩壊し東条内閣が発足した十月十八日、第二十班は手放しで喜んでいる。

いかなることあるといえども、新内閣は開戦内閣ならざるべからず。開戦、開戦、これ以外に陸軍の進むべき途なし。

ところが二か月後にトーンが一変した。

・十月二十三日付

陸相は絶対に目途なしとして、内閣を倒したるものなり。今更目途なき対米外交を続行し、決心をにぶらせるは国家の不為ならずや。陸相に節操ありやと問ひ度。

陸相に節操ありや、とは穏やかでない。

參謀本部職員が東条を「陸相」と呼んでいるのは、東条が内閣総理大臣でありながら陸軍大臣、内務大臣を兼務していたからである。また批判に転じたのは、東条が首相に就任したとき、内大臣・木戸幸一が「陛下のお言葉」として、——慎重なる考究を加えることを要す。

と耳打ちしたことによっていた。

東条はこの一言で、開戦一本やりから慎重論に転換した。十一月一日に開かれた連絡会議に先立って、東条は參謀総長・杉山元を首相官邸に招いて会談した。そのとき東条が示した案は三つあった。

- 一、戦争を極力避け臥薪嘗胆する。
- 二、開戦を直ちに決意し、政戦略の諸施策をこの方針に集中する。
- 三、戦争決意のもとに、作戦準備を完整すると共に、外交施策を続行して妥結に努める。

「政戦略」は見慣れない熟語だが、連合艦隊司令長官・山本五十六がいうところの「攻勢作戦」のことであろう。緒戦でアメリカ、イギリスを叩き、攻めに攻めて優勢なうちに講話を結ぶという作戦である。

これに対して杉山は言った。

「外交がうまく行けば準備した兵を下げることになる。これは困る。内地から二十万、支那からもやるべき作戦をやめて兵を送っておる。兵を南洋まで出して、戦争しないで退けたら、士氣に關す」

外交がうまく行けば戦争という事態を回避できるのだから、喜ぶべきであろう。ところが杉山は「困る」と言う。

御前會議で決定された要綱に従って、陸軍はすでに十個師団以上の兵員を南方に輸送しつつあった。武器弾薬や食糧なども、着々と準備を整えていた。いまだ引き揚げを命じることはできない。「士氣に關す」とは、何とも逆立ちした言い分であった。

杉山の一言で東条は第一案を放棄した。そもそも同腹だったのだから当然といえば当然だったが、ここで東条は開戦決意の責任を杉山に転嫁したともいえる。

この決定が出て以後の『機密戦争日誌』は、ひたすら日米交渉の決裂、戦争の勃発を望む内容に変わっている。その記述を見るに、戦略や計画といった頭脳回路を使う作業が一切欠落していて、あるのは好戦的な感情である。陸軍參謀本部に勤務する佐官たちは、政府の決定に面従腹背する増長傲慢ぶりであった。

・十一月十三日付

来栖大使の飛行機遅々たるは可。「ル」大統領、来栖大使を迎えるの態度に熱意なきが如きは、また可なり。

・十一月十七日付

昨は妥協、今日は決裂、一喜一憂しつつ時は経過す。一刻も速かに十二月一日の来たらんことを務る。

・十一月二十一日付

野村電到着。乙案提示せるところ、「ハル」は援蒋中止に関し、これは援英中止要求と同様なりとて、大いに不満の態たりしが如し。さもあるべし。これにて交渉はいよいよ決裂すべし。目出度めでたし。

・十一月二十三日付

対米交渉の峠もここ数日中なり。願わくば決裂に到らんことを祈る。

・十一月二十七日付

米の回答全く高圧的なり。交渉は勿論決裂なり。之にて帝国の開戦決意は踏み切り容易となれり。目出度く之天佑ともいふべし。

・十一月二十九日付

午前九時三十分より総理、重臣を宮中に召集し、開戦決意に関し説明諒解を求む。参集の重臣左の如し。

阿部、林、岡田、米内、若槻、広田、平沼、近衛、原。

更に御前に於て重臣と懇談す。非戦論少なからず。独り阿部、林、広田は首相の決意を諒とせるが如し。他の非戦論者に対しては総理、阿部、林、広田が説得之勉め、最後に於て全員同意し、政府を鞭撻する所あり。

国家興亡の歴史を見るに国を興すものは青年、国を亡ぼすものは老年なり。重臣連の事勿れ心理も已むなし。若槻、平沼連の老衰者に皇国永遠の生命を托する能わず。

陸軍参謀本部の中堅将校にかかつては、「元老」と称され「重臣」とされた人々も形無しであった。

三

第二次大戦の太平洋戦争は、日本軍が真珠湾を奇襲で攻撃したことがクローズアップされる。だがアメリカ海軍も日本との開戦を前提に、準備行動を開始していたことは意外と知られていない。

国防防衛計画「レインボー5号」の中の海軍基本戦略

「WPL 46」がそれである。

それによるとアメリカ軍は、太平洋に浮かぶミッドウェー、ウェーキ、ジョンストン、パルミラ、サモア、グアムの諸島を結ぶラインを第一の防衛線に想定していた。十月十六日に発令された作戦に従って、アメリカ海軍は次のように艦船の配備を強化した。

・ジョンストン島に第三機動部隊・重巡洋艦一、駆逐艦五

・ミッドウェー、ウェーキ・潜水艦各二。

・サモア・重巡洋艦一、機雷敷設船一

・第十二機動部隊（基幹空母「レキシントン」）海兵隊
戦闘機十八機を増強。

このような増強は日本を挑発するに等しかった。

ただしアメリカ政府および両軍司令部は十一月二十七日の時点でも、日本軍が戦端を開く正面はインドシナ半島からフィリピン、ボルネオにかけての南西太平洋地域と予測していた。この方面には、イギリスとオランダの両極東軍が控え、かつアメリカはフィリピンに八万人の兵力を有していた。

アメリカ、日本の双方ともに、

「もし相戦わば」

と想定していたのは、西南太平洋地域ないし、中南太平洋地域（小笠原諸島―マリアナ諸島を結ぶ海域）だったから、ミッドウェー、ウェーキへの守備隊派遣は予防的措施以外のなものでもなかった。

ハワイに本営を置いていたアメリカ太平洋艦隊が睨んでいたのはマリアナ、フィジー、サモア、サンゴ海、フィリピンの海域だった。

広大な海域を守るのにアメリカ太平洋艦隊は航空母艦四隻、旧式で訓練用の「ユタ」を含む戦艦五隻しか保有していなかった。相手の出方を覗うより他にどんな手があるのか。

一方、日本帝国海軍はロシア艦隊を打ち破った東郷平八郎の兵略が、脳裏に強くこびついていた。長駆やってくる敵の大艦隊を真正面で待ち受け、敵艦隊より射程距離が長く破壊力が大きな大艦巨砲で決戦を挑む、という考え方である。

このため対米開戦を準備するに当たって海軍参謀本部が描いたのは、小笠原諸島からマリアナ諸島にかけての海域での艦隊決戦だった。

ところが山本五十六が指示したのは、日米の共通認識から大きく外れたハワイ強襲作戦だった。その研究は一九四

一年の一月、山本から直接、第十一航空艦隊参謀長（少将）の大西瀧治郎に伝えられたとされている。大西は四月に案をまとめ、山本に直接手交した。艦隊幕僚に正式な研究課題として示されたのは五月である。

当初、幕僚たちは山本の考えに反対、もしくは懐疑を示した。

理由は四つあった。

第一の理由は、相手を英・蘭に限定すべきである、というものだった。アメリカを巻き込むのは絶対的な不利を生じさせるであろう。大局的な視点で見たとき、この主張は正しかったともいえるし、遅かれ早かれアメリカが参戦してくることを考えれば消極的に過ぎた。

第二は、日本ないし周辺のどこから出航するにせよ、敵に気づかれずにハワイまで三千哩（カイリ）の航行を成し得るかどうか。

第三は、仮にハワイ近海にたどり着けたとして、そこに敵艦隊が待ち受けていたら、勝算はどうか。

第四は兵を訓練する時間だった。

これに対して山本は言った。

——戦争というものは、勝っても負けても神様が喜ぶことではない。これは博打である。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

『日本歴史シリーズ・太平洋戦争』 一九七八、世界文化社。収録論説の著者は大宅壮一、青地晨、児島襄、江崎誠致、高木俊朗、巖谷大四、島田俊彦、杉森久英、加藤秀俊、小松伸六、河北倫明である。

『太平洋戦争』上・下 児島襄、一九六五、中央公論新社。中公新書。

『零式戦闘機』『零戦燃ゆ』 柳田邦男、一九七七、文藝春秋。『零戦燃ゆ』(飛翔編、熟闘編、渾身編)はその続編として位置づけられるが、より広範に太平洋戦争を追っている。

『戦後史の謎を追う』上・下 秦郁彦、一九九三、文藝春秋。

秦 郁彦 はた・いくひこ／1932…山口県に生まれ五六年東大法学部を出てハーバード大学、コロンビア大学に留学した。防衛研研究所教官、防衛大学校講師、大蔵省財政史室長、プリンストン大学客員教授、千葉大学教授。

『機密戦争日誌』 一九四〇年六月一日から一九四五年八月一日まで、大日本帝国陸軍大本営陸軍部第二十班(戦争指導班)の業務日誌。日誌担当者として種村佐孝、原四郎、野尻徳雄、田中敬二、甲谷悦雄、橋本正勝の六人の名前が挙がっている。

一九四五年八月十四日、庶務を担当していた中根吾一という少尉が上官の山田成利という大佐の許可を得て搬出し、ドラム缶に入れ自宅の敷地に埋設した。それを元第二十班員の原四郎が継承した。

種村佐孝 たねむら・さこう／1904～1966。名の読みは

「すけたか」とも。ポツダム宣言にかかわってはソ連と同盟して対米戦争を継続する工作に従事した。最終階級は大佐。

原 四郎 はら・しろう／1911～1991。終戦時は陸軍中佐だった。戦後、航空幕僚監部調査課長、戦史編纂官を経て伊藤忠電子計算サービス取締役となった。読売新聞社長副社長・原四郎(1908～1889)とは同名異人。

野尻徳雄 のじり・のりお／生没年未詳。戦後、陸上自衛隊幕僚監部第四部長、第十師団長となった。

田中敬二 陸軍大学校輜重兵科卒。終戦時は参謀本部作戦課・陸軍大佐だった。

甲谷悦雄 こうたに・えつお／国立公文書館「アジア歴史資料センター」の記録には、ドイツ大使館付武官補佐官、関東軍参謀、参謀本部ロシア班長、参謀本部露西亜班長、大本営一部十五課長、独逸大使館付武官補佐官とある。「旧帝国陸軍切つての国際共產主義運動の分析官」とされる。

橋本正勝 はしもと・まさかつ／国立公文書館「アジア歴史資料センター」の記録には、関東軍補給参謀、軍務局課員、大本営参謀、第二総軍参謀とある。終戦時、陸軍中佐。

『機密戦争日誌』序文 誤解を避けるために改めて書くと、この序文は『大本営陸軍部戦争指導班 機密戦争日誌』全三卷(防衛研究所図書館所蔵、軍事史学会編、一九九八、錦正社)が出版された際、伊藤隆氏(軍事史学会会長・政策研究大学院大学教授)が「刊行にあたって」と題して付記したものである。

レインボー５ 第二次世界大戦前、アメリカ合衆国が有事を想定して策定していた基本計画。レインボー１はナチス・ドイツ軍が南米に上陸した場合、同２はアメリカがイギリス、フランスと連

合して大西洋でナチス・ドイツと、太平洋で大日本帝国と戦う場合、同3はアメリカが単独で大日本帝国と戦う場合、同4は1、2、3のバリエーション、同5は大西洋・欧州大陸での戦い（対ナチス・ドイツ戦）を優先する場合を想定していた。ナチス・ドイツとイギリスが同盟を結んだ場合、ソ連を仮想敵とする軍事プランもあったといわれる。

## 061 鹵獲品

第六十一

鹵獲品

一

確認の意味で一九四一年十二月から四二年四月末までの出来事を書き出す。参照したのは岩波書店『日本史年表』（歴史学研究会編、一九九三）である。

一九四一年

- 12・6 ナチス・ドイツ軍、モスクワ攻略に失敗
- 8 日本軍、マレー半島に上陸。  
ハワイ真珠湾を空爆  
新聞、ラジオの天気予報・気象報道中止  
日本、対米英宣戦布告／英米、対日宣戦布告
- 9 中国国民政府、日独伊に宣戦布告  
大韓民国臨時政府、対日宣戦布告
- 10 マレー沖海戦（イギリス極東艦隊壊滅）  
グアム島を占領
- 11 独・伊、対米宣戦布告

一九四二年

- 15 第78回臨時議會召集。
- 16 戦艦「大和」竣工。
- 19 電球の切れ球との引き換え販売開始。
- 21 言論出版集会結社等臨時取締法公布  
タイと軍事同盟条約締結（日泰共同作戦二関スル協定）
- 25 日本軍、香港占領
- 29 南方熊楠没（享年七十四）
- 1・1 食塩の通帳配給制実施。  
連合国26か国が共同宣言
- 2 日本軍、マニラを占領
- 8 大東亜戦争国債発行
- 9 学徒勤労動員開始
- 25 タイ政府が対米宣戦布告
- 2・1 衣料、味噌・醬油販売に切符制実施  
大日本婦人会発足
- 2 イギリス軍、エジプトでクーデター
- 4 蒋介石、インドを訪問
- 5 英米が合同参謀本部を発足
- 6 シンガポールが陥落（英軍マラヤ司令部司令官
- 15 パーシバル中将が日本軍に降伏）

18 第一次戦捷祝賀で特赦

インド国民会議、反英決議

3・1 日本軍、ジャワ島に上陸

7 大本営政府連絡会議「戦争指導大綱」策定

8 日本軍、ラングーンを占領

9 日本軍、ジャワ島を制圧（オランダ軍降伏）

11 アメリカ極東軍司令官マッカーサーマッカーサー  
ー将軍がフィリピンを脱出

13 中国軍、ビルマ戦線に参戦

29 フィリピン抗日人民軍結成

4・5 日本軍、コロンボを空襲

11 日本軍、バターン半島を制圧

日本が米英宣戦布告に踏み切ったとき、ヨーロッパ戦線は大きな転換期を迎えていた。ナチス・ドイツのロシア攻略が失敗に帰したのだ。

いわゆる「バルバロッサ」作戦がそれで、ナチス・ドイツは百三十五個師団三百八十万人の兵を投入した。これこそが、史上最大の作戦だった。モスクワ陥落を企図したのではなく、東欧エリアからスラブ系民族を追放して、ドイツの植民地化するのがねらいだった。

作戦が発動されたとき、ナチス陸軍首脳は

——二か月もあれば片がつく。

と考えていた。

ところが車両が足りなかった。

燃料もなかった。

例えばレニングラード攻略を目指した北方面軍は、レニングラードまで五百マイルの地に設置した本営を六月二十二日午前三時を期して進撃を開始したものの、二十四日に燃料不足のため機甲部隊が停止してしまった。

このときは空路で燃料を補給したが、二十六日にいたって再び燃料切れのため全軍が足止めとなった。

このようなことでは埒が明かない。

そこで、前線に補給基地を建設しよう、ということになった。

進撃が再開されたのは七月四日だったが、一週間後にまた燃料が切れてしまった。この間にソ連軍は応戦準備を整えることができた。

電撃作戦というと威勢がいいが、実態はこのようなものだった。そもそも「電撃」とか「奇襲」というのは、持たざるものの作戦であって、スポーツと同様、長期戦に持ち込まれると実力の差がはつきりする。

ナチス・ドイツ敗退のニュースを大本営はどうとらえたか。



——我らには大和魂がある。  
ぐらゐに考えていた可能性なしとしない。

二

戦争につきまとうのは戦死、戦傷だけではない。捕虜と  
鹵獲品が必ず出る。戦いに勝った側にとって、捕虜は有用  
な情報源であり労働力であると同時に、食糧や医療の点で  
は負担になる。

ただ、純粹に軍事的な観点では、日本軍によるマレー攻  
略作戦、インドシナ侵攻作戦は「絵に描いたような」と形  
容するに十分な成功だった。またフィリピン攻略作戦は、  
上陸からマニラ侵攻までは順調そのものだった。緒戦の南  
方作戦は、全体として予想をはるかに上回る戦果をあげた  
といっている。

例えばマレー攻略作戦で日本軍が受けた損害は、戦死三  
千五百七人、戦傷六千五百五十人の計九千六百五十七人だっ  
た。またインドシナ侵攻作戦での戦死は八百四十人、戦傷  
は一千七百八十四人の計二千六百二十四人である。

これに対して日本軍に降伏したのは、インド軍の六万人  
を筆頭に、イギリス軍三万八千人、オーストラリア軍一万  
八千人、マレー義勇軍一万四千人の約十三万人だった。攻

め入った日本軍の総兵力が四万人弱だったのだから、日本  
軍は作戦終結とともにその三倍以上の食糧や居住地を手配  
しなければならなくなった。

インドシナ侵攻作戦で連合国軍は兵力をほとんど損傷せ  
ず、日本軍に降伏した。ここでも捕虜は七万人を上回った。  
フィリピンでは、バターン半島および、コレヒドール要  
塞に立てこもっている連合国軍はせいぜい三万人というのが  
日本軍の予想だった。ところが白旗をあげて出てきたのは、  
アメリカ軍一万二千人、フィリピン軍六万四千人の計  
七万六千人、さらに市民が二万六千人もいた。そのうち三  
分の一がマラリアに罹り、全員が飢えていた。日本軍にと  
って不幸な誤算が、バターン死の行軍を生み出した。

物的な戦果（鹵獲品）はどうだったか。

マレー侵攻作戦で日本軍は大量の兵器・武器を押収した。  
火砲約七百四十門、重軽火器二千五百挺以上、小銃類約六  
万挺、自動車約一万台、機関車・貨車約一千輛、戦車・装  
甲車約二百輛、航空機十機などである。

インドシナ侵攻作戦では、パレンバン製油所を接收した  
ほか、ジャワ島のスラバヤにあったオランダの工廠を接收  
し、これを陸軍から海軍が譲り受けて艦船の補修基地に活  
用した。このちスラバヤ工廠に松尾三郎（のち日本電子  
開発、北海道情報大学を創業）が海軍大尉として赴任し、

レーダーの必要性を痛感することになる。

フィリピン制圧作戦で、日本軍はコレヒドール要塞から三千トンの食糧品を発見した。ハム、ベーコン、缶詰、タバコなどが、アメリカ軍が使っていたトラックで運び出された。

このとき、陸軍は要塞の中に不思議な機械装置を発見した。すでに触れているように、ホレリス式パンチカード統計会計機械装置「IBM405」一式なのだが、兵士たちは首を傾げるだけだった。ただ、何かしら特殊な機械であるらしいことが分かった。

参謀本部に問い合せると、「ただちに本国に輸送せよ」という回答が返ってきた。しかし、

——貴重な機械なので慎重に扱え。

と付け加えなかった。

その不思議な機械は、駆逐艦の甲板に据え付けられ、その年の夏、東京・目黒の海軍研究所に運び込まれた。連日、陽に焼かれ汐に晒されたために、全体が赤サビで覆われていた。研究所員たちはその赤サビを落とす作業から始めなければならなかった。

パンチカード式計算機であることは分かったが、アメリカ軍が何のために使っていたのかは分からなかった。まさか給与計算や受発注管理のために、ではあるまい。コレヒ

ドール要塞に設置されていたからには、軍事的な意味があるはずだった。

陸軍の兵器行政技術部長だった中将・小池国英が電気試験所の部長・山内二郎に

——戦場で数学を使うとしたら何だ？

と問いかけたが、答えは出なかった。

砲弾の発射角を計算するために、第日本帝国の海軍は軍艦の砲塔で電動のヘンミ計算尺を使っていた。しかしパンチカード式計算機は持ち運ぶには大きすぎ、重すぎる。

実はアメリカ軍はIBM405を兵站の管理ばかりでなく、暗号の解析に使っていたのだが、日本にはその発想そのものがなかった。

軍中樞が暗号に数学理論が欠かせないことに気がつくのは四二年末、組織的な取り組みが始まるのは四三年の七月、参謀本部に発足した特殊情報部である。ホレリス型パンチカード式会計分類機械装置のコピーを作った話は後述する。

### 三

鹵獲品を押収したのは日本軍だけではない。連合国軍も日本軍から様々なものを押収した。ただし連合国軍が手に入れたのは、ガラクタの類だった。とりわけアメリカ軍が

ガラクタの収集に熱心だった。

ハワイとマリアナ諸島を結ぶ線上のほぼ中間点に、「ウェーキ」（または「ウエーク」と呼ばれる島が浮かんでいる。珊瑚礁でできた小さな三つの島——ウィルクス、ウェーキ、ビール——が、「V」字型に並び、最大のウェーキ島ですら、長さ七キロ、幅は最も広いところで約二キロしかない。

ここにアメリカ海軍はウインフィールド・カンガム中佐を指揮官とする守備隊五百二十三人を配置していた。このほかに島民を主体とする設営隊が千三百余。「V」字の三つの頂点にそれぞれ砲台があり、開戦の直前にウェーキ島飛行場に十二機の戦闘機「F4Fワイルドキャット」が配備されていた。

日本軍が真珠湾を攻撃した、という報せが入ったとき、飛行隊長のブットナム少佐は

——ここにも日本軍がくる。

と考え、上空警戒のため四機を発進させた。

四機は高度三千四百メートルに待機していた。ところがマーシャル群島クエゼリン環礁の基地から飛んできた日本軍の零戦と九六式陸上攻撃機計三十四機は、高度六百メートルという低空で侵入した。そのために哨戒機はまったく気がつかなかった。

日本軍機はウェーキ島の地上施設——無線司令室、燃料タンク、機材倉庫、滑走路——などに爆弾を落とし、滑走路に駐機してあった八機のワイルドキャットに機銃掃射を浴びせた。それによって八機のうち七機が大破・炎上し、残る一機も穴だらけになった。

上空を哨戒していた四機は急を知らせる無線を受けて急降下したが、舞い降りたときには日本軍機ははるか遠くに去っていた。燃料タンクから黒煙がもうもうと上がり、滑走路は穴だらけになっていた。着陸したとき、四機のうち一機が横転し、エンジンが壊れてしまった。十二機だった戦闘機は、たった数分で四機になった。

ここからウェーキ島航空基地の「奇跡」が始まる。部隊に手先が器用なジョン・キニーという大尉がいて、彼は徹夜の作業で二機を飛べるように修理したのだ。

ウェーキ島航空隊の戦闘機は四機から六機になった。

翌日も日本の九六式陸上攻撃機が二十七機の編隊でやってきて、空襲を行った。

三日目には九六式陸上攻撃機が二十六機やってきた。

アメリカ側の記録によると、ウェーキ島航空隊は、二日目に日本の爆撃機を一機、三日目に二機を撃墜したことになる。

十二月十一日未明、日本海軍の軽巡洋艦三、駆逐艦六、

哨戒艇一、潜水艦六、輸送船二から成る第一次ウェーキ島攻略隊が上陸作戦を開始した。このとき、沈黙を守っていた島の砲台が火を吹いた。

十分に牽き付けた上での射撃だったので、撃ち出す砲弾のすべてが日本の艦船に当たった。直近弾を受けて駆逐艦「疾風」が轟沈、駆逐艦「追風」「弥生」に被害を与えた。さらにワイルドキャット四機が襲いかかった。支援部隊の軽巡洋艦「天龍」「龍田」小破、駆逐艦「如月」轟沈。

#### 四

日本軍は上陸をあきらめて撤退していったが、ウェーキ島守備隊も甚大な損失に直面していた。

六機のワイルドキャットのうち一機が砂浜に不時着陸して炎上、もう一機もエンジンがばらばらになってしまった。その四時間後、今度は九六式陸上攻撃機十七機が襲来し、守備隊の戦闘機三機（日本側記録では二機）が撃墜され、十四日の空襲でさらに一機を失った。ウェーキ島航空隊はこれで壊滅したことになる。

だがキニー大尉はあきらめなかった。破壊されたワイルドキャットの部品をかき集め、徹夜の作業で飛行可能な機体を二機、再生したのである。ウェーキ島の航空隊がよみ

がえった。日本軍はそのことを知らなかった。

十二月二十二日、機動部隊からウェーキ島攻略の支援に回った空母「蒼龍」「飛龍」から発進した九七式艦上攻撃機三十三、零戦六の編隊が攻撃した。その際、日本軍はワイルドキャットの反撃を受けて大いに驚いた。日本軍は航空機二機を失い、その代償としてワイルドキャットの残機をすべて撃墜した。

日本軍にとって、ウェーキ島のアメリカ海軍守備隊は「こしやくなヤツ」であった。

たった四機の戦闘機のために、駆逐艦二隻を失い、九六式陸上攻撃機を何機も撃墜され、攻撃を始めてから一週間たっても占領できずにいる。

業を煮やした帝国海軍軍令部は、次の作戦行動の準備にあった機動部隊の一部を割いてウェーキ島攻略の「支援」に当たらせることにした。「支援」というのは機動部隊の面子を立てた表現であって、実態は主力の入れ替えである。

その陣容は、空母「蒼龍」「飛龍」の二隻を中軸に、重巡洋艦「利根」「筑摩」「青葉」「衣笠」「加古」「古鷹」の六隻、駆逐艦「夕風」「朝風」の二隻、輸送船「聖川丸」「天洋丸」の二隻、計十隻の大艦隊である。

ウェーキ島は、長さ七キロ、最大幅約二キロの珊瑚礁の島に過ぎない。しかも守備隊の兵力は四百人を切るまでに

減少していた。

「たかが」であった。

十二月二十三日は皇太子の誕生日だった。

日本軍は同日午前零時から上陸作戦を開始し、三時間後に陸戦兵を乗せた二隻の哨戒艇が砂浜に乗り上げた。とたんに前面の陣地から砲撃があり、哨戒艇が炎上した。その炎の中に千を上回る日本兵が見えた。

守備隊は絶望的な状況のなかでよく戦った。真つ暗な中でマングローブや灌木に潜み、手榴弾と機銃で日本軍陸戦隊の進軍をはばみ、最後は銃剣とナイフで白兵戦を展開した。だが多勢に無勢だった。

民間人七十人を含む百二十人の戦死者、四十九人の戦傷者を出し、ついに降伏した。死亡した民間人七十人の大半は、攻撃二日目に爆撃された病院の入院患者だった。対して日本軍は戦死四百四十、戦傷百五十九。

アメリカ軍は日本軍のガラクタを集めるのが、このほか好きだった、ということを書いた。

その最初のガラクタ集めが、このウェーキ島攻防戦の中で起こっていた。

海岸からほど近くに轟沈した駆逐艦「疾風」の中から、アメリカ海軍は文書の束を回収した。海水に浸っていたために、紙がゴワゴワになっていたが、文字は鮮明に読むこ

とができた。島の守備隊が日本軍に降伏する直前の十二月二十日、飛行艇が着水し、紙くずのようになった文書の束を運び去った。

それは日本海軍の暗号書だった。

このことが戦局を微妙に、そして最後に大きく動かしていく。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

大韓民国臨時政府 大韓帝国が日本領に編入された一九〇九年、中国の上海にあった抗日組織を母体に樹立され、二九年の光州学生事件など反日闘争を指導した。李承晩が大統領に推戴され憲政体制のもとで立法機関である臨時議政院、司法機関である法院、行政機関である國務院で構成する民主共和制政府として機能した。

戦艦「大和」 一九四一年十二月に竣工し、四二年二月就役して連合艦隊旗艦となった。ミッドウェー海戦に参加したが決戦に間に合わず、その後一年以上をトラック島に停泊しているだけという時代遅れの巨大戦艦だった。主砲の四十六センチ砲が発射した砲弾は三百十一発だったと記録されている。

シンガポール陥落 直接原因は水源を日本軍に握られたことにあった。パシバルは飲み水に毒が投じられることを恐れたのである。

パシバル Arthur Ernest Percival / 1880.7.~1962. イギリス下層階級の生まれで陸軍の一兵卒から出世し、ナチス・ドイツとの戦いではダンケルクに追い詰められた英仏連合軍二十二万人の救出作戦を指揮し、ドイツ空軍機の激しい爆撃のなかで十八万人強を救出することに成功した。のち極東軍司令官に任じられたが、本国から増援のない状況でよく戦った。シンガポール陥落に伴う山下奉文への無条件降伏は「イエスカノーカ」の問答で有名だが、日本軍の捕虜となつてのちもイギリス、オランダ軍捕虜をよく統率した。またミズーリ号甲板上で行われた日本の降伏文書署名にイギリス軍代表として出席している。

マッカーサーとフィリピン マッカーサーの父親であるアーサー・マッカーサーが陸軍中将だったとき フィリピン軍政官として赴任していた。息子ダグラスにとっては第二の故郷というべき土地だった。のち四三年一月、アメリカ海軍省作戰部長キングが提案した中部太平洋からの日本軍攻略方針に対し、「フィリピン開放の時宜は逸した」として独自の戦略を開陳した。結果としてマッカーサーの戦略が採用された。

バターン死の行軍

コレヒドール攻略戦に参加していた第四百四十一連隊隊長の今井武夫(当時大佐)は、戦後、アメリカ軍から事情聴取を受けたとき、「他の方面での出来事だと考えた。まさか自分が目撃した捕虜の行軍のこととは夢想だにしなかった」と語っている。

マレー侵攻作戦 一九四一年十二月~一九四二年二月:対英戦争。

インドシナ侵攻作戦 一九四二年二月~対仏・蘭戦争。

フィリピン制圧作戦 一九四一年十二月~一九四二年五月:対米戦争。

バルバロッサ作戦 Unternehmen Barbarossa: 一九四一年六月二十

二日に開始され十二月五日に終了した。ナチス・ドイツは枢軸国軍三百八十八万人超、車両六十万台、馬匹六十万頭超を投入した。ラトビア、リトニア、ペラルーシ、ウクライナ、モルドバといった東欧圏からスラブ系住民を追い出してドイツの植民地にするヒトラーの構想(夢想)に基づいた史上最大の侵攻作戦だった。四一年十月二日から四二年一月七日にかけて行われたモスクワの戦いでドイツ軍が劣勢に陥ったことが、第二次大戦の趨勢を転換させた。

陸軍兵器行政本部 一九四二年から四五年まで陸軍省の外局とし

て設置された。陸軍の兵器・弾薬などについて、製造・補給、研究開発・試験、教育を一元的に統括した。

小池国英 こいけ・くにひで／1892～1959。

山内二郎 やまうち・じろう／1898～1984。のち情報処理学会会長となった。

ウエーキ島 「ウエーク」とも。第二次大戦後、同島の飛行場は拡張整備され太平洋航空路の中継点として重きを成した。

ウィンフィールド・カニングガム Winfield S. Cunningham／1900～1986。ウエーキ島の戦いで日本軍の捕虜となり、横浜を経て上海の収容所に送られた。第二次大戦後、海軍に復帰し、一九五〇年七月、少将として退役した。

カニングガム守備隊 一九四一年十二月三日、真珠湾から空母エンタープライズでウエーキ島に配備された。制式名称は海兵隊第211戦闘飛行隊である。

F4Fワイルドキャット 一九三六年三月にアメリカ海軍が発注したF3F複葉式戦闘機の後継機としてグラマン社が開発した「F4F-1」複葉機をベースに、単葉・全金属製に改良した。

ブリュースター社の「F2A」(バッファロー)と並んで太平洋戦争における連合国軍の主力戦闘機となった。イギリスでは「マーレット」と呼ばれた。

最大速度は五百三十一キロ／時、最大航続距離は二千七百二十キロで、十二・七ミリ機銃四基、九十キロ爆弾二個を装備した。

航空母艦に収納するため翼を折りたためるようにした4型が一九四一年から自動車メーカーのラインで増産され、第二次大戦全期を通じて計七千八百機が生産されている。日本の零戦に比べて上昇・旋回性能が劣ったものの急降下性能や防弾設備、武装、高空

性能等で勝っていた。またエンジンの馬力が零戦より強かったため、零戦に比べ墜落や失速が少なかった。このため搭乗員の生存率が高かったといわれる。

守備隊の健闘 ウエーキ島守備隊の健闘はルソン島コレヒドール要塞の戦いと並んでアメリカ合衆国本土で大いに宣伝され、太平洋戦争に挑むアメリカ国民の気持ちを奮い立たせた。

062 その名はジーク

第六十二

その名はジーク

一

日本の大本営は、アメリカ連合艦隊の殲滅と、マレーの迅速な攻略に重きを置いていた。

開戦初期にアメリカとイギリスに決定的な打撃を与えることは、太平洋の戦局を有利に運ぶ以上の意味があった。それによって、ヨーロッパ戦線におけるナチス・ドイツ軍の優勢を確定させ、短期間に有利な条件で太平洋戦線を終結できると見ていたためだった。そこでマレー攻略作戦では、飛行場の占領・確保と、敵航空兵力の壊滅に全力をあげた。

イギリス領マレーの連合軍兵力は、英国陸軍のパーシバル中将を総司令官に、将兵八万八千人、航空機二百五十四機だった。具体的にいうと、イギリス正規軍が一万九千六百人、オーストラリア第八師団が一万五千二百人、インド第三軍が三万七千人、マレー義勇軍が一万六千八百人だった。大日本帝国陸軍参謀本部は航空兵力を二割ほど多く、

陸戦兵力を二割ほど少なく見積もっていたことになる。

配備されていたイギリス軍の航空機は、戦闘機が百十二、爆撃機が八十六、軽爆撃機が十五、電撃機が三十六、飛行艇が五だった。だが、戦闘機百十二機のうち五十二機、爆撃機八十六機のうち十五機は整備中で実戦に使用できない状態にあった。

極東軍総司令官のポーハム大將は対日開戦に備えて、歩兵二個旅団、爆撃機四戦隊、戦闘機二戦隊の増派を本国に求めたが、ロンドンではそれどころではなかった。ナチス・ドイツによる空襲を受けていたためだった。それでも極東軍には実動可能な航空機が百二十機以上配備されていたのだから、日本軍に痛打を与えることはできたはずだった。

ところが十二月八日、午前零時過ぎにインド軍第八旅団ドラグス大隊が太平洋戦争「最初の一発」を撃ってから数時間のうちに実動可能機数は五十機に減少し、翌九日には十機になってしまった。ほとんどが地上駐機中に日本軍機の掃射や投弾を受け、大破・炎上した。

このときイギリス極東艦隊司令長官（中将）トーマス・フィリップスは、

——艦隊を港湾にとどめておくのは危険である。
と考えた。

彼が警戒したのは潜水艦による魚雷攻撃だった。艦隊主

力をシンガポール近辺にとどまらせておくのは、日本軍に好餌を与える以外の何ものでもない。

味方偵察機からの情報では、日本軍が動員している艦船は戦艦一、重巡洋艦二、軽巡洋艦二、駆逐艦二十だった。

対してフィリップス中将が率いる極東艦隊は航空母艦こそ欠けていたものの、超弩級旗艦「プリンス・オブ・ウェールズ」、巡洋戦艦「レパルス」以下、巡洋艦三、駆逐艦四、砲艦三を保有していた。

数においてほぼ互角である。

そこで彼は、艦隊決戦を決意した。

十二月八日午後五時半過ぎ、イギリス極東艦隊「Z部隊」はシンガポール港を出撃した。

十日午前零時五十二分、シンガポールの司令部から

「日本軍がクアンタンに上陸中」

という報せが入った。

このため、艦隊は針路をクアンタン沖に変更した。上陸作戦を遂行中の日本軍に、沖合から艦砲射撃を加えようというのである。

サイゴンの日本軍航空基地からは四百マイル（六百七十キロ）も離れている。

——であれば、日本の航空機の攻撃を懸念することはない。

とフィリップス中将は考えた。

ところが日本の航空機は、例えば零戦は最長で八百八十五マイル（千四百八十キロ）、隼は九百八十マイル（千六百四十キロ）を給油なしで飛行することができた。サイゴンからの四百マイルは、日本軍航空機にとってはぎりぎりだが射程圏内だった。

フィリップスは開戦初日と二日目に、イギリス極東軍の航空機を大破・炎上させた日本軍機が、どこから飛んできたのかを考えるべきだった。

アメリカから供与された戦闘機「バッファロー」について、ブルック・ポーム大將が

「イギリス本土の防衛用としてはスピードが遅い。しかしマレーでは十分に間に合う」

と評価した背景には、有色人種に対するヨーロッパ人（ないし白人種）の過大な自信があった。

実際には、一九四一年九月十九日、フリーマンという駐華アメリカ大使館陸軍武官補（大尉）が、日本の新型航空機に関する情報を本国および、連合国に発信していたのだが、彼らは頭から信用しなかった。

いわゆる「フリーマン・レポート」がそれで、黄河上流の甘肅省蘭州上空で中国軍の対空砲火で撃墜された日本軍の軍用機についてだった。

レポートは

「日本機はすべて、蘭州から約四百五十マイル離れた山西省运城基地からやってきた」

と記し、さらに「タイプ・ゼロ」として

- ・単座追撃機、低翼単葉、全金属製。
- ・推定時速二百六十マイルで六時間の飛行をする。
- ・武装は、すべて固定式。
- ・機首にプロペラの回転と同調させた七・七ミリ機銃二丁。
- ・一丁当たり、通常弾、曳光焼夷弾、炸裂弾を約五百発装填。
- ・両翼に二十二・二ミリ機銃が二丁、それぞれに七十五発の銃弾を装填。

など、詳細なデータを収集していた。

細かな点で誤りがあつたにしても、レポートは日本が驚異的な性能を備えた軍用航空機を実戦配備したことを告げていた。だがイギリス極東軍の首脳部は「日本がそんなに優れた飛行機を作れるわけがない」と決めてかかつていた。イギリス極東軍はそのツケを払わなければならないとなつた。

ナチス・ドイツの超弩級戦艦「ビスマルク」を航行不能にいたらしめたのが本国の航空機部隊だったことを、パリシバルやフィリップスは思い出すべきだった。

二

太平洋戦争の緒戦でアメリカ軍が得た教訓は、
——日本軍はバカにできない。

ということだった。大航海時代からこのかた、西洋ないしキリスト教白人世界が有色人世界との戦いにおいて、存亡の危機を実感する戦いを挑まれた経験はない。

ことに航空機の性能には目を見張るものがあつた。イギリス極東艦隊が潰え、アメリカ太平洋艦隊が真珠湾に沈んでしまったため、連合国軍は制海権を失った。

そのいずれもが艦隊決戦によるものではなかった。例えば日清戦争でも日露戦争でも、あるいは第一次大戦における大西洋上でも、主力戦艦が真正面から砲撃を交わし、その結果が戦争の勝敗優劣に結びついた。

ところが今回の戦争は、航空機が艦隊を沈めていた。それはヨーロッパ戦線でも同様だった。

ナチス・ドイツ軍が優勢にあるのは、メッサーシュミット社やフォッカーウルフ社の戦闘機が制空権を守っている

ためだった。すなわち、可及的速やかに建造しなければならないのは航空母艦だった。一九四一年から四三年にかけて、アメリカが新たに建造した艦船を見ると、この考え方が現実反映されていたことがよく分かる。

また、アメリカ軍が着手したのは、航空機の増産だった。零戦に撃ち落されても、搭乗員さえ救出できれば新しい航空機で戦線に復帰できる。

一九四一年の七月から十二月にかけて生産された航空機は一万三百五十機だったが、一年後には倍以上の二万三千三十二機を生産している。自動車メーカーのラインが戦闘機生産のためにフル稼働した結果だった。

大量の爆弾を敵の頭上に落とし、大量の兵士や兵器を輸送できる大型機の増産と開発が本格化した。また新型戦闘機の開発が火急の課題となった。日本の「タイプ・ゼロ」に対して、従来の主力戦闘機「ワイルドキャット」は操縦性能、航行速度、旋回能力において、「P-51」は破壊力と航続距離において敵わなかった。

とはいえ、当面は「タイプ・ゼロ」と戦わなければならない。

まず戦闘機の改良が始まった。

コクピットの外壁と搭乗員の座席背後に分厚い鉄鋼の板が張られ、燃料タンクの内側に三重のゴム皮膜が施された。

分厚い鋼板が零戦の機銃を撥ね返し、ゴムの皮膜を施すことによって燃料タンクが被弾しても火が発生しなくなる。さらに翼に装備した機銃を大口径のものに変更した。

これらの措置によって長身で大柄な搭乗員は窮屈な思いをし、機体の重量がかさんで航続距離が短縮され、旋回性能が落ちた。だが搭乗員の生命を護ることができる。

次いで、新しい戦法が編み出された。

一つは「単機で闘うな」だった。

アメリカ軍は、ゼロ一機にワイルドキャット二機で当たるようになった。戦法を編み出した少佐の名から「サッチ・ウィーブ」と名づけられ、アメリカ航空機戦力の壊滅を防いだ。

背後に付かれたら急降下で逃げろ、ということも徹底的に教え込まれた。

その一方、アメリカ南西太平洋方面軍は一九四二年一月、オーストラリアのメルボルンに「航空技術情報部隊」(T AIU)を設置するとともに、ダグラス・マッカーサー大将の名で太平洋に展開する全軍に次のような指令を発した。

「墜落した敵機の捕獲機体または残骸または搭乗員を、航空技術情報部隊が可能な限り速やかに完全な管理下に置く権限を持つことを承認する」

墜落した日本軍航空機の残骸から調査するのである。そ

のためにアメリカ軍は、日本軍航空機を運び出すマニュアルを作って諸部隊に配布し、ばかりでなく専用の小型空母まで建造した。

ここに、フランク・マッコイという陸軍大尉が存在した。この人物が「タイプ・ゼロ」の全貌を解明していくことになる。

三

日本軍の零式戦闘機（零戦）に関する記録は、数多く残されている。

両翼幅約十二メートル、全長約九メートル、全重量約二千五百キログラム、二〇〇〇ccのエンジンで最高速度五百四十キロ／時、航続飛行距離一千五百キロという性能は、太平洋戦線の緒戦時、おそらく世界で最高レベルにあったといっている。戦記は零戦がいかに優れていたかを語り、設計と開発の辛苦が伝えられる。

実際、制式採用された最初、中国大陸で行われた空中戦で、零戦は三十機で敵戦闘機三十七機を撃墜、被弾ゼロという華々しいデビューを飾った。赤松貞明、武藤金義、岩本徹三、杉田庄一、西澤廣義、坂井三郎、笹井醇一、太田敏夫、水谷竹雄、本田敏秋といった多くの撃墜王が誕生し

た。

零戦乗りでいちばんの暴れん坊として知られた赤松は、戦後、酒に酔うと

——オレは三百五十機以上を撃ち落とした。

と自慢した。その中には地上に駐機してあった敵機も含まれているらしい。ただ一九四五年五月二十五日に、千葉県上空に侵入したアメリカ軍「P-51」（ムスタング）七十五機の編隊に単機で突入したのは、紛れもない事実である。その戦いで一機を撃墜し、自身は無傷で厚木基地に帰ってきた。

岩本徹三は、二百二機を落とした、と主張している。ラバウル航空隊のエースであって、

——機体の色が違って見えた。

という逸話がある。桜色の撃墜マークが機体を覆うまでに描きこまれたためだった。

当人の主張と日米双方の正式な記録がほぼ一致するのは坂井三郎である。彼が撃墜した連合軍航空機は六十四機とされている。

一九四二年の五月、ポートモレスビー攻撃に出撃した彼は、部下の西澤廣義、太田敏夫とともに零戦三機で編隊を組み、敵基地上空で宙返りをやってのけた。数日後、ポートモレスビーの連合国軍陣営から、

「先日の宙返りは素晴らしかった、今度来るときは緑色のマフラーをつけてこられたし」

という手紙が届いた。

——撃ち落して進ぜよう。

というのである。

谷水竹雄は日本の劣勢が明らかになった四三年後半、ラバウル航空隊のエースだった。

「機動性に富み、迅速に横転ができるヘルキャットがいちばん手強かった。その点、小回りが利かないF4U、P—38は一撃離脱で容易に撃ち落すことができた」

と語っている。B—29を含め、計三十二機の撃墜が記録されている。

こうした記録は、零戦の優れた戦闘性能と突出した個人技によって作られた。だが工業製品として見たとき、果たしてどうであるか。

三菱重工業名古屋航空機製作所（名航）の堀越二郎は優れた技術者だが、軍が要求する性能を実現するために精緻に作りこんだ。精緻というだけでなく、生産に従事したのは動員された女学生だったりした。このために量産が難しくかった。

近代戦で量産が難しいということは致命的な欠点だった。それは堀越の問題ではなく、量産を前提にした性能要求を

設定できなかった日本の軍部の欠陥だった。

四

フランク・マッコイは一九三七年にオクラホマ大学の法学科修士課程を卒業し、いったんは弁護士になったが日米開戦を機にカンザス州の陸軍大学将官課程に進んだ。陸軍大学ではわずか六週間で卒業の扱いとなり、大尉に任官した四二年一月、航空技術情報部隊に配属された。航空技術情報部隊の初代隊長に任命されたのだった。のち、彼は陸軍少将にまで昇進して退役している。

ちなみに同名の陸軍軍人「フランク・ロス・マッコイ」がいる。この人も最終階級は少将だが、一八七四年にベンシルベニア州ルイスタウンで生まれている。一八九八年の米西戦争（アメリカ対スペイン帝国）、第一次大戦に従軍したほか、一九二三年九月に発生した関東大震災の救援作戦の指揮を執り、リットン調査団のアメリカ代表、極東委員会議長を務めるなど日本とも縁が深い。

同部隊の任務は、太平洋の島々で捕獲された日本軍の航空機の残骸を調べ、捕虜になった搭乗員にインタビューすることだった。まず彼は日本軍の航空機を型式に分類し、それぞれに短いコードネームを付けた。そうすることで最

前線の将兵は敵機を見分け、後方部隊に適正な情報を発信しやすくなる。

零戦は「ジーク」と呼ばれるようになった。

最初のころ、アメリカ軍に若干の混乱が生じた。フランク・マッコイが「ジーク」と名付けた戦闘機とよく似た、しかし翼の形状や機体の大きさが異なる戦闘機の見撃情報が各戦線から次々に寄せられたためだった。

そこで彼は、戦場で撮影された日本軍航空機の写真を詳細に調べ、分類する作業を行わなければならなかった。同じ機体であっても、迷彩の塗装や目撃した角度によって全く別の機種に見えることがある。

その結果、マッコイは「ジーク」が用途に応じて様々に改良・改造されていること、搭載するエンジンも異なっていることを解明した。陸上基地から飛び立つ場合は翼は長く、三十キロ爆弾ばかりでなく魚雷を懸垂できるように改良されていた。

対して空母艦載用に翼の端を切り落としているモデルもあった。あるいは速度を重視するモデル、積載爆弾を重視するモデルなどがあった。さらに年式によって微妙に形状が異なった。

同じ零戦であっても、九百四十馬力の栄十二型空冷二重星型十四気筒エンジン搭載の「二一型」と、一千百三十馬

力の栄二十一型空冷二重星型十四気筒エンジン搭載の「三二型」では、翼の長さが一メートルも違っていた。マッコイが「ジーク」と名付けたのは四三年四月に実戦配備された千百三十馬力の「五二型」だった。

次に彼がしたのは、太平洋の島々で捕獲した零戦の残骸をかき集めて、飛行が可能な機体を復元することだった。このためにマッカーサーは、太平洋に展開する全アメリカ軍に、日本軍航空機の残骸を発見したときどう対処すべきか、厳しい規律を通達している。

発見された機体の残骸は専用の小型空母でブリスベーンの空軍基地に輸送された。そこで復元したのち日の丸が塗りつぶされ、アメリカ軍機であることを示す星のマークが付けられた。

星のマークが付いた零戦は実際にアメリカ本土の空を飛んだ。一九四二年三月に復元機はアメリカ陸軍の戦闘機「P-40」や「P-38」と擬似戦闘を行った。こうした作業を通じて、零戦は次第にその性能や弱点が解明されていった。

同じころ、アリューシャン列島のアラスカに近いアクタイン島で、アメリカ軍にとっては奇跡的に幸運な、日本軍にとっては決定的に不都合な発見があった。ほとんど無傷の零戦が発見されたのだ。それはアクトン島の浜辺の泥湿地

に、車輪を空に向け、仰向けになっていた。

カリフォルニア州サンディエゴ基地に搬送されたのは八月十二日である。

戦後になってこの機は、一九四二年六月四日、アリユーシャン諸島ウナスカ島のアメリカ軍港ダッチハーバーの攻撃に、空母「龍驤」から飛び立った古賀忠義という一飛曹が操縦していた「零式艦上戦闘機二一型」ということが判明した。発見された島の名にちなんで「アクタン・ゼロ」もしくは古賀飛曹の名にちなんで「コガのゼロ」と称される。

古賀一飛曹は対空砲射で被弾し、味方の潜水艦が救助にくるようになっていた不時着予定地に向かった。アクタン島がその指定地だった。ところが彼の零戦は着陸したとき、深い泥湿地に脚を取られ、もんどりうって反転して停止した。

このとき古賀一飛曹は首の骨を折って死亡してしまった。不時着した場合、日本軍は機体に火を放ち、場合によっては自決するよう、搭乗員たちを指導していたが、当人が死亡してしまったのでは機体の処分ができるはずがなかった。

日本軍はその後、古賀機の搜索が続けたが、濃霧のため発見できなかった。これをアメリカ海軍の哨戒機PBYカタリナが偶然に発見した。不時着から三十六日後のことだ

った。これでアメリカ軍は完全な状態の零戦を確保し、その強さの理由と弱点を徹底的に解明していくことになる。

零戦の復元という大仕事を果たしたマッコイ大尉は、次いで四三年の夏に日本陸軍の隼も復元したが、もう一つ、もっと重要な仕事を果たした。

捕獲した日本軍航空機の残骸に刻印されている記号や数字を収集し、そこに潜んでいる意味を読み取ろうとしたのである。彼は捕獲した残骸から得られた記号や数字を、サンフランシスコ市に本部を置いていた太平洋地域統括情報センター（JICPOA）に送った。

JICPOAはそうして得られた情報をIBM405にかけ、暗号を解読するのと同じ要領で詳細に分類・集計した。その結果、エンジンに付けられている番号と機体に装着されているプレートの番号などから、零戦の生産機数を型式ごとに推定できるようになっていく。

例えばJICPOAは、機体に付いていた番号から「ジーク」の生産拠点を割り出すことに成功した。「M」は三菱重工業、「N」は中島飛行機、「A」は愛知航空機、「K」は川島航空機、「W」は九州航空機、「Y」は航空技術廠、「P」は日本飛行機といった具合だった。

またJICPOAは一九四二年における零戦の生産機数を、粗鋼や部品の供給能力などを勘案して

一月…七五
二月…七八
三月…七八
四月…八一

と推定した。

戦争が終わって、GHQ戦略爆撃調査団に対して三菱重工業と中島飛行機が明らかにした実際の生産機数は、

一月…七九（推定値との差…四）
二月…八〇（同二）
三月…九〇（同十二）
四月…八五（同四）

だった。

四か月間の総生産機数は実数三百三十四機、JICPO Aの推定値は三百十二機で、二十二機しか変わらない。墜落した機体からの推測とはいえ、これはもう「誤差の範疇」といい。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

**太平洋戦争“最初の一発”** 日本時間の十二月八日午前零時を期して、マレー攻略のために編成された第二十五軍(司令官・山下奉文)の第五師団がマレー半島のシンゴラ、バター、コタバルの三か所に上陸した。シンゴラ、バターは無血上陸を果たしたが、コタバルでは戦闘が行われた。

コタバルに上陸したのは第五師団所属の第二十三旅団陀美支隊五千三百人だった。沖合いから近づく上陸用舟艇(ダイハツ)のエンジン音が気がついたコタバル航空基地の守備についていたインド軍第八旅団のドグラス大隊は、日本兵が上陸を開始するのを待って引き金を引いた。これが太平洋戦争“最初の一発”となった。日本軍による真珠湾奇襲攻撃より一時間二十分早かった。

**クアンタン** Kuantan…シンガポール北方、マレー半島東海岸の浜辺で現在は観光地になっている。地名は十五世紀のキリスト教布教者クアンタン・ヴァン・デーン・ボリストによる。

**戦闘機「バッファロー」** 制式採用後の名称は「ブリーユースター/F2A バッファロー」。アメリカ海軍に配属された最初の単葉機で、一九三六年に策定された海軍次期艦上戦闘機の要求仕様(単葉機、折りたたみ翼、引き込み脚、密閉式コクピット)に沿ってブリーユースター社、グラマン社、セバスキー社が競争試作に参加し、ブリーユースター社が受注に成功した。航続距離約一千二百七十キロ、最大速度二百九十五キロ/時、十二・七ミリ機銃四基を装備し、最高高度は六千メートルだった。実際はそれよりかなり遅かったといわれる。

一九四一年九月十九日 零式戦闘機が実戦に投入されたのは一九四一年九月十三日で、この直後に中国軍の対空砲火で一機が撃墜されている。フリーマンの記録はそのとき撃墜された零戦を調査したものだった。しかし巡航速度や機銃の口径などに誤認がある。

**戦艦「ビスマルク」** 第二次世界大戦におけるナチス・ドイツ海軍の軍艦。一九四〇年八月二十四日に就役し、四一年五月二十七日イギリス海軍潜水艦の魚雷と自沈用爆薬によって沈没した。五月二十四日のイギリス艦隊との砲撃戦は勝利したが、二十六日イギリス空母アーク・ロイヤル艦載機との戦いで浸水、舵が動かなくなり速度は最大七ノットと動きが取れなくなった。二十七日朝、イギリス海軍の戦艦キング・ジョージV世、戦艦ロドニーなどの砲撃戦で「浮かぶ廢墟」となった。

**アメリカ海軍の新造艦** 日米開戦のちアメリカ合衆国が新たに建造した戦艦は八隻、重巡洋艦は四隻なのに、航空母艦は七隻、軽空母は九隻、護衛空母は二十九隻である。また新造艦のうち駆逐艦が二百七隻、護衛駆逐艦が百九十九隻、潜水艦が八十八隻というのは、空母+駆逐艦+潜水艦の組み合わせを軸に艦隊を編成するようになったことを示している。海軍の戦い方が大きく変わった。つつあった。

**戦闘機「P-36」** もと「カーチス・ホーク75」と呼ばれ、初期モデルは翼に機銃を装備していなかった。のち両翼に七・六二ミリ機銃各一基を装備し、「P-36C」の名で制式採用された。太平洋戦争勃発時にはすでに時代遅れとなりかけていたが、真珠湾に襲撃した日本海軍攻撃隊に対して唯一の反撃を行い、九七式艦上攻撃機二機を撃墜している。

**サッチ・ウィーブ** この戦法を最初に考案したのはフライング・

タイガースのクレア・シェンノート准将(1893~1958)だったといわれる。空母「サラトガ」配属の航空隊司令だったジョン・S・サッチ少佐(1905~1981)と僚機を操縦していたオヘア大尉はシェンノート准将の助言に工夫を加え海洋上での戦闘諸要素を加味して改良した。彼の名を取ってこの戦法は「サッチ・ウィーブ」と呼ばれた。

サッチ少佐はのち海軍少将に、オヘア大尉は少佐にそれぞれ昇進したが、オヘア少佐は戦闘で行方不明になった。シカゴ・オヘア空港の名は彼にちなんでいる。アメリカの戦闘機は重く頑丈だったため、急降下だけは零戦に負けなかった。

**赤松貞明** あかまつ・さだあき/1900~1980。中国戦線で活躍した古豪で、撃墜機数をカウントする習慣がなかったため正確な数は分からない。当人の申告によると三百五十機以上という。第二次大戦後は酒におぼれ、かつての戦友、僚友に借金を繰り返す生活だったといわれる。

**武藤金義** むとう・かねよし/1916~1945。愛知県に生まれ日米開戦時は第三航空隊でフィリピン航空戦、ジャワ島攻略など初期の作戦に参加した。のち横須賀航空基地で教員になる。カダルカナル戦に伴いラバウルに進出し撃墜王となった。四五年七月二十四日豊後水道上空の空中戦で撃墜され戦死した。死後特進して少尉。「大空の武蔵」の異名を持つ。

**岩本徹三** いわもと・てつぞう/1916~1955。九六式戦闘機に乗り中国戦線で数機を撃墜したのを皮切りに、四一年十二月八日の真珠湾攻撃には空母「瑞鶴」の航空部隊で参戦、四二年四月にはインド洋、五月には珊瑚海海戦と転戦した。のち大村航空隊、横須賀航空隊の教員任務に就き四三年十一月戦場に復帰し

ソロモン方面転出を経てラバウル航空隊で活躍した。四四年二月ラバウルから撤収しトラック島、木更津、岩国、国分基地と転戦し、岩国基地で終戦を迎えた。自身の記録によると撃墜数は二百二機にのぼるといふ。

**杉田庄一** すぎた・しょういち/1925~1945。新潟県に生まれ四二年十月ラバウル航空隊に所属し四三年四月山本五十六司令長官座乗の一式陸攻を護衛した零戦六機の一だった。四三年八月戦闘で重傷を負い内地に送還されたのちマリアナ諸島方面、フィリピン方面を転戦して内地に帰還。四五年四月戦死した。撃墜数は七十機とされる。

**西澤廣義** にしざわ・ひろよし/1920~1944。長野県に生まれ地元の実業工場に勤務していたとき徴兵となり横須賀航空隊に入った。四一年千歳基地勤務ののち四二年ラバウル航空隊に配属され、坂井三郎、大田敏夫と編隊を組んだ。四四年航空機受領のため輸送機で移動中、撃墜され戦死した。百二十機の撃墜が記録されている。

**坂井三郎** さかい・さぶろう/1916~2000。一九三八年中国戦線で九六式艦上戦闘機部隊に配属され試験飛行間もない零戦で戦果をあげた。日米開戦とともにフィリピン攻撃に参加、のちラバウル航空隊で撃墜王となったが四二年七月戦闘で重傷を負い内地に送還され飛行教官となった。四四年硫黄島に赴き空中戦でアメリカ軍攻撃機を撃墜、さらにポツダム宣言無条件受諾後の四五年八月十七日、横須賀上空に飛来したアメリカ軍爆撃機を撃墜している。大日本帝国海軍航空機最後の戦いを演じたことと知られる。

撃墜した連合国軍航空機は六十四機とされるが、列機を損失し

なかったこと、搭乗機を一度も不時着なく無事着陸させたことなど名バイロットとして多くの逸話を残している。第二次大戦後は日本通運に勤務したのち印刷業を開くかわらアメリカ空軍などに招かれ講演や著述を行った。著書『天空のサムライ』がある。

笹井醇一 ささい・じゅんいち／1918～1942。東京に生まれ四一年海軍兵学校を出て台湾の台南航空隊に配属され小園安名の下で航空機操縦の特訓を受けた。日米開戦と同時にフィリピン攻撃に参加し、以後、ボルネオ、スラバヤ、ジャワを転戦し四二年ラバウルに進出。同年八月二十六日ガダルカナル島上空で撃墜され戦死した。撃墜した連合国軍航空機は五十七機以上とされる。二階級特進して少佐。

太田敏夫 おおた・としお／1919～1924。「利夫」と記す資料もある。西澤廣義、坂井三郎とともに「ラバウル三羽鳥」の異名を取った。撃墜数は三十四機とする説と五十機とする説がある。日本の撃墜王たちについて撃墜機数が曖昧なのは、日本海軍が個人の戦果を評価しなかったことによっている。

戦闘機「P-51 ムスタング」 ナチス・ドイツ空軍に劣勢を強いられたイギリス政府がスピットファイアに代わる主力戦闘機の開発をアメリカ政府に依頼し、ノース・アメリカン社が四か月弱で開発した。機体は流線型で、最高速度は七〇三キロ／時、航続距離は千五百三十キロだった。アメリカ軍は太平洋戦線で零戦に對抗するため改良を重ね、ついに零戦を圧倒した。

余談だが日本も零戦の後継機として高速・高高度での戦闘が可能な局地戦闘機「飛燕」を開発した。この機影がちよっと見るとムスタングと類似していた。このためアメリカ軍機が味方機と誤認したケースも多々あったらしい。

日本軍機の通称 「ジーク」と同様に、九七式艦上攻撃機は「ケイト」、九六式陸上攻撃機は「ネル」、一式陸上攻撃機は「ベティ」、隼は「オスカー」、九七式重爆撃機は「サリィ」、重爆撃機「呑竜」は「ヘレン」と名づけられた。戦闘機は男性名、攻撃機や爆撃機は女性名で呼びやすい名前を付けることによって、戦場の兵士たちは日本軍機を識別しやすくなった。

## 063 戦場の計算機

第六十三

戦場の計算機

一

アメリカ極東軍のワイリピン防衛軍が、コレヒドール要塞に放置した「IBM405」の話である。

鹵獲した日本陸軍第十四軍は、それが何なのか理解できなかった。そこで東京の大本営に処分を問い合わせると、

「大至急、本国に輸送すべし」

という回答が返ってきた。ただし、

「精密な機械なので、丁寧に扱え」

と付け加えるのを忘れた。

ただ、第十四軍司令官の本間雅晴中将はイギリス滞在の経験もあったので、それがパンチカード式計算機械装置ではないかと思っていた。そこで要塞から丁寧に運び出すとトラックに載せ、スラバヤ湾まで運んだ。

そこからは海軍の仕事だった。

彼らは十分な認識がなかったし、特別な注意もなかったので、「やけに重い機械」としてしか扱わなかった。

海軍は駆逐艦の甲板に計算機を固定して搬送した。このため「IBM405」は汐風と直射日光にさらされ続けた。東京・目黒の海軍研究所に届いたときは全体が赤錆に覆われ、どうにもこうにも動かなかった。

そこで日本ワットソン統計会計機械の元社長であり、日本を代表する計算機技術者と目された水品浩に修理が命じられた。修理が行われたのは三重県鳥羽にあった神戸製鋼の工場である。

なぜ東京から鳥羽に回送されたのかを説明するのには、ドウリットル部隊による東京初空襲のことに触れなければならない。

太平洋戦争が始まったとき、アメリカ海軍の作戦本部が最も懸念したのは、ハワイの航空基地が日本軍に奪われ、アメリカ本土への空襲が行われることだった。

アメリカ海軍作戦参謀にフランシス・ローという大佐がいた。

——日本も同じではないか。

と彼は考えた。

このときルーズベルト大統領の名で、

——緒戦で圧倒され続けている連合国軍を奮い立たせる作戦はないか。

ということが作戦本部に諮問されていた。

——ジャップを怯えさせてやれ。

彼は東京を空襲することを考えた。

ただちに計画案が策定された。東京から五百マイル離れた海上まで、爆撃機を空母で運ぶ。そこから爆撃機を発進させ、日本上空を通過して中国に着陸する、というのである。

航続距離二千マイル（三千二百キロ）を誇る双発の軽爆撃機B―25があった。

計画案が上層部に報告され、

——やってみよう。

ということになった。

通常、こういう無茶な計画は立案されること自体がない。航空母艦は機体が軽く滑走距離が短い戦闘機や急降下爆撃機を前提に設計されている。艦上戦闘機の自重は七百キロ、それに対してB―25は二トンを上回る。空母の甲板から飛び出したとたん、海中に墜落するであろう。

そこでロー大佐は

——特別攻撃用に機体の重量を落とせ。

と命令した。

白羽の矢が立ったのは第十七爆撃連隊のジェームズ・ドゥリットル中佐である。

当時、アメリカ海軍航空部隊で統率力、作戦遂行能力ともナンバーワンとされていた。そのドゥリットルを隊長に二百人の要員（志願兵）が選ばれた。

彼らは最初、空母の甲板に見立てた狭くて短かい滑走路で離陸することを練習し、次に空母からの発艦訓練が行われた。日本を飛び越えて中国大陸に着陸するのだから、着艦訓練は必要なかった。

一九四二年の四月二日、ドゥリットル隊と十六機のB―25を載せた空母「ホーネット」はサンフランシスコ港を出港し、北太平洋上でハワイから来た「エンタープライズ」と合流した。

エンタープライズには太平洋艦隊第十六機動部隊司令官ウィリアム・ハルゼー（中将）が乗り組んでいた。巡洋艦四隻と駆逐艦六隻に警護された二隻の空母が東京から五百マイルの海洋上で停止したのは四月十八日だった。

計画では、東京上空に達するのは深夜ということだった。白昼堂々では高射砲に撃墜されてしまうであろう。

ところが日本の哨戒艇に発見された。その船はそもそもは漁船だったが、日本海軍に徴用された「黒潮部隊」に属する警戒艇であって、アメリカ海軍巡洋艦「ナッシュビル」がただちに砲撃してこれを撃沈した。

日本の警戒艇が果たして空襲警報を発信したかどうかは

分からなかった。一瞬の迷いがあった。

だがハルゼーが「Go!」の決断した。

こうして東京に向けて発艦した十六機のB-25は、同日午後零時に東京、川崎、横須賀、名古屋、四日市、神戸などを空襲して中国に飛び去った。

『機密戦争日誌』一九四二年四月十八日付

絶好の快晴下に午後〇時三十分頃、突如帝都空襲を行う。焼夷弾のみ。国民をして初めて大東亜戦争の渦中に入らしめた如き感を抱かしめたり。昨日本日は日米交渉開始の飛電ありで、上層部を驚かしむ。本日は帝都空襲せられて上下驚愕す。

作家・伊藤整はその日記にこう書いた。

初めての本当の空襲であるが、晴れて明るい日のこととて、のん気である。あの飛行機が敵機というのだそうだが、ふだんの日本の飛行機を見ると変らない気持。今まで受け身ばかりいたアメリカ人も初めて少しは仕事らしいことをしたと、ほめてやりたい位の気持ちである。昼間の東京に入ってくるなど、なかなかやるわい、といかにも冒險好きなアメリカ青年の顔が目には浮かぶやうだ。

——ほめてやりたい。

——なかなかやるわい。

実際はそれどころでなかった。

無防備の上空五百メートルから投下された爆弾と焼夷弾、機銃掃射によって、東京では死者三十六人（六都市合計五十人）、重軽傷約五百人、焼失・全壊家屋二百六十五戸、軍事施設や工場など数か所が損壊した。

これに対して日本軍は、たまたま試験飛行中だった陸軍三式戦闘機「飛燕」が一連射撃を行ったものの、燃料切れで一機も捕捉することができなかった。

## 二

日本軍は総攻撃をかけた占領を宣言するのに、日本の記念日や皇族の誕生日、過去の戦争にちなんだ月日を選んだ。それと同じように、アメリカ軍もまた、日米外交交渉開始の日を選んで日本本土への初空襲を実施したわけだった。

それはともかく、アメリカの爆撃機が爆弾を落としたということは、横浜や川崎、千葉も安全ではないことを意味していた。陸軍兵器行政本部や電気試験所は鹵獲した「I



B M 4 0 5」を動かして役立てようと考えたので、東京から鳥羽に回航したわけだった。

では、なぜコレヒドール要塞にI B M社のパンチカード式計算機械装置があったか、である。

話は日米開戦の前にさかのぼる。

ナチス・ドイツ軍がイギリス空爆を開始した一九四〇年の七月、I B M社会長のトーマス・ワトソンは、連邦政府に対して思い切った提案をした。

その内容は、

一、連合国軍に対して、当社が保有するすべての施設を提供する。

二、アメリカ政府が調達する軍用資材の納入に当たっては、一%の利益で満足する。

三、戦争に勝った暁には、枢軸国側に接收されているI B M社の資産を可及的速やかに回収し、開戦前の状況に復することを優先してほしい。

というものだった。

このときI B M社が海外に展開していた事業所は、カナダ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、シンガポールなど七十七か国に及んでいた。その中には当面の敵であ

るナチス・ドイツ、イタリア、日本も含まれていたが、ルーズベルト大統領にとってこの提案は心強いものだった。ルーズベルトはワトソンの提案を了解した。

さらにワトソンは「陸海空三軍の前線基地に、当社の計算機を配置してどうか」と提案した。その運用と保守に、自社の社員を充てる、というのである。

合衆国政府は補給の効率化と補給物資の最適化を目指していたため、ワトソンの提案は持つてこいだった。しかも戦争の現場である前線に計算機を持ち込むという発想は、なるほど奇想天外だった。

敵に奪われたら……、壊れたら……などということを、連邦政府は考えなかった。

——補充すればいいだけのことではないか。

これを受けて連邦政府は、三軍の方面軍司令部ごとにM R C（マシン・レコード・センター）、前線部隊にM R U（マシン・レコード・ユニット）を配備することを決め、I B Mマシンと自家発電装置を搭載できる専用トレーラーを開発した。

このあたりが生産力の違いというものである。

トレーラーに計算機一式を乗せて、前線で計算機を動かすという発想は、従来の戦法にまったくなかった。計算機は一発も弾を撃ちださないが、膨大な物資を効率よく、最

適に配置する「補給」という重大な戦略を担うのだ。あるいは傍受した敵の電信を解析することもできる。

もう一つの計算機メーカーであるレミントンランド社は、機関銃や大型火炮、増産に向けた農機具などの生産に追われていた。これに対してIBM社が作っていたのは商業用の秤だったり、タイムレコーダーだったりした。

およそ軍需と縁のない製品ばかりで、ワトソンは経営者として、なんとしても計算機を軍需と結びつける必要があった。

ワトソンは「計算機に賭ける」という決意をしていたのである。

### 三

クレア・レイクとフレッド・キャロルという卓越したエンジニアが、IBM社の統計会計機械装置を磨き上げたことはすでに書いた。実はもう一人、スコットランド生まれのジェームス・ブライスというエンジニアがいた。

ハーバード大学を中退してIBM社に入り、新型の計数器、乗算器、除算器を生み出した。ブライスはそれまでの機械仕掛けの統計会計機械装置から「プログラム」を分離することに成功した。

計算処理をする度に配電盤の配線を変更するワイヤリングの作業が簡易になった。彼は統計会計機械装置を汎用のパンチカード・システム（PCS）に育てる仕事をした。

ブライスは並行して真空管に着目し、統計会計機械装置に使えないか、と考えた。地道な研究を重ねた結果、一九三三年に真空管を使って演算を行う手法の開発に着手していた。

日米開戦の四年前、一九三七年、一人の青年がそのブライスを訪ねてきた。

青年の名はハワード・エイケンといった。ハーバード大学大学院生である。

エイケンは独自に編み出した自動計算機械の構想を説明した。それは物理計算を行うための仕組みで、既存のどのような計算機械装置とも異なる新しい技術体系——のちに「アーキテクチャ」と呼ばれるもの——を意味していた。

ブライスはクレア・レイク、フレッド・キャロルなどと相談し、これは行ける、という確信を持った。ただちにワトソンにレポートが回付され、ワトソンが即決した。IBM社が世界に誇るエンジニアが太鼓判を押しているのである。

一九三九年の春から夏にかけて、IBM社はハーバード大学と共同で新しいアーキテクチャの研究開発を行うこと

を決めた。計算機的设计と開発はクレア・レイクを中心に、IBM社のエンディコット研究所の技術者グループが担当し、エイケンにプロジェクト・チームを任せることになった。

プロジェクトでは演算素子にはリレーが採用され、プログラムは紙テープで供給された。物理方程式を毎秒三回の速度で演算した。三年後に完成したマシンは、長さが十五・五メートル、高さが二・五メートル、部品点数は七十五万個という巨大なものだった。

大きさだけ見れば大型の蒸気機関車に等しい。のちにこのマシンには「ASCC」(Automatic Sequence Controlled Calculator)。強いて訳せば「電動機械式自動計算機」の名が与えられることになる。

ASCCは一九四三年一月に試運転が開始され、翌年五月、「ハーバード・マークI」の名で正式に公表された。IBM社は次期製品に必要な技術を手に入れたのだ。

政府と軍がIBM社の計算機を標準的に採用したのは、操作を同一にすることで要員の養成・確保を容易にできること、MRCやMRUの間でデータやプログラム(パンチカードと配電盤)および、要員の融通が利くこと、IBM社の保守要員がどんな場所でもサポートできる——などが

理由だった。IBM社が一貫して通してきたレンタル制で蓄積したノウハウが役立った。

これによりアメリカ軍は対ナチス・ドイツ、対日本の両面戦争に臨んで、兵員、輜重、弾薬、医薬品、食料、機器・備品などの輸送と在庫管理を常に的確に行うことができるようになった。前線からの要求と本部からの供給を最適化し、国内における軍需物資の生産を調整することができたし、また暗号の解析や作戦の立案などにもIBM社の計算機を適用した。

納入価格の1%という利益は、名目に過ぎなかった。

IBM社は第二次大戦そのものでは大きな利益をあげることができなかったが、計算機のデファクト・スタンダードの地位を獲得することができた。「世界のコンピュータ市場の七割」といわれたIBM社のシェアは、ワトソンの捨て身の策略——ギャンブル、という人もいる——によって可能になった。

前線基地に計算機を配置する戦略は、欧州と太平洋での二面作戦を優位に転換するのに役立った。何よりも物資と兵器、兵員の補充が的確かつ円滑に実施できた。太平洋戦争は兵站の戦いでもあった。

と同時に計数化と理論をどう適用するかの戦いでもあった。それは作戦だけでなく、要員の評価にも使われた。

例えば、ある部隊の指揮官に欠員が生じた場合、司令部は部隊を維持し、指揮命令を実行するのに必要なスキル、ノウハウ、年齢、位階を方面司令部に伝達する。すると方面司令部では、数万人の尉官、佐官の中から、最適な人材を抽出して送り込んでくる。

これは兵器、武器、弾薬、医療部隊、医薬品、治療器具、燃料などについても同様だった。

一九四二年七月から十二月にかけてアメリカの産業界が生産した主要な軍事物資は以下のようなものである。

|           |             |
|-----------|-------------|
| ・ 航空機     | 二万三千三十二機    |
| ・ M1カービン銃 | 十一万五千四百一十一挺 |
| ・ 一〇五ミリ砲弾 | 六百十万九千発     |
| ・ 中型戦車    | 九千四百八十一台    |
| ・ トラック    | 三十三万三千五百十六台 |
| ・ 靴 下     | 二千四百三十五万一千足 |

こうした大量の物資を戦地に配給する輸送船の手配を、計算機が一手にこなした。このためにアメリカ軍は陸海空のそれぞれで、機材・機器、武器・装備などすべてをコード化した。兵隊への給与、恩賞、部隊や指揮官の交代も計算機が打ち出し、適宜処理されていた。

日本軍がガダルカナル島の守備隊を支援するため、酒樽に米を詰めて海洋に浮かばせ、潮の流れに任せたとはいえ、元が違っていた。インパール作戦で、最前線に食糧を搬送する兵士たちが、背中に食糧を負いながら飢え死にするような出来事は、アメリカ軍では起こりえなかった。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

フランシス・ロー Francis Stuart Low / 1894 ~ 1964。

新鋭空母「ホーネット」の最終機装工事の状況を視察するためノールフォーク海軍基地を訪れた。そのとき、空母の輪郭が描かれた飛行場の滑走路にキヤリアの浅いパイロットが離着陸の訓練を行っている光景と、その輪郭に対してアメリカ陸軍航空軍の爆撃機の編隊が攻撃演習を行っている光景を見た。ローはその光景から「航統距離の長い陸軍の双発爆撃機を空母から発進させたらどうだろうか」とひらめいたという。

ジェームズ・ドウリットル James "Jimmy" Harold Doolittle / 1896 ~ 1993。一九四二年、中佐のとき東京初空襲に成功し、その軍功で二階級昇進し、准将に昇進した。そののち北アフリカ戦線に司令官となって赴任し、少将・戦略空軍司令官、四四年イギリス本土防衛のため中将・アメリカ第八空軍司令官となった。

日本の哨戒艇

第二十三日東丸と長渡丸の二隻がそれぞれアメリカ艦隊を発見し、「敵艦隊見ユ」「敵ハ空母三、巡洋艦四ヲ伴フ」という至急電を計七通も発信していた。日東丸は巡洋艦の砲撃で沈没したが、アメリカ海軍はのために一千発もの砲弾を発射した。

東京初空襲後の B-25 一機はソ連のウラジオストクに着陸し、四機は夜間着陸に失敗して大破した。残りの十一機は飛行場を発見できず搭乗員は落下傘で降下した。そのうち一機の搭乗員は中国共産党軍によって六人が殺害され、二機は日本軍占領地に不時着／落下傘降下したために八人が捕虜となった。ソ連領に着

陸した B-25 はそのままソ連軍が接收し、分解して調査し、そっくりの爆撃機を開発した。

伊藤 整 いとう・せい / 1905 ~ 1969。本名も同じだが「整」は「ひとし」と読む。北海道松前郡白神村に生まれ、小樽高等商業校を出て市立小樽中学校の教師となった。のち東京商科大学に入ったが中退して文筆活動に入り小説、文芸評論で活躍した。詩集『雪明りの路』、小説『生物祭』『街と村』『得能五郎の生活と意見』『鳴海仙吉』『氾濫』などがある。東京工業大学教授、日本近代文学館館長、日本ペンクラブ副会長、文芸家協会理事。六七年日本芸術院賞、六八年日本芸術院会員。死後勲三等瑞宝章。

戦闘機「飛燕」 ひえん。第二次大戦中、日本陸海軍機で唯一の液冷エンジンを装備した制式戦闘機で、流線型の機体の特徴だった。ドイツのダイムラー・ベンツ製「DB 601」エンジンを国産化し川崎飛行機が設計、生産した。制式名称は「キ-61 三式戦闘機」で一九四四年一月に就役し前線配備された。翼幅十二・〇メートル、全長八・七五メートル、最大速度は高度五千メートルで時速五百八十キロ、最高一万メートルまで上昇することができた。十二・七ミリ機銃二基、二十ミリ機関砲二門を備えており、B-29 撃墜用だった。太平洋戦域をはじめ本土防空に威力を示した。

ハワード・エイケン Howard Aiken / 1900 ~ 1963。

IBM 社と共同で開発した「MARK I」は約三千個の電磁リレーを用い、計算の手順が計算機の外にある制御板で指定されるものだった。このため MARK I は「逐次型自動制御機械装置」と位置づけられている。

余談だが、エイケン「人々があなたのアイデアを盗むことを

気に病んではならない。もしあなたのアイデアに何か良いところがあるのだとすれば、それはそもそも人々に捧げられるべきものなのだ」という言葉を残している。優れた発明、技術は社会の公共財であるという考えを示したもので、現在のオープンソース・ソフトウェアの基本的な思想は彼によってかたちづけられた。

ASCC ハーバード大学の学長ジェームス・ブライアン・コナントは「マークⅠ」について次のように述べている。

「この計算機の個々の構成要素には、IBM技術者達の一連の発明が生かされています。これまで、私達は基礎科学が産業にどのような恩恵をもたらしたかということについてはたびたび聞かされてきましたが、産業界の技術が科学にこれほどまでの恩恵をもたらしたという話は余り聞いたことがありません」(日本IBMホームページ「コンピュータ・ミュージアム」)

コレヒドール要塞 マッカーサー將軍の脱出

一九四二年の二月二十二日、ワシントンからコレヒドール要塞のマッカーサーに宛てて、脱出命令が到着した。オーストラリアで再起を図れ、というのである。三月十日、マッカーサーはウェインライト少将を呼び、「私が帰ってきたときには、君を中将に昇進させよう」と言つて、全フィリピン軍司令官に任命した。

葉巻一箱と髭剃りクリーム二瓶を手渡したのは、饒別のつもりであつたのかもしれない。マッカーサーが妻と息子、フィリピンのケソン大統領、サザランド参謀長、ロックウェル海軍少将など幕僚二十二人が魚雷艇四隻に分乗してコレヒドール島を離れたのは翌十一日である。

そもそもダグラス・マッカーサーという人物は、一九三七年十二月末日付で陸軍を退役し、年俸三万一千五百ドルでフィリピン

政府に軍事顧問として招かれていた。しかし対日戦の機運が高まったことから四一年七月に再び陸軍中将・極東軍司令官に任命され、開戦と同時に大将に昇進した。連邦政府は優秀な軍人をヨーロッパに振り向けたことと、現地の事情に詳しい現役将校がいなかったことによつてゐる。

ある意味で太平洋戦争は、彼にとつて千載一遇のチャンスだった。生来、目立ちたがり屋だった彼は第一次大戦ではヘルメットを被ることなく、手には馬の鞭を持つて最前線の指揮に当たつたという逸話がある。退役して悠々自適を決め込んでいたところ、にわかに極東軍司令官という大役が転がり込んできた。フィリピンで勇名を馳せ、英雄になれば、ひよつとするとアメリカ合衆国大統領への道が開けるかもしれない、とひそやかに考えた。その道を開くためには、十万人の兵士と避難民は重い足枷になる。

彼の盟友でよき助言者だったコートニー・ホイットニー准将も、脱出を勧めた。そのこともあつてマッカーサーは

——ここは逃げるに如かずである。と考えた。

織田信長、徳川家康がそうであつたように、名將は逃げるのがうまい。全軍の將が死すれば家が崩壊するのは、武田信玄、今川義元の例で分かるであらう。ただしマッカーサーの場合は違つていた。彼独りの問題でなく、連合軍に蔓延していた將軍たちの功利主義というものだった。

マッカーサーとその家族、極東軍司令部の幕僚たちを乗せた魚雷艇は、途中、日本軍の巡洋艦の数キロ鼻先を横切り、コレヒドール島脱出から二日目の三月十三日、ミンダナオ島にたどり着いた。ここで様子を見、十六日の深夜、迎えにきた二機のB-17爆

撃機でオーストラリアに飛び立った。

「アイ・シャル・リターン」の名言はこのとき生まれた。

マッカーサーから体よく指揮を委ねられたウェインライトは、ただちに「四月十五日までに食糧の補給がなければ、降伏せざるを得ない」とワシントンに打電した。責任逃れの布石を打った、といえなくもない。

ここで要塞の内に問題が発生した。一つはアメリカ人とフィリピン人との間の人種的な確執だった。バターン半島の防衛線ではアメリカ軍の士官がフィリピン軍の兵を指揮していた。戦闘で斃れるのはフィリピン人が圧倒的に多かった。加えてフィリピン人一般市民をコレヒドール要塞に退避させることを、アメリカ軍が拒否したことから、対立の溝が深まった。

もう一つは戦意の低下だった。六万五千のフィリピン軍将兵は、マッカーサーと一緒にケソン大統領が脱出したことを知って衝撃を受けた。

064 真珠湾の次

第六十四

真珠湾の次

一

太平洋戦線でアメリカ軍は、第六十七節で紹介するランチェスター戦略モデルを忠実に実践した。戦争初期に採用したのは戦略モデルのうち「弱者の戦い方」だった。つまり局地戦にしばらく、兵力の分散を避け、一点集中の戦略を練った。

太平洋は広大で、小さな島が無数に散在している。

その中に戦略的な重要拠点となる島があった。真珠湾で太平洋艦隊の戦力を半減させられたアメリカ軍は、戦略拠点を絞り込み、その他の島は日本軍のなすがままにまかせた。

もうちょっと視野を広げると、大局的な戦略のベースにはレインボー計画があった。そのうちの第五プラン（レーンボー5）では、ヨーロッパの対ナチス・ドイツ戦線を優先することになっていた。中国よりイギリス、フランスとの同盟関係の方がプライオリティが高かった。

そのために、対日包囲網の実質的な主体はイギリスとオランダということになった。合衆国艦隊司令長官（兼海軍作戦部長）アーネスト・キングは太平洋艦隊長官チェスター・ニミッツに、

——ABDA部隊には、全滅するまでに少しでも日本軍の進撃速度を遅らせることを期待する。

と語ったと伝えられる。

アジアはイギリス、オランダに任せる、というのである。そうせざるを得なかったのが実際だったが、ランチェスター戦略モデルという支えがなければ、アメリカ政府はアジアの戦いに引き込まれ、戦争初期に戦意を喪失していたかもしれない。

日本は、緒戦の連勝に酔っていた。東条英機はラジオで「皇軍は各地に転戦、連戦連勝、まことにご同慶の至りであります」

と語り、

「ご同慶の至り」

が流行語になった。

ところが実態はというと、開戦早々から日本軍では物資の生産・調達と輸送、つまり補給の問題が生じていた。これがために、戦争の長期化によって、戦略と戦術を大幅に修正せざるを得なくなった。

そもそもこの戦争は、鉱物資源や工業生産力の限界を開くために、日本が全身をハリネズミのようにして始めた戦いだつたから、戦争は短期間に終結させなければならなかつた。

一九四〇年七月、陸軍航空総監（兼陸軍航空本部長）に就任した山下奉文は、遣独視察団の団長としてナチス・ドイツを視察してレーダーや暗号生成装置、パンチカード式集計分類計算機械の重要性に気がついた。メッサーシュミット社を訪問したとき、部品管理にパンチカード式計算機を使っているのを見た話はすでに書いた。

帰国後に彼は、近代戦争は軍勢力より産業力、技術力が決め手になるという報告書を首相・東条に提出した。しかし東条は山下を二・二六青年将校の一派と疎んじていたこともあって、新京（長春）に追いやってしまった。

山下は独断で日本ワットソン統計会計機械にパンチカード式計算機械装置を発注していたが、アメリカ合衆国政府が対日輸出規制（道義的対日禁輸）をかけていたために、それは実現することがなかった。

連合艦隊司令長官・山本五十六もアメリカの工業力、特に自動車産業を重視した。それゆえに対米戦争は回避するのが善策、避けられないとしてもできるだけ先延ばしにするのが改善の策と考えていた。

しかし彼は、その一方で「軍人は政治に口を挟むべきではない」と頑なに信じていた。軍人としての美学を優先させた彼は、表立って対米開戦に異論を唱えることをしなかつた。

開戦前の秘話として伝えられるのは、

——開戦することが決まったあとに開かれた大本営での会議で、山本五十六は「一両年は存分に戦ってお見せする。しかし、そのあとは保証しかねる」と言つた

というエピソードである。

ときにそれは

——山本五十六は戦争に反対だつた。

と解釈されるのだが、それは間違っている。

軍人であれば、戦争というものを否定することはない。戦うと決まったからには、いかに短時間に、いかに少ない犠牲で勝利を収めるかを考えるのが指揮官の仕事である。

山本がごく親しい友人に

「一気にアメリカ本土に兵を進めてはどうか」

と漏らしたのは、ジリ貧に陥ることを危惧したからだつた。仮にアメリカ本土での戦いには敗れるにせよ、そこで講和交渉に入ることができる。この考え方は「強者の戦い方」の原則に合っている。

山本の構想は、「ミッドウェー海戦」と呼ばれる艦隊決

戦の延長線上にあった。一九四二年六月五日に行われたこの海戦は、太平洋戦争の趨勢を左右したとされる。すなわち連合艦隊は主力空母四隻を失って制海権を明け渡した。

それは紛れもない事実だが、南雲機動部隊の後に陸海軍の陸戦隊約五千人を乗せた輸送船団が連なっていたことはあまり知られていない。作戦の通りアメリカ太平洋艦隊を撃滅できていたら、連合艦隊はミッドウェー島に陸戦隊を上陸させ、ここをハワイ島攻略、さらにアメリカ本土空爆の起点とする計画だった。

二

現地時間一九四一年十二月七日午前七時五十二分、第一次攻撃隊指揮官・淵田美津雄坐乗機が発信した「ト・ト・ト」電で始まった真珠湾奇襲攻撃のあと、アメリカでは——日本が上陸してくるかもしれない。

と真剣に心配した。

実際、日本軍はアメリカ本土攻撃を実行に移していた。大本営が立案したアメリカ本土攻撃は、日米開戦直後、伊号潜水艦九隻による通商妨害（貨物船やタンカーを魚雷や搭載砲で破壊・沈没させる）に始まり、四二年二月二十三日、エルウッド製油所に砲撃が行われた。

その四日前（二月十九日）、オーストラリアのダーウィン港が空襲され、停泊していたアメリカとオーストラリアの艦船と商船が沈没・破壊されていた。

いつ、どこからやってくるか……

いやがおうにも不安が高まっていた。

二十四日の深夜二時過ぎ、陸軍基地のレーダーがロサンゼルス（西百二十マイル（二百キロ））の上空に、不審な飛行物体を検出した。

次いでロングビーチの上空に飛行機が目撃され、数分後、——ロサンゼルス上空一万二千フィートに敵攻撃機二十

五。
が報告された。

陸軍基地が警報を発し、灯火管制が敷かれ、迎撃のための戦闘機が準備され、砲撃が行われた。闇夜にサーチライトが交錯し、砲弾千四百発以上は射ち出された。射撃は午前四時過ぎまで続けられ、七時過ぎに灯火管制が解除された。

海軍長官フランクリン・ノックスは二十五日、

——不安から発生した誤報だろう。

と述べ、二十六日に陸軍参謀長ジョージ・マーシャルはルーズベルト大統領に

——当時活動していたアメリカの陸海軍航空機は存在せ

ず、関係した航空機は十五機に及ぶようだが、爆弾は全く落とされなかったし、未確認航空機は一機も撃墜されなかった。

と報告した。

のち「ロサンゼルス戦」と称される。

この冗談のような怯えぶりを知ったなら、山本五十六は——もっと早く上陸作戦を執行しておけばよかった。と口惜しんだかもしれない。

西海岸の防衛陣が水平線の向こうに双眼鏡を向けて目を凝らしていたころ、ホノルルでは

「二月十一日に日本軍がハワイに上陸する」

という憶測が、まことしやかに流れていた。

二月十一日と具体的だったのは、それが日本の「紀元節」に当たっていたためである。何かの記念日に日本軍が行動を起こすのは周知の事実だった。

判明しているだけで十二月十七日、年が明けた一月五日と日本軍の偵察機がオアフ島上空に飛来して偵察を行っていたので、ハワイ駐留軍は日本軍の動きに最大限の注意を払っていた。ばかりでなく、ハワイ在住の日系人をアメリカ本土西海岸の収容所に隔離するようなこともした。

内乱を怖れたのである。

四年の二月十一日は何ごともなく過ぎたが、アメリカ政府と軍関係者が恐れた憶測は、半ば当たっていた。連合艦隊は第二次ハワイ攻撃を計画し、実行に移していた。

その計画は「K作戦」といった。

数度の偵察で、連合艦隊はアメリカ軍が真珠湾に着底した艦船を引き揚げ、破壊された港湾施設を修理しているのを知った。灯火管制もかけず大車輪で取り組んでいたので、あと二か月もしたら軍港として再生するかもしれない。

そこで航空母艦に搭載した複葉式の九六式艦上攻撃機をもつて、アメリカ軍の陸上基地を破壊し、港湾の修復工事に打撃を与え、沈没したままのアメリカ海軍艦船を修理不能なまでに壊滅させるという計画が作られた。

九六式艦上攻撃機は本体が布張りで最高速度は三百キロという時代遅れの戦闘機である。であればこそレーダーに補足され難いのだが、航続距離を考えるとハワイ近海まで空母を動員しなければならなかった。空母はいずれの決戦に備えて温存したいし、九六式艦攻は対空砲火に狙われやすい。

そこで使用する航空機は、海上で発進できる水上飛行艇がいい、ということになった。マーシャル群島ウオッジエ環礁から発艦させるのだが、用意できたのは二機の二式大艇だった。搭載できる爆弾は一機当たり二百五十キロでし

かない。

四一年十二月八日に連合艦隊が投入した航空機は三百機超、空母六隻、戦艦・重巡洋艦・駆逐艦など十四、特殊潜航艇五だった。これに比べ、「第二次」といいながら二式大艇がたった二機というのは、

——偵察のついでに過ぎない。

言葉だけが大げさになり、実態は情けないほどの作戦だった。

この「攻撃」は折からの悪天候に阻まれた。

厚い雲が低く垂れ込めていたため、飛び立った二機の飛行艇は目標を捕捉することができなかった。ドウリットル部隊のように上空五百メートルまで高度を下げなかったのは、搭乗員たちの士気が後ろ向きになっていたことと、帰還して報告することが義務付けられていたためである。

——この天候では爆撃は無理。

と判断した二機は、帰還のために急いで爆弾を投下した。

一発はハワイ諸島モロカイ島付近の海上に落ちて巨大な瀑布を生んだが、人の眼に触れることがなかった。もう一発はマウイ島の人家近くに落下して火災を起こした。

伸るか反るかの大博打に打って出た以上とことんやるほかないのだが、慎重に過ぎるのは及び腰という表現が似合っ

ている。

三

日本軍の第二次ハワイ爆撃と本土砲撃は、せいぜい東京初空襲への腹いせという程度で、戦略的な意味はほとんどなかった。

——なぜ失敗に終わったか。

が海軍作戦本部で検討された。

結論は

——航空母艦の出撃が制約されたためである。

だった。

——しからばハワイ諸島を射程距離に置くどこか島の上に海軍の航空基地を持てばいいではないか。

——ミッドウェー島はどうか。

という意見が出た。

なぜミッドウェーだったか。

それは、十六機のB-25による東京初空襲（四月十八日）に遠因があった。ドウリットル部隊を載せた空母はサンフランシスコ港から出たのだが、大本営は

——彼らはミッドウェー方面海域から発進した。

と推測した。本国西海岸から太平洋を横断して攻めてくる

とは考えもしなかった。

このため

——ミッドウェーを抑えれば、アメリカ艦隊を封じ込めることができる。

と考えた。

加えて東京初空襲の仇討ちという意味も込められていた。かねて海軍は「積極的敵艦隊殲滅論」を主張し、陸軍に連携作戦の発動を求めていた。ミッドウェー諸島はアリユーシャン列島とハワイ諸島の中間にあつて、ここを抑えることは、ハワイ攻略を目指す海軍、北辺防衛の強化を指向する陸軍の双方に利があつた。以上のことから、海軍の構想はにわかに具体的な作戦に転換した。

一方、アメリカ合衆国政府と太平洋方面軍は、暗号の解説でこの事実をつかんでおおいに焦つた。それで彼らは、必ずや日本軍のハワイ上陸作戦が実行されるであろうことを確信した。だが、太平洋艦隊の艦船は広大な太平洋に散開し、それぞれの局面で対峙する日本軍との戦いに疲労を重ねていた。

ワシントンの海軍省作戦部は

——日本軍はハワイを真っ直ぐ目指してくる。

と判断していたが、太平洋艦隊司令長官であり太平洋作戦地域司令官のニミッツ（海軍大将）は

——自分が山本の立場だったらどうするか。と考えていた。

ニミッツが考えたのは、

——ハワイが射程に入る島に恒久的な飛行場を建設する。ということだった。

そうすれば艦船の被害を気にすることなく、いつでも攻撃機を出撃させることができる。

この時点でハワイの太平洋艦隊司令部情報部は、ウェーキ島で回収された日本海軍の暗号表をもとに、日本軍の暗号解読作業を進めていた。

五月に入つてのことだったが、情報部に勤務していたジョセフ・ロシユフォートという中佐が、日本軍の電信の中に「AF」という符号がしきりに入るようになったことに気がついた。

——AFは日本軍の次の作戦目標ではないか。

と考えたロシユフォートは、ニミッツの迷惑を受けて

——ミッドウェー島の蒸留施設が故障している。

という無電を、わざと平文で打った。

すると日本軍の電文に

——AFは目下飲料水の欠乏に悩んでいる。

という連絡電が登場した。これで「AF」がミッドウェーを意味していることが判明した。

この話には異説があつて、というのはこの時点でアメリカ軍は日本軍の暗号はあらかた解読できていた。「AF」が日本海軍の次の攻撃目標ということは分かつていたので、条件に合わない軍事拠点を消し込んで「AF」ミッドウェーを割り出した、という。

ともあれ五月十五日、ニミッツは太平洋に展開している空母に、ハワイに大至急で帰還するよう命令を出した。主力の「ホーネット」と「エンタープライズ」が真珠湾に入つたのは同月二十六日、サンゴ海海戦で大破した「ヨークタウン」が帰還したのは翌二十七日である。

「ホーネット」と「エンタープライズ」には、新しい戦闘機、艦上爆撃機が積み込まれ、新たな搭乗員とたつぷりの食糧が補充された。大破した「ヨークタウン」はただちにドライドックに入つたが、このときアメリカ海軍の機械力がいかに発揮された。

一千四百人の作業員が徹夜の作業に取りかかった。かくして三隻の空母は五月二十八、二十九日に相次いでミッドウェーに向けて出撃して行つた。「ヨークタウン」には一千四百人の作業員がそのまま乗り組み、航海しながら修理が進められた。

アメリカ太平洋艦隊の兵力は空母三、重巡洋艦七、軽巡洋艦一、駆逐艦十七、艦船搭載の砲門百四十、艦載機二百

三十三機、ミッドウェー基地航空隊保有機百二十一機である。

ほぼ時期を同じくして日本海軍も行動を起こしていた。

5月

26日 空母「龍驤」「隼鷹」(第四航空戦隊)が大湊湾を出港。

27日 空母「赤城」「加賀」「飛龍」「蒼龍」(第一機動部隊)が広島湾を出港。

28日 陸戦隊船団がサイパン港を出港。

29日 攻略部隊本部が広島港を出港。

同日 戦艦「大和」が呉港を出港。

山本五十六が立てた作戦は次のようだった。

一、まず第四航空戦隊はアリユーション列島ダッチハーバーのアメリカ軍基地を叩く。これによりミッドウェーへのアメリカ軍支援を遮断する。

二、次に南雲中将率いる第一機動部隊がミッドウェー島のアメリカ軍基地を攻撃し、ここに陸戦隊を上陸させて占領する。

三、旗艦「大和」以下の砲艦は後方に控え、アメリカ太

平洋艦隊主力と正面で対峙し、艦隊決戦を挑む。

四、さらに陸戦部隊をハワイに運び、艦砲射撃ののち陸上戦に持ち込んでこれを占領する。

五、しかるのち連合艦隊主力はトラック島に再び集結してフィジー、サモア、ニューカレドニアといった諸島を陥す。

六、精鋭の機動部隊はオーストラリアのシドニーを空襲、連合国軍に壊滅的な打撃を与える。

七、これを受けて連合艦隊は再びハワイを攻略・占領して、アメリカ西海岸の空襲を目指す。

太平洋戦争が第二段階に入ったことを意味していた。これが成就すれば、対米英戦の勝機もしくは、日本にとって有利な条件での和平交渉が見えてくるであろう。実際に血を流すことも人が死ぬこともないシミュレーション・ゲームや空想小説では稀にそのようなストーリーが描かれることがある。だが本編の中では、いま現在、多くの人々が傷つき命を落としている。

第二次大戦が終了したあと、アメリカ合衆国の海軍大学はミッドウェー海戦をしばしば教習の素材に使った。自国海軍が大勝利をあげたというだけでなく、これ以外、後にも先にも教習の素材に相応しい実戦がなかった。

その結果、彼らは

——空母の数、航空機の性能、搭乗員の戦闘経験においては、日本軍側が有利だった。

と分析した。

対してアメリカ海軍は、

——情報、奇襲、相対的な位置、空母の作戦使用技術、レーダー、自動無線帰投装置、基地航空隊などにおいて優位だった。

と指摘している。

山本五十六の思惑通りにコトが進んでいれば、太平洋戦争の帰趨は大きく変わっていたはずである。だがアメリカ太平洋艦隊は日本の連合艦隊を待ち受ける立場にあった。作戦を立てる時間は十分にあった。


~~~~~ 補 注 ~~~~~

**アーネスト・キング** Ernest Joseph King / 18078-19656。

第二次大戦中、アメリカ合衆国海軍の制服組トップだった。一九四四年十二月元帥となり、対日戦略では航空兵力と海軍艦隊で日本本土とインドシナ・フィリピン・インドネシアの補給路を遮断する作戦を立てた。

**ABD A 部隊** アメリカ (America: A)、イギリス (British: B)、オランダ (Dutch: D)、オーストラリア (Australia: A) のアルファベット頭文字に由来する。対日多国軍で、総司令長官はイギリス軍駐インド軍司令官アーチボルド・ウェーヴェル大将だった。緒戦でイギリス東洋艦隊とフィリピンのアメリカ軍が消滅してしまったため、四二年二月、イギリスのチャーチル首相の判断で解散した。これに代わるものとして南西太平洋方面軍が編成され、ダグラス・マッカーサーが指揮官となった。

**遣独視察団** 一九四〇年十月から四一年四月にかけて陸軍が指揮官や技官を派遣しナチス・ドイツの新兵器や新用兵を学んだ。同時期に海軍も同様な視察団を別途派遣している。

**真珠湾奇襲攻撃** 「ト・ト・ト」電が発信されたのは日本時間は十二月八日午前三時二十二分だった。コタバル上陸の二時間後だったが、連合国側に情報を秘匿するため陸軍と海軍は交信していなかった。日付変更線の関係でハワイ攻撃は宣戦布告日の「前日」となった。

**オーストラリアへの空襲** 一九四二年二月十九日、日本の機動部隊がダーウィンを攻撃した。第一次攻撃隊は空母から発進した零

戦十八機、艦上攻撃機七十三機、第二次攻撃隊はセレベス島などの航空基地から双発爆撃機五十四機による空襲で、全くの不意打ちだった。このためダーウィンの軍事施設は大きな損害を受け、港に集結していた連合国軍艦船二十三隻すべてが沈没または壊滅的打撃を受けた。死者は民間人・軍人計二百四十三人だった。

**エルウッド製油所** カリフォルニア州サンタバーバラの石油採掘・製油工場。伊-17潜水艦が艦砲射撃を行った。分厚い鉄鋼に当たって爆発する徹甲弾だったため、砲弾の多くは不発だった。

**伊号潜水艦による米本土艦砲射撃** 六月二十日のバンクーバー砲撃、同二十一日のフォート・ステイブンス陸軍基地砲撃である。

また、アメリカ本土には四二年九月に零式艦上戦闘機が焼夷弾を抱えて出撃した。ただしアメリカ本土上空を飛んだのはただの一機だった。その零戦は翼を切って折りたたむように改良した偵察機タイプで、伊-25号潜水艦に搭載され、ロサンゼルス沖で飛び立った。上空からロサンゼルス市を撮影し、オレゴン州の山林に焼夷弾を落とした。

**ロサンゼルスとの戦い** ロサンゼルス・ヘラルド・エグゼミネー紙は、「目撃者は飛行機の数五十機、三機が海上で撃墜された」と報じた。

**フランクリン・ノックス** William Franklin Knox / 18074-1944。一九三六年共和党副大統領候補だった。

**第二次大戦中の在米日系移民** 日本が宣戦を布告するのとはほぼ同時に、まずカリフォルニア州在住の日系人が資産を没収されたうえ同州内十か所の収容所に隔離された。ハワイ在住の日系人はアメリカ本土西海岸の収容所に強制送還されるか、子息が海兵隊に志願して家族の生活を保障することになった。ヨーロッパ戦線に

おける日系人部隊の三分の二がハワイからの志願兵だった。こうした中からロバート・マツナガ上院議員やダニエル・イノウエ上院議員などが出た。

ウオツジエ環礁 陸地部分八平方キロメートルで、マーシャル諸島の中で最大規模の島とされる。第二次大戦中、ここには連合艦隊第四艦隊の陸戦部隊三千五百人が駐留していた。一九四四年一月三十日、アメリカ軍の爆撃と艦砲射撃で砲台が破壊され、餓死を含め二千九百人の死者を出した。

島上の海軍航空基地構想 いわゆる「不沈空母」構想。海軍参謀だった源田實が発案したとされる。太平洋の島々に海軍航空部隊を配備し、島を空母に見立てて適時作戦行動に援用するという考えで、これにより第一航空艦隊（一航艦）が編成された。艦船を保有しない艦隊で、事実上、空軍に近かった。

ジョセフ・ロシュフォート Joseph Rochefort / 1900～1976。オハイオ州デイトンで生まれ、少年のころからクロスワードパズルを解くことに熱中した。一九一八年海軍に入り、二六年に新設された通信部門の暗号解読組織「OP-20-G」のチーフとなった。その後日本語教育を受けてハワイ基地に赴任し、大日本帝国海軍の暗号解読に当たった。

ダッチハーバー アリユシャン列島のアラスカ寄りにある。アメリカ軍は日本軍によるアメリカ本土への空襲や上陸があるとすれば、中部太平洋→ハワイのルートか、アリユシャン列島→カナダ→アメリカ本土のルートと想定していた。中でもダッチハーバーは軍港として利用できる条件を整えていて、日米どちらにどうしても確保しておきたい（ないし敵に利用されたくない）要所だった。

065 空母对空母

第六十五

空母対空母

一

われわれは歴史を学ぶなかで、太平洋戦争は艦隊決戦の時代から航空機主導の時代へ転換する経過を見ることになる。二キロ、三キロを隔てて大砲を撃ち合う艦隊決戦では、砲弾の大半が無駄になる。しかも艦が沈没すれば攻撃力はゼロになってしまう。

に対して数十キロ、場合によっては百キロ以上、波濤を隔てて航空機で爆弾を運べば、命中確率は飛躍的に高くなり、結果として安くつく。戦争も経済効率で動くということだが、そのためには索敵の技術が重要になる。最後は目視による確認であるとしても、まずはレーダーで群影をとらえ、目視した情報を電信で伝えなければならぬ。

イギリス空軍機がナチス・ドイツの戦艦「ビスマルク」を叩きのめして「浮かぶ廃墟」にし、大日本帝国の陸上攻撃機がイギリスの戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」を沈没せしめた。ここまでは目視が優先し、電波は副次的な

役割だった。

では、その航空機を艦載し、発着させる空母と空母が大海原で向かい合ったかどうかということになるか、である。世界の戦争史上、初めて行われた空母対空母の戦いとして、サンゴ海海戦は、記録に残っている。

事前に理解を促すために書くと、サンゴ海はオーストラリアの西北側に広がる海域であって、北からニューギニア島、ソロモン諸島、ニューヘブリデーズ諸島、ニューカレドニア島に囲まれている。

発端は四二年の一月二十三日、日本がソロモン諸島の北端にあるニューブリテン島を占領したことにあつた。日本の大本営外軍部（軍令部）がねらったのは、アメリカ軍とオーストラリア軍の分断だった。

まず南方における連合国軍の動きを封じ込める。その上で、アメリカ太平洋艦隊と決戦してこれを殲滅し、しかるのちにハワイ上陸作戦を実施するという構想である。

そこで日本軍は、ニューブリテン島ラバウル基地に台湾から海軍航空部隊を進出させ、ここを拠点にニューギニア島南端のポートモレスビーにある連合国軍基地をしきりに空襲した。連合国軍もB-25などでラバウルを集中的に空襲し、あるいは潜水艦で日本の輸送船を攻撃するなど双方が激しい消耗戦を繰り広げた。ラバウル航空隊の奮戦が

伝説となるのはこのときの戦いである。

五月四日、日本軍がガダルカナル島の北に浮かぶツラギ島を占領して進攻の構えを見せると、アメリカ軍は空母「レキシントン」と「ヨークタウン」を出動させ、ツラギ守備隊に猛烈な空襲をかけ始めた。大日本帝国海軍はこれに対抗して空母「瑞鶴」「翔鶴」、改造空母「祥鳳」を繰り出し、八日に空母対空母の決戦が火蓋を切った。

この戦いで日本軍は「レキシントン」を沈め、「ヨークタウン」を大破させた。その代償として「祥鳳」を失い、「翔鶴」が大破した。艦船の被害からいうと、かろうじて日本軍に軍配が上がるかたちだが、損失は日本軍のほうが大きかった。

それというのは、日本軍が多くの搭乗員、戦闘員を失ったのだった。このとき被弾した空母に艦載機が着陸できず、海上に没するという状況が発生した。航空機は補充できるが、搭乗員は簡単に養成できない。

日本の軍隊では明治から一貫して「戦陣訓」というものが重視された。戦いに勝っても、個別の作戦、指揮官の判断、個々の兵士の行動というものには必ず反省すべきことがある、という考え方だった。教訓から学び、少しでも改善しようとした。

第一次大戦までの日本は、より客観的に教訓をとらえよ

うとした。だが日中戦争が泥沼化して以後、精神論に傾斜していく。

空母対空母の戦いでは、飛び立った艦載機の帰艦を確実に保証することが最も重要である。そのことに、日本軍は気がつかなかったのではなく、分かつてはいた。しかし日本軍の航空機に搭載されていた音声無線（無線電話）は雑音が多く、ほとんど通じなかった。

飛び立っていった攻撃機の編隊に母艦は指令できず、編隊を作っている航空機の間でも通信ができなかった。「トン・ツー」のモール信号は使えたが、全機に搭載されていなかった。母艦と編隊はお互いに何が起きているかを知らなかった。

一部の艦載機には方位検出装置が搭載されていた。しかしそれも性能が悪かった。クルシー式空三号無線帰投方位測定機がそれだ。アメリカのフェアチャイルド社が開発した製品を輸入して国産化したものだったが、十年以上前の古い技術から前進していなかった。

このため攻撃を終えて引き返す航空編隊は、母艦の所在地を探すのに一苦労した。間違えてアメリカの空母に着艦しかかったケースもあった。

対してアメリカ海軍はそのことに気がついていて、かつ物的な対策を講じていた。まず大型空母とともに、動きが

軽俊な小型空母を量産した。ばかりでなく、後方の部隊に交換用の航空機と搭乗員を乗せた予備空母を配置していた。

また味方空母が発する誘導電波を受信できる装置を航空機に組み込んだ。さらに航空機が不時着したとき、搭乗員が海上に浮かんでいられる救命具と、その位置を知らせる信号発信装置を配布した。駆逐艦や魚雷艇などは信号を頼りに、航空機搭乗員を救出することができた。

——日本軍は人命を軽視し、アメリカ軍は重視した。

といわれる。

事実、そうだったが、仮に日本軍が人命を重視したとしても、できなかった。

このことが日本時間六月五日に行われたミッドウェー海戦につながっていく。

## 二

ミッドウェー海戦（連合艦隊「MI作戦」）に連合艦隊が繰り出した艦船は「すごい」の一語に尽きる。

### 第一機動部隊

- ・空母四…赤城、加賀、飛龍、蒼龍
- ・戦艦二…榛名、霧島

・重巡洋艦…利根、筑摩

・軽巡洋艦一…長良

・駆逐艦…嵐、野分、萩風、舞風、風雲、夕雲、巻雲、

秋風、磯風、浦風、浜風、谷風

・油槽艦八

連合艦隊本隊

・空母二…鳳翔、瑞鳳

・戦艦七…大和、長門、陸奥、伊勢、日向、扶桑、山城

・軽巡洋艦二…北上、大井

・駆逐艦二十…吹雪、白雪、初雪、叢雲、磯波、浦波、

敷波、綾波、夕風、有明、海風、江風、夕暮、

白露、時雨、天霧、朝霧、夕霧、白雲、山風

この後方に攻略部隊（戦艦二、重巡洋艦四、軽巡洋艦一、駆逐艦八、油槽艦四）、攻略部隊支援隊（重巡洋艦四、駆逐艦二、油槽艦一）、攻略部隊護衛隊（軽巡洋艦一、駆逐艦十、哨戒艇三、油槽艦一、輸送船十二）が続き、伊号潜水艦二十三、潜水母艦六などが続いていた。

十二隻の輸送船には、ミッドウェー島、ひいてはハワイに上陸する陸戦兵七千六百人が乗っていた。総兵力十万人である。真珠湾攻撃の際の日本海軍機動部隊より、はるかに規模が大きい。

乾坤一擲の大決戦は、結果を知っているわれわれからすると「丁か半か」の賭博のようにも見える。作戦がうまく当たっていればアメリカ太平洋艦隊は壊滅し、ミッドウェー島は大日本帝国が占領することになっていた。

しかし全く逆の結果になった。

- ・ 陸用爆弾から魚雷への転換
- ・ 攻撃編隊の着艦か、攻撃隊の発艦か

この二つの判断ミスが重なった。帰還する日本の攻撃編隊の後ろについていったアメリカ軍攻撃編隊にとってラッキーだったのは、第一機動部隊の空母を旋回していた直掩機の燃料切れが迫っていたことだった。

連合艦隊の体勢についても、数々の敗因が指摘されている。

- ・ 海軍軍令部と連合艦隊（山本五十六）との齟齬。
- ・ 作戦の目的が曖昧だった。ミッドウェー島占領なのかアメリカ太平洋艦隊撃滅なのか。
- ・ ミッドウェー占領後の展望がなかった。
- ・ 南雲部隊の意思統一ができていなかった。

・ 第一機動部隊と連合艦隊本隊は三百キロ以上も離れて航行していた。艦隊本隊が戦いに参加していれば事態は大きく違った。

・ 日本の空母は板の甲板で艦内は密閉度が高かった。このため被弾すると爆風の被害が大きかった。また火災が発生したとき、可燃物を船外に破棄することが難しかった。

等々である。

——情報収集と分析能力の差が勝敗を左右した。という指摘もある。

この海戦で、日本の第一機動部隊はアメリカ空母艦隊の居場所を見つけるのに無駄な時間を費やした。四方八方に飛ばした索敵機に依存するほかなかった。この海戦では、索敵機がアメリカ艦隊を発見していたが、無線の電波出力が弱かったために正確な情報を伝達できなかった。

アメリカ軍も同じように索敵機を飛ばしたが、日本軍と決定的に違ったのは、同時に無線通信とレーダーを活用したことだった。

索敵機は何も発見できなかったが、追尾する潜水艦が日本艦隊の位置を逐一報告し、ミッドウェー島基地のレーダーが日本の連合艦隊空母群の所在を探り当て、さらに攻撃

機を電波で誘導して戦果を拡大した。

三

日本海軍の空母群は、ミッドウェー島攻撃隊からの「第二次攻撃隊ノ要アリ」という報告を受けて、甲板に並んだ攻撃機の爆装を艦船用から陸上用に転換した。さらに利根四番機からの報告「敵ハソノ後方ニ空母ラシキモノ一隻を伴ウ」を受けて、甲板上の航空機の爆装を再び艦船用に転換しようとした。

そこに、第一次攻撃隊が帰ってきた。

南雲は予定通り第一次攻撃隊の収容を優先し、それが終わったなら第二次攻撃隊を発艦させることを山口少将に伝えた。第一次攻撃隊を収容してから第二次攻撃隊を発艦させても遅くはない。このため今度は甲板上の航空機を再収用する作業が始まった。

その判断が空母決戦のタイミングを逸した。このとき、日本の第一次攻撃隊のあとを追ってきた敵航空隊が日本艦隊の上空に到着した。

空母は帰艦機を収容しているときか発艦させているときが最も弱い。甲板を大きく広げているだけでなく、高射砲や煙幕などを打ち上げることができない。アメリカ軍航空

機はそのタイミングをねらって奇襲をかけるかたちになった。

日本の空母三隻への命中弾は二発ないし四発だったので、通常の爆弾であれば各艦とも中破か大破の被害で済んだはずだった。ところが爆弾のなかに、新型爆弾が混ざっていた。落下した数秒後に起爆装置が働くのである。

これが被害を拡大した。

甲板に並んだ攻撃機が横転し、装填しつつあった爆弾に火が移った。

投弾や機銃掃射は思うがままだった。投下した爆弾は確実に日本海軍の空母甲板に落下していった。その甲板には燃料を満載した攻撃機が整列し、爆弾や魚雷を装備していた。誘爆が被害を大きくした。

格納庫の魚雷が爆発し、「加賀」「蒼龍」は沈没、「赤城」は大破・炎上し味方の魚雷で処分された。

帰還しようとした第一次攻撃隊の約百機は、着艦すべき空母が大破または沈没してしまったため、燃料切れで次々に海中に墜落した。

このときやや北に離れていたために無傷だった空母「飛龍」は、搭乗員を救助すべきだった。だが第二航空司令・山口少将はそれを後回しにした。

午前十時五十分、独断で発令した。



「全機今ヨリ発進、敵空母ヲ殲滅セントス」

飛龍から発艦した攻撃機は二十四機だった。この攻撃隊の第一波はアメリカ空母上空を援護していた戦闘機を振り切つて、ヨークタウンに三発の命中弾を与え大破させた。第二波はヨークタウンに魚雷二発を命中させ、巡洋艦一隻にも損害を与えた。

その間、山口は上空にとどまっていた赤城、加賀所属の残存機十五機を回収し最後の攻撃を準備した。

そこにエンタープライズから発進した急降下爆撃機十三機が来襲した。飛龍の上空を守る戦闘機は一機もなかった。アメリカ軍機は楽々と投弾し、四発の命中弾を加えた。

爆弾四発が艦橋付近に命中し、発生した火災が全艦に広がった。「飛龍」に対して行われたアメリカ軍の攻撃は、最終的に航空機百十五機、魚雷二十六本、爆弾七十発に達したという。

午後五時十分、沈没。

日本海軍は「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」の空母四隻、重巡「三隈」、艦載機三百二十一機および、三千五百人の人員を失った。アメリカ海軍の損失は空母「ヨークタウン」、重巡「ハンマン」、艦載機百五十機、人員三百七人だった。

日本軍の常勝に歯止めがかかった瞬間だった。

#### 四

この戦いを大本営は次のように発表した。

東太平洋全海域に作戦中の帝国海軍部隊は六月四日、アリューシャン列島の敵拠点ダッチハーバー並びに同列島一帯を急襲し四日、五日、両日に互り反復之を攻撃せり、一方同五日洋心の敵根拠地ミッドウエーに対し猛烈なる強襲を敢行すると共に、同方面に増援中の米国艦隊を捕捉猛攻を加え敵海上及航空兵力並に重要軍事施設に甚大なる損害を与えたり、更に同七日以後陸軍部隊と緊密なる協同の下にアリューシャン列島の諸要点を攻略し目下尚作戦続行中なり、現在までに判明せる戦果左のごとし。

一、ミッドウエー方面。

(イ) 米航空母艦エンタープライズ型一隻及ホーネット型一隻撃沈。

(ロ) 彼我上空に於いて撃沈せる飛行機約百二十機。

(ハ) 重要軍事施設爆破。

二、ダッチハーバー方面。

(イ) 撃沈破せる飛行機十四機。

(ロ) 大型輸送船一隻撃沈。

(ハ) 重油槽群二ヶ所、大格納庫一棟爆破炎上。

三、本作戦における我が方損害。

(イ) 航空母艦一隻喪失、同一隻大破、巡洋艦一隻大破。  
(ロ) 未帰還飛行機三十五機。

当時、軍事専門家は次のように指摘した。

「大和以下の戦艦が十一隻も随行しながら、空母群と三百マイルも離れたところを航行していた。これでは空母決戦となったとき、いかに全速力で駆けつけても敵空母群を砲撃することは不可能ではないか」

「戦艦艦隊は自らが標的となつて敵空母艦載機を引き寄せ、重装備の火砲で応戦しつつ、その間に空きとなつた無防備の敵空母群を叩くという戦術がなぜ取れなかったか」

だが日本帝国海軍は十分な能力を持つレーダーを備えていなかった。ゆえにそれができなかった。

連合艦隊は翌日の昼間攻撃を検討したが、アメリカ艦隊は早々に退避して戦場を離脱していた。索敵機では捕捉できないために、追撃を諦めざるを得なかった。

これに対してアメリカは次のように戦果を評価した。

——空母二ないし三を撃沈破、他の一ないし二空母を大破せしめたものと見られる。

六月六日、アメリカ太平洋艦隊指令長官ニミッツは次のようなコメントを発表した。

「真珠湾の復讐は、一部成就された。しかし、完全な復讐は、日本海軍が無能力になるまでは達成されないだろう。その方向に向かって、われわれは重要な前進をした。われわれはいまや、目標のなかば（ミッドウエー）に達したといつても、それは認められるだろう」

~~~~~ 補 注 ~~~~~

戦陣訓 明治期に西洋流軍隊制度が導入されるのと同時に移入された考え方で、戦いに勝ったあとでも味方の勝因と敵の敗因を分析し次の作戦に活かすことを指していた。ところが一九四一年、陸軍大臣東条英機の名で全軍に示された『戦陣訓』は、「生きて虜囚の辱（はずかしめ）を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」など、全将兵に死を強制する役割を果たした。併せて「戦陣訓の歌」も作られた。生きて捕虜になった者やその家族は「非国民」と非難された。

ポートモレスビー ニューギニア島の東南に伸びた半島のほぼ中央、オーストラリア側にある。日本軍にとつてはオーストラリアに上陸する橋頭堡、連合国軍にとつてはルソン島→台湾島→沖縄→九州と反攻・北上する起点として重要な位置にあった。日本軍のラバウル航空隊、ブーゲンビル島占領、サンゴ海海戦などはすべてポートモレスビー攻略のための作戦だったが、サンゴ海海戦の勝利と引替えにポートモレスビー攻略の意味が見失われた。山本五十六の死が太平洋戦争における日本海軍の戦略を狂わせた。

ラバウル航空隊 日本軍はガダルカナル島を抑え、さらに南進してオーストラリアに上陸する構想を持っていた。このためガダルカナル島北西のニューブリテン島、ブーゲンビル島に航空基地を建設して連合国軍に圧力をかけた。ニューブリテン島東端にあった航空基地がラバウルである。ここには台湾航空隊の零戦部隊が進駐し、ニューギニア島のポートモレスビーに連日の猛攻撃をかけた。

連合国軍はラバウルに向けてB-25の編隊を繰り出して反撃した。それによって、一九四四年の時点では日本軍の航空機はほとんど破壊され、航空基地としての機能を失った。基地の整備兵たちはそれでも零戦の残骸をかき集め、複座式の偵察用零戦を二機組み立てた。そのうちの一機が一九七二年八月、ラバウルの沖合い十キロの海底から引き揚げられ、これが国立科学博物館に保存されている。

フェアチャイルド社 Fairchild: 一九二〇年二月、シャーマン・フェアチャイルド (Sherman Mills Fairchild / 1896～1971) が設立したフェアチャイルド・エアリアル・カメラ・コーポレーションを前身とする航空機用精密機材メーカー。第二次大戦後、シリコンバレーの起点となるフェアチャイルド・セミコンダクター社の出資元でもある。ジョージ・フェアチャイルド (George Winthrop Fairchild / 1894～1962) は一九一五年から二四年までコンピュータインテュイティング・タービュレーティング・レコーディング (CTR のち IBM) 社の会長を務めた。

ミッドウェー海戦 (一九四二年六月五・六日) 文頭の数字は時刻を示す。

六月五日

〇四三〇 赤城、加賀、飛竜、蒼竜からミッドウェー島攻撃のため百八機が発艦。

巡洋艦「利根」から索敵機七機が発進

〇五三四 アメリカ軍飛行艇「PB Y5」日本軍機動部隊を発見
〇六〇三 PB Y5 飛行艇からアメリカ太平洋艦隊に報告「敵空

母二隻、戦艦数隻、ミッドウェーの三二〇度、一八〇マイル。針路二三五度、速力二五ノット」

〇六三〇 ミッドウェー島攻撃隊が島守備隊と交戦開始

〇七〇〇 ミッドウェー島攻撃隊より報告「第二次攻撃隊ノ要アリ」

〇七一〇 アメリカ軍雷撃機十機が日本機動部隊を攻撃（九機撃墜）

機動部隊司令長官・南雲中将より発令「第二次攻撃隊

本日実施。待機攻撃隊爆装二換エ」

〇七五五 アメリカ軍急降下爆撃機十六機が「飛龍」を攻撃（八機撃墜）

〇八〇〇 利根四番機から報告「敵ラシキモノ十隻見ユ、ミッド

ウェーヨリノ方位一〇度、二四〇マイル、針路一五〇度、速力二〇（ノット）以上」

南雲中将より利根四番機に返電「敵艦種を知らセ」

利根四番機「敵兵力ハ巡洋艦五隻、駆逐艦五隻ナリ」

〇八二〇 利根四番機「敵ハソノ後方ニ空母ラシキモノ一隻を伴ウ」

〇八三〇 利根四番機「サラニ敵巡洋艦ラシキモノ二隻見ユ。ミ

ッドウェーヨリノ方位八度、一五〇マイル、敵針一五〇度、速力二〇ノット」

南雲中将から山本連合艦隊長官に打電「敵航空母艦一、

巡洋艦五、駆逐艦五、ミッドウェーノ一〇度、二四〇マイルニ認め、コレニ向ウ」

空母「飛龍」山口二航空司令から意見具申「直チニ攻

撃隊発進ノ要アリト認ム」要アリト認ム」

南雲中将、山口少将に返電「揚収終レバ一旦北ニ向ウ

敵機動部隊ヲ捕捉撃滅センス」

「筑摩」から利根四番機応援の索敵機が発進

〇九〇七 第八戦隊司令官阿部少将より利根四番機に打電「筑摩機来ルマデ接触セヨ。長波幅射セヨ」

〇九二五 利根四番機「ワレ燃料不足、接触ヲ止メ帰投ス」

〇九三五 第八戦隊司令官阿部少将から利根四番機に打電「一〇

〇〇マデマテ」

〇九三八 利根四番機「ワレ出来ズ」

〇九三九 第八戦隊司令官阿部少将から利根四番機に打電「一〇

〇〇マデマテ」

〇九四一 利根四番機「ワレ出来ズ」

〇九五五 駆逐艦「嵐」が米潜水艦ノーチラスを雷撃

一〇〇〇 「ホーネット」発艦の雷撃機四十一機が機動部隊を攻

撃（三十五機を撃墜）

一〇二〇 南雲中将より発令「第二次攻撃隊、準備出来次第発艦

セヨ」

一〇二四 空母「赤城」艦上スピーカー「発艦はじめ」

アメリカ軍機が急降下し投弾開始

一〇二六 空母「赤城」「加賀」「蒼龍」が被弾

一〇四五 空母「蒼龍」総員退去

一一〇〇 空母「飛龍」から第一波攻撃隊が発艦

一一二〇 「飛龍」発艦の第一波攻撃隊がアメリカ軍空母「エン

タープライズ」を攻撃

「エンタープライズ」に火災が発生

一一三〇 第一機動部隊司令官・南雲中将が軽巡洋艦「長良」に

移乗

一六二三 空母「加賀」総員退去

一七三〇 アメリカ軍「ヨークタウン」発艦の爆撃隊、「エント

ープライズ」発艦の攻撃機が「飛龍」を爆撃

一九一三 空母「蒼龍」沈没

一九二五 空母「赤城」総員退去

空母「加賀」が大爆発を起こし沈没

六月五日

〇二三〇 空母「飛龍」総員退去

駆逐艦「卷雲」が「飛龍」に魚雷を発射

〇六一五 空母「飛龍」沈没

04 含牙篇

卷之九 修羅

066 ターニングポイント

067 ランチェスターの法則

068 寂寥

069 V T 信管

070 修羅

071 P L A N & D O

072 火炎

066 ターニングポイント

第六十六

ターニングポイント

一

太平洋戦争の転換期は一九四二年六月五日のミッドウェー海戦だと言われる。しかし陸上（島）の戦いを含め流と、七月から十一月にかけての五か月が転換期ではなかったか。強いてしよれば、九月・十月、すなわちガダルカナル島の攻防ということになるであろう。

破竹の勢いで勝ち進んだ日本軍の攻勢に歯止めがかかり、アメリカ軍が勢いを盛り返すには、いくつかの幸運と不幸が必要だった。個々の戦局においては、次のような出来事が記録されている。

6・5 ミッドウェー海戦

米Ⅱ空母「ヨークタウン」沈没

日Ⅱ空母「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」沈没

日Ⅱ陸軍北海支隊がアッツ島に上陸

7・16 日Ⅱ海軍設営隊がガダルカナル島に飛行場建設

に着手

8・5 ガダルカナル飛行場完成

米Ⅱガダルカナル島に上陸

8 7 第一次ソロモン海戦

米Ⅱ重巡洋艦「アストリア」「クインシー」「ヴンセンズ」沈没

重巡洋艦「シカゴ」大破

豪Ⅱ重巡洋艦「キャンベラ」沈没

日Ⅱ重巡洋艦「加古」沈没、「鳥海」「青葉」小破

ツラギ島の日本軍守備隊が玉砕

日Ⅱ一木支隊主力がガダルカナル島に上陸

日Ⅱ一木支隊主力が全滅

18 24 第二次ソロモン海戦

日Ⅱガダルカナル島に一木支隊第二梯団と川口支隊が上陸

9・3 日Ⅱタワラ島を占拠

米Ⅱガダルカナル島イボ岬に上陸

8 9 日Ⅱ伊号第二十五潜水艦が搭載機でアメリカ西海岸を爆撃

12 日Ⅱ川口支隊、ガダルカナル島飛行場奪還攻撃に失敗

- 25 日…ニューギニア島プアからブナに撤退
26 日…ガダルカナル島日本軍に物資輸送開始
10・11 サボ沖海戦
米Ⅱ重巡洋艦「ソルトレイク・シテイ」大破
日Ⅱ重巡洋艦「青葉」「古鷹」沈没
23 日…大本営がガダルカナル島第二師団長・川口少将を罷免
24 日…ガダルカナル島総攻撃
26 南太平洋海戦
米Ⅱ空母「ホーネット」沈没
空母「エンタープライズ」大破
日Ⅱ空母「翔鶴」「瑞鳳」大破
11・12 第三次ソロモン海戦（～5日）
米Ⅱ戦艦「サウスダコタ」大破
軽巡洋艦「アトランタ」沈没
16 日本艦隊Ⅱ戦艦「比叡」「霧島」沈没
日…大本営、ガダルカナル島第十七軍に持久戦を指示
28 日…大本営、ガダルカナル島撤退を決定
30 ルンガ沖海戦

この期間、日本帝国海軍は空母四隻、戦艦二隻、重巡洋

艦三隻を失った。これに対してアメリカ太平洋艦隊が失ったのは空母二隻、重巡洋艦三隻で、損害は日本がやや大きかった。だが残存の主力を見ると、日本は空母六隻、戦艦十一隻を保有していたのに対し、アメリカは空母二隻に過ぎなかった。

アメリカ太平洋艦隊の戦艦の多くはやつと真珠湾から引き揚げられ、大車輪で修理が行われている最中だった。航空兵力においてアメリカは増産に次ぐ増産を続け、ようやく日本軍との差を縮めていた。陸海空、ほぼ互角である。

二

何が戦局の転換を促したかという点、生産力である。この年八月十五日付け『機密戦争日誌』はこう記す。

物的困窮に立ち入れる陸軍省は遂に独逸より鉄一〇〇万トン、船五〇万トン購入申込みを議するに至る。窮通か、番町皿屋敷のお化けか。

これを理解するには若干の——風が吹けば桶屋が儲かる的な説明がいる。

第二次大戦は、鉄の戦いであった。鉄がなければ戦争の

経営が覚束なかった。

四二年度の粗鋼生産量は四百二十七万トンが見込まれていた。それは前年度に輸入された鉄鉱石の量から割り出された。しからば来年度はどうであるかというと、鉄鉱石の輸入量が激減したために、内閣企画院がはじき出した数字は三百万トンだった。三〇％の減少である。

原因は輸送船舶の逼迫であった。

日米開戦の四一年十二月時点で、日本が保有していた輸送船舶の総排水量は六百三十万トンだった。このうち百八十万トンを海軍が、二百十万トンを陸軍が徴用し、残った二百四十万トンが国内産業に振り向けられた。

「粗鋼の生産を維持するには、さらに六十万トンの船舶が必要である」

と企画院は言った。鉄鉱石を輸入しなければならない。

一九四一年十二月から四二年三月までの間に、十二万七千トンが純増した。日本は連合国軍から拿捕した艦船を哨戒艇に援用し、沈没・座礁した船を浮揚・修理し、懸命に新造した。その結果、この期間は喪失を穴埋めすることができた。

ところが四二年四月から、船舶の損失が急カーブで上昇した。アメリカの潜水艦は、日本の補給船を狙い撃ちにした。戦争資源を絶つ、という作戦である。この戦法はナチ

ス・ドイツが編み出した。

さらに日本は、ガダルカナル島への物資補給で多くの船舶を失った。その要因はアメリカ艦隊の砲撃ではなく、張り巡らした無線通信網、暗号の解析、潜水艦の活躍に依っていた。

一九四二年四月から四三年三月までに日本が獲得した船舶は、拿捕・浮揚修理三十七万七千トン、新造三十六万二千トンの計七十三万九千トンだった。ところが喪失は百二十五万トンに達し、差し引き五十一万一千トンの純減である。結果、戦地に兵力を送ることや、南方で得た鉱物資源を運搬することがままならなくなった。

粗鋼生産を維持するには六十万トン相当の船舶を確保しなければならない。しかし原料の輸送に船舶を回せば、戦場への物資輸送が滞る。

「来年度の装甲の生産量は三百万トンに減少する」

こう聞いたとき、陸軍参謀本部は

「ばかを言うな」と気色ばんだ。

「最低でも三百五十万トンは要る」

と叫ぶ陸軍に対して企画院は答えた。

「それなら全ての船舶を物資の輸送に割り当てなければならぬ」

「ばかを言うな」

参謀本部は別の意味で同じ言葉を吐いた。

このとき参謀本部は、一方で船舶の増徴を要求していた。「十二月五日までに二十四万トン。さらに作戦遂行用に九万五千トン、来年三月までに損害補填用として十六万五千トンがほしい」

合計五十万トンである。

「ばかなことを言うな」

と言ったのは、今度は軍需省だった。そんなにも陸軍に船を持っていかれたら、鉄も石油も手に入らなくなる。

この堂々巡りの中で、ナチス・ドイツに頼み込もうという話が出た。

だが、それはほとんど空想ないし漫画に近い。ナチス・ドイツはイギリスへの渡洋爆撃とロシア戦線を維持するのに精一杯だったし、加えてフランス、ベルギー、オランダなどでパルチザンのゲリラ攻撃に手を焼いていた。だけでなく、どのような手段で運ぶのか。

三

陸軍参謀本部が船舶三十五万トンの増徴に固執したのは、ガダルカナル島に送り込んだ三万五千人の将兵のためだった。戦いを維持するには大量の物資を補給し続けなければ

ならない。

三万五千人が一日に八百七十五グラムの食糧を消費するとして、毎日、約三十一トンの食糧を運ばなければならない。そのほかに兵器、砲弾、燃料が要る。これをまかなうには排水量にして数万トンに相当する船舶が要るであろう。このとき最も頭を痛めていたのは東条英機であつたらう。彼は第二次組閣で内閣総理大臣であつたばかりでなく、外務、陸軍、軍需の三省の大臣を兼ねていた。陸軍大臣の立場では参謀本部が要求する船舶三十五万トンの増徴を認めるべきだったが、軍需大臣の立場では鉄鋼三百五十万トンの生産確保を優先しなければならない。

それはどう考えても二律背反というものだった。逆立ちしても解決策は出てこない。そのために東条は、内閣総理大臣として決断することができなかった。

東条の意を受けたのは、陸軍省の軍務局長・佐藤賢了である。

一九三八年三月に行われた国家総動員法の審議に際して、議員の野次に「黙れ！」と発言して問題になった。一九三九年、第二十一軍参謀副長（大佐）、四〇年南支那方面軍参謀副長を経て、この年の四月、軍務局長に就任していた。東条腹心の一人といつていい。

この佐藤が参謀本部に出向いて、

「陸軍に船を譲ると鉄の生産は二百万トンに落ちる」と告げた。

同じ陸軍省の中で意見が真つ二つに割れていた。

「ばかを言うな」参謀本部は怒った。

『機密戦争日誌』十月三十日付

陸軍省軍務局長曰く、①来年度鉄三五〇万トンは絶対確保するを要す、②右保持困難なるが如き作戦は御免蒙る。意中言外に「ガ」島作戦の中止を要求するが如し。

鉄か船か、原料か物資かで大本営が割れている中で、戦争は待ったなしで進んでいた。にもかかわらず、東京では十二月に入っても、船舶の割当てをめぐる意見の対立が収まっていなかった。

十二月五日、東条は臨時閣議を招集した。船舶割当問題に決着をつけるためだった。

その席で東条は言った。

「陸軍に二十四万トンの増徴を認める。九万五千トンの追加徴用も認める」

ここまではよかった。

「ただし、損害補填用は八万五千トンとする」

この決定に参謀本部は激怒した。

『機密戦争日誌』十二月五日付

次長とくに第一部長激怒。無法の統帥干渉、傲慢無礼の閣議決定に至る間に於ける陸軍大臣の態度に対し、嫌き足らずものあり。次長官舎に軍務局長を招致して事情を聴取、激論あり。

第一部長激昂して軍務局長の間に夫々二つずつの鉄拳飛ぶ。軍務局長の反撃冷静なるものあり。種村は軍務局長をして其席を去らしむ。

次官官舎に至り、次官、局長に対し、第一部長より色々説明、陸軍省の善処を要望するところあり。

激論数刻、午前三時に至るも遂にまとまらず、此の間第一部長、大臣との面会を強要するも、陸軍大臣の消息不明を理由として面接せしめず。

翌日、田辺、田中らは陸軍大臣としての東条に面会を強要して、再び激論となった。

このとき田中が激昂して、東条を

「バカヤロウ」

と罵倒した。

東条は内閣総理大臣でもある。

戦争運営の中枢が混乱・分断するなか、大本営は一九四

二年十二月三十一日にガダルカナル島からの撤退を決定、翌四三年二月一日から撤退開始、七日完了までの間、日本の船舶による輸送力は排水量に換算して七万七千トンが失われた。四月十八日、ソロモン上空で連合艦隊司令長官・山本五十六が戦死した。第六十六

~~~~~ 補 注 ~~~~~

**アッツ島** アリユーシャン列島の島で、一九四二年六月、ミッドウェー作戦に呼応して①哨戒線の前進②米ソ連絡網の遮断③アメリカ軍による航空基地利用の阻止——などを目的に、陸軍北海支隊と海軍北方部隊が上陸し占拠した。しかしミッドウェー作戦で連合艦隊が敗北したことにより、アリユーシャン列島の戦略的な価値が無くなった。米軍の反攻が強まる中で大本営はアッツ島とキスカ島を無策のまま放置することになった。

一九四三年五月十二日、アメリカ軍は戦艦三、空母一、重巡三、軽巡三、駆逐艦十二の艦隊が支援して第七歩兵師団一万一千人をアッツ島に上陸せしめ、北海守備第二地区部隊二千六百五十人と激戦が展開された。五月二十九日、日本守備隊の残存三百人は山崎保代陸軍大佐ともども玉砕した。

**山崎保代**・やまさき・やすよ／1891～1943。山梨県都留郡禾生村に生まれ、一九一三年陸軍士官学校を出た。四〇年三月歩兵大佐に昇進して歩兵第一三〇連隊長、四三年二月潜水艦「伊三二」でアッツ島に着任した。玉砕後、二階級特進して中将となった。

**ツラギ島** 旧ソロモン王国の故地で、ガダルカナル島の向かいにある。一九四二年五月に日本軍が占拠し、三か月後の八月八日にアメリカ軍の攻撃によって守備隊が玉砕した。同島の東側にあるガブツ島とタナンボゴ島は日本軍航空隊の水上機の基地で、ツラギ島と同時にアメリカ軍が奪回した。ツラギ、ガブツ、タナンボゴ三島の日本軍守備隊は約千百人だったが、生存者はわずか三人

だった。駆逐艦「菊月」と輸送船「第三利丸」が座礁したまま放置されている。

**タラワ島** イギリスの植民地だったが日本軍の上陸によって独立し、現在はキリバス共和国となっている。日本軍はこの島に陸上局地戦闘機「隼」、九七式攻撃機を配備していて、上陸してくるアメリカ軍におおきな損害を与え、一度は撃退することに成功した。アメリカ軍にとつてのウェーキ島に等しい。四三年十一月二十一日早朝に始まった陸戦は二十三日夜に集結した。日本軍の戦死は四千七百十三人、生存は百六十人、アメリカ軍の戦死は一千九人、戦傷は二千二百九十六人だった。

## 067 ランチェスターの法則

第六十七

ランチエスターの法則

一

ミッドウェー海戦の大敗をきっかけに、大本営は冷静さを失い始めた。

この言い方に対する異論・反論はもちろんある。

アメリカの空母を艦隊決戦におびき出して壊滅し、ミッドウェー島を不沈空母としてハワイ、アメリカ本土を空爆するという山本五十六の大構想に、当時の大本営海軍部は反対だった、という説である。

大本営は冷静だったが、山本は「この作戦が通らなければ連合艦隊長官を辞める」とねじ込んだ、というのである。そうであったかもしれないが、最終的に大本営はMI作戦を許可した。

代案がなかったということだし、その裏で陸軍の一幹部が首相に「バカヤロウ」の罵声を浴びせるような状況があった。冷静だった、と言えるかどうか。

船舶を資源の運搬に回して鉄の生産に充てるべきか、物

資や兵器・弾薬の輸送に用いるべきかは難しい選択だったかもしれないが、その議論に半年近くもの時間を費やしたのでは話にならない。この間の停滞が、戦局のムードを一変させた。追い上げ、追いつき、反撃に出る方が強い。

アメリカ軍はこの間に、部隊を入れ替えていた。

例えば焦眉の的だったガダルカナル島では、七月二十一日の上陸から激戦を戦ってきた第一海兵師団がようやく疲弊し、第二海兵師団一万四千七百三十三人、第二十五歩兵師団一万二千六百二十九人の新鋭部隊に交替した。戦車、水陸両用車輛、無線電話などが空輸され、兵士はM1ガーランド銃かM1カービン銃を装備していた。

大日本帝国陸軍の歩兵が装備していたのは一九〇五年（明治三十八）に制式採用された「三八式歩兵銃」である。元込め式で弾丸五発を弾倉できた。一九四一年末までに改良が加えられ、五発を一セットにした挿弾子を装填でき、歩兵一人当り百二十発の弾丸を携行した。

これに対してM1ガーランド銃は八発の挿弾子を装填でき、M1カービン銃は十五発弾倉で連射が可能だった。単純計算でアメリカ軍の破壊力は日本軍の倍を上回っていた。

おまけに日本軍から奪取した飛行場は、戦車を改良したブルドーザーで短期間に整備・拡張され、大型輸送機の離



着陸が可能になった。その周辺に兵舎が建ち並び、病院をはじめバーや野外映画館までがしつらえられた。

以後のサイパン島、硫黄島、沖縄などでも同様だったが、アメリカ軍は橋頭堡として一定の面積を確保すると、まず船でブルドーザーと鉄の板を運び込んだ。ブルドーザーで樹木をなぎ倒し、土地を均し、そこに鉄の板を敷き詰める。飛行機が離着陸できれば、大型の機甲車輛と火砲、歩兵、物資などを送り込むことができる。そういうシステムができていた。

ジャングルの何百か所に鉄条網が備えられた。鉄条網には手榴弾が仕掛けられ、その手榴弾にはワイヤーが結び付けられた。日本兵が近づいてワイヤーに足を引っ掛けると手榴弾が爆発する。その爆発音を頼りに日本兵を追撃する仕掛けだった。

しばらくすると手榴弾の代わりにマイクがしつらえられた。マイクを通じて機銃掃射やアメリカ兵の会話、車両のエンジン音などを流す。それに日本兵が応射するのを待つ。さらに無人となった家屋に食糧と水を用意した。その周りに一個小隊を配備し、日本兵が食糧や水を盗みにきたところを一斉射撃で斃す。

こうしたいくつもの罠のために、日本兵はむざむざと命を失っていた。

そればかりではなかった。

アメリカ軍は「情報」の収集と活用で日本軍を凌駕した。ガダルカナル島では、占領した日本軍の基地の燃えかすの中から、日本語の日記を日系二世の海兵隊員が解読した。彼ら日系二世の海兵隊員の中には、日の丸の鉢巻を締めて日本軍と戦う者もいた。アメリカ本土で暮らす父母や兄弟の名譽がかかっていた。

日記に記されている出来事からアメリカ軍が割り出したのは、日本軍の士気や補給の状況だけではなかった。そこには日本の地名、方言、習慣に関する情報が記録されていた。

わたしたちは意識することなく、自身の出身地を語っているものである。アメリカ軍はジャングルの奥に潜む日本軍の出身地を割り出した。日本の陸軍が県単位で編成されていることを知っていたのである。

所属師団を割り出し、その兵力を察知した。こうした情報は一元的に集約され、日本軍が太平洋にどのよう兵力を配置しているかを知る手がかりとなった。

個別の局面でいえば、兵員の気質——粘り強いのか、猪突猛進か、合理性を重視するか、など——を勘案して戦術を組み、投降し、あるいは捕らえた日本人捕虜を尋問する際、東北弁、関西弁、四国弁、九州弁が話せる日系二世を当て、

故郷の話聞きだすことから心を開かせることも可能になった。

前線に配備された計算機は、最前線の部隊から送られてくる様々な情報を、その場で分析することができた。ある場合は暗号であったり、ある場合は占領したナチス・ドイツやイタリアや日本の前線基地の糞尿だったりした。

いささか尾籠な話だが、アメリカ軍は敵軍が残した糞尿の量から、兵員の数を推測し、作戦をシミュレーションしようとした。戦場に配置された計算機が、数値を算出したことはいうを待たない。

第二次大戦は、戦闘を計数化した初めての戦争だったということができる。

## 二

戦闘を計数化する、とはどういうことか。

ナチス・ドイツ、ファシスト・イタリア、大日本帝国の枢軸三国との戦争が現実のものになりつつあった一九四〇年、アメリカ合衆国大統領ルーズベルトはコロンビア大学の数学教授チャリング・タープマン、プリンストン大学のフィリップ・モースといった数学者を集めて、キムボール海軍作戦研究班に特別プロジェクトを編成した。

プロジェクトチームに課せられたのは「ランチェスターの法則」(Lanchester's laws)の実践的研究だった。

「ランチェスターの法則」は、現在はビジネス上の戦略を策定するときの基本原理と受け止められている。経営コンサルタント会社などが研修講座で行う「ビジネス・ゲーム」は、大半がこの法則をモデル化したものといっている。

——ビジネスも戦いの一種である。

という認識に立つてのことだが、この法則の特徴は不特定条件ないし複数の条件が重なり合ったとき、最も適切な判断を導き出すことにある。それは変化が激しければ激しいほど、弱者と強者の条件を特定することができない、という観点から戦略をとらえようとしていることだ。

それまで圧倒的な強者として君臨していた企業でも、市場そのものが縮小してしまえば弱者になってしまう。そこで、現状把握と将来予測、周辺の動向などを考慮し、「弱者の戦略」か「強者の戦略」のいずれかを採用すべきであるという。

この法則は、イギリスの航空工学技術者で、のちに英国学士院会員、法学博士、王立航空協会名誉会員となったフレデリック・ウイリアム・ランチェスターが、第一次大戦中に行われた空中戦のデータを解析する中から一九一四年に発見したといわれている。

ランチエスターは有名な大学で専門的に統計学や経営学を学んだわけではなかった。最初、ガス会社に入り、ガソリンエンジンの設計と製作に携わった。一八九二年、二十四歳の時に自分が設計したエンジンを自動車に搭載して走らせることに成功した。

彼は一躍、「イギリス初のガソリンエンジン自動車の開発者」として知られることになった。それをきっかけに自動車会社を設立し、「ランチエスター・カー」を製造・販売したが、事業としてはパツとせず、飛行艇製造会社の技術コンサルタントを経て、一九一三年に「ランチエスター研究所」を設立した。

翌年、四十五歳のとき、雑誌に連載を始めた。「飛行機は今後、戦争にどう使われ、戦争をどう変えていくか」という内容で、それは第一次大戦のときの航空機の戦いを分析したものだ。

その中で、理論の原型となる論文二編を発表したのである。

法則の第一は「一騎打ちの法則」と呼ばれる。

中世的な戦争は一对一の戦いを中心なので、敵味方の力量が同等であれば、数の多い方が勝つ。戦闘は一对一で相殺されつつ進行するため、あぶれた兵力は戦闘できずに余ってしまいが、相手がすべて倒れたとき一人でも残ってい

れば戦いに勝利することができる。

将棋の「歩」を使って行う「はさみ将棋」という遊びを考えればいい。対戦者が交互に一手ずつ指す。相手の駒に前と後、左と右を挟まれた駒は盤上から取り除かれる。

理屈で言えば相互に駒を一つずつ失い、最後に三対二の戦いになる。ところが実際には、交互に一駒ずつ失うわけではない。それが作戦の妙であり、見落しとの痛いところだ。

ところが近代戦争は違う。

銃や大砲といった飛び道具、戦車や戦闘機などが登場した第一次大戦を契機に、戦争は数の理論から質の理論に転換した、と彼は結論づけた。戦闘は一对 $n$ で行われ、仮に味方の数が敵より少なくとも、敵に集中的に損害を与えることができる。

これは本将棋を使うとうまく説明がつく。

相手の「玉」に味方の駒を殺到させればいいのである。相手の「玉」の行きどころを封じてしまえば勝負がつく。相手にいくら駒を渡しても構わない。どうせ一手で一駒しか使えないのだ。

将棋の駒の働きにはルールがあって、「歩」が「桂馬」を守り、「桂馬」と「香車」が逃げ道を封じ、遠くから龍と馬が睨みを利かせればいい。また味方の数が敵より多い

場合、それぞれがあぶれることなく戦闘に参加できるように、多面展開を行えばいい。

太平洋戦争の後半にいたってアメリカ軍が取った作戦がこれだった。南方から北上する陸軍第六、第八軍、中部太平洋から西進する太平洋艦隊と海兵師団のために、日本軍は兵力を散開させざるを得なかった。これを「集中効果」といい、物量は「多面展開」であった。

### 三

いわれてみればその通りで、理論としては単純なものだった。ランチェスター自身も、雑誌に書いた自分の論文が近代戦争の基礎理論として重宝がられるようになるとは考えもつかなかった。

一方、軍艦や航空機、戦車、銃砲の数量だけを重視していた軍当局者、政治家たちにとって、「集中効果の法則」と「多面展開のルール」は革新的な理論にはかならなかった。

問題なのは、いかにすれば「集中効果」をあげることができるか、だった。すなわち、兵器の性能と兵力のバランスをどのように最適化するかである。

キムボール海軍作戦研究室（班から室に昇格）は、戦闘

力

——「戦略力」と「戦術力」に分けて考えるべきである。という結論に到達した。

さらにコロンビア大学のクープマンは、全戦闘力の何割を「戦略力」に、何割を「戦術力」に配分するかという、「戦闘力配分の法則」を発見した。それはこんにち「クープマンの法則」として知られている。

最小の損害で最大の戦果を上げるには、全戦闘力の三分の二を「戦略力」に、三分の一を「戦術力」に配分するべきであるというものだった。敵地を爆撃する場合、味方の爆撃機の損害を無限にゼロに近づけるには、迎撃する敵の戦闘機の製造能力を無限にゼロに近づければいい。

つまり、戦闘機を製造している工場や補給網を徹底的に破壊してしまえば、味方の損害は限りなくゼロに近づく。これが「戦略爆撃」の原理となった。アメリカ軍が大型爆撃機B-29をもつて執拗に日本本土の工業地帯を爆撃したのは、クープマンの法則に基づいていた。

一方、大統領ルーズベルトや国務長官ハルなどが頭を悩ませていたのは、アメリカ陸海空軍が主張する兵器や装備の優先度と財政の問題だった。彼らの評価に任せる限り、客観的なプライオリティが確定できず、軍事費は天井知らずに膨張する。軍は軍需産業と密接な関係にあつて、上乗

せした軍事予算をめぐって陣取り競争をしているに過ぎないのだ。

そこで専門の研究チームが構成され、どのような状況が想定されるか、その場合にどのような作戦を立て、どのような兵器が敵に最大のダメージを与えるかを研究することになった。戦略のシミュレーションであり、OR（オペレーションズ・リサーチ）の始まりとなった。

プロジェクトチームの数学者たちは、陸海空軍の作戦立案担当官や現場の指揮官などから、様々な戦闘の想定をヒアリングした。その結果、双方が同じ力量であれば、一の敵を打ち負かすには三の攻撃力が必要であることを発見した。さらに全兵力の一分が戦死や戦傷で戦線から離脱すると、組織的な戦闘能力が大幅に失われることを見出した。

また「弱者の戦い方」として、

- ・ 局地戦を選ぶ
- ・ 接近戦にもちこむ
- ・ 兵力を一点集中させ陽動作戦をとる

といった、具体的な戦術ルールを編み出した。

次いで、「強者の戦い方」では、

・ なるべく確率戦にもちこむ

・ 総合戦を展開する

・ 遠隔的戦闘にもちこむ

・ 短期決戦をねらう

等々の戦術ルールが確立されていた。

さらにプロジェクトチームは、当初の想定に入っていないかった結論を出した。

「重要なのは補給である」

というのである。

兵士の訓練度、組織の統率力、兵器の性能などがほぼ拮抗している場合、勝者になるには潤沢な物資と、その適切な補給が決め手になる、というのである。ここに「補給」という新しい概念が誕生した。その基礎的要素とは、

一、実際の戦闘は、兵力の消耗と補給によって展開される。

一、敵味方双方の兵器は絶えず生産され、絶えず改善の努力が行われる。

一、前線の戦闘力は後方補給力によって左右される。

というものだった。「ランチェスター戦略モデル」と呼

ばれるのがそれである。

プロジェクトチームはそれだけにとどまらず、複雑な計算式を作り上げた。

アメリカ政府は第二次大戦を、大きな事業の運営と同じ視点でとらえようとしていた。計数的経営の発想が、戦争に適用されていた。ここで計算機の重要性が浮上してきた。IBM社からの提案をルーズベルトが受け入れたのは、こうした下地があったからだった。

加えて陸軍はレミントンランド社に、海軍はIBM社に、連邦政府は主要な工科系大学に、それぞれ計数処理に適した新型計算機の開発を発注した。国を挙げての計算機開発競争が始まった。

レミントンランド社とIBM社の新型計算機は第二次大戦には間に合わなかった。だが、その成果は一九四五年以後、相次いで実用化されていく。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

挿弾子 防衛省の説明には「弾倉への装弾を容易にするために用いる弾薬の保持具」とある。挿弾子を用いると、手で一発ずつ装填するより素早く再装填が行える。

M1ガーランド銃 一九三二年に開発された初の自動小銃で、弾丸八発を装弾することができた。弾丸を発射した後の薬莖除去と弾丸装填を自動的に行う機構を備えたが、大量の火薬を消費するデメリットがあった。このため輸送力と兵站管理力が必須だった。**M1カービン銃** 一九四一年に開発され、ほぼ同時に制式採用された。

チャリング・クープマン Tjalling Charles Koopmans／1910～1985。

フレデリック・ウィリアム・ランチェスター Frederick William Lancaster／1868～1946。

068 寂寥

第六十八

寂寥

一

ミッドウェー海戦を境にアメリカ軍の劣勢挽回に勢いがついたのは事実だった。しかしアメリカ軍は、この時点ではまだ

——優勢になった。

とは判断していなかった。

対して日本軍、とくに海軍は意気消沈し、次善の策を講じることすらできなかった。山本五十六が乾坤一擲の総兵力で臨んだ艦隊決戦に、戦艦や重巡洋艦などが参加しないまま、主力空母の半数を失ってしまった。そのショックがあまりにも強烈だったのだ。

海戦に参加した将兵には緘口令がひかれ、他の部隊より優先的に激戦地に送り込まれた。日本の大本営は緘口令のうえ、口封じをした。

『機密戦争日誌』七月十三日付

近来戦争指導活発化せず。ミッドウェー以来、海軍の海軍本位的威勢よき積極論を聞かざるも亦寂寥。

一方、パプアニューギニアのポートモレスビー攻略作戦は着々と進められていた。六月十六日、ガダルカナル島に連合艦隊の第十一設営隊、七月一日に第十三設営隊が上陸して、ルンガ川のほとりに飛行場を建設し始めた。これに對してアメリカ軍は陸海軍共同によるソロモン諸島奪還を計画し、七月十日に「ペスト」と名づけた作戦を発動した。八月七日、ガダルカナル島に向けて最初のアメリカ軍部隊が発進した。当初予定された攻撃部隊第一海兵師団の兵力は一万九千人だったが、一個連隊をサモア島に振り向けられ、実質的には二個連隊に過ぎず、これをツラギ島とガダルカナル島に分けると、それぞれに上陸させるのは一個連隊に過ぎなくなる。

しかも兵装は旧式で、アメリカ本土から三週間前に到着した新兵が中心だった。つまり、訓練を十分に受けていない緒隊の寄せ集めだった。本気で反攻基地を確保しようとしたのでなく、いわば日本軍の出方を探るための武力偵察に近い。

ガダルカナル島の日本軍守備隊（約二千四百人）は、それを「アメリカ軍の反攻」と早合点し、ジャングルの中に

逃げ込んでしまった。反対にツラギ守備隊七百人は上陸してきた六千人のアメリカ陸戦隊に真正面からぶつかり、捕虜二十三人を出して全滅してしまった。

「ランチェスター戦略モデル」をもつてすれば、ガダルカナル島の日本軍守備隊は水際で粘り強く戦い、ツラギ島守備隊はゲリラ戦に持ち込むべきだった。

同日午前十時半に、「ペスト」作戦を展開中の第一海兵師団通信部は

——STOより。二十四機の雷爆撃機、貴地に向かう。という通報を得た。

STOというのは、太平洋の島々にアメリカ軍が配置した監視員の符号である。

この通信はボルネオ島のポートモレスビーで受信され、タウンズビル（オーストラリア）↓キャンベラ↓ハワイのルートでアメリカ海軍太平洋艦隊司令部に届けられた。

太平洋艦隊司令部はただちにガダルカナル沖に遊弋中のオーストラリア海軍重巡洋艦「キャンベラ」に緊急を知らせ、艦隊は戦闘準備を整えることができた。

飛来した日本の陸上攻撃機二十七機のうち五機、艦上爆撃機九機のうち五機、零戦十七機のうち二機が、翌日も同じ方法で陸上攻撃機二十三機のうち十八機、零戦二十五機のうち二機が、それぞれ撃墜されている。

この通信網は以後も継続して活用され、日本の航空機は出撃するたびに的確な迎撃機や対空砲火に遭遇して大きな損害を出した。これに対して日本軍は、事前に迎撃機が舞い上がっている、高度の違いから侵入する連合軍機を見逃し、陸上施設や艦船への爆撃を許している。

以後のガダルカナル島の戦いを詳述するのは、本書の目的ではない。概略をいえば、アメリカ軍の物資陸揚げ中に日本艦船が襲撃した第一次ソロモン海戦は日本軍が勝った。このとき陸軍参謀本部は「ガ島に人質を取った」と喜んだ。ところが上陸した一木支隊、第三十五旅団の攻撃が失敗した。陸上部隊を救援するために出向いた艦隊がアメリカ空軍と潜水艦によって沈められた。何度試みても結果は同じだった。

三万五千人の兵士が孤立した。人質を取られたのは日本軍だった。

二

『機密戦争日誌』はこの間、次のように記す。

九月十日付

海軍勝手な作戦而も拙劣なる作戦をやり不経済油の使用

をやり今更油が足りぬ故民需特配を中止するが如きは無責任も甚だし。海軍も充分右責任を感じある如きも、現実には石油なきを如何せん。ソロモン海戦尚逆睹し難く連合艦隊主力未だラホールにある現状に於いて特に然るべし。海軍今日の苦境すべてミッドウェー海戦に起因す。

十月二十六日付

ソロモン方面陸軍戦況全く頓挫せり。然るところ海軍作戦は意想外進展しありて同慶に堪えず。第一部長、開戦以来未だ嘗てなき屈辱を感じと述懐せらる。総長の陛下に対し奉る心中をお察しし陸軍統帥部の苦衷言わん方なし。

大本営は、適切な戦局の分析ができていなかった。情報の客観的な分析と、様々な条件のもとの柔軟な作戦の変更に対応する機能が、日本軍には欠けていた。また繰り返しになるが、物資の輸送と補給の重要性に気がついていなかった。

インパール作戦でもそうだったように、日本陸軍の物資調達は現地主義が貫かれた。すなわち占拠した土地の物品を掠め奪い、武力をもって強奪し、駐屯先を耕し作物を得るのである。十五世紀のチンギス・ハンの戦法と少しも違わない。

このためにガダルカナルでは物資の輸送に極端な消耗が強いられた。

一九四二年十一月二十五日から四三年一月三十日まで行われた日本軍による補給作戦は、駆逐艦六十九隻、潜水艦四十六隻などによって遂行されたが、送り込んだ食糧、弾薬、兵器など三千三百トンのうち、揚陸されたのは七百五十六トン、二二・九％に過ぎなかった。

七百五十六トンというのは決して小さな数字ではないが、このうち食糧は六百八十六トンであつて、同島に取り残された将兵二万八千人が二十八日間で食べつくしてしまう量なのである。そういった緻密な計算がないまま日本陸軍は次々に兵団を送り、自らの首を絞めた。それは「皇軍は不敗である」という過信と面子のゆえだった。

とはいえ、日本軍によるガダルカナル島の撤兵は太平洋戦史に残る名作戦とされている。

指揮を執ったのは連合艦隊の山本五十六長官だった。

彼は同島の将兵が救出地に集合するよう、味方に対する欺瞞作戦を実行した。航空機をもって同島のアメリカ軍基地を攻撃し、反攻に出るように思わせた。さらに現地の司令部に、

——新たに上陸させる兵団と合せて敵を挟撃するのである。

という偽の情報を流した。

彼は駆逐艦二十隻を二隊に分け、一隊を橋本信太郎少将に、もう一隊を小柳富次少将に委ねた。

救援隊はそれぞれ単艦回避運動距離一キロの間隔をおいて二列縦隊で進み、途中、アメリカ軍の航空機四十機が攻撃してきたが、上空を掩護していた零戦三十機がこれを撃墜し、次に繰り出してきた魚雷艇部隊を橋本少将麾下の駆逐艦が応戦して炎上させ、二月一日午後十一時に同島エスペランス岬の四百メートル沖合いに到達した。これによって五千四百十四人が救出された。

同様の方式で二月四日に第二次救出作戦が行われ、四千九百九十七人が収容された。第三回目の救出作戦をめぐって、アメリカ軍に察知されているかどうか、議論が分かれた。駆逐艦艦長が鳩首し、決行が決まった。

二月七日、第三次救出作戦が敢行され、二千六百三十九人が運び出された。

駆逐艦二十隻による作戦行動がアメリカ軍に知られなかったはずはなかった。彼らは日本軍の暗号を解読して十分な情報を手に入っていたが、太平洋艦隊の司令長官ニミッツは、山本長官の偽せ情報を信用した。つまり、日本軍は懲りずに、またぞろ大兵力をガダルカナル島に運んでいる、と思つたのだ。

——運べるだけ運ばせればいい。

と彼は考えた。

——日本の一個師団でもガダルカナル島に上陸してくれば、他の戦闘地域の脅威が減るであろう。このためアメリカ軍は日本の駆逐艦隊の行動を見て見ぬふりをした。

——頃合い。

と攻撃に出たアメリカ兵が見たのは、ゴミの山だった。

日本兵は一人も残っていないかった。

こうしてガダルカナル島はアメリカ軍の手中に落ちたが、なお、アメリカ軍は「優位」にはなかった。アッツ、マキン、タラワ、クエゼリン、ルオットといった諸島に日本軍の守備隊が頑張っていた。

戦況が一気にアメリカ軍有利に傾いたのは四四年六月以後である。欧州戦線で連合国軍がノルマンディ海岸に上陸してドイツ進攻の橋頭堡を築き、八月にパリが解放されたのだ。その結果、アメリカ軍は太平洋戦線にやや力を傾けることができるようになった。

三

アメリカ軍が日本軍の暗号をほとんど解読していたことは、戦後、明らかになっている。解読できるようになった

のは、外交文書については四一年四月から、軍事指令については四二年春ごろからであったとされる。

アメリカは日本が開発した暗号機とまったく同じ装置を作り出し、陸軍省と海軍省に二台ずつ、さらにロンドンに一台、フィリピン（フィリピン陥落後はオーストラリア）に一台を置いていた。日本がアメリカに宣戦を布告した際、駐米日本大使館の職員が暗号電を翻訳している間に、アメリカ政府は傍受した暗号をPCSにかけて解読してしまっていた。

また、連合艦隊司令長官・山本五十六が乗った海軍一式陸上攻撃機を撃墜したのも、暗号を解読した結果だった。開戦直後、ウェーク島海岸に沈没・着底した日本海軍駆逐艦「疾風」「如月」から発見した暗号書が決め手だった。

同じように、アメリカ太平洋艦隊は日本の連合艦隊司令部が四三年四月にトラックからラバウルに移ったこともつかんでいた。アメリカ軍にとって、ハワイ奇襲攻撃に始まる作戦指導力において、山本五十六は尊敬の対象であると同時に最大の標的でもあった。

——ヤマモトを排除することは、空母数隻を撃沈するのに等しい。

と彼らは考えた。

一九四三年の四月、山本長官は前線に展開する主要な日

本軍航空隊基地を訪問する計画を立てた。バレラ、ショールランド、ブインの基地を訪れ、士気を鼓舞するのである。この計画は四月十三日に東南方面艦隊第十一航艦司令長官草鹿任一中将の名で「作戦特別緊急電報」として各基地に打電された。

アメリカ軍もその電波をキャッチしていた。

四月十七日、アメリカ海軍のノックス長官は、太平洋方面総司令官ニミッツ大將に、

——ヤマモトを撃て。

という極秘電を発した。ニミッツ大將はその指令を機動部隊司令官ハルゼー中將に伝え、ハルゼーは基地航空隊司令官であるマーク・ミッチャー少將に命令を出した。ミッチャー少將はこの命令を受け、ガダルカナルのP-80戦闘機航空隊から十六人、第七十戦闘中隊から二人のパイロットを選び抜いた。指揮官はジョン・ミッチェル少佐である。

ミッチェル少佐はただちに作戦の立案に取りかかり、十八機を二手に分けることを考えた。

山本長官搭乗機には相当数の護衛機が付くであろう。そこで十四機が護衛機を攪乱している間に、あらかじめ飛行予定コース上に待ち受けた四機が山本長官搭乗機をねらう。必殺の一撃を加え、ただちに退去する。

同日、日本海軍航空基地は山本五十六連合艦隊司令長官の詳細な行動予定を暗号で交信した。この電波は、アリユーシヤン列島の米海軍無線基地で補足され、ハルゼー米南太平洋部隊司令官に報告された。それによると、

—— 山本長官は午前八時にラバウルを発し、同九時四十五分にパラレ基地到着の予定。

という。

翌十八日未明、ハルゼー中将はガダルカナル島のミッチャー少将に指示を与えた。

孔雀ハ時間通り行動スルモノト思ワレ

尻尾ヲ団扇デアオラレタシ

というものだった。

「孔雀」とは、すなわち山本五十六である。

四月十八日未明、ガダルカナル島のアメリカ軍基地から十八機のP-38が離陸した。うち二機が故障のため途中で引き返した。刺客は十六人に減った。

護衛の対象は二機の一式陸攻である。一機に山本五十六連合艦隊司令長官が、もう一機に宇垣纏参謀長が乗った。日本のラバウル航空基地は最初、零戦二十機で護衛する予定だった。ところが山本長官が、

「たかが護衛のために、大切な零戦をそんなに飛ばす必要はない」

と言った。

そこで護衛の零戦は六機に減らされた。

午前九時三十四分、山本連合艦隊司令長官を乗せた一式陸攻がブーゲンビル島上空にさしかかったとき、十六機のアメリカ軍機が襲いかかった。護衛が二十機であれば——と言っても、「覆水盆に返らず」のことわざがある。

山本長官が乗った一式陸攻に射撃を加えたのは、トーマス・ランフィアという大尉である。

アメリカ軍が「ライター」と呼んだように、防弾・防火装備を持たない一式陸攻は、あつという間に翼の付け根から火を吹いてジャングルに墜落した。

ただちに搜索隊が編成され、同日夕刻、山本五十六大将の死が確認された。

発見したのは歩兵第二十三連隊道路設営隊長・浜砂盈栄少尉だった。

軍刀ヲ左手ニテ握リ、右手ヲソレニ副エ、機体ト略々並行ニ頭部ヲ北ニ向ケ、左側ヲ下ニシタ姿勢デ居ラレマシタ。御遺骸ノ下ニハ座席クツシヨシヲ敷キ、少シモ焼ケテハ居ラレマセンデシタガ、左胸部ニ敵弾ガ当ッタモノノ様デ血

ガ流レテ居リマシタ。他ノ方ノ遺骸ハ全部腐敗シテ、殆ド
全身ニ蛆ガ湧イテ居リマシタガ、御遺骸ノミハ僅カニ口ト
鼻ノ付近ニ蛆ガ湧イテイル程度デアリマシタ。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

**ソロモン海戦** ソロモン海はニューギニア島東部からオーストラリア北部の珊瑚海につながり、ソロモン諸島とニューカレドニア島、フィジー島などで囲まれる海域。ガダルカナル島における陸戦に関連して、日本軍と米・豪連合軍が三度にわたって戦った。第一次・一九四二年八月八・九日。サボ沖海戦、ツラギ夜襲戦とも呼ばれる。オーストラリアの重巡洋艦キャンベラ、アメリカの重巡洋艦アストリア、クインシー、ヴィンセンスを撃沈し、重巡洋艦シカゴ、駆逐艦ラルフ・タルボット、バターソンが大破するなど日本軍の勝利となった。

第二次・一九四二年八月二十四日。この海戦のあと同年十月十三日、日本海軍の戦艦金剛、榛名などがヘンダーソン飛行場を艦砲射撃で攻撃した。

第三次・一九四二年十一月十二・十五日。ガダルカナル島に上陸した日本陸軍第三十八師団への物資補給を阻止しようとした米豪連合軍によって、日本海軍が惨敗を喫した。輸送船十一隻約七万七千トンを喪失したことにより、陸軍は民間船舶の追加徴用に動くことになった。

#### ノルマンディ海岸 Normandie

ドーバー海峡のフランス側、ル・アーブルとカーンの間にある海岸で、連合国軍の反攻上陸作戦が行われた。映画『地上最大の作戦』で知られる。ここが反攻上陸作戦に選ばれたのは近くにあるコタンタン半島のシュールブル港が物資補給の拠点として適していたこと、海岸から内陸まで平坦な土地が続いていることなどだ

った。

ついながら、この地名はノルウェー王室からイングラランド王室に嫁いだ王妃の子孫が「ノルマンディ公」と称され、英仏百年戦争のときフランスに上陸して占領し、わが領地としたことに始まる。

**海軍一式陸上攻撃機** 九六式陸上攻撃機の燃料タンクをインテグラル・タンク式に改良して航続距離を延ばした。インテグラル・タンクというのは翼を密閉してそこに六千リットルの燃料を注入するものだった。このため翼に被弾するとたちまち火災が発生し、あるいは爆発した。アメリカ軍はその弱点を見抜いて翼の付け根に照準を合わせた。一撃ですぐに火がつくことから「ワンシヨット・ライター」と呼ばれた。

**P-38 戦闘機** 通称は「ライトニング」(稲妻)。ロッキード社が設計・開発した双胴型高速戦闘機で、一九三九年に米陸軍に制式採用された。二基のエンジンを搭載し最高速度六六〇キロ/時、航続距離四〇〇〇キロ、搭載できる爆弾は最大九〇〇キログラムだった。空中戦では日本の零戦に敵わなかったが、防御性能と破壊力が高く評価され、ヨーロッパ戦線でも使用された。『星の王子さま』の著者であるサン・テグジュペリが偵察任務で用いていたことでも知られる。

**山本五十六の死** その死は一か月以上秘匿され、五月二十一日にようやく大本営が発表した。同年六月五日、東京・日比谷公園で国葬が行われた。護衛の使命を果たせなかった六人はその後、激戦の最前線に送り込まれて五人が戦死、右手首を失って退役した一人のみが生き残った。



069 V T 信管

第六十九

V T 信管

一

ガダルカナル島から日本軍の撤収が完了した（とされる）  
一か月後の一九四三年三月十二日、アメリカ統合参謀本部  
主催の太平洋軍事会議で「エレクトロン作戦」が採択された。  
戦争の運営にかかる中長期の基本方針という意味なので、  
こんなにち的に言えば「戦略」と表記すれば分かりが早い。

ガダルカナル島を制圧したことで、連合国軍は勝利の手  
応えを確実にした。その前段階として、四二年八月から九  
月にかけて、アメリカ陸海軍・政府首脳は太平洋の戦いに  
かかる「レインボー計画」、日本を占領・支配する「ダウ  
ンフォール作戦」を立てていた。

このうち「レインボー計画」は海軍省のアーネスト・キ  
ング作戦部長が提唱したもので、ハワイを拠点として、中  
部太平洋のサモア↓ギルバート諸島↓マーシャル群島↓ト  
ラック↓グアムと太平洋上の島々をしらみつぶしに制圧し、  
日本本土に上陸して首都・東京を占領するというものだった。

た。これが実施されていたら、平塚から藤沢にかけての湘  
南海岸は、欧州戦線におけるノルマンディ海岸になっていた。  
た。

しかし状況が変わった。

海軍の現場で戦争指揮に当たっている第三艦隊司令長官  
のハルゼー、太平洋艦隊司令長官のニミッツ、第十六任務  
部隊司令官のスプルーアンスといった諸将が反対した。

ガダルカナル島の戦いとソロモン海戦で連合国軍は制空  
権と制海権を手中にした。太平洋上の島々を占拠している  
日本軍は放っておけない。補給がなくなれば立ち枯れる  
であろう、というのである。

だけでなく、ボーイング社の開発による空の要塞「B-  
29 スーパーフォレスト」が姿を見せつつあった。全長三  
十メートル超、両翼全幅四十三メートル、機体重量三万二  
千キロ超という巨大な爆撃機であって、高度一万メートル  
を航行し、最高時速六四〇キロ、航続距離四八〇〇キロ、  
最大九トンの爆弾、貨物を積載することができた。

当初、アメリカ軍は対日爆撃の基地として中国・湖南省  
のどこかを想定した。東京まで直線距離で二千四百キロな  
ので、ぎりぎり往復が可能である。修理や補給が容易なイ  
ンド西ベンガル州カルクタ（カルカッタ）を本拠として、  
中国に設置する前線基地を併用する案が固まった。

ただしその時点で実戦配備が可能なB―29は一機も存在していなかった。量産が始まったのは四三年の秋以後であつて、対日爆撃を専門とする第二十爆撃集団が編成され、カルカッタの空軍基地に配備が始まったのは四四年三月である。

――それまでの間に陸・海軍が役割を分担しつつ、フィリピン島から北上する。

というマッカーサー案が採択された。

四三年十一月、カイロで開かれた米・英・中首脳会談（カイロ会談）でアメリカ政府が示した議案書に

――可能であればグアム、テニアン、サイパンもB―29戦略爆撃の基地とする。

という文言が盛り込まれたのは、そのような事情によつていゝる。

ともあれガダルカナル島の攻防のあと、マッカーサーが指揮する陸軍第六、第八軍とハルゼー麾下の太平洋艦隊が連携しつつ、日本に圧力をかけていくことになった。この作戦の中に、連合艦隊司令長官・山本五十六の暗殺、イギリス軍ビルマ戦線の支援および、日本本土爆撃などが入つてゐた。

ビルマ戦線は、日本にあつては「インパール作戦」（ウ

号作戦）と称される。一九四四年の一月七日に大本営において作戦が認可され、三月八日に進軍が始まった。

日本陸軍の戦争は中国戦線が好転せず、ガダルカナル島を拠点にアメリカとオーストラリアを分断する構想が失敗に歸してゐた。鉄か船か、鉄鉱石か支援物資かという行き詰まりを打開する策であつたにもかかわらず、

①インドから雲南を経由して中国に支援物資が送られてゐるルートを遮断する

②インドのチャンドラ・ボースが指揮する反英組織と連携してイギリス軍とアメリカ軍を分断する。

という目標が設定された。

ベトナム戦争でアメリカ軍が「ホーチミン・ルート遮断」を標榜して北ベトナムを爆撃したことを思い出す。

これについて大本営は、

――我が陸軍が戦うべき相手はイギリス軍であつて、なぜならイギリスを攻撃することはナチス・ドイツを側面から支援することになるからである。海軍が太平洋で戦つてゐるアメリカ軍との戦争は、所詮、今大戦の副次的なものに過ぎない。

という何とも珍妙な理屈をひねり出した。

二

日本においては、陸軍でさえ開戦直前に山下奉文が計算機と暗号の必要性を認識していた。だが大本営は、アメリカ軍の暗号解読力と総合的な機械生産力、さらに電子技術の効用を甘く見ていた。

なかでも「VT信管」と呼ぶ装置は、真空管の技術がものをいった。

VTとはアメリカ軍が外部に秘匿するために付けた仮の名「Variable Time fuze」に由来する。正式な呼称は「Proximity fuze」、日本語に訳すと「近接ヒューズ」ということになる。

それまでの砲弾は、爆発のタイミングを発射されてから何秒後と設定するか、命中した衝撃で爆発するかでしかなかった。ところが、VT信管付きの砲弾は、標的の数メートル以内には到達すると、対象物に跳ね返った電波をキャッチして爆発する。

そのことにはナチス・ドイツも大日本帝国も気がついてはいた。だが実装することができなかった。発射時の過剰な荷重に耐える信頼性の高い真空管と、劣悪な条件のもとでも安定して稼動する液体電池がなければならず、かつそ

れぞれを大量に生産できなければならなかった。

これに対してアメリカ軍は、ドイツから亡命していたアインシュタインの協力もあって、一九四二年に実用化テストを始め、四三年ごろから一部で実戦配備するようになっていた。取り付けられたのは主に高射砲や高角砲など対空火砲の砲弾だった。

ただし当時の技術では、敵味方の識別ができなかった。

そこでアメリカ軍はこの砲弾を発射するとき、同じ空域に味方航空機の侵入を禁止する措置を取った。日本軍の航空機は標的の艦隊上空に掩護機がないことを不思議に感じつつ、これ幸いと突入して次々に撃ち落とされた。罠に嵌ったようなものだった。このためにアメリカ軍の撃墜率は飛躍的に向上した。

日本海軍の航空機は、対空砲が命中してもいいのに翼がもがれ、機体に火がついて、抱えていた爆弾ごと爆発してしまふ。かつて太平洋の空を縦横無尽に飛び回り、多くの撃墜王を出した日本軍航空隊は、四四年に入るとたいした戦果をあげることができないまま、ずるずると後退していく。

VT信管が日本の航空戦力を壊滅に追い込んだ、といわれている。

その威力が発揮された最初の大きな戦いは、一九四四年

の六月十九・二十の二日間にわたって行われた「マリアナ沖海戦」である。

同時期に日本陸軍はインパール作戦に行き詰まり、ビルマ戦線から全軍撤退の覚悟を定めつつあった。ミッドウェー海戦での敗北、ガダルカナル島からの撤退に始まった日本軍の停滞は、この時点で一気に「涸落」と呼んでいい状態に転換した。

マリアナ沖海戦は、局面においてはサイパン島の攻防戦だったが、太平洋戦争全体から見ると日本軍が策定した「絶対防衛ライン」をめぐる攻防であったということができる。絶対防衛ラインとは、アメリカ軍航空機による日本本土爆撃の射程を意味していた。その防衛作戦は日本海軍の内で「乙計画」と呼ばれ、山本五十六のあとを受けて連合艦隊司令長官に就任した古賀峯一大将が策定を進めていた。

一九四四年の三月三十一日、パラオからミンダナオのダバオ基地に向かった海軍の飛行艇が、折からの強い低気圧に飲み込まれて行方不明になる事件が発生した。その飛行艇には古賀大將以下、連合艦隊の作戦指導に当たる幕僚が搭乗していた。幕僚が携帯した革鞆には作戦遂行に関する詳細な資料が入っていた。

飛行艇はセブ島に墜落したのだが、このとき現地の抗日

ゲリラ部隊からアメリカ軍に、その資料と信号書など一式が手渡されていた。乙作戦は筒抜けになった。このことをアメリカ軍は秘匿したため、日本は知らなかった。

日本の大本営は、アメリカ軍はニューギニア↓フィリピン↓台湾↓沖縄と島伝いに北上してくると読んでいた。それとヨーロッパ戦線で六月六日に連合国軍がノルマンディ上陸作戦を敢行したため、参謀本部第二部は

「当分の間太平洋方面は積極的作戦停滞の公算あり。但し政治的に本土空襲を企図することあるべし」と分析した。

アメリカは主力をヨーロッパ戦線に投入するから、ここしばらく積極的な攻勢はない、というのである。

この判断は完全に間違っていた。

北アフリカ戦線に勝利し、イタリアを降伏させ、ノルマンディ上陸を果たした現在、アメリカ合衆国は四三年一月のカサブランカ合意に縛られず、太平洋戦線に余剰の兵力を回すことができるようになったのだ。

厚い鋼板に覆われた上陸用舟艇、水陸両用艇、ジェット燃料の火炎を数十メートルも放つことができる火炎放射器、日本軍の機関銃や対戦車砲弾ではびくともしない最新鋭の重戦車などが陸続と北アフリカ戦線から太平洋戦線に回送され、さらに四一年十二月から建造を始めていた新鋭艦五

百六十隻が相次いで就役した。空母四十五隻、駆逐艦四百八隻、潜水艦八十八隻、戦艦・巡洋艦十九隻である。

同時にアメリカ作戦本部は、ニューギニアからフィリピンを経て黒潮に沿って北上する黒潮ラインに陸軍のマッカーサー大將を、グアムからテニアンを経てサイパンにいたるマリアナ・ラインに海軍のスプルーアンス大將をそれぞれ当て、両者が競って日本本土防衛線を突破するよう煽っていた。陸軍と海軍のメンツと両大將の功名争いという組織的・人為的要素を加味して、攻撃の手が緩まぬよう引き締めを図っていた。

三

黒潮ラインではフィリピンが、マリアナ・ラインではサイパン島が、それぞれクローズアップされた。ことにサイパン島をアメリカ軍が抑えれば、最大四千キロの爆弾を搭載できる超大型爆撃機「B-29」による本土爆撃が容易になる。

同爆撃機の航続距離は五千六百キロだったから、最長で日本の仙台、長岡、沖縄、台湾までが射程距離に入ることになる。つまり「絶対防衛ライン」が崩壊する。

対して日本軍はこのとき、一トンの爆弾の搭載が可能で

最大時速四百二十七キロ、航続距離が四千六百五十キロの「一三試陸攻深山」、四トンの爆弾を搭載でき時速五百九十キロで航続距離四千キロの「二七試陸攻連山」、B-29をはるかに超える超大型爆撃機「富岳」を試作していた。

これをサイパン島に実戦配備できるようにすれば、フィリピン、ニューギニアの連合軍基地を爆撃することが可能になるわけだった。どちらにとっても譲れない戦略拠点だった。

海戦に参加した艦船は小澤治三郎中将麾下の第一機動艦隊であって、その主力は以下のようなだった。

航空母艦 大鳳、瑞鶴、翔鶴、隼鷹、飛鷹、龍鳳、千歳、

千代田、瑞鳳

航空戦艦 伊勢、日向

大型戦艦 大和、武蔵、長門、金剛、榛名

重洋戦艦 愛宕、孝雄、摩耶、島市、妙高、羽黒、熊野、

鈴谷、利根、筑摩、最上

巡洋艦 阿賀野、矢矧、能代

駆逐艦 朝雲、風雲、磯風、浦風、雪風、谷風、初月、

若月、秋月、涼月、霜月、野分、満潮、山雲、

長波、朝霜、岸波、沖波、藤波、秋霜、早霜、

浜風、玉波、浜波、早波、島風、白露、時風、五月雨

投入された航空機は計四百五十三機だった。内訳は戦闘機百八十、爆撃機百五十、水上爆撃機二十四、攻撃機九十九である。このほか、諸島に建設した第一航空艦隊基地の航空戦力として、テニアン島に六百七十二機、トラック島に五百五十一機、ケンダリー島に百六十八機、ペリリュー島に二百四十機の計一千六百三十一機が配備されていた。この総兵力をもってアメリカ太平洋艦隊主力である第五十八機動部隊を殲滅しようという計画だった。

対するアメリカ第五十八機動部隊の陣容は、二年前のミッドウェー海戦のときとはまったく違っていた。ミッドウェー海戦のときアメリカ太平洋艦隊が保有する空母は三隻しかなかったが、マリアナ沖海戦には日米開戦と同時に急ピッチで建造された最新鋭の二十二隻、それと真珠湾から引き上げられ修理を完了した戦艦が艦隊に編入されていた。大型空母六、小型空母七、戦艦七である。艦船と砲門の数において、日本の連合艦隊にはほぼ匹敵する規模だった。

大型空母 レキシントン、ホーネット、ヨークタウン、バンカーヒル、ワスプ、エンタープライズ、

エセックス

小型空母

バターン、カボット、ペローウッド、モントレイ、プリンスストン、サンハシント、カウペ

ウス、ラングレー

戦艦

アラバマ、サウスダコタ、インディアナ、ニュージャージー、アイオワ、ワシントン、ノースカロライナ

その他

重巡洋艦三、軽巡洋艦六、防空巡洋艦四、駆逐艦五十八

航空機

九百二機

帝国海軍が希求して已まなかった艦隊決戦が実現したのである。

六月十九日午前七時三十分、小澤部隊から二百四十一機の攻撃隊が舞い上がった。その中には最新鋭の艦上爆撃機「彗星」、艦上攻撃機「天山」が含まれていた。

### 第一次攻撃隊

〇七三〇発艦 第三航空戦隊六十四機（零戦十四、戦闘爆撃機四十三、天山七）

〇七四五発艦 第一航空戦隊百二十八機（零戦四十八、彗星五十一、天山二十九）

〇九〇〇発艦 第二航空戦隊四十九機（零戦十七、戦闘爆

撃機二十五、天山七）

## 第二次攻撃隊

一〇一五発艦 第二航空戦隊六十五機（零戦二十六、艦上

爆撃機二十七、彗星九、天山三）

一〇二〇発艦 第一航空戦隊十八機（零戦四、戦闘爆撃機

十、天山四）

第一機動艦隊から第二次攻撃隊が発艦しているころ、アメリカ第五十八機動部隊のレーダーが接近しつつある日本軍第一次攻撃隊航空機の機影を捕捉していた。ミッチャー中將はただちに艦載機四百五十機を上空に待機させた。日本の第一次攻撃隊は待ち受けていたヘルキャットに襲われ、その猛攻をくぐりぬけた百九十七機が敵艦隊上空に到達した。

標的である敵艦隊の上空に機影は見えなかった。

——千載一遇のチャンス。

と見た攻撃隊は、一斉に突入していった。

ここで悲劇が起こった。

日本の戦闘機、爆撃機は、レーダー誘導の対空砲に撃ち落され、さらにVT信管付きの対空砲弾でむなく海上に墜落していった。百九十七機中、実に七〇％に相当する百

三十八機が撃墜されたのだ。

第一次攻撃隊として飛び立った二百四十一機は、あつという間に五十九機になってしまった。

のちにアメリカ軍はこの空戦を「マリアナの七面鳥射ち」と呼んだ。

第一機動部隊の第二次攻撃隊八十三機は敵艦隊を見失って攻撃に失敗した。だけでなく、空中戦で五十四機を失った。

さらに空母「翔鶴」「大鳳」が、アメリカ軍の潜水艦が放った魚雷で撃沈した。小澤治三郎は第一機動部隊の旗艦を重巡洋艦「羽黒」に移し、艦隊の再編成を指令せざるを得なかった。

翌二十日、今度はアメリカ軍が攻撃に出る番だった。

ミッチャー中將は素敵に手間取ったが、午後四時に日本の艦隊を捉えることができた。薄暮戦となるのも顧みず、彼は艦載機全機の出動を命令した。戦闘機八十五、急降下爆撃機七十七、雷撃機五十四の計二百十六機である。

小澤は残存の七十五機を上空に待機させて迎え撃ったが、掩護の間隙を縫って低空で侵入したアメリカ軍の雷撃機が魚雷を投下した。雷撃機と潜水艦の魚雷で空母「飛鷹」が撃沈され、「瑞鶴」「隼鷹」「龍鳳」「千代田」が中・小破の被害を受けた。



四

航空機を失った艦隊は悲惨だった。

小澤部隊はあつてなく背走してしまった。

陸上の守備隊は、さらに悲劇だった。

マリアナ沖海戦の直前、サイパン島に斉藤義次中将が率いる陸軍第四十三師団など二万五千四百六十九人が上陸した。守備隊は先任の南雲忠一中将率いる海軍の陸戦隊六百六十人と合せ、三万一千七百余に膨れ上がった。このほか、同島には住民・軍属約二万五千人がいた。

ここにアメリカ軍の第五水陸両用軍団六万六千七百七十九人が上陸した。

トーチカに立てこもって闘う兵士や市民には、

——連合艦隊がくる。

という望みがあつた。

朝な夕なに、遠い水平線の向こうに何かが見えたといって島民は歓喜し、守備隊の士気は奮い立った。遠目が利く者が岬の高台に立ち、士官たちは双眼鏡で沖合いを凝視し続けた。その連合艦隊が、マリアナ沖海戦で消滅していることを、彼らは知らなかった。

さらに重要なことを、大本営は決定していた。

『機密戦争日誌』一九四四年六月二十四日付

海軍は『あ』号作戦に関し陸軍と協議の上、中止するに決す。即ち帝国はサイパン島を放棄することとなれり。来月上旬にはサイパン守備隊は玉砕すべし。最早希望ある戦争指導は遂行し得ず。残るは一億玉砕に依る敵の戦意放棄に俟つあるのみ。

この決定はサイパン島の守備隊や住民には一切知らされなかった。

日本側は三万人以上の将兵と一万人を超す市民が死亡し、アメリカ軍の死傷も一万四千人を上回った。七月六日、斉藤義次、南雲忠一の両中将が自決し、七日と八日に分けて敢行された玉砕戦でサイパン島における日本軍の抵抗は終息した。

四千人以上の市民・軍属が、のちに「バンザイ・クリフ」と名づけられた断崖から海に投身し、その遺体のためにアメリカの軍船が着岸できなかったほどだったという。

『機密戦争日誌』七月一日付

今後帝国は作戦的に大勢転回の目途なく、而かも独の様相も概ね帝国と同じく、今後逐次ジリ貧に陥るべきを以て

速やかに戦争終結を企図すとの結論に意見一致せり。即ち帝国としては甚だ困難ながら政略的攻勢に依り戦争の決を求めざるを得ず。此の際の条件は唯国体護持たるのみ。而して政略攻勢の対象は先ず「ソ」に指向するを可とす。斯かる帝国の企図不成功に終りたる場合に於ては最早一億玉碎あるのみ。

以後、「一億玉碎」という言葉が常套句のように使われていく。

七月十八日、東条英機はサイパン島陥落の責任を取って辞任し、二十二日、小磯国昭を首班とする内閣が発足した。小磯は

——自分の任期中に、わずかでも戦局を好転させ、以て次期和平内閣に指揮を譲る。

の覚悟で臨んだ、といわれる。

実際、彼は対中和平交渉を水面下で始めていた。だが指導力において力強さに欠如していた。

八月三日テニアン島、十一日グアム島、九月十五日ペリリュー島が陥落した。

八月二十五日、中国国民政府最高軍事顧問・矢崎勘十郎中将は、対重慶政府との和平工作に「見込みなし」と報告した。

九月十八日、ソ連政府から日本の特使派遣を拒否するという回答がもたらされた。ソ連を仲介役とする和平工作もまた頓挫したのである。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

アーネスト・キング 第六十四「真珠湾の次」補注

ダウンフォール作戦 対日上陸作戦で、台湾から北上して九州に上陸する「オリンピック作戦」と、太平洋から上陸して関東地方を占領する「コロンネット作戦」で構成されていた。作戦実施想定時期はオリンピック作戦が四十五年十一月、コロンネット作戦は四十六年春とされていた。海軍内で検討された計画に過ぎなかったが、マリアナ沖海戦で日本の航空戦力が壊滅的な状態に陥り、サイパン島を制圧してB-29による戦略爆撃が容易になったことから、日本の無条件降伏をにらみながら本土上陸の両面作戦が正式に決定された。

ウィリアム・ハルゼー William Frederick Halsey, Jr./1882-1959. 航空戦闘部隊司令官兼第二空母戦隊司令官としてアメリカ海軍の航空母艦の指揮を取った。ドゥーリットル部隊による東京初空襲の指揮を取った。四二年南太平洋方面軍司令官となり、ソロモン沖海戦、ルンガ沖海戦などを通じて南太平洋地域での連合国軍優勢を決定づけた。

チェスター・ニミッツ 第五十七「駆け引き」補注

レイモンド・スプルーアンス Raymond Ames Spruance/1886-1966. 最終階級は海軍大将。四二年五月、病氣療養のため一時離任したハルゼーに代わって第十六任務部隊司令官となり、空母「エンタープライズ」でミッドウェー海戦に臨んだ。エンタープライズから発艦した攻撃機の爆弾が日本の空母「加賀」「赤城」に致命傷を与え、さらに空母「飛龍」、重巡洋艦「三隈」

を撃沈する戦果をあげた。

B-29の量産 四三年の秋から量産に着手したが、インドと中国の飛行場建設の遅れ(ブルドーザーやクレーンがなく、人手で工事が進められたため)もあって計画は大幅に遅れた。四四年一月には九十七機が完成しているべきところ、飛行可能な機体は一機しかなかった。二月に入って「カンザスの戦い」と呼ばれる突貫工事がジョージア州マリエッタ工場でスタートし、三月下旬にB-29の編隊がインドに向けて出発した。ちなみに編隊はイギリスを経由してインドに向かった。

チャンドラ・ボース Netaji Subash Chandra Bose/1897-1945. 国民会議派議長の時インド独立闘争についてガンジーやネルーらと路線を異にし、初めヒトラーに枢軸国軍のインド侵攻を直訴した。しかし対ソ戦に最も力を注いでいたヒトラーはこの提案を拒否したため、ボースは今度 は日本に協力を求めた。四三年インド独立連盟東亜代表者大会で自らを首班とする「自由インド仮政府」の樹立を表明した。大日本帝国政府は独立国家として承認するに当たって「領土と人民を基礎とする国家の存在が不可欠である」とする見解に沿い、日本海軍が占領中のアンダマン、ニコバル両諸島を自由インド仮政府に帰属させることを決定した。

日本が無条件降伏した直後、ソ連との連携を探るためサイゴンから飛び立った飛行機が墜落して死去した。その墓は東京・杉並の蓮光寺にある。しかしインドでは戦後長く生存が信じられ、ソ連領内でボースを見たという目撃証言が後を絶たなかった。

アインシュタイン Albert Einstein/1879-1955. ドイツのウルムという町のユダヤ人一家に生まれ、十二歳でユークリ

ツド幾何学を独学した。一八九四年家族はイタリアに移住し、アインシュタインはスイスのチューリヒ大学に進んだ。一九〇五年スイス特許局職員だったとき「相対性理論」「光子仮説」「ブラウン運動理論」の論文三篇を発表し、これが認められてチューリヒ大学教授となった。二一年にノーベル物理学賞を受賞したが、それは光子の存在を指摘する光電効果の発見に対してだった。

ナチスによるユダヤ人迫害が激しさを増した一九三三年、ロバート・オッペンハイマーの勧めでアメリカ大統領ルーズベルトに原子爆弾の開発に貢献できるといふ内容の手紙を送り、これが容認されてアメリカ合衆国に亡命した。亡命後はプリンストン高等学術研究所で研究を続けたが、彼の亡命をきっかけに原爆開発プロジェクト「マンハッタン計画」がスタートし、VT信管が実現した。

サイパン島 北マリアナ諸島の中で最大の面積を持つ。紀元前から「チャモロ」と呼ばれる海洋性民族が定住していた。一五二一年世界一周を目指すマゼランの艦隊が上陸し、スペイン王妃マリー・アンヌの名にちなんで「マリアナ」と命名した。のちスペインがドイツに売却し、第一次大戦で大日本帝国の信託統治に入った。同島には大日本帝国の南洋庁支所があって、太平洋委任統治領の中心となっていた。「太平洋の防波堤」といわれたゆえんである。アメリカ軍が占領してのちは日本本土を爆撃するB-29の基地となり、戦後はアメリカ政府の信託統治となった。

古賀峯一 こが・みねいち／1885～1944。佐賀県に生まれ海軍兵学校、海軍大学校を出て一九一七年少佐。二六年在フランス日本大使館付武官、二七年ジュネーブ軍縮会議全権団随員、三三年少将に進み軍令部参謀。三六年中将、三七年軍令部次長、

四二年大將・横須賀鎮守府長官を経て四三年二月山本五十六のあとを受けて連合艦隊司令長官となった。四四年三月三十一日、バオにあって総司令部がアメリカ軍機の猛爆撃を受けたときフィリピンのダバオに移動するため乗込んだ水上艇が強い低気圧に巻き込まれ遭難した。四月五日「殉職」と断定され、死後、元帥に昇格した。山本五十六の撃墜死を「海軍甲事件」、古賀の遭難死を「同乙事件」と呼ぶ。

ノルマンディ上陸作戦 上陸作戦の準備は四三年春から開始され基本計画は四四年四月に固まっていた。しかしドーバー海峡上空が天候不順のため実施が順延された。当初「Dデイ」(作戦実施日)は六月五日だったが折からの暴風で順延され、六日も悪天候だったがナチス・ドイツ軍の隙を衝くことができるという戦略的な判断もあってゴースインが出た。上陸軍第一波はイギリス三個師団、アメリカ二個師団、空挺部隊はイギリス一個師団、アメリカ二個師団で、計八個師団だった。

重爆撃機「深山」 しんざん…一式陸上攻撃機を大型化した重爆撃機。実際の最高速度は三百九十キロ/時、積載可能重量は八百キロで、六機が製作されたが、速度の問題から輸送用として使われた。

爆撃機「連山」 れんざん…陸上への爆撃に絞って開発された重爆撃機で四機が試作されたが実戦配備はされなかった。

超大型爆撃機「富岳」 ふがく…エンジン六基を備え、最高七百八十キロ/時で十五トンの爆弾を積載、二十ミリ機銃四基を備える超大型爆撃機。アメリカ本土爆撃を構想し陸海軍共同で計画された。しかし当時の日本の技術的では完成させることは難しかった。

小澤治三郎 おざわ・じざぶろう／1886～1966。宮崎県に生まれ一九〇六年海軍兵学校卒、三〇年大佐。三六年少将、三七年連合艦隊参謀、三九年第一航空戦隊司令官、四〇年中将に進み四一年第一南遣艦隊司令長官、四二年第三艦隊司令長官、四四年第一機動艦隊司令長官を兼務した。四五年四月海軍総司令長官兼連合艦隊司令長官兼海上護衛司令長官となり終戦を迎えた。

空母「レキシントン」 初代は一九二七年十二月に就役し四二年五月八日の珊瑚海海戦で日本海軍艦載機の放った魚雷と爆弾によって撃沈された。マリアナ沖海戦に参加したのは二代目艦で排水量二万七千トン、全長二百六十六メートル、最高速度三十二・七ノット／時、艦載機百三機。四三年二月に就役し九一年十一月に退役、現在は博物館として展示されている。

空母「ホーネット」 初代は一九四一年十二月に就役し四二年十月の南太平洋海戦で沈没した。マリアナ沖海戦に参加したのは二代目艦で、当初は「キアサージ」という艦名だった。四三年一月「ホーネット」の名を継ぎ、四七年予備役に編入された。その後、対潜哨戒空母として復帰し六六年アポロ宇宙船の回収に使われた。**空母「ヨークタウン」** 初代ヨークタウンは三九年九月大西洋艦隊に就役、四二年六月ミッドウェー海戦で沈没した。四三年四月、ボム・ノム・リチャードを「ヨークタウン」に改名、四七年予備役となったが五七年対潜空母として復帰した。七〇年再度の予備役編入後、七三年除籍となった。

空母「エンタープライズ」 太平洋戦争の全期を通じて生き残ったアメリカ太平洋艦隊旗艦。一九三八年五月に就役し、四二年六月ミッドウェー海戦で艦載機が日本連合艦隊の空母「赤城」「加賀」「飛龍」駆逐艦「朝潮」、同年八月第二次ソロモン海戦で空母「龍

驥」、同年十月南太平洋海戦で空母「翔鶴」、同年十一月ガダルカナル沖海戦で戦艦「比叟」、重巡洋艦「衣笠」をそれぞれ撃沈するなど最大の活躍をした。四七年予備役に編入されアナポリス海軍兵学校に保存されている。のちのエンタープライズは世界初の原子力空母、かつ艦載機のほか対空砲などの兵備を持たない空母として六一年十一月に就役、「ビッグE」の通称で知られ、太平洋艦隊旗艦の座を「J・F・ケネディ」に譲った。

彗星 すいせい・ドイッ・フォックカーウルフ社から入手した設計図をもとに開発された。機首に置いたエンジンの下に冷却用外気吸引口がある独特のデザインだった。全長十・二メートル、全幅十一・五メートルで乗員二名、最高速度五百五十二キロ／時、七・七ミリ機銃三基を備え、最大五百キロの爆弾を装着できた。

天山 てんざん・一式陸攻、九七式艦攻に代わる次期主力攻撃機として設計され、最高速度は四百六十五キロ／時、十三ミリ機銃一基、七・九ミリ機銃一基を装備し八百キロ爆弾または魚雷一本を装着できた。「深山」「連山」など山シリーズの第一号機として大きな期待を集めたが、日本海軍の伝統的な防衛力軽視のため簡単に撃墜されていった。

バンザイ・クリフ 現地名は「プンタン・サバナタ」岬。岬沖合いの海底十三メートルの岩礁に、一九九九年六月、ダイバーでもある東京・蔵前の浄念寺第二十六世石田住職によって慰霊塔が建立された。

070 修羅

第七十

修羅

一

太平洋の戦局が大きな転換点にさしかかっていたとき、大東亜戦争（陸軍の戦い）も転機を迎えていた。香港、シンガポール、コレヒドール、ジャワ、スマトラと連戦連勝を重ねていた陸軍は、ガダルカナル島で前進を阻止されていた。

ミッドウェー海戦の敗北とガダルカナル島からの撤退、つまり一九四三年二月七日で大日本帝国の戦いは終了したのも同然であった。こう書くのはそれ以後、二年六か月も続いた戦闘で傷つき斃れていった二百万人を超える人々を侮辱するような思いがある。

だが、国民の生命と財産の保全に全責任を負うことが、国家というものの最終的な存在意義であるとすれば、余力を残して講和を目指す動きが封殺されてしまったのは、いかにも悲しいことだった。

ガダルカナル島から日本軍の撤収が完了した（とされる）

翌日の四三年二月八日、『機密戦争日誌』は次のように記している。

斯くしてガ島の消耗戦は茲に終了し、船舶の消耗も次第に減少すべく予想せられ、大東亜戦争は再び常道に乗りたる感あり

陸軍参謀本部および大本営は、まだこの戦争の本質を理解していなかった。彼らは「消耗戦」という言葉を使いながら、それはガダルカナル島に限定したことだと解釈していた。

開戦のとき、参謀本部は

——イギリスを降伏させればアメリカは戦意を失う。

と読んだ。

ところが今度は、連合国軍が

——ドイツが降伏すれば、日本は戦意を失う。

と読んでいた。

四三年に入って連合国軍は勝利をほぼ確信するようになっていた。この時点でナチス・ドイツ軍は北アフリカでロンメル將軍率いる機甲師団が敗北し、冬將軍の前にスターリングラードから撤退を余儀なくされていた。

またイタリア・ファシスト軍は四一年一月、エチオピア

戦線で大敗して急速に勢いを失い、四二年末時点でムツリ―二政権の崩壊は時間の問題と見られていた。状況は大きく変わりつつあった。

その象徴的な出来事は、四三年一月十四日にモロッコのカサブランカで開かれた米英拡大会談である。会談には両国政府首脳と軍参謀が集まり、次のようなことが確認された。

- 一、英米両国はナチス・ドイツの打倒を第一に優先する。
- 一、太平洋戦線はアメリカ合衆国が主に担当する。
- 一、アジア戦線においてイギリスはビルマ奪回作戦「アナキム」に専念する。

このことは、アメリカ合衆国はヨーロッパ戦線に影響を及ぼすような大規模かつ長期的な作戦を太平洋戦線で実施しないことを意味していた。地中海のヤルタでルーズベルトがチャーチルに言ったように、当分の間、アメリカ合衆国軍は日本軍を「ベイビー・アロング」においてほしい、というのである。

そこでアメリカ合衆国海軍が考えたのは、日本軍の動きを封じ込める作戦だった。

三月十二日、アメリカ統合参謀本部主催の太平洋軍事会

議では、ベイビー・アロングを基本方針とする「エレクトン」作戦が採択された。

マッカーサーが指揮する陸軍第六、第八軍とハルゼー麾下の太平洋艦隊が連携しつつ、太平洋に散在する島々をしらみつぶしに制圧し、じわじわと日本に圧力をかけていくことになった。

このとき決定された十三の作戦の中に、山本五十六の暗殺、ラバウルの制圧、ニューギニア島の奪回、アリューシヤン列島からの日本軍の排除、インド・中国からのビルマ戦線支援および、日本本土爆撃などが入っていた。

エレクトン作戦はただちに実行に移され、四月十八日、アメリカ海軍のP-38双胴戦闘機が連合艦隊司令長官・山本五十六大将を乗せた海軍一式陸上攻撃機を撃墜することになった。遺体が発見されたのは四月二十日である。大本営は国民にこの事実を秘匿し、アメリカ軍もまた暗号解読の事実を知られたくないために沈黙を守った。

五月二十九日、北の守りであったアリューシヤン列島キスカ島の山崎部隊が玉砕した。それを代償にして駐留部隊五千六百三十九人が脱出に成功した。このころになると、さしもの零戦もアメリカ軍に弱点が見抜かれていたため、大きな戦果をあげることができなくなっていた。

七月、ヨーロッパ戦線で連合国軍がついにシチリア島上

陸を果たした。イタリアの喉元に匕首を突きつけたのである。これがためにムッソリーニ政権が崩壊した。

八月三日、中部ソロモン諸島のニュージョージア島をアメリカ軍が奪回した。

十月十八日、ニューギニアから日本軍が消えた。

十一月一日、アメリカ第三海兵師団がブーゲンビル島に上陸した。この島には日本の陸軍四万四千人、海軍二万一千人の計六万五千人が配置されていた。

また、その西北に位置するニューブリテン島には陸軍七万五千人、海軍四万人の計十一万五千人がいた。ソロモン諸島の守備隊を加えると、この地域だけで日本兵は三十万人に達していた。

ところが制海権を失い、制空権を維持できなくなった島の日本軍は孤立し、食糧、武器、弾薬、医薬品などの補給が乏しくなり、ガダルカナル島やニューギニア島と同じ状況が生まれつつあった。大本営はなすすべを知らなかった。

『機密戦争日誌』一九四四年一月二十六日付

三十万玉砕の秋到らば、好むと好まざるとに拘らず、国内の正気勃然として興り、真に皇国の興廢を自覚し、裸一貫、総力の結集に邁進し得べし

二

同様のことがビルマ（ミャンマー）方面でも発生した。一九四四年一月に発動した「インパール作戦」（「ウ」号作戦）がそれである。

朝日新聞社の記者としてこの作戦に同行していた丸山静雄は『インパール作戦従軍記』（岩波新書）で次のように書く。

インパール作戦とは、ビルマに進入した日本軍が幾多の作戦によってほぼ全ビルマを占領したあと、さらにビルマ国境を越えてインドに進攻しようとした一大作戦をいう。

この作戦はビルマを確保するためにはビルマの防衛線を国境外に推進しなければならぬとする戦略と、インドに兵を入れ、インドを独立させて英国を浮き上がらせ、英米の連合戦線を分断することによって太平洋戦争を終結に導いてゆきたいとする政略とが結びついて企図されたものである。

作戦は第十五軍（軍司令官は牟田口廉也中将）が三個師団を持ってインパール平原に拠る英軍第四軍（軍団長はスクーンズ中將）の三個師団を攻撃するというもので、主力

(第三十三師団Ⅱ弓兵团)をもつて南からインパールに迫り、一部兵力(第十五師団Ⅱ祭兵团)をもつて東からインパールを衝き、他の有力兵团(第三十一師団Ⅱ烈兵团)をもつて長駆ウクルル山中を突破してコヒマに進出、英軍の退路を断つという大胆な構想であった。

このあたりを図解的に説明すると、日本の陸軍は次のような理屈をひねり出した。

——我が陸軍が戦うべき相手はイギリス軍であつて、なぜならイギリスを攻撃することはナチス・ドイツを側面から支援することになるからである。海軍が太平洋で戦っているアメリカ軍との戦争は、所詮、今大戦の副次的なものに過ぎない。

何とも珍妙な理屈だった。

実態は中国大陸での戦闘が膠着状態に陥ったことの打開策であつたにもかかわらず、目的として、

①インド——雲南經由でイギリス、アメリカの支援物資が中国に送られているのを遮断すること。

②日本本土爆撃を行っているB—29の発進基地をチャンドラ・ボースが率いるインドの反英組織との連携で壊滅すること。

——などが掲げられた。

ビルマ方面に大本営が投入した兵力は、独立混成第二十四旅団、第十五軍(第三十一師団、第十五師団、第三十三師団)、第二十八軍(第二師団、第五十四師団、第五十五師団)、第三十三軍(第十八師団、第五十六師団、第五十三師団)だった。このうち牟田口廉也中将麾下の第十五軍約十二万人がインパール作戦に充てられた。

なぜ牟田口だったかという点、

——戦争の引き金を引いた張本人である。

というのが理由だった。

牟田口は盧溝橋事件を反省したわけでなく、

「もし自分の力によってインドに侵攻し、大東亜戦争に決定的な影響を与えることができれば、今次大戦勃発の遠因を作ったわたしとしては、国家に対して申し訳が立つ。男子の本懐としても、まさにこのうえなきことである」

と功名に駆られていたのだから始末に負えない。

屁理屈と片意地、功名心のあげく、陸軍参謀本部はとんでもない指令を発した。

——食糧、弾薬は歩兵が携行し得る三週間分をもつて限度とする。

こんなバカな作戦があるか。

ガダルカナル島に孤立した日本陸軍の将兵に対して、海

軍は消耗を覚悟の上で食糧や武器弾薬を送り続けた。ところがインパール作戦では、

——食糧は占領先で調達し、窮すれば資材運搬用の牛馬を食すべし。

というのである。

このような前近代的で非合理的な方針がまかり通ったのは、もはや玉碎戦しか打つ手がなくなった証拠でもあった。

三

三月八日、インパール作戦が発動された。その三日前にイギリス軍のウインゲート空挺旅団がビルマに降下している。十五日、牟田口中将率いる第十五軍がチンドウイン川（ミャンマー最大のエーヤワディー川＝旧イラワジ川の支流）に到達し、渡河作戦が敢行された。

ビルマ方面の制空権は、すでにイギリスに握られていたし、第十五軍に与えられた航空機は二百機に満たなかった。牟田口は

——短期にインパールを陥落するには、自動車中隊百五十、駄馬輜重兵中隊六十が必要。

と申請したが、大本営が送ってきたのは自動車中隊二十六、駄馬輜重兵中隊十四に過ぎなかった。これは牟田口に

とつても予想外のことであったに違いない。

作戦の序盤は順調に進み、四月六日に日本軍はコヒマ（ミャンマー北部の交通の要）を制圧したが、ここで足が止まった。アメリカが機械化部隊二個師団を派遣して日本軍の前進を阻んだほか、イギリス空挺ゲリラ師団が日本軍の補給を妨害した。

そのために日本軍の兵士は野草を食べて命をつなぎ、多くの命を代償にして敵から奪った武器と弾薬で戦い、折からの豪雨と泥濘の中、マラリア、デング病、コレラに斃れていった。

四月、第三十一師団長の佐藤幸徳（中将）は悲痛な電報を打った。

弾一発、米一粒毛補給ナシ
敵ノ弾、敵ノ食糧ヲ奪ツテ攻撃ヲ続行中

文末の「攻撃を続行中」は、なお戦意を失っていないことを示すための形容詞に過ぎなかった。爆弾を抱えてイギリス軍の戦車に体当たりしていく兵士、衣服をつけたまま半ば白骨化している兵士の遺体を目の当たりにして、六月三日、佐藤は独断で撤退を決意した。

児島襄は『太平洋戦争』下巻「悲劇のインパール作戦」

で次のように記す。(原文ママ)

道ばたには点々と負傷兵が横たわっていた。その眼、鼻、口にウジ虫がうごめいている。のびた髪の毛に真っ白にウジ虫が集まり、白髪のように見える兵が歩いていった。木の枝に妻子の写真をかけ、その下でおがむように息絶えた死体、マラリアの高熱に冒されて譫言を口走る者、ぱっくりあいた腿の傷に指を入れてウジをほじくり出す兵士……泥の中にうずくまったまま

「兵隊さん、手榴弾を下さい……兵隊さん」
と呼びかける兵士がいる。

苦しみから逃れるため、自決のための手榴弾がほしい、
というのである。

六月三日の第三十一師団の独断撤退で第十五軍は崩壊した。独断で撤退を支持した第三十一師団長・佐藤幸徳は軍法会議にかけられることを覚悟したが、実をいうと彼が

「弾一発、米一粒も補給ナシ」

の電文を討った直後の四月三十一日、ラングーンの作戦司令部では

「インパールには戦局を左右するような戦略的価値なし」
という報告が行われていた。

また五月十五日には東京の陸軍参謀本部に

——インパール成功の公算は逐次低下しつつあり。
という報告が届けられた。

にもかかわらず参謀本部は

「インパールはいまや世界的問題である」

と面子にこだわって、作戦の継続を決定した。このために将兵三万五百二人が戦闘で、四万一千九百七十八人が戦傷病で死亡した。

『機密戦争日誌』一九四四年七月四日付

ビルマ『ウ』号作戦中止せらる。東亜情勢帝国に取り
益々非なり。此の秋奮起せずんば悔を千載に残さん

——悔を千載に残さん。

などと無責任に文学的な表現をしている場合ではなかった。牟田口という名誉欲のかたまりのために何万もの兵士を見殺しにした罪の意識は片鱗もなかった。

このインパール作戦を

「ひどい作戦だった」

と回顧するのは、のちに伊藤忠商事からセンチュリ
サーチ センター社長・会長となり、情報サービス産業協

会会長を務めた高原友生である。

高原は一九四四年に陸軍士官学校を卒業し、歩兵第五十八聯隊に配属された。祖父は陸軍軍人、父は海軍少将という軍人一家だったから、軍人になることには全く抵抗がなかった。

歩兵第五十八聯隊は、その年の二月に発令された「ウ」号作戦に参加し、高原は少尉ながら聯隊旗手という名誉ある仕事を任された。

「わたしらは司令部に直属していたからまだよかった。でも食べ物はないし、イギリス軍の追撃で部隊はどんどん崩れていく。とうとう捕虜になってビルマで抑留生活を送りました」

そのとき、現地の人々が親切に接してくれた。

「たいへんな迷惑をかけたのに、お世話になった。そのご恩返しをしている」

高原はビジネスの現場から退いた現在、非営利特定事業法人ミャンマー経済研究所（MERAC）理事長として、文化交流や経済支援活動に従事した。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

イタリア・ファシスト トスカーナ公国、シチリア王国、ローマ教皇国を統一して一八七〇年九月に成立したイタリア王国は、第一次大戦では連合国に参加したが国内の経済は低迷し、社会主義運動が活発になった。社会主義運動はやがてナシヨナリズムと結びつき、一九一九年ごろを境に新しい社会運動として「闘争的ファッショ」が台頭した。社会主義から出発した北一輝が国粹主義に傾斜していったプロセスと近似している。ファッショ(Fascio)は共和制ローマ時代、法官の権威を示す紋章を意味する。

戦闘的ファッショ運動は一九二一年の総選挙で三十五議席を獲得し、同年十一の第三回大会でベニート・ムッソリーニ(一八八三―一九四五)が「国民ファシスタ党」の結成を宣言した。ムッソリーニは退役軍人や憂国論者の支持を得て「黒シャツ隊」と呼ばれる行動部隊を編成し、これを武装化して国軍を圧倒する勢力を形成した。二二年十月、約四万人の黒シャツ隊が「ファシスト革命」を掲げて国民ファシスタ党への政権移譲を要求するデモ行進を開始すると、ときのファクタ内閣は戒厳令を敷いて阻止しようとしたが国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ3世が戒厳令を拒否したことから政権が瓦解した。これが「ローマ進軍」と呼ばれる。

ローマに入ったムッソリーニは国王に組閣令を出させて組閣、当初は閣僚十四人の十人は他の政党から出さかただったが二三年に選挙法を改正して長期政権の基礎を築いた。以後二六年までの間に政治結社の禁止や言論統制などにより独裁政権化し、さら

に二八年にいたって大評議會を国家最高機関とすることによってムッソリーニは国民ファシスタ党をすら超越する絶対的な地位を獲得した。

ナチス・ドイツとの関係は初期においては決して友好的でなく、オーストリア併合をめぐって一時期は軍事衝突の危機的緊張を持つ状況にあった。ところが三四年末に勃発したイタリア領ソマリランドとエチオピアの紛争にイギリスが介入したことから反英に転じ、イタリア軍がエチオピアに侵攻してこれを併合した。ナチス・ドイツと軍事同盟を結んだのは三九年五月である。

アナキム ビルマ奪回作戦の名称。ABDA司令長官・インド軍最高司令官アーチボルド・ウェーヴェルの幕僚が策定した「アラクン作戦」を継承して立案された。

エレクトン作戦 マッカーサーが立案したとされる。一九四二年秋に行われたアメリカ陸海軍・政府首脳による太平洋軍事会議で海軍省のアーネスト・キング作戦部長(大将)はオレンジ計画を改良した「レインボー計画」を提唱した。ハワイを拠点に中部太平洋のサモア↓ビルバート諸島↓マーシャル群島↓トラック↓グアムと軍を進めフィリピンから日本本土を攻撃するというものだったが、同じ海軍のハルゼー、ニミッツ、スプルーアンスといった諸将が反対した。陸・海軍が役割を分担しつつ日本軍を封じ込めるというマッカーサー案が採択され、これがのちに「カートホイール(車輪)作戦」となった。

ムッソリーニ政権の崩壊 イタリア軍はユーゴ、ギリシャへ進軍したが軍事力不足のためあつてなく連合国軍に奪回され、四三年七月、連合国軍がシチリア上陸作戦(ハスキー作戦)に成功すると、ファシスト評議員はムッソリーニ不信任を可決した。

ウィンゲート空挺旅団 制式名称はイギリス第三インド師団第七十七旅団、第百十一旅団である。この二旅団は四三年二月六日から十一日までの間、グライダーで「ブロードウェイ」と呼ばれたフーコン地区インドウに降下し、九千二百五十人、驢馬一千三百五十頭、火砲・弾薬、車両など二百五十トンをもって作戦行動を開始した。

指揮を取ったウィンゲート少将は「われわれは敵の胃袋に入った。わが剣を敵の肋骨に突き刺した」と言った。対して牟田口中将は「降りた連中は補給をどうするのか。放つておいても干乾になる。牟田口は幸運だ」とその存在を軽く見ていた。

ウィンゲート Orde Charles Wingate / 1903～1944。第二次世界大戦中ビルマ戦線で英印軍特殊空挺部隊チンディットを編成した。一九四四年三月二十四日、インパールの飛行場で事故死した。

ビルマ戦線への補給 日本軍の補給を担ったのは泰緬鉄道だった。バンコクのノンブラドックからビルマのタンピサヤまで四百十五キロを結ぶ。鉄道の建設には連合国軍（イギリス、オランダ、フランス、オーストラリア）捕虜五万人とタイやビルマの労働者十万人が動員され、捕虜一万五百六十二人、労務者三万人が死亡した。このときは映画『戦場にかける橋』、そのテーマソング『クワイ川マーチ』で知られる。

四三年十二月に全線が開通し、四四年五月まで毎月一万二千トン前後の物資を運んだ。ところがタンピサヤから前線までトラックがなかったため、日本軍は戦闘に従事できない傷病兵を補給部隊に編入し彼らに物資を背負わせて山道を運ばせた。それを知ったイギリス空挺旅団は日本の補給兵を樹上から狙撃して妨害した。

狙撃されないまでも途中で動けなくなりそのまま死亡することもしなくなかった。

日本兵の戦いぶり 児島襄『太平洋戦争』（下）には次のような悲惨な記述がある。

「第百六十一インド旅団のM3戦車が戦場に現われた。連射砲を命中させても、この大型戦車は平然としている。サイダー瓶にガソリンを詰めた火炎びん攻撃にも屈しない。黄色爆弾をフトンに詰めた、フトン爆弾を抱いた肉攻班が、わが身をキャタピラの下敷きにして、やつと擱座させる。その轟音を合図に、「ワッショイ、ワッショイ」と声をかぎりに叫びながら、敵陣に殺到するのである」

戦車「M3」 アメリカ合衆国で開発・製造され、第二次大戦中、連合国軍に供与された。重量十二・九トンの軽戦車と二十六トンの中戦車があった。イギリス第七機甲旅団に属する王立第二戦車連隊にはM3軽戦車が百十五両（百五十両とも）配備されていた。

高原友生 たかはら・ともお / 1925～2009。二〇〇四年五月、長年の業界活動に対し藍綬褒章を受けた。

071 P L A N & D O

第七十一

PLAN&DO

一

インパール作戦が開始されて一か月後、一九四三年の四月に進水した超大型航空母艦「大鳳」は、全長二百六十メートルの甲板を備え、艦上爆撃機、戦闘機など五十機以上を艦載できる格納力を持っていた。

甲板に鉄鋼を張った甲装仕様で、高度三千メートルからの八百キロ爆弾もしくは一二〇〇メートル離れた場所からの六インチ砲直撃にも耐えられる能力があった。魚雷攻撃を受けて浸水しても、限定区画で被害を抑え、全体のバランスを取る仕掛けが施されていた。

ジリジリと追い詰められていた連合艦隊にとっては、起死回生の特効薬にも似た「不沈空母」が登場した。兵員輸送と航行訓練を兼ねて呉↓シンガポール↓リンガ↓タウイタウイ↓ギラマスと航行し、六月十八日、マリアナ沖海戦に臨んだのが初の実戦参加だった。

翌十九日の海戦で午前八時十分過ぎ、アメリカ潜水艦

「アルバコア」が放った魚雷六本のうちの一本が右舷前方に命中した。このとき積載していた航空燃料の管に亀裂が入った。燃料は気化して密閉された区画に充満した。

午後二時半過ぎ、帰還した攻撃隊の一機が胴体着陸した瞬間に大爆発が起こった。懸命の消火活動が続けられたが、午後四時半、左舷に大きく傾斜し沈没した。就役からわずか二か月半であっけなく海の藻屑となってしまった。

海軍にはもう一つの不沈空母があった。いや、潮岬沖で沈没した超弩級空母「信濃」のことではない。ここでのいうのは島のことである。

源田實という中佐がいた。

ミッドウェー海戦（一九四二年六月）、第二次ソロモン海戦（四二年八月）、マリアナ沖海戦（四四年六月）、エンガノ沖海戦（四四年十月）などで、連合艦隊は多くの空母を失った。ばかりでなく、南太平洋や東シナ海、日本近海を航行しているときにも米潜水艦の標的となった。

大本営は急ピッチで「雲龍」型中型空母、「伊吹」型重巡空母を建造したが、その完成を待っていることはできなかった。

——空母が足りないなら、島を空母と見立てればいいではないか。

と源田は思いついた。

「不沈空母」構想である。

それはいまさらの話ではなく、一九四二年（昭和十七）の早い段階で着想されていた。

マリアナ諸島、パラオ、ニューギニア、フィリピンを結ぶ海域を「内南洋」とし、そこに浮かぶ島嶼に航空基地を建設する。そこに配備した基地航空部隊をもつて空母部隊と同様の航空作戦を展開するといふのである。ミッドウェー島がその最初の候補だった。

ミッドウェー島の攻略は失敗したが、源田の構想は着実に実行されていた。

トラック、テニアン、サイパンといった島々に第一航空艦隊（一航艦）の航空部隊が配備され、四四年二月の時点では計十三の航空隊が編成されていた。計画では最新鋭の戦闘機、爆撃機計一千六百二十機が配備されるはずだったが、航空機の生産が追いつかなかった。

このため現地の航空部隊は、墜落したり破壊された航空機の残骸を組み合わせて、どうにか戦闘機らしき航空機を作り出した。また大本営は旧式の戦闘機や爆撃機をかき集め、機数だけは計画を達成した。ところが今度は輸送船と搭乗員が足りなかった。

マリアナ沖海戦、エンガノ岬沖海戦が行われた一九四四年は、インパール作戦の停止（失敗）、サイパンの陥落と、

日本軍の劣勢はつきりした年だった。欧州戦線ではイギリス空軍がドイツを爆撃し、ドイツ軍がクリミア半島から撤退、連合軍がノルマンディに上陸と、第二次世界大戦そのものが攻守転換した年でもあった。

弱り目に祟り目ということではなく、劣勢に立ったとき内包していた弱点が噴き出してくる。日本軍ないし大日本帝国にあつては、情報の処理と評価の問題だった。どのように情報を入手するか、入手した情報をどう分析するか、分析した結果をどう活かすか、実施した作戦の成果をどのように評価するかである。

一般に、企業経営やプロジェクト管理の基本的な手法とされる「PLAN&DO」は、PLANの前にAS—ISの分析が、DOのあとにCHECK（評価）がなされる。そのうえで適切なAction（実行）がある。いわゆるPDCAは、Cにこそ重きを置かなければならない。

さらにいうと、すべての前提となるAS—ISは客観的で正確な「事実」に基づかなければならない。主観的な感想、希望的観測、「べき」論や「だったら」の仮定、周辺関係者への配慮や忖度などを一切排除し、事実を事実として受け入れることからスタートする。

DOのあとのCHECKも同様である。信頼性のある情

報が適正な手段で入力され、正しい方程式で数値化され、その結果は冷静かつ批判的に受け止めなければならない。このとき「べき」論や「だったら」の仮定は有効に作用することもあるのだが、決してその前提とはなり得ない。

だが日本軍は、そのすべてに「大和魂」と「根性」を当てはめた。その典型的な例は、四四年十月十二日から十六日にかけて、波状的に展開された台湾沖航空戦である。

二

マリアナ沖海戦（あ号作戦）に完敗した日本海軍は、最後の決戦「捷号作戦」を立案した。フィリピン方面を意味する捷一号、九州南部から台湾島にかけて展開する捷二号、本州・四国・九州および小笠原諸島の死守をねらった捷三号、北海道を防衛する捷四号である。

アメリカ軍はフィリピン（ルソン島）再上陸を予測させる活動を頻繁に示していた。いわゆる「キングⅡ作戦」である。ミンダナオ島奪還計画（キングⅠ作戦）に続くものだった。ソロモン↓ニューギニア↓モロタイと兵を進めてきたので、次はルソン島ということは容易に推測できた。

そこで捷一号が発動された。公式記録による作戦発動日は四四年十月十八日とされる。しかし台湾沖航空戦が行わ

れたのは四四年十月十二日から十六日の五日間、その図上演習が始まったのは七月二十三日、「捷号作戦」のために第二航空艦隊（二航艦）が創設されたのは六月十五日にさかのぼる。

捷一号のねらいはウイリアム・ハルゼー大將率いるアメリカ海軍機動部隊第三十八機動部隊の殲滅とされた。各航空部隊から搭乗員を集め、昼間攻撃隊、薄暮攻撃隊、悪天候下でも攻撃可能な「T攻撃部隊」が編成された。福留繁中将を司令官とし、海軍爆撃機「銀河」、艦上攻撃機「天山」、陸軍爆撃機「飛龍」など千二百五十一機である。

十月十二日、アメリカ第三艦隊の航空機千三百七十八機が台北を空襲した。四三年十一月二十五日、中国・江西省遂川（Suchuan）から飛来した十四機のB-24による新竹爆撃以来の空襲だった。

「ハルゼー艦隊現わる」

の報で、同日の薄暮、約百機が出撃した。曇天の日暮れで照明弾の効果がなかった。アメリカ側の対空砲火で五十四機が未帰還となった。

翌十三日にもアメリカ第三艦隊は約九百五十機が台湾を空襲した。このときも薄暮攻撃に二十八機が出撃した。アメリカ第三艦隊は日本軍の暗号を解読していて、連合艦隊司令長官・豊田副武大將が台湾の新竹基地に滞在している

ことを掴んでいた。

山本五十六がソロモン上空で撃墜死、古賀峯一はセブ島で遭難死と、連合艦隊司令長官は二代続いて不遇の死を遂げていた。豊田を空襲で死ぬようなことがあったら、二航艦の責任は限りなく重い。

ということから、福留中将は十四、十五、十六と連日の索敵、追撃に専念した。ばかりでなく連合艦隊司令部は第五艦隊（支那方面艦隊…重巡洋艦「那智」「足柄」などで編成）に追撃命令を出していた。

十二日の未帰還五十四機を含め、五日間で日本軍が被った損害は三百十二機、出撃した六百四十四機に占める損失率は四八・四％に達した。連合艦隊司令長官の滞在、乾坤一擲の大戦果への意欲、戦況転換への希望的観測といった様ざまな要素が錯綜した。豊田長官に大戦果を報告しなければならぬ。

このときの戦果を日本軍司令部は次のように評価した。

12日 空母六ないし八隻を撃沈

13日 空母三ないし五隻を撃沈

14日 第一次攻撃隊ハ空母三

第二次攻撃隊ハ空母二二夫々相当ナル損害ヲ与ヘ

得タルコト確実

15日 轟沈 戦艦一

撃沈確実 大型空母一、小型空母一、甲巡洋艦一
沈没ほぼ確実 小型空母一、戦艦一、乙巡洋艦一

「戦果」を合計すると、アメリカ艦隊は少なくとも空母十一隻、戦艦一隻、巡洋艦一隻を失ったこととなる。ということは、アメリカ第三十八機動部隊は消滅したはずだった。

大本営発表

十月十五日十五時付

台湾東方海面の敵機動部隊は昨「ハ」日来東方に向け敗走中にして、我が部隊は此の敵に対し反覆猛攻を加へ戦果拡充中なり。現在までに判明せる戦果（既発表のものを含む）左の如し

轟撃沈 航空母艦七隻 駆逐艦一隻

（註）既発表の艦種不詳三隻は航空母艦三隻なりしこと
判明せり

撃破 航空母艦一隻 戦艦一隻 巡洋艦一隻

艦種不詳十一隻

十七日十六時付

我航空部隊は明十六日台湾東方海面に於て新たに来援せ

る敵機動部隊を追撃し、航空母艦、戦艦各一隻以上を撃破せり

十九日十八時付

我部隊は十月十二日以降連日連夜台湾及「ルソン」東方面の敵機動部隊を猛攻し其の過半の兵力を壊滅して之を潰走せしめたり。

(一) 我方の収めたる戦果綜合次の如し

轟撃沈 航空母艦十一隻 戦艦二隻 巡洋艦三隻 巡洋

艦若は駆逐艦一隻

撃破 航空母艦八隻 戦艦二隻 巡洋艦四隻 巡洋艦

若は駆逐艦一隻 艦種不詳十三隻

撃墜 一二機(基地における撃墜を含まず)

(二) 我方の損害飛行機未帰還三二機

(註) 本戦闘を台湾沖航空戦と呼稱す

これに対して、大本営や海軍軍令部の内部に再調査の必要を指摘する声がないではなかった。ところがそうした声は

「消極的である」

「国民の士気を喪失させるものである」

という理由で無視されてしまった。

あまつさえ、

——残敵を掃討し、敵損傷艦を拿捕すべし。

という命令まで出した。のちに権力サイドが流す偽情報

の代名詞となった「大本営発表」である。

赫々たる大戦果ではないか。この報道に日本国民は歓喜した。「日本軍の反攻が始まる」と喧伝された。

三

十月十六日、台湾から飛び立った索敵機が台湾東方四百三十哩の海上に空母七隻からなる敵機動部隊が航行しているのを発見した。この知らせは大本営を大混乱に陥れた。恐慌をきたしたといっている。

翌十七日になると、今度はフィリピン島レイテ湾沖に米海軍機動部隊約十隻が姿を現わした。そればかりか総艦数七十隻にも達するアメリカ海軍第三十八任務部隊が、海面を埋め尽くしているのが発見された。この時点で初めて、大本営は台湾沖航空戦の戦果にとんでもない誤認があったことを知った。

このとき、第三艦隊司令長官ハルゼーは、旗艦ニュージヤージーからニミッツ(太平洋艦隊司令長官兼太平洋戦域最高司令官)に宛てて

——近頃、ラジオ東京が全滅したと報じた第三艦隊の艦船は、海中から引き揚げられ、日本艦隊に向けて高速で撤退中。

——という電報を発していた。

台湾沖航空戦の戦果は、帰投した攻撃機搭乗員の報告に基づいていた。

——彼らは口々に

——爆弾が空母に命中した（と思う）。

——炎上しているのを見た。

——と報告した。

いくつかの報告は正しかったが、多くは想像であつたり見間違えであつたりした。機関を全開にして回避行動を取る艦隊が吐き出す重油の煙を、命中弾による火災と勘違いしたこともあつたらしい。

——この報告を鹿屋基地参謀が都合よく解釈した。

——だけでなく、搭乗員の質問に当たつた将校たちが誘導的な尋問を行つた。

——敵艦からあがる煙は、味方の爆弾が当たつたものではないか？

——と訊ねられ、初年兵は

——かも知れません。

——と回答した。

——いや、違うと思います
と答えることができない圧力があつた。
すると

——爆弾が命中したものと認める。

——ということになった。

——その繰り返しが行われ、

——命中弾三発であれば中破ないし大破と考えてよからう。

——さらに火災が発生していれば沈没したかもしれない。

——いや沈没したであろう。

——ということになって行つた。

開戦から一、二年のころは猛特訓を受けた戦闘機乗りがいくらでもいて、戦果を厳しく評価することが教育されていた。ところが戦局が劣勢になつていたこともあつて、希望的観測が安易に入り込んだ。

——ミッドウェー海戦のあと、大本営は

——「希望的観測に基づいて戦果を評価しないように」

と全軍に通達していたが、苦戦を強いられていた最前線では少しでも希望を見出そうとし、また各軍の司令本部も「戦果」を強く求めていた。大本営の通達は事実上、反故になつた。

——情報の収集と評価はきわめて恣意的であつて、その集積

を綿密かつ客観的に分析する作業は全く行われなかった。現今の成果主義がもたらす弊害と相通じるところがある。

この戦果誤認がもたらした被害は、大きかった。

四四年十月二十三日から二十六日にかけて行われたフィリピン沖海戦は、アメリカ太平洋艦隊の主力は消滅した、という前提で立案されていた。マリアナ沖海戦と同じ過ちを海軍軍令部は犯したことになる。

台湾沖航空戦に攻撃機を動員したため、フィリピン航空部隊の稼動機数は三十五機に減っていた。航空機の援護がないまま、連合艦隊はフィリピン沖海戦（レイテ沖海戦とも）十月二十二日・スリガオ海峡海戦、同二十四日・シブヤン海海戦／エンガノ岬沖海戦、同二十五日・サマール沖海戦の総称）で空母「瑞鶴」「瑞鳳」「千歳」「千代田」、戦艦「武蔵」「扶桑」「山城」のほか艦船三十を失い、南方艦隊は壊滅してしまった。

かつ、フィリピン駐屯の山下奉文率いる陸軍第十四方面軍が連合軍に降伏して以後、アメリカ軍はB-29による日本本土空襲を楽々とできるようにした。日本軍がミッドウェー島を足がかりにアメリカ本土を爆撃しようと考えたことを、今度はアメリカ軍が実行する番だった。

だけでなく、アメリカ軍は日本軍が作ったゲラム、サイパン、テニアン（テニアン）の飛行場を拡張して大型爆撃機が離発着で

きるようにした。「不沈空母」化したのである。源田の構想を逆手に取ったともいえるし、戦争である以上、アメリカが同じことを考えたとして少しもおかしくない。

四

興味深いのは、アメリカ海軍は南西太平洋方面最高司令官ダグラス・マッカーサーに「エレクトロン作戦」の自己検証を求めていたことである。エレクトロン作戦は太平洋の島々を占拠している日本軍を放置（無視）して、ニューギニア島↓ルソン島↓台湾島と、飛び石式に軍を進めることに狙いがあつた。

マッカーサーはB-29の実戦配備やマンハッタン計画のことを承知していたので、少しでも早く日本に白旗を上げさせたかった。それは新婚旅行で訪れた日本に大量の爆弾を落としたり、大勢の日本人を殺害することを忌避したかったばかりはなく、アメリカに最終的な勝利と世界に平和をもたらした将軍として歴史に残ることを求めていたためだった。

実際、マッカーサーは陸軍参謀本部に予想される詳細なスケジュール（予定）を提出していた。「レノ計画」がそれで、キングII作戦の着手（ルソン島リングエン上陸…四

五年一月六（九日）は予定より四十日も早かった。

このときからポツダム宣言無条件受諾から四日後の八月十九日まで、ルソン島ではウォルター・クルーガー中将麾下のアメリカ陸軍第六軍と山下奉文大将麾下の日本陸軍第十四方面軍の間で血みどろのジャングル戦が繰り広げられた。

書きそびれたのは、台湾沖航空戦における日本軍航空機の損失である。投入した航空機は延べ六百四十四機に及び、損失は三百機を上回った。それだけでなく、この攻撃では第二十六航空戦隊司令官・有馬正文少将自らが一番機に乗り込み、敵空母にめがけて突撃、自爆している。

有馬の自殺行為は彼個人の死のみを意味しなかった。二百五十キロ爆弾を装着した航空機を敵艦船に突入させる特別攻撃、いわゆる「特攻」が正規の作戦として組み込まれ、以後、無為な死が積み重ねられていく。

十月二十日、アメリカ軍がフィリピンに上陸し、マッカーサー大將が「自由の声」放送で

「アイ・ハブ・リターンズ」（わたしは帰ってきた）と放送した。コレヒドール要塞から脱出したときに発した「アイ・シャル・リターン」に対応させた言葉だった。

十月二十四日、「大和」の姉妹艦として建造された「武蔵」がフィリピンのシブヤン湾に沈没した。アメリカ軍の攻撃機二百六十四機が五波にわたって殺到し、魚雷十五本、爆弾二十発を命中させた。世界に誇った四十六センチ砲は、一度も戦艦決戦に使われることがなかった。

十一月五日から十一日にかけて、ブーゲンビル島沖で激しい航空戦が展開された。日本海軍は航空機百七十八機、搭乗員七百二十八人を投入し、百二十一機と約四百人が失われた。

一九四五年三月一日、硫黄島の日本軍が全滅した。戦死者は日本軍の約二万二千に対し、アメリカ軍は約二万五千人に達した。アメリカ海兵隊の戦死者数が守備隊の戦死者数を上回ったのは、硫黄島の戦いが唯一である。

三月十日、東京の夜空をB-29の大編隊が覆い、大量の焼夷弾と爆弾を投下した。グアム、サイパン、テニアン、の三航空基地から飛び立った計三百三十四機が投下した爆弾と焼夷弾は二千トンに達した。東京の町は火の海となり、家屋二万七千軒以上が焼け、市民八万四千人が死亡、百万人を超える市民が被災した。

三月十三日の深夜には、四時間近くにわたって大阪が空襲を受けた。数次に来襲したB-29は計五百五十機に及んだ。上空二千米トールの低空から一般家屋をねらってクラスタ焼夷弾が落とされた。これにより約五千人の死

者・行方不明者が出た。

爆撃は十二日名古屋、十四日大阪、十七日神戸と連続し、アメリカ軍が日本本土を焦土化する作戦が明らかになった。しかし迎撃に飛び立つ戦闘機は数少なく、B-29には高射砲も届かなかった。

設計・試作の段階にあった本土防衛用の局地戦闘機「烈風改」、夜間戦闘機「電光」、陸上戦闘機「陣風」、高速戦闘機「火龍」「震電」、特攻機「桜花」、哨戒爆撃機「大洋」、対潜哨戒攻撃機「東海」、重戦車「カト」「ホリ」などは木っ端微塵に破壊されていた。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

**空母「信濃」** しなの・大和型戦艦の三番艦として建造されていたが、ミッドウェー海戦で喪失した空母の穴を埋める目的で空母に改造された。通常の空母というより「洋上移動航空基地」という発想が強かった。源田實の第一航空艦隊構想を船で実現したかった。だった。

八百キロ爆弾の水平爆撃にも耐えられるよう防御が施され、「大鳳」と同様に飛行甲板に七十五ミリ装甲板が張られた。四四年十一月二十九日、横須賀から呉に回航していたとき、浜名湖の南方沖合いでアメリカ海軍の潜水艦「アーチャーフィッシュ」が放った魚雷四本が右舷に命中し、和歌山県潮の岬南方四十八キロで転覆・沈没した。

**源田 實** げんだ・みのる／1904～1989。海軍兵学校五十二期(一九二四年卒)、二七年海軍砲術学校を経て霞ヶ浦海軍航空隊に入った。日中戦争で日本の制空権確立に貢献したあと十二式戦闘機(のち零式艦上戦闘機)の開発に参画した。真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦では旗艦・空母「赤城」に参謀として乗艦した。大艦巨砲主義に立たず航空機の戦略的活用を本意とした。

**台湾沖航空戦** このときアメリカ海軍はレイテ上陸作戦を前に日本軍の航空兵力の撃滅をねらいハルゼー大將が率いる第三十八任務部隊をもって日本軍航空機をおびき出した。暗号解読によって日本軍の動きは逐一知られていた。日本軍は戦略的な罠に落ちたのである。

**第三十八任務部隊** 正規空母九、軽空母八、戦艦六、巡洋艦十四、

駆逐艦五十八、護衛空母十一、給油艦三で成っていた。日本軍航空機による被害は重巡洋艦「キャンベラ」と軽巡洋艦「ヒューストン」が大破したに過ぎなかった。

**サンチ** センチメートルと同義。明治初期、日本陸軍は兵制をロシアに学んだため兵器の単位などにドイツ語読みが定着した。これに対して海軍はイギリス流兵制だったためインチ、ポンドが使われた。

**フィリピン沖海戦**(レイテ沖海戦) フィリピン再上陸・奪回を目指すアメリカ軍と絶対防衛ライン死守をねらう日本軍が総力を傾けて戦った。十月二十四日のシブヤン海海戦、二十五日のサマール沖海戦、エンガノ沖海戦、スリガオ海峡夜戦など様々な名で呼ばれている。

帝国海軍は艦隊主力をレイテ湾に突入させる作戦だったが、「大和」の姉妹艦である超弩級戦艦「武蔵」、戦艦「山城」「扶桑」、空母「瑞鶴」「瑞鳳」「千代田」「千歳」、重巡「愛宕」「摩耶」「島海」「筑摩」「鈴谷」「最上」、軽巡「能代」「多摩」「阿武隈」、駆逐艦「山雲」「朝雲」「満潮」「野分」「早霜」「藤波」「不知火」「秋月」「初月」などを失う結果となった。神風特別攻撃隊「敷島隊」がアメリカの護衛空母「セント・ロー」を撃沈したのはこのときだった。

**四式重爆撃機「飛龍」** ひりゅう…全長十八メートル、全幅二十二・五メートル、最高速度五百三十七キロ/時、爆弾積載量一トン、十二・七ミリ機銃三基、二十ミリ機銃一基を備えていた。

**局地戦闘機「烈風改」** れつぷうかい…零戦に代る次期主力戦闘機として四四年十月に完成した「烈風」をさらに大型化し、排気タービン過給器、三十ミリ砲を主翼に四、胴体後上斜めに二の計

六門を装備した。

**夜間戦闘機「電光」** でんこう…海軍試作丙戦闘機として最初から夜間戦闘を目的に開発された。機首にレーダー、三十ミリ機銃二基、二十ミリ機銃二基および遠隔操作式二十ミリ連装旋回機銃一基を装備する予定だった。全装備自重が約十トンという大型機で最高速度は六百六十九キロ/時を記録、四五年八月の完成を目指したが同年六月の空襲で設計図、試作機のいずれもが全焼・破壊された。

**陸上戦闘機「陣風」** じんぷう…全長十・一二メートル、全翼幅十二・五メートル、自重三・五トンの単座式で、最高速度は六百八十五キロ/時、高度一万メートルで三千四百二十五キロを航続できる設計だった。主翼に二十ミリ機銃四ないし三十ミリ機銃二基、機首に十三ミリ機銃二基を装備した実物模型までできたところで終戦となった。

**高速戦闘機「火龍」** かりゅう…中島飛行機が設計を完了した段階で終戦を迎えた。

**高速・高高度局地戦闘機「震電」** しんでん…全長九・七メートル、全翼幅十一・一メートルで機体の最後尾にプロペラを置き、後退翼と垂直尾翼を百八十度回転させた設計だった。最高速度は七百五十キロ/時で爆弾二百四十キロを装着でき、三十ミリ機関砲四門、七・七ミリ機銃二基を装備した。

**特攻機「桜花」** おうか…火薬を爆発させて推力を得る火薬式ロケットで最高速度八百七十六キロ/時を達成した。一式陸攻ないし九七式艦攻で懸垂し、敵艦隊の近くで切り離して突入する特攻専用機として開発された。一千二百キロ爆弾に翼とロケットエンジンを付け、操縦できるようにしたといったほうが正しい。

**哨戒爆撃機「大洋」** たいよう…金属不足から機体を木製にしたものだったが、完成しないまま終わった。

**対潜哨戒攻撃機「東海」** とうかい…視界をよくするため機首をガラス張りにし、低空での哨戒と攻撃を安定させるため双発とした。九州飛行機が開発しわずかに実戦配備されたが十分な性能を発揮しないうちに終戦となった。

**重戦車「カト」** ソ連軍の重戦車「スターリン」との決戦を想定して開発が進められた。口径百五ミリの対戦車砲を固定装備し射程一千メートルで厚さ二百ミリの鋼板を打ち抜くことができた。連合国軍の主力戦車「M4」が相手であれば一撃で宙に吹き飛ばしたとされる。

**重戦車「ホリ」** カトと同じく百五ミリ砲を搭載し、砲塔が回転する方式を採用し、かつ前面装甲の厚さを百二十五ミリにして防御力を強化した。満州におけるソ連機械化部隊および本土決戦を想定して設計されたが、鉄鋼の不足から実現には至らなかった。

072 火炎

第七十二

火 炎

一

一九四四年六月にサイパン島守備隊が連合国軍に降り、七月にグアム島が陥ちた。十月にはフィリピンに連合国軍の上陸が始まり、太平洋戦争の次の戦場は中部太平洋では硫黄島、南西諸島では沖縄になることがはっきりした。

大本営はそこで西南諸島防衛のため、第十軍幕下に第三十二軍を編成して沖縄の首里にその本営を置いた。とともに満州の関東軍から第九師団と第二十四師団を、中国大陸から第六十二師団と第四十四旅団および、第五砲兵団を転進させ、総兵力十万を沖縄諸島に配備した。司令官は牛島満である。

うち第九師団は関東軍の精鋭、第五砲兵団は大砲を専門とする重量感のある兵団であって、特に第五砲兵団は日本陸軍にあつてきわめて特殊な戦闘集団といつてよかった。

第五砲兵団を構成していたのは野戦重砲兵二個聯隊、重砲兵一個聯隊、独立重砲兵一個大隊、臼砲一個聯隊、迫撃

砲四個大隊、野戦高射砲四個大隊、独立速射砲三個大隊などで、径七十五ミリ以上の火砲計四百門以上という陣容である。

戦車が二十七両しかないこと、航空兵力が欠乏していることなど不備を数え上げれば切がなかった。十万の兵と四百門の火砲というのは、この時点で大本営が用意できた最大の陣容というほかなかった。海洋決戦が不可である以上、連合国軍を沖縄本島に引き付けるしかない。

この牛島の作戦はもろくも崩れた。

四十四年九月にアメリカ軍のフィリピン上陸が開始されると、大本営は沖縄の第九師団を台湾に転出させることを決めた。台湾を防衛しなければならぬ、というのが、アメリカ軍は陸軍第八軍、第六軍の計十二個師団・四十万人と総艦数七十を超える太平洋艦隊第三十八任務部隊を当てているのである。

にもかかわらず兵力の四分の一を割かれては沖縄防衛作戦の根本が崩れる。ばかりでなく本土防衛構想そのものが崩壊する。

翌四五年一月二十三日、牛島のもとに、姫路から第八十四師団を増派する、という報せが届いた。新兵ばかりだが、戦力には違いなかった。ところが同日の夕刻、

——第八十四師団の増派は中止。

ということになった。

——海上輸送の安全が確保されていない。

というのが理由だった。

牛島は唸った。

沖繩住民による決戦部隊が編成された背景には、以上のような事情があった。

まず満十七歳から四十五歳までの男子約二万五千人が、現地徴兵として第三十八軍に編入された。次いで男子中学生に通信員教育が、女子生徒に看護婦教育が行われ、半ば強制的に部隊が編成されていた。

男子中等学校上級生一千六百八十五人による「鉄血勤皇隊」（戦死七百三十二人）、女子中等学校上級生五百四十三人の女子挺身隊（戦死二百四十九人）がそれである。うち沖繩師範学校女子部と沖繩県立第一高等女学校の生徒二百二十二人による「ひめゆり部隊」の悲劇は、こんにちまで語り継がれている。

四月一日、アメリカ軍が沖繩島に上陸を開始した。作戦は「アイスバーク」と名付けられた。アメリカ第五艦隊、イギリス機動部隊を合せた総兵力は正面主力十八万三千、後詰五十四万八千人、動員された艦船は一千三百十七隻、艦載機は一千七百二十七機だったと記録されている。対する日本軍守備隊は陸軍七万七千九十九人と、直前に配備

された海軍陸兵隊八千の計八万四千六百である。

戦いはアメリカ軍による嘉手納への爆撃と沖合いからの艦砲射撃で始まった。午前九時からの上陸作戦は日本軍守備隊が手薄だったためにたいした戦いもないうち、中、北の両航空基地を確保することができた。ただちにブルドーザーが大地を拓き、そこに鉄の板が敷き詰められ、大型輸送機が頻繁に往復した。その日のうちに六万の将兵と、戦車三百九十両などの重火器、トラック、食糧、医療部隊などが進出した。

同月六日、日本の連合艦隊は「菊水作戦」を発令した。戦艦「大和」が広島県徳山港を出港した。以下、軽巡洋艦「矢矧」、駆逐艦「冬月」「涼月」「磯風」「浜風」「雪風」「朝霜」「初霜」「霞」で編成する日本海軍最後の艦隊だった。

大和が沈没した四月七日、アメリカ陸兵が南進を開始した。

十二日、第六十二師団がアメリカ軍の前に立ちどかった。しかし同師団はアメリカ軍の圧倒的な火炮によって損失を重ね、二十五日、ついに撤退した。

二十九日、天長節（明治天皇の誕生日）の日、牛島はそれまでの持久戦の方針を一転し、嘉手納の航空基地奪回を

図る攻勢に出た。大本営をはじめ上層の第十方面軍、第八飛行師団、海軍などから牛島に宛てて航空基地奪還のため「攻勢要望電報」が相次いで届いていた。

五月四日、反攻作戦が決行された。第五砲兵団が七十五ミリ榴弾砲一万発をアメリカ軍陣地に打ち込む一方、第二十四師団、船舶工兵で組織する第二十三、第二十六聯隊が左右から前進を始めたが、アメリカ軍の猛反撃にあつて諸部隊は損失を重ねていった。

翌五日十八時、作戦中止。

同月三十日、牛島は第三十二軍本営を首里から摩文仁八九高地に移すことを決めた。

那覇西方の守備に就いていたのは海軍陸戦隊八千である。実態は基地設営隊や航空隊整備要員などが半数を占め、陸戦の訓練を受けていたのは三千人に過ぎなかった。しかも小銃は五人に一丁しかなかった。

ここには六月四日、アメリカ軍が上陸した。海軍陸戦隊は航空機から外した機銃や手榴弾で戦ったが、二日後に完全に包囲された。包囲網がじりじりと狭められる中で肉弾戦が展開され、六月十二日に立って戦うことができたのは二百七十人に足りなかった。翌十三日午前一時過ぎ、玉碎。摩文仁に埋伏した日本軍は正規兵力の八五%を失っていた。小銃は規定の五分の一、火炮は半分が失われた。にも

増して五月四、五の両日に行われた航空基地奪回の反攻で多くの指揮官が斃れていた。アメリカ陸軍第七師団が迫り、重戦車が登場すると、日本軍は夜間に奇襲的な攻撃を行うほか手立てがなくなった。

六月二十二日、第六十二師団長・中将藤岡武雄、自決。  
二十三日、第三十二軍司令官・中将牛島満自決。  
三十日、第二十四師団長・中将雨宮巽自決。

## 二

日本軍は航空機二千五百七十一機を繰り出して沖縄の守備隊を支援したが、六月二十三日に守備隊が壊滅した。サイパン島の激闘を境に、硫黄島、東京大空襲、沖縄上陸と、アメリカ軍は一般市民に対する無差別攻撃を一顧だにしなければならなかった。

そのために二十一万人も沖縄の住民が犠牲になった。避難民が籠もる洞窟に手榴弾や催涙弾を投げ入れ、逃げ出してきたところを機銃で掃射した。あるいは洞窟の上から火炎放射器を放つ「馬乗り」と呼ぶ戦法が編み出された。船が海を埋め、空を戦闘機が覆い、陸に鉄の雨が降り、血の川が流れた。

それでもなお大本営参謀本部は戦争の継続を計画した。

本土防衛は「本土決戦」に変わった。

軍として総兵員四十万人のほか、六十五歳以下の男子と四十五歳以下の女子による「国民義勇隊」、四十歳以下の女子による「国民戦闘隊」を編成し、ゲリラ戦を展開するという計画である。国民を総動員しての臨戦態勢だったが、それぞれに手渡す武器がなかった。

日清・日露のころの単発先込め式歩兵銃、家伝の刀剣を手に入れているのはマシなほうだった。軍が考えたのは竹槍や長銃、捕り物用の指股などだった。日の丸の鉢巻を締め、「エイツ」の掛け声で一斉に青竹を突き出しても、上空に飛来するB-29ばかりはどうにもしようがなかった。

こうした武器——というより、武器として使うことも可能な道具——の性能について参謀本部が示したのは、「射程距離はおおむね三四十メートル、命中率は五〇%」だった。

当たるも八卦、当たらぬも八卦みたいなもので、アメリカ軍の機械力の前に出たとたん、たちどころになぎ倒されること請け合いであった。それを見て、ときの首相鈴木貫太郎は「これはひどい」と呟いたと伝えられる。

そうこうしているうち、アメリカの工作船は日本の沖合いを悠々と遊弋して機雷を敷設していった。戦闘機は連日のように漁村の船舶を無差別に爆撃した。星のマークを付

けた航空機は百メートル以下にまで高度を下げ、機銃を乱射して市民を殺戮した。

——日本に非戦闘員は存在しないものと心得よ。という教唆があったといわれている。市民が殺戮されるのを見ても、軍は何もできなかった。

一九四五年七月。

この時点で日本軍の組織だった戦闘が行われていたのは、沖縄本島の南方、宮古・八重山群島である。ここには同年六月、陸軍一万三千の部隊が上陸し、航空基地を作り陣地を築いて徹底抗戦の構えを見せていた。日本本土（九州）への上陸を企図していたマッカーサー指揮のアメリカ陸軍第八軍は最初、宮古・八重山群島を立ち枯れさせる方針だったが、

——後背の憂いは除去しておくべきである。

という意見に従って連日の空爆と艦砲射撃が行われた。

宮古・八重山群島はかつて琉球王国の支配下にあったものの、やや海浪を隔てていたため半ば独立のかたちだった。加えて上陸してきた日本軍の兵士が島民の食糧を奪い婦女子に暴行を働いた。ために島の住民は日本軍に反感を持った。また連合国軍は出血を避けて無理な戦闘を行わなかった。このため沖縄本島ほどの悲惨な事件は少なかった。



八月十七日に沖繩本島から陸軍の伝令がきて、守備隊に敗戦を伝えた。同月二十五日、武装解除。

余談だが、宮古・八重島群島の住民は、武装解除後の旧日本兵による乱暴狼藉から生活を守るために「自警団」を組織した。その指導者的存在だった登野城地区青年団の团长・宮城光雄と副团长・豊川善亮は、

——日本から独立しようではないか。  
と話し合った。

二人は大川地区の青年团长・本盛茂、石垣地区の青年团长・内原英昇の賛同を得、かつ南部琉球地区軍政長官であるジョン・デイル・プライス海軍少将の同意を得て、十二月十五日、石垣島の「八重山館」という映画館で郡民大会を開いた。

館内は熱気に包まれ、屋外に人があふれた。その中で「共和国」の樹立が宣言され、「八重山共和国」がここに誕生した。

元県会議員で小学校の校長だった宮良長詳（長義とも）を大統領に選出し、第一に食糧の確保と安定供給、第二にマラリアの撲滅、第三に治安の回復、第四に財源の確保——などを決定した。しかし八日後の十二月二十三日、沖縄軍政当局からの通達で琉球政府に編入されてしまった——という逸話がある。

### 三

ともあれ一九四五年。

その七月二十六日未明のことである。

マリアナ諸島サイパン島のアメリカ軍テナン基地から三機のB-29爆撃機がひっそり離陸した。この時点でアメリカ軍は、サイパン島の日本軍守備隊を壊滅させ、護衛の戦闘機をつけずに爆撃機を発進させることが珍しくなくなっていた。

テナン基地を発進した三機の大型爆撃機は、空襲警報が鳴り響く快晴の仙台市上空をゆうゆうと飛び去り、日本時間の午前八時二十分過ぎ、新潟県と福島県の県境にある小さな集落にさしかかった。眼下に川の流れが白く光り、操縦席の前方に二つの山塊が見え始めた。

百人一首に、猿丸という大夫が詠んだ歌が入っている。

おくやまにもみじふみわけなく鹿の

こゑきくときぞ秋はかなしき

この歌を詠んだのが、この町の奥山に流れる「実川」という溪流のほとりだった、という。実川は「さねがわ」と

読み、町の名を「鹿瀬」という。

このとき、山の中腹に開墾された段々畑で、町の住民と外国人——イギリス、アメリカ、カナダの捕虜——たちが共同で農作業にいそしんでいた。捕虜は敵なのだから厳しく監視しなければならなかったのだが、純朴な住民たちは遠来の外国人たちと仲良くやっていこうと考えていた。

その町には、ドイツ人技師が設計した、当時、国内で最大規模の水力発電所と、化学肥料の工場があった。大本営はこの施設を空襲から守るため、ほど近くにアメリカ兵の捕虜収容所を設けていた。味方の捕虜が大勢いる町に爆弾を落としたりしないだろう、と考えたのだ。

見たこともない大きな飛行機を発見した町民は大騒ぎになり、連合軍の捕虜たちは被っていた帽子を手にとって、上空に向かって振った。銀色の機体は、向かいの山の上空八千四百メートルで反時計回り——つまり機首を左に——旋回し、やや高度を下げた。と、その機体の腹部が開いて、大きな爆弾が落とされた。町民はパニックに陥った。

「爆弾が投げ出された瞬間に、ガランガランという音がしたっけね」

と、その町の古老は言う。

ガランガランは落下速度を調整するための回転尾翼の音だった。

「お尻に落下傘みてえなモンがついとったな」

この目撃証言は正しかった。

爆弾は落下傘のために横に流され始めた。

「アアッ」

悲鳴に近い声が上がった。

爆弾が流されながら落下するその先には小高い丘があって、その丘を越えたところに小学校があった。学校には一年生から六年生まで七百人以上の子どもたちがいて、一時間の授業が始まったばかりだった。警報を鳴らす間もなかった。

幸いにも爆弾は小学校の手前の丘に着地して爆発した。TNT火薬が岩を砕き、そのかたまりは杉の木立をへし折って山の斜面を転げ落ち、地面を削った。破裂した爆弾の破片と小石が混ざった飛礫が人々に襲いかかった。このために何人かが額から血を流した。

小学校では、なにか異常を感じた教員が、「避難！」と叫んだ。

子どもたちは日ごろの訓練どおり、机の下にもぐりこみ防空頭巾を着用した。瓦の屋根と木造の校舎に小石の飛礫が当たって激しい音を立て、ガラスが割れた。怪我人は出なかった。

大音響が鳴り止んだとき、丘には爆弾が当たった部分だ

け、薄茶色の地肌がのぞいていた。数時間後、複葉の赤トンボが飛来し、上空から写真を撮影した。

アメリカの爆撃機は都市や港湾を空襲した帰路、残った爆弾を「ついで」に落としていくことがあった。その場合でも、彼らは工場や港湾にねらいをつけた。ところが今回は人家も道路もない山の中である。しかも落としたのは一個の爆弾だった。赤トンボの操縦士は首を傾げた。

このことは正規のルートで大本営に伝えられた。ものすごく大きくて落下傘が付いていたということに、わずかに注意が払われた。だが、人口が数千人にも満たない山奥の小さな町であるし、死者も出ていない。要するに「取るに足りないこと」だった。

実をいうと、この三機はアメリカ軍が「パンプキン作戦」と呼んだ新型爆弾を投下する予行演習だった。一機は爆弾投下機、一機は観測機、一機は写真撮影機だった。演習は「成功」と評価された。このような模擬爆弾の投下は、戦後公開されたアメリカ軍の機密資料によると、前後十六回（一説に三十回以上）行われていた。

アメリカ軍は新型爆弾を投下する候補地として、札幌、仙台、新潟、京都、大阪、広島、小倉、長崎などを想定していた。投下演習は、それぞれの都市に向けたものだったと想像していい。

それから二週間後、本物が広島に投下された。

「リトル・ボーイ」と名づけられたその爆弾が市中心部の上空五百七十メートルで爆発した瞬間、厚い鋼板に密閉されていたウランに化学反応が促され、TNT火薬二万トンに相当する破壊力と摂氏三万度の光熱が発生した。

その光熱は秒速四十五メートルの猛烈な強風によって運ばれ、六千度まで低下した熱が市民二十万人の命を瞬時に奪った。続いて九日、長崎にも新型爆弾が投下され八万人が死傷した。

新潟の山奥に原爆の模擬爆弾が落とされた話は、筆者が七歳から十二歳まで住み暮らした町の物語として、同町出身の研究者・沖田信悦が語っている。五十年以上を経た現在、模擬爆弾がそぎ落とした山の崖は緑に覆われ、何ともなかったかのように装っている。

語る人も次々に鬼籍に入り、記憶は薄れつつある。それで、あえてそのこと書いた。

#### 四

新型爆弾とは、いうまでもなく原子爆弾である。日本軍は八月七日に広島に調査団を派遣し、原子爆弾が使われたことを察知したが、国民には知らせなかった。長崎に再び

きのこ雲が発生したとき、それを遠方から目撃した本土防衛軍の兵士たちは、歓喜の声を上げさえもした。

——研究所が新型爆弾を完成した。

という情報が流れていたためだった。このことはのちに栃木県計算センター（のち「TKC」と改称）を創業した飯塚毅が陸軍見習士官として熊本県田原坂に駐在していた四五年八月九日の記憶として語っている。

だが、それはまったくのデマだった。

なぜアメリカは原爆を使ったか、という疑問に対して、「ソ連が参戦する意思を示したためである」

という説明がなされる。大統領トルーマンは少しでも早く、アメリカの力で日本を降伏させ、戦後体制をアメリカ主導に導こうと考えた、というのである。

戦後になってアメリカ陸軍長官・スチュムソンは

「原爆投下の目的は満州に侵攻し始めたロシアが日本本土に到達する前に、できるだけ早く降伏を実現することであつた」

と述べ、国務長官バーンズは

「原爆は、日本を打ち破るために必要なのではなく、ソ連を最もコントロールしやすくするためだった」

と証言している。

「生体実験ではないか」

という指摘もある。

事実、アメリカ、イギリス、中国、ソ連の四か国首脳によつて開かれたポツダム会談のさなか、トルーマンは原爆実験成功の報告を聞き、軍部は完成したばかりの二種類の原子爆弾の破壊力をテストする必要があると主張した。それで一発を広島に、違う種類の一発を長崎に落として、殺傷能力や人体に与える影響を実験した、という。

たぶん、どちらも当たっている。

日本政府の戦意をいかに喪失させるか、新型爆弾の威力をどのように測るか、の二つの観点から、アメリカ軍は史上まれな、欺瞞的な手口を使った。それは日本軍の真珠湾奇襲攻撃をののしることができない以上に卑劣なものだった。そのことを、当時、呉海軍工廠に勤務していた若木重敏という技術大尉が、終戦後、執念をもつて調べ上げた。

八月六日、午前七時過ぎ、一機のB-29が広島市の上空に飛来した。これはテニアン基地から先発した天候観測機「Esary」（エザリー）号だった。原爆を積んだ「Enola Gay」（エノラ・ゲイ）号は、それから一時間十分の後方を飛行している。

広島市では、エザリー号の飛来に対応して空襲警報が鳴り響いた。市民は朝食を放り投げて防空壕に避難した。七時三十一分、空襲警報が解除され、市民は朝食をそそくさ

と済ませ、出勤、通学に表に出た。

エノラ・ゲイ号は新浜沖上空に待機していた。

エザリー号から

「ヒロシマでは警報が解除された」

という通信を受け、原爆を投下した。

アメリカ軍はネバダ砂漠で行った実験で、原子爆弾は物陰に潜むものに対して直接的な大きなダメージを与えることができないことが分かっていた。いきなりエノラ・ゲイ号が接近したのでは、広島市民の多くが防空壕に避難してしまう。

そこでエザリー号を先発して市民を緊張させ、警報解除で安心し、かつ出勤や通学に気が急いたときを見計らって投弾した——というのである。

次いで八月九日には、「グレート・アーティスト」と名付けられたB-29が長崎の上空で二発目の原子爆弾を投下した。晴れ渡った空の下が地獄になった。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

牛島 満 うしじま・みつる／1887～1945。鹿児島県に生まれ一九〇八年陸軍士官学校卒、一六年陸軍大学校卒。三六年歩兵第一連隊長として二・二六事件の処理に当たった。三七年歩兵第三十六旅団長として南京攻略戦に参加、三九年予科士官学校校長兼陸軍戸山学校校長、同年十二月第十一師団長、四一年満州・公主嶺学校校長、四二年陸軍士官学校校長を経て四四年八月八日第三十二軍司令官として沖縄に赴任した。

戦艦「大和」の撃沈 アメリカ海軍は潜水艦で魚雷攻撃することをミッチャー提督に進言したが、ミッチャーは「偉大な戦艦を潜水艦攻撃で沈めるのは軍人として忍びない」として航空機を発進させた——というエピソードがある。沈没したのは九州坊の津沖百五十キロの地点で、乗員二百五十六人が救出された。片道の燃料しか積んでいなかったという説には異説もある。

本土決戦 計画は四五年二月に立案され、想定戦場は「本土」と「朝鮮」に絞られた。配置する兵力は次のようだった。

・本土…師団四十三（うち満州から転用三）、独立混成旅団十六、戦車旅団六

・朝鮮…師団四、独立混成旅団一、低装備師団三
・総兵員…四十万人／馬匹…四十七万頭／自動車…一万二百台／輸送車両…七万台／兵站要員…百九十万。

・「国民義勇隊」「国民戦闘隊」計二千八百万人。

・戦闘機八百七十機、高射砲一千二百門。

戦闘に使用可能な航空兵力は陸海合わせて一千五百機足らず、兵

器の充足率は小銃が五〇%、軽機関銃が二三%、歩兵用火器が二八%という有様だった。

宮古・八重山の戦争 連合国軍の空爆と艦砲射撃によって宮古島で三千二百四十五人、八重山群島で六千百九十九人が死亡している。このうち四千人は石垣島守備隊を乗せた輸送船が撃沈したときの溺死者だった。

宮良長詳 みやら・ちようしやう／1894～1965。八重山共和国大統領（八重山自治会会長のあと八重山支庁長を務めた）。**猿丸大夫の歌碑** 新潟県東蒲原郡阿賀町鹿瀬の角神（つのがみ）ダム脇の公園にその歌を刻んだ石碑がある。

沖田信悦 おきた・しんえつ／1946～…一九六九年明治大学を出て千葉県船橋市で古書籍商「鷹山堂」主人。著書に『千葉県古書籍商組合略史』（一九九六）、『琥珀色の彼方 鹿瀬町とハーマニカ長屋』（一九九七）などがある。

広島への原爆投下 二発の原子爆弾をサンフランシスコ港からテナン基地まで運んだのはアメリカ海軍重巡洋艦「インディアナポリス」、「原子爆弾を落とした人」はポール・ティベッツ大佐（広島）、チャールス・ウィーニー少佐（長崎）、作戦を立案したのは太平洋戦略空軍参謀長だったカーチス・ルメー中将である。インディアナポリス号はテナンからの帰路、日本海軍潜水艦「伊五八号」によって撃沈された

日本本土上陸作戦 「ダウンフォール作戦」と呼ばれ、七月七日に発動されていた。九州上陸を前提とする「オリンピック作戦」と、関東上陸を目指す「コロンネット作戦」で構成されていた。オリンピック作戦は陸軍のマッカーサー将軍が、コロンネット作戦は海軍のラムゼー提督が指揮を取る手はずだった。

若木重敏 わかぎ・しげとし／1916～2016。秋田高校から九州大学農学部及び京都大学理学部に進み海軍広島分遣研究所所長として特殊火薬類の研究に従事した。のち協和発酵工業（のち協和発酵キリン）副社長となった。「ユング・ホルツ」のペンネームで創作活動も行った。

日本IT書紀 04 含牙篇

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。